

# 上淵名裏神谷遺跡 三室間ノ谷遺跡

一般国道17号線(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

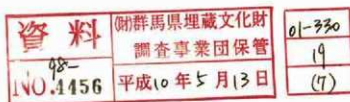
建設省  
群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



『上淵名裏神谷遺跡 三室間ノ谷遺跡』

正 誤 表

頁	行	誤	正
6	20	…榛名山ニツ岳の	…榛名山の
8	36・37	1号溝に…	1号・2号溝に…
47	24	3基のピットと	3基のピットと15号溝が
96		挿図「第97図 1号古墳」を添付した図と差し替えて下さい。	
162	6	説に伴う	設に伴う





KAMI HUTI NA URA KAMI YA  
上 淵 名 裏 神 谷 遺 跡  
MI MURO AI NO TANI  
三 室 間 ノ 谷 遺 跡

一般国道17号線(上武道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

建 設 省  
群 馬 県 教 育 委 員 会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、すでに新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和54年度及び昭和56年度に発掘調査をしました上洲名裏神谷遺跡、三室間ノ谷遺跡の報告書ですが、古墳時代の住居跡、木製品、浅間B経石下の水田址等貴重な遺構、遺物の調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、佐波郡境町教育委員会、佐波郡東村教育委員会、地元関係者の方々から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成3年12月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺 弘之

## 例 言

- 1 本書は、一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う、上瀧名裏神谷遺跡と三室間ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。なお、上瀧名裏神谷遺跡の一部（水田址）については、昭和61年『群馬県史』資料編2において、「上瀧名遺跡」として既に扱われている。遺跡名は異なるが同一遺跡なので注意されたい。
- 2 上瀧名裏神谷遺跡は佐波郡境町大字上瀧名1349他、三室間ノ谷遺跡は佐波郡東村東小保方字三室間ノ谷6049他に所在する。

3 本発掘調査は、建設省関東地方建設局から群馬県教育委員会が受託した事業であり、さらにこれを財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託をうけて実施されたものである。

- 4 発掘調査と整理事業を実施した期間と体制は以下のとおりである。

### (1) 発掘調査

[上瀧名裏神谷遺跡] 昭和54年4月10日～昭和55年3月31日

調査担当 中東耕志、原 雅信、大木紳一郎、渡辺健二

事務局 小林起久治、森田秀策、阿久津宗二、井上唯雄、飯塚喜和子、国定 均  
秋山二三夫、松土淳子、後藤榮子

[三室間ノ谷遺跡] 昭和56年4月3日～昭和57年3月31日

調査担当 石塚久則、大木紳一郎

事務局 小林起久治、沢井良之助、井上唯雄、長谷部達雄、近藤平志、国定 均  
山本朋子、柳岡良宏、笠原秀樹、吉田有光  
吉田笑子、吉田恵子、野島のお江、並木綾子、今井もと子

### (2) 整理作業

[上瀧名裏神谷遺跡・三室間ノ谷遺跡] 平成2年4月1日～平成3年3月31日

整理担当 大木紳一郎

図版作成 藤井輝子、笠井初子、土田三代子、神谷順子、増田政子、儘田澄子  
橋爪美穂

事務局 邊見長雄、松本浩一、田口紀雄、神保信史、能登 健、岩九大作、国定 均  
小林昌嗣、須田朋子、柳岡良宏、吉田有光  
野島のお江、並木綾子、今井もと子、松井美智子、角田みづほ

- 5 遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は当事業団技師佐藤元彦が行った。
- 6 出土遺物の保存処理は当事業団技師岡 邦一と北爪健二、小村浩一が行った。
- 7 遺物と土壌の分析に関しては、以下の方々、団体に依頼した。

プラント・オパール分析 藤原宏志氏（宮崎大学）

石材同定 飯島静男氏（群馬地質研究会）

樹種同定 藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）

花粉・珪藻・鉱物分析・種子同定 株式会社バリノ・サーヴェイ

なお科学分析については、依頼した報告者の原文をそのまま掲載するように努めたが、紙面の都合により、報告者の了解のもとに一部割愛などの編集を行っている。分析データと写真資料は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。



- 8 発掘調査においては、地理で竜瀬良明氏と沢口 宏氏、テフラの同定で新井房夫氏、土壌では三土正則氏、木製品では浅岡俊夫氏と山田昌久氏から貴重なご助言とご指導を頂いた。また埴町教育委員会の坂爪久純氏、佐波郡東村教育委員会の横山 巧氏他多くの方々から有益なご意見、援助を賜った。ここに記して感謝に替えたい。
- 9 本書の編集と執筆は大木神一郎が行い、他の執筆者による記述部分は文末に氏名を記した。
- 10 本遺跡の出土遺物、資料類は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 本書の構成は、本文、遺物観察表、写真図版からなり、それぞれをまとめてある。
- 12 遺構名称は、発掘調査時に登録したものをそのまま用いているため、上流名裏神谷遺跡では算用数字による通し番号のみ、三空間ノ谷遺跡では通し番号の前にI-IVの区名を付した。なお調査終了後の検討により遺構と認められないものについては欠番とした。
- 13 遺構検出位置については、区とグリッド名を記載し、各節のはじめに全体図を掲げてこれを示した。
- 14 遺構規模は、検出面での長さ、幅、深さ等の最大値を計測して記載した。また計測値に大きな変化がある場合には最小値と最大値を「-」で示した。
- 15 挿入中の方位記号と本文記載の方位はすべて国家座標上の北を基準としている。
- 16 出土遺物は可能な限り実測図、写真、出土位置図を掲げたが、掲載出来なかったものについては本文中に概要を記した。
- 17 本書では各遺構名、施設名について以下の略称を用いている。  
「住」 竪穴住居跡      「坑」 土坑      「P」 ビット  
また、挿入中の炉やカマドの焼土部分は細かい網目で表してある。
- 18 本書では、テフラの略称としてAs-A（浅間山1783年）、As-B（浅間山1108年推定）、FA（榛名山6世紀初頭）、FP（榛名山6世紀半ば）、As-C（浅間山A.D.300前後）を用いる。
- 19 挿入図の縮尺は、遺構1/60、遺物1/3を基準として掲げたが、大形品と小形品はそれぞれに応じた縮尺を採用した。
- 20 竪穴住居跡床面積と水田面積の計測には1/20平面図上でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による3回計測平均値を用いており、小数点以下は4捨5入して記載した。
- 21 挿入中の断面図には20cm間隔で横線を入れた。

# 目 次

序	
例 言	
第I章 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
第II章 周辺の地形と関連遺跡	4
第III章 上瀨名裏神谷遺跡の調査	7
1 竪穴住居跡	7
2 古墳・円形周溝遺構	95
3 溝	98
4 井戸・土坑	111
5 水田址	114
6 遺構外出土遺物	116
(1) 縄文土器	116
(2) 石器	117
(3) 古墳時代以降の遺物	117
第IV章 三室岡ノ谷遺跡の調査	121
1 竪穴住居跡	121
2 溝	161
3 井戸・土坑	171
4 堰没谷	177
(1) 水田址	177
(2) 木道遺構	180
(3) 谷頭・堰・橋	183
5 堤と池跡	192
6 遺構外出土遺物	194
(1) 縄文土器	194
(2) 石器	195
(3) 古墳時代以降の遺物	197
第V章 科学分析について	199
1 三室岡ノ谷遺跡出土材の樹種	199
2 三室岡ノ谷遺跡出土種子同定	203
3 三室岡ノ谷遺跡出土花粉・珪藻・重鉱物分析	205
4 三室岡ノ谷遺跡プラント・オパール分析	220
第VI章 まとめ	225
遺物観察表	
写 真 図 版	

## 挿 図 目 次

第 1 図	上湖名裏神谷遺跡・三室岡ノ谷遺跡位置図	2	第 60 図	10号住居跡出土遺物 (1)	61
第 2 図	遺跡の調査範囲	3	第 61 図	10号住居跡出土遺物 (2)	62
第 3 図	周辺地形区分図	4	第 62 図	10号住居跡出土遺物 (3)	63
第 4 図	周辺の遺跡と位置関係	5	第 63 図	10号住居跡出土遺物 (4)	64
第 5 図	Ⅳ・Ⅴ区住居群全体図	7	第 64 図	11号住居跡土層断面	65
第 6 図	1号住居跡	9	第 65 図	11号住居跡	66
第 7 図	1号住居跡掘り方断面	10	第 66 図	11号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	66
第 8 図	1号住居跡掘り方	10	第 67 図	11号住居跡掘り方	67
第 9 図	1号住居跡カマド及び貯蔵穴と焼土ピット断面	11	第 68 図	11号住居跡遺物出土状況	68
第 10 図	1号住居跡遺物出土状況	12	第 69 図	11号住居跡出土遺物	69
第 11 図	1号住居跡出土遺物 (1)	13	第 70 図	12号住居跡	71
第 12 図	1号住居跡出土遺物 (2)	14	第 71 図	12号住居跡炉及び遺物出土状況	72
第 13 図	2号住居跡土層断面	15	第 72 図	12号住居跡炉及び貯蔵穴断面	73
第 14 図	2号住居跡	16	第 73 図	12号住居跡遺物出土状況	73
第 15 図	2号住居跡カマド及び遺物出土状況	17	第 74 図	12号住居跡出土遺物 (1)	74
第 16 図	2号住居跡出土遺物 (1)	18	第 75 図	12号住居跡出土遺物 (2)	75
第 17 図	2号住居跡出土遺物 (2)	19	第 76 図	12号住居跡出土遺物 (3)	76
第 18 図	3号住居跡土層断面	20	第 77 図	12号住居跡出土遺物 (4)	77
第 19 図	3号住居跡及びカマド	21	第 78 図	13号住居跡	78
第 20 図	3号住居跡遺物出土状況	22	第 79 図	13号住居跡土層断面	79
第 21 図	3号住居跡出土遺物 (1)	23	第 80 図	13号住居跡貯蔵穴断面	79
第 22 図	3号住居跡出土遺物 (2)	24	第 81 図	13号住居跡遺物出土状況及び出土遺物	80
第 23 図	3号住居跡出土遺物 (3)	25	第 82 図	14号住居跡	82
第 24 図	3号住居跡出土遺物 (4)	26	第 83 図	14号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	83
第 25 図	4号住居跡土層断面	27	第 84 図	14号住居跡出土遺物 (1)	84
第 26 図	4号住居跡	28	第 85 図	14号住居跡出土遺物及び遺物出土状況	85
第 27 図	4号住居跡カマド及び遺物出土状況	29	第 86 図	15号住居跡伊勢	86
第 28 図	4号住居跡出土遺物 (1)	30	第 87 図	15号住居跡	87
第 29 図	4号住居跡出土遺物 (2)	31	第 88 図	15号住居跡遺物出土状況	88
第 30 図	5号住居跡土層断面	32	第 89 図	15号住居跡出土遺物 (1)	89
第 31 図	5号住居跡	33	第 90 図	15号住居跡出土遺物 (2)	90
第 32 図	5号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	34	第 91 図	15号住居跡出土遺物 (3)	91
第 33 図	5号住居跡遺物出土状況	34	第 92 図	15号住居跡出土遺物 (4)	92
第 34 図	5号住居跡出土遺物 (1)	35	第 93 図	16号住居跡及び遺物出土状況	93
第 35 図	5号住居跡出土遺物 (2)	36	第 94 図	16号住居跡伊勢	94
第 36 図	6号住居跡	38	第 95 図	16号住居跡出土遺物	94
第 37 図	6号住居跡伊勢断面	39	第 96 図	1号古墳土層断面	95
第 38 図	6号住居跡遺物出土状況	39	第 97 図	1号古墳	96
第 39 図	6号住居跡出土遺物 (1)	40	第 98 図	1号古墳出土遺物	97
第 40 図	6号住居跡出土遺物 (2)	41	第 99 図	円形周溝遺構	97
第 41 図	7号住居跡土層断面	42	第 100 図	Ⅳ区・Ⅴ区溝位敷図	98
第 42 図	7号住居跡	43	第 101 図	1号・2号・3号溝及び2号溝出土遺物	99
第 43 図	7号住居跡貯蔵穴断面及びカマド	44	第 102 図	4号溝	100
第 44 図	7号住居跡遺物出土状況	45	第 103 図	5号・13号溝及び5号溝出土遺物	101
第 45 図	7号住居跡出土遺物	46	第 104 図	6号溝及び出土遺物	103
第 46 図	8号住居跡土層断面	47	第 105 図	7号・8号・11号溝	104
第 47 図	8号住居跡	48	第 106 図	9号・10号溝及び9号溝出土遺物	106
第 48 図	8号住居跡出土遺物	49	第 107 図	12号溝及び出土遺物	107
第 49 図	9号住居跡	51	第 108 図	14号・16号・17号溝	108
第 50 図	9号住居跡土層断面	52	第 109 図	15号溝及び出土遺物	109
第 51 図	9号住居跡ピットP10及び貯蔵穴断面	52	第 110 図	18号溝	110
第 52 図	9号住居跡柱穴配置図	52	第 111 図	1号井戸	111
第 53 図	9号住居跡カマド及び遺物出土状況	53	第 112 図	1号土坑	112
第 54 図	9号住居跡出土遺物 (1)	54	第 113 図	3号・4号・5号土坑	113
第 55 図	9号住居跡出土遺物 (2)	55	第 114 図	Ⅳ区水田址と周辺の地形	114
第 56 図	9号住居跡出土遺物 (3)	56	第 115 図	Ⅳ区水田址	115
第 57 図	10号住居跡	58	第 116 図	遺構外出土縄文土器	116
第 58 図	10号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	59	第 117 図	遺構外出土石器	117
第 59 図	10号住居跡遺物出土状況	60	第 118 図	Ⅳ・Ⅴ区出土遺物	118
			第 119 図	Ⅳ区水田面下層出土遺物 (1)	119
			第 120 図	Ⅳ区水田面下層出土遺物 (2)	120

第121図	Ⅱ・Ⅲ区住居跡群位置図	122	第160図	I区Iの溝と土坑及び1号溝出土遺物	163・164
第122図	Ⅱ1号住居跡	124	第161図	Ⅱ・Ⅲ区の溝と土坑及び6号溝出土遺物	165・166
第123図	Ⅱ1号住居跡カマド及び出土遺物(1)	125	第162図	Ⅳ区Iの溝と土坑及び2号溝出土遺物	167・168
第124図	Ⅱ1号住居跡出土遺物(2)	126	第163図	Ⅱ区溝土層断面	169
第125図	Ⅱ2号住居跡	128	第164図	Ⅲ区溝土層断面	170
第126図	Ⅱ2号住居跡断面	129	第165図	井戸跡	171
第127図	Ⅱ2号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	130	第166図	土坑(1)	173
第128図	Ⅱ2号住居跡出土遺物(1)	131	第167図	土坑(2)	174
第129図	Ⅱ2号住居跡出土遺物(2)	132	第168図	土坑(3)	175
第130図	Ⅱ2号住居跡出土遺物(3)	133	第169図	土坑出土遺物	176
第131図	Ⅱ3号住居跡土層断面	134	第170図	埋没谷と調査範囲	177
第132図	Ⅱ3号住居跡	135	第171図	I区水田址	178
第133図	Ⅱ3号住居跡カマド及び貯蔵穴	136	第172図	Ⅳ区A s - B 下面の地形	179
第134図	Ⅱ3号住居跡炭化材出土状況	137	第173図	I区谷基準土層	180
第135図	Ⅱ3号住居跡出土遺物(1)	138	第174図	I区谷と遺物出土位置	181
第136図	Ⅱ3号住居跡出土遺物(2)	139	第175図	I区谷の木道遺構部分	182
第137図	Ⅱ4号住居跡土層断面	140	第176図	Ⅳ区谷頭地形	183
第138図	Ⅱ4号住居跡及び掘り方	141	第177図	Ⅳ区谷頭・堰と遺物出土位置	184
第139図	Ⅱ4号住居跡断面	142	第178図	堰と橋状遺構	185
第140図	Ⅱ4号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	143	第179図	I区出土木製品(1)	186
第141図	Ⅱ4号住居跡出土遺物	144	第180図	I区出土木製品(2)	187
第142図	Ⅱ5号住居跡及び出土遺物	145	第181図	Ⅳ区谷頭出土木製品	188
第143図	Ⅱ6号住居跡土層断面	146	第182図	I区谷出土遺物	189
第144図	Ⅱ6号住居跡	147	第183図	Ⅳ区谷出土遺物(1)	190
第145図	Ⅱ6号住居跡カマド及び貯蔵穴	148	第184図	Ⅳ区谷出土遺物(2)	191
第146図	Ⅱ6号住居跡炭化材出土状況	149	第185図	堤土層断面	192
第147図	Ⅱ6号住居跡出土遺物(1)	150	第186図	堤跡・溝・近代の池	193
第148図	Ⅱ6号住居跡出土遺物(2)	151	第187図	遺構外出土縄文土器	194
第149図	Ⅱ7号住居跡	152	第188図	遺構外出土石器(1)	195
第150図	Ⅱ7号住居跡出土遺物	153	第189図	遺構外出土石器(2)	196
第151図	Ⅱ8号住居跡	154	第190図	石製骨蔵器	197
第152図	Ⅱ8号住居跡カマド及び貯蔵穴断面	155	第191図	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物	198
第153図	Ⅱ8号住居跡出土遺物	156	第192図	樹木の材組織とその名称	199
第154図	Ⅱ9号住居跡及び出土遺物	157	第193図	花粉化石ダイアグラム	222
第155図	Ⅲ1号住居跡	158	第194図	珪素化石ダイアグラム	223
第156図	Ⅲ1号住居跡掘り方及び出土遺物	159	第195図	重鉱物分析ダイアグラム	224
第157図	Ⅲ2号住居跡及び出土遺物	160	第196図	三室罎ノ谷遺跡におけるイネ科植物推定生産グラフ	224
第158図	I区溝土層断面(1)	161			
第159図	I区溝土層断面(2)	162			

## 写真図版目次

### 上瀬名裏神谷遺跡

- PL. 1 IV・V区住居跡群全景  
 PL. 2 1号住居跡  
 PL. 3 1号住居跡  
 PL. 4 2号住居跡  
 PL. 5 2号住居跡  
 PL. 6 3号住居跡  
 PL. 7 3号住居跡  
 PL. 8 4号住居跡  
 PL. 9 4号住居跡  
 PL. 10 5号住居跡  
 PL. 11 5号住居跡  
 PL. 12 6号住居跡  
 PL. 13 6号住居跡  
 PL. 14 7号住居跡  
 PL. 15 8号住居跡  
 PL. 16 9号住居跡  
 PL. 17 9号住居跡  
 PL. 18 10号住居跡  
 PL. 19 10号住居跡  
 PL. 20 11号住居跡  
 PL. 21 11号住居跡  
 PL. 22 12号住居跡  
 PL. 23 12号住居跡  
 PL. 24 13号住居跡  
 PL. 25 14号住居跡  
 PL. 26 15号住居跡  
 PL. 27 16号住居跡  
 PL. 28 1号古墳  
 PL. 29 IV・V区溝  
 PL. 30 V・VI区溝  
 PL. 31 III～VII区溝  
 PL. 32 円形溝遺構・井戸  
 PL. 33 土坑  
 PL. 34 水田址  
 PL. 35 水田址  
 PL. 36 水田址下部  
 PL. 37 1号・2号住居跡出土遺物  
 PL. 38 2号・3号住居跡出土遺物  
 PL. 39 3号・4号住居跡出土遺物  
 PL. 40 5号・6号住居跡出土遺物  
 PL. 41 6号・7号住居跡出土遺物  
 PL. 42 8号・9号住居跡出土遺物  
 PL. 43 9号住居跡出土遺物  
 PL. 44 10号住居跡出土遺物  
 PL. 45 10号住居跡出土遺物  
 PL. 46 11号住居跡出土遺物  
 PL. 47 12号住居跡出土遺物  
 PL. 48 12号住居跡出土遺物  
 PL. 49 13号・14号住居跡出土遺物  
 PL. 50 15号住居跡出土遺物  
 PL. 51 15号住居跡出土遺物  
 PL. 52 15号・16号住居跡、1号古墳、溝出土遺物

### 三室間ノ谷遺跡

- PL. 53 II区全景  
 PL. 54 II 1号住居跡  
 PL. 55 II 2号住居跡  
 PL. 56 II 3号住居跡  
 PL. 57 II 4号住居跡  
 PL. 58 II 5号住居跡  
 PL. 59 II 6号住居跡  
 PL. 60 II 6号住居跡  
 PL. 61 II 7号住居跡  
 PL. 62 II 8号・9号住居跡  
 PL. 63 III 1号・2号住居跡  
 PL. 64 I区全景  
 PL. 65 I区溝  
 PL. 66 I区溝  
 PL. 67 II区溝  
 PL. 68 II区溝  
 PL. 69 II区溝  
 PL. 70 III区溝  
 PL. 71 III区溝  
 PL. 72 IV区全景  
 PL. 73 IV区溝  
 PL. 74 I区土坑  
 PL. 75 I区土坑  
 PL. 76 I区土坑  
 PL. 77 Ⅲ・II区土坑  
 PL. 78 III区土坑  
 PL. 79 IV区土坑  
 PL. 80 埋没谷の調査  
 PL. 81 埋没谷土層  
 PL. 82 I区木道状遺構  
 PL. 83 I区埋没谷遺物出土状況  
 PL. 84 I区埋没谷木道状遺構  
 PL. 85 IV区埋没谷  
 PL. 86 IV区埋没谷と遺物出土状況  
 PL. 87 I区谷  
 PL. 88 堤跡土層断面  
 PL. 89 池と柱  
 PL. 90 II 1号・2号住居跡出土遺物  
 PL. 91 II 2号住居跡出土遺物  
 PL. 92 II 3号住居跡出土遺物  
 PL. 93 II 4号・5号・6号住居跡出土遺物  
 PL. 94 II 6号・7号住居跡出土遺物  
 PL. 95 II 8号・9号、III 1号・2号住居跡出土遺物  
 PL. 96 溝・土坑出土遺物  
 PL. 97 I区谷出土木製品  
 PL. 98 I区谷出土木製品  
 PL. 99 IV区出土木製品・種子  
 PL. 100 土器の製作技法  
 PL. 101 三室間ノ谷遺跡出土加工材の顕微鏡写真  
 PL. 102 三室間ノ谷遺跡出土加工材の顕微鏡写真  
 PL. 103 三室間ノ谷遺跡出土加工材の顕微鏡写真  
 PL. 104 三室間ノ谷遺跡出土種子  
 PL. 105 三室間ノ谷遺跡で検出された珪藻  
 PL. 106 三室間ノ谷遺跡で検出された珪藻  
 PL. 107 三室間ノ谷遺跡で検出された珪藻



# 第I章 調査の経過

## 1 発掘調査に至る経過

上武道路は埼玉県熊谷市大字高柳で国道17号線から分岐して北西に延び、再び前橋市田口町で合流するバイパス道路として計画された。群馬県内には利根川を横断して新田郡尾高町に入り、県央から東毛地域の2市4町2村を通過する。群馬県教育委員会では事前に建設省から提示された希望路線に沿って、幅2kmの範囲で埋蔵文化財の分布調査を実施し、総数472件の包蔵地を確認した。これが昭和45年度のことである（昭和45年 群馬県教育委員会『上武国道地域埋蔵文化財分布調査報告書』）。以後、対象地を150m幅の範囲に狭め、また現状保存を要する地点を除いて、最終的に工事に先立つ発掘調査の必要な埋蔵文化財包蔵地は57地点に絞られた。これにより、発掘調査委託契約は建設省関東地方建設局と群馬県教育委員会の間で昭和48年度に締結され、発掘調査は昭和49年1月から、第1期工事区間である新田郡尾高町から前橋市の国道50号線合流地点までを対象地域として行うこととなった。

発掘調査は南の地点から順に進められ、昭和49・50年度に新田郡新田町歌舞伎遺跡、昭和50・51年度に佐波郡境町三ツ木遺跡と西今井遺跡、昭和51・52年度に小角田前遺跡、昭和52・53年度に下瀬名塚遺跡と続けられた。昭和53年度からは7月に設立された財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が上武道路地域埋蔵文化財発掘調査を引き継ぐこととなった。

佐波郡境町の上瀬名真神谷遺跡は、昭和53年度に行われた下瀬名塚遺跡に引き続いて、昭和54年1月から調査が開始され、そのまま昭和54年度の事業として継続された。一方、その北側に位置する佐波郡栗村の三室間ノ谷遺跡は、昭和56年4月から1年間に亘って発掘調査が実施された。契約時には、上瀬名真神谷遺跡はNo11・12上瀬名遺跡、三室間ノ谷遺跡はNo13・14三室A遺跡と登録されていたが、遺跡名称については、周辺地域における同一名称遺跡との混乱を避けることを主な理由に、大字名に続けて代表的な小字名を付す名称に変更することになった。本報告書で用いている名称がそれである。

なお、上瀬名真神谷遺跡と三室間ノ谷遺跡は、町村界に隔てられたために遺跡名が異なるが、本来は南北に隣接する一連の遺跡と理解されるため、本書で一括して報告することとなった。

## 2 調査の方法と経過

調査範囲は、上瀬名真神谷遺跡が長さ0.68km（上武道路建設用ステーション枕No.500～534）で面積26000㎡、三室間ノ谷遺跡は長さ1.05km（上武道路建設用ステーション枕No.535～586）で面積39700㎡にわたる。このように調査区が長く延びるため、工程上の都合から調査区を細分した。上瀬名真神谷遺跡は、20mピッチで設定された道路建設用ステーション枕に従って、南端部のNo.500枕から100m毎（ステーション枕番号は5おき）に7区分し、南からI～VII区と呼称した。三室間ノ谷遺跡は、地形を勘案して4区分し、南からI～IV区と呼称した。このため三室間ノ谷遺跡の場合、細分区の長さは不均等であり、I区とIV区が谷地形でII区とIII区が台地部分に当たっている（第2図）。

昭和54年1月に開始された上瀬名真神谷遺跡は、昭和45年度に実施された「上武国道地域埋蔵文化財分布調査」では水田面にいたる緩傾斜地に古墳時代土器片の広範な散布と縄文時代の石斧が確認された。また発掘調査直前の現地視察で、III区の南西に路線をかすめた古墳1基の存在が推定された。VII区は水田化されており遺物の散布は認められなかったが、狭い谷地形であることから水田址となる可能性が考えられた。発掘



第1図 上瀧名真神谷・三空閑ノ谷遺跡位置図 (1/25000)

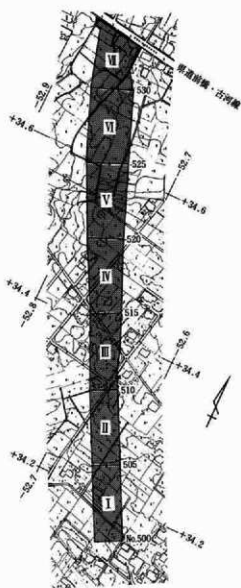
国土地理院発行「伊勢崎」上野境より

調査はまずトレンチ掘削による文化層と、遺構の有無の確認から始められた。その結果、南東側の最も標高の低い位置にあたるⅠ・Ⅱ区では遺物がほとんど出土せず、遺構も検出できなかった。再確認のため全面にわたる表土削除を行ったが、文化層と遺構は全く認められなかった。このため調査の主体はⅢ～Ⅴ区に移ることになった。特に台地が北西側に傾斜する直前の平坦地にあたるⅣ区では古墳時代の集落跡、谷地形のⅤ区では黒色土の直上に天仁元年(1108年)降下と推定される浅間山噴出火山灰(以後As-Bと呼称)が5cm前後の厚さで確認されたことから、水田址の存在が十分に予想された。

昭和56年度に調査された三空閑ノ谷遺跡は、広範囲に土師器の散布が認められており、上瀧名真神谷遺跡の北側に連続する遺構の存在が予想された。全面的な表土削除に先立つトレンチ調査では、台地にあたるⅡ～Ⅲ区で竈穴住居跡群が確認されたが、Ⅰ区とⅣ区の谷部分における水田址の存在は不明確であった。

なお測量にあたっては道路建設用ステーション杭を結ぶ直線を基準線として方眼を組んだ。上瀧名真神谷遺跡の場合は4mメッシュとし、方眼の呼称は南東を起点として路線方向に算用数字、南西を起点として路線直交方向にアルファベットで表した(第5図参照)。また路線方向は100m単位で区切ったため、算用数字は各区毎に1～25までとし、調査区全域にわたる通し番号は採用しなかった。従って、各方眼は南側交点のアルファベットと数字で呼称し、冠頭に区の名称を付して記す。三空閑ノ谷遺跡は路線方向に10m、これと直交方向に7mの方眼を設定し、前者を南東方向起点に道路建設用ステーション杭番号(No.535～585)、後者を北東起点にアルファベットで呼称することとした。このため各方眼は東側交点でのアルファベットと数字で表される(第121図参照)。



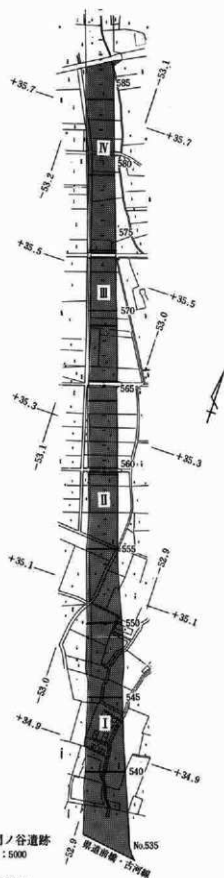


上澗名裏神谷遺跡 1:5000

座標系 第Ⅷ系

アミ掛け部分が路線を示す。

路線内のローマ数字は区の番号を表す。

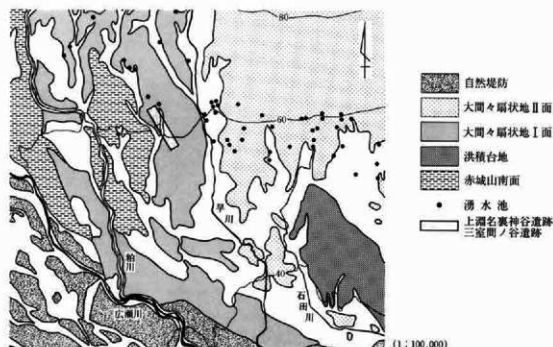
路線右側の算用数字は上武道路建設用の  
ステーション枕番号を表す。三室間ノ谷遺跡  
1:5000

第2図 遺跡の調査範囲

## 第II章 周辺の地形と関連遺跡

上瀬名裏神谷遺跡と三空間ノ谷遺跡は、大間々扇状地の第I面(桐原面)の南東部にあたる南北に細長い台地地形の西端に位置する(第3図参照)。この台地では扇状地礫層の上に中部以上の関東ローム層が堆積しており、麓層として八崎軽石層が確認されている。地形は南方向に緩く傾斜しており、中央部から西半分にかけての部分比較的標高が高い。この台地の東側には、大間々扇状地II面(藪塚面)とを画す早川が南流し、西側には小河川である中川、更に西方約2kmには粕川が蛇行しながら南流する。この台地周辺では8km近くわたる中小の解析谷が多数形成されている。このうち遺跡の西側に見られる中川低地(第4図)は赤城山南面台地との境を流れる中川に沿って形成された谷底平野である。この谷頭には「厄ガ池」湧水池があり、途中で小規模な支谷を幾つか併せて、幅100~250m、延長約5kmに及ぶ。調査地点との比高差は約3mで、この間の地形は西側に傾斜する緩斜面となっている。沢口 宏氏は、この谷の幅がほとんど一定であること、湧水や降水だけで谷が解析されたとは考えにくいことから、侵食が始まる以前の台地や扇状地形成段階で既に谷の原形となる凹地が存在したと推定している(註1)。ここに発達した谷底平野には、シルトや粘土等からなる沖積層が堆積しており、河川氾濫のほとんどない良好な水田可耕地であった可能性が高い。

三空間ノ谷遺跡で調査の対象となった小谷は、この中川の谷の支流にあたり、東側に湾曲しながら南北に約1.2km延びる。幅は30~70mと狭く、最も東に湾曲した部分には間ノ谷沼と呼ばれる湧水池が存する。現在沖積層の堆積する谷頭は湿潤な凹地となっているが、等高線の描く波形や地形のわずかな凹面から、更に上流に谷が延びていたことが看取される(註2)。なお、この小谷における沖積層の堆積時期は第IV章4埋没谷で詳述するが、出土した遺物や4世紀初頭に降下したと推定される浅間山給源のC軽石(以後As-Cと呼称)が下層に見られることから、3世紀頃と考えられよう。



第3図 周辺地形区分図



上瀧名裏神谷遺跡と三室間ノ谷遺跡のる瀧名台地と周辺地域には、古墳時代以降の遺跡が多く分布しており、それ以前の遺跡については極端に少ない。縄文時代では、上瀧名裏神谷遺跡の西側緩斜面から草創期の爪形文・押圧縄文土器、石器が発見され（註3）、また三室間ノ谷遺跡の北側に連続する地域で出土した爪形文土器、押圧縄文土器、熱赤文土器、三角錐形石器（註4）が本地域の最古段階を示す事例として特筆されよう。瀧名台地では他地点でも縄文時代の遺物が散布するが、古墳時代以降に比べて極端に少ない。

弥生時代の遺跡は更に少なく、後期の土器が下瀧名塚越遺跡からまともまで出土したのが目立つ程度である（註5）。むしろ、この時期は瀧名台地より約3km南東にある新田町の木崎台地に遺跡の分布が偏る。従って弥生時代集落が存在したとすれば、早川下流域の扇端低地周辺の台地縁辺部に最もその可能性が高い。

瀧名台地で安定した集落が形成されるのは古墳時代に入ってからである。三室間ノ谷遺跡の北西方に接して伊勢崎・東流通団地遺跡（第4図）がある。これは古墳時代の堅穴住居だけでも450軒を数える大規模な遺跡（註6）で、古墳時代前期から平安時代まで続く典型的な伝統集落（註7）である。これは前述の中川低地を臨む両側の台地上に形成されるが、墓域も含めてその占地は時期毎に異なる様相を見せており、集落の動向を具体的に知ることができる（註8）。他に古墳時代初頭から始まる集落は、瀧名台地南端に位置する下瀧名塚越遺跡、島海戸遺跡（註9）等で知られるが、いずれも広い水田可耕地に面しているのが特徴である。一方、中川右岸のちょうど上瀧名裏神谷遺跡の対岸に位置する十三宝塚遺跡（註10）では、古墳時代後期から集落形成が始まる。またこれより1km南東の台地東端にあたる上瀧名遺跡（註11）でも集落形成は後期からである。これは伊勢崎・東流通団地遺跡で見られる古墳時代後期集落の拡大現象と軌を一にするものと理解されよう。ここに見られる集落の拡大・拡散現象と呼応して、瀧名台地の東半部では6-7世紀を主とする古墳群が形成される。台地東半北部を占める下谷・瀧名古墳群は前方後円墳4基を含む70基以上からなる群集墳（註12）で、6世紀中頃に噴出した榛名山二ツ岳の軽石を石室石材として用いるものが多いことから6世紀後半以降が主体と考えられている。また、これより南方の瀧名台地南東端に位置する下瀧名塚越遺跡には5世紀後半まで遡る古墳群が存在している（註13）。

奈良・平安時代の遺跡としては、9世紀を中心とした官衙あるいは寺院址と推定される十三宝塚遺跡の存在が目ざされる。伊勢崎・東流通団地遺跡では、この時期の堅穴住居が200軒ほど検出され、大部分が中川右岸に集中するようになる。また、台地南辺部ではこの時期の集落がかなり広範囲にわたって密に展開しており、前後の時期を通してそのピークに達した感がある。十三宝塚遺跡をはじめとして、このような大集落の形成、さらに式内社大國神社や「駅」推定地の存在などから、本地域が律令期における古代佐位郡の中核的な位置を占めたと推定されている。

#### （註）

- 1 昭和57年三室間ノ谷遺跡の調査時に、直隸沢口 宏氏よりご教示頂いた。
- 2 1991財口 宏「第1章第2節 地町の大地の姿と生い立ち」『地町史 巻1 巻 自然編』依波郡地町町
- 3 昭和57年、この地点の土層堆積について調査したところ、約1mの厚さをもつ黄色ロームの下位に4-8層積石層を含む厚層3m以上の有機物を含む黒泥土層が認められた。ことから、陶器ロームの堆積が始まってしばらくの間、ここは溜溜な谷地形であった可能性が高い。
- 4 1989「三笠坊主林遺跡」財団法人群馬県立文化財調査事業団 写真図録71、28参照
- 5 1988中東康定「神谷遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代1』群馬県史編纂室
- 6 1989「下瀧名塚越遺跡」財団法人群馬県立文化財調査事業団
- 7 1991「伊勢崎・東流通団地遺跡」群馬県企業局
- 8 1983松登 鶴・石渡 隆・小島純子・藤川浩夫「赤城山南麓における遺跡群研究」『信濃』35巻4号
- 9 1986財口 一「伊勢崎・東流通団地遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』群馬県史編纂室
- 10 1977「土橋・三ツ古屋・出口・島海戸遺跡発掘調査概報」地町教育委員会
- 11 1986小林俊次「島海戸遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』群馬県史編纂室
- 12 本号を主として律令時代以降の集落が検出されており、この点に照準する地町伊勢崎遺跡発掘調査概報目録。以上群馬県教育委員会 1981「十三宝塚遺跡発掘調査概報」、地町教育委員会 1987「十三宝塚遺跡第6次発掘調査、十三宝塚遺跡発掘調査目録」
- 13 1980「上瀧名遺跡第1次発掘調査概報」、1981「上瀧名遺跡第2次発掘調査概報」、1982「上瀧名遺跡第3次発掘調査概報」、1983「上瀧名遺跡第4次発掘調査概報」、以上地町教育委員会
- 14 1980松登左衛門・松村一昭「弥生時代東村の古墳」東村支誌編纂委員会
- 15 註1と同様

### 第Ⅲ章 上淵名裏神谷遺跡の調査

上淵名裏神谷遺跡は、調査対象地長0.68kmのうち南東部にあたるⅠ・Ⅱ区からは全く遺構が検出できず、出土遺物もほとんどないため、調査の主体はⅢ～Ⅴ区に向けられることとなった。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区は台地西辺に小規模に張り出したほぼ平坦な地形にあたり、標高は60mと調査区なかでは最も高い。南側へはかなり緩い傾斜で次第に低くなっており、西側と北側は中川低地およびその支谷へと下る傾斜面をなす。Ⅵ区はこの北側傾斜面に位置し、Ⅶ区は谷部分（中川低地の支谷にあたる）に相当する。

遺構は、竪穴住居跡16軒、古墳1基、円形周溝遺構1基、溝18条、井戸1基、土坑4基、水田址が検出された。これを各区毎に分けると以下のとおりである。

Ⅲ区-古墳1基、溝1条、土坑1基

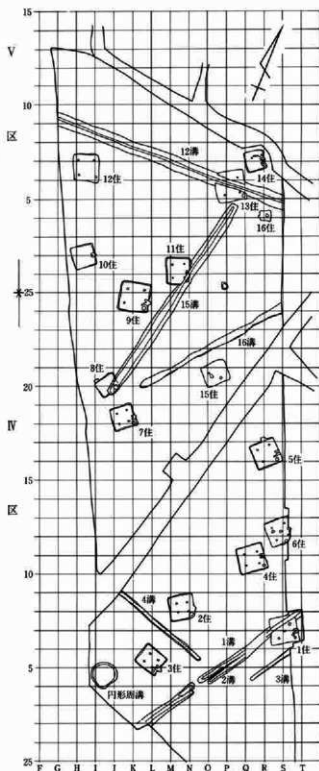
Ⅳ・Ⅴ区-竪穴住居跡16軒、溝9条、土坑1基

Ⅵ区-溝2条、井戸1基

Ⅶ区-水田址、溝6条、土坑2基

#### 1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は標高の最も高いⅣ・Ⅴ区で検出され、南北約120mの範囲に分布しており（第5図）、北側傾斜面には見られない。東西方向の分布範囲は不明である。検出された16軒はいずれも古墳時代後期初頭に属するもので、重複せずにはほぼ均等に分布することから、限られた短期間の間に形成された集落であったと推定される。ただし、12号・15号・16号住居跡のように炉をもつもの、13号住居跡と14号住居跡のように上層が重複するほどに近接するものが存在することから、すべてが同時に存在するのではなく、連続する複数時期にわたる可能性が高い。なお、12号住居跡の炉はカマド導入期の様相を示す点で注目される。



第5図 Ⅳ・Ⅴ区住居跡群全体図

1号住居跡 (第6~12図 PL.2・3・37)

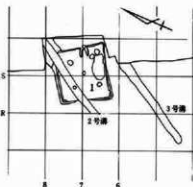
位置 R・S-6・7

平面形 ほぼ正方形。

規模 5.97×5.73m 面積 29㎡

主軸方向 N-55°-E

床面の状態 ハードローンを掘り込み、10~15cmの厚さでロームブロックを多く含む黄褐色土と暗褐色土で貼床を構築する。掘削土をそのまま利用したものであろう。ほぼ同レベルだが、周縁ほど小さな凹凸が多い。南壁に沿って、長さ2.7m、幅1.4m、高さ5~10cmの高まりが検出された。中央部は細長くくぼんでおりピットP5が掘り込まれている。これは検出された位置と踏み固めの状況から出入り口施設に伴う痕跡と思われる。断面の所見からは貼床構築時に高まりを築いていたと思われる。またこれが貯蔵穴と接する部分では、直線状の段に形作られ、南東隅部に約1m四方の空間を作り出している。



壁の状況 高さは58.0cmで、下半のハードローン部分はほぼ垂直に遺存するが、上半は崩落により外傾する。特にピット等の痕跡は認められない。

カマド 東壁のやや南寄りに検出され、天井部がやや崩落するのみで、遺存状況は良好。規模は長さ112cm、幅92cm、燃焼部長80cm、燃焼部幅56cmを測る。軸は住居主軸よりやや南に傾く。本体は粘土で構築され、火床面は床面と同様にロームブロックを貼って構築される。火床面から天井面までの高さは15cmを測る。煙道は火床面から約60°で外傾し、直径は12cm前後を測る。焼土ブロックの状況や赤化部分の形成が一元的であるため、作り替えは認められず、比較的短期間の使用と推定される。

貯蔵穴 カマドの右側、南東隅で検出。楕円形を呈し、径60×54cm、深さ41cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直。ロームブロックを含む暗褐色土が埋積する。

ピット 5基検出されたうち、P1~P4は主柱穴である。底径から柱の直径は15cm前後と思われる。南面するP1~P4の柱間寸法がやや広いのは出入り口との関連によるものだろう。ほぼ垂直に掘り込まれたP5は出入り口階段部の支柱穴であろうか。

壁 溝 ほぼ全周するが、深さは一定せず1~10cmを測る。掘り方には認められないことから、貼床構築時に設けられたと思われる。

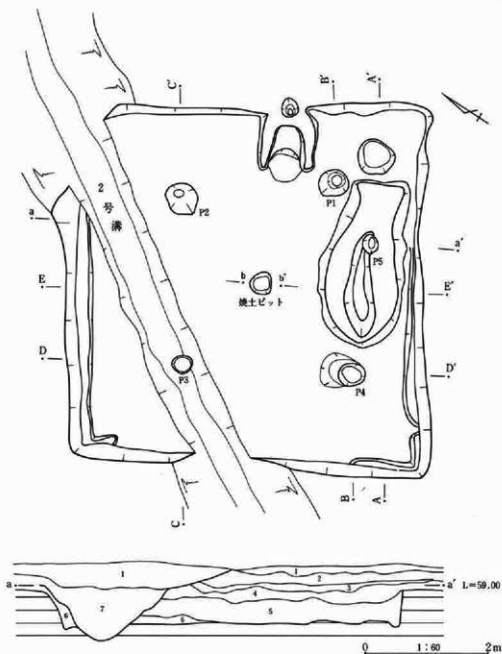
その他 床中央で小ピットを検出。径35cm、深さ10cmを測る皿状のくぼみで、焼土ブロック混入の黄褐色土が埋積する。人為的な埋土か、窠のように機能したのかは不明。

掘り方 東半を主に、周縁部を浅い溝状に掘り込む。深さは中央平坦部から10cm前後を測る。カマド煙道部はこの時点で掘り込まれている。

埋没状況 大部分がFPを混入する黄褐色土で埋まり、As-B混入の黒褐色土で覆われる。人為的埋土とは認められない。

出土遺物 破片は床面上に散乱する。完形や大形破片は南東部に集中するが、すべて廃棄と見られる。なおカマド燃焼部中央から軒(4)が伏せた状態で出土したが、煙道から流入した土により火床面から浮いている。なお、二次的の火熱を受けたものが見られるが、本跡が焼失家屋でないことから、カマド等での二次使用も考えられよう。ほとんど古墳時代後期に属するが、7世紀末~8世紀初頭の杯1点が混入している。出土位置から重複する1号溝に伴う可能性がある。

重複遺構 1号溝に切られる。



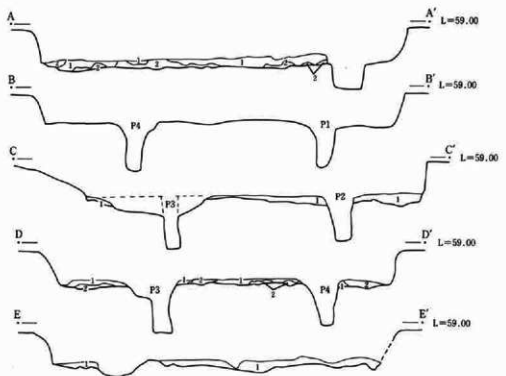
## 土層説明

- 1 暗褐色土 砂質、As-Aを多量に含む。土粒は粗い。  
 2 黒色土 小パミス及び小礫の残層。  
 3 黒褐色土 大粒の黄白色のパミスを含む。  
 4 暗褐色土 3に近いが、ローム粒が多く含まれパミスの密度は少ない。  
 5 暗黄褐色土 土粒がやや細かく粘性を有する。FPを若干含む。  
 6 黄褐色土 ローム粒多い。流れ込みと思われる。  
 7 2号溝埋土

cm	上端径	下端径	深さ	柱間寸法(m)	
P1	49×41	18	45	P1-P2	2.54
P2	55×47	15	73	P2-P3	2.74
P3	33	27	56	P3-P4	2.72
P4	72×43	30	82	P4-P1	3.10

第6図 1号住居跡

第三章 上洞名表神谷遺跡の調査

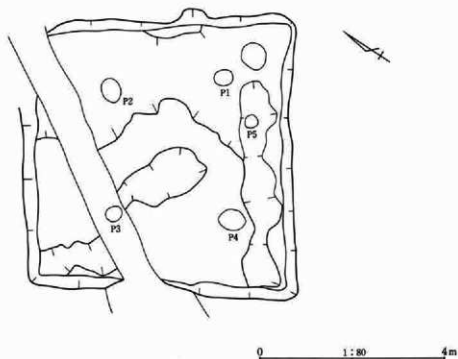


土層説明

- 1 黄褐色土: ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土: 色調やや明るく、ローム粒を含む。

0 1:60 2m

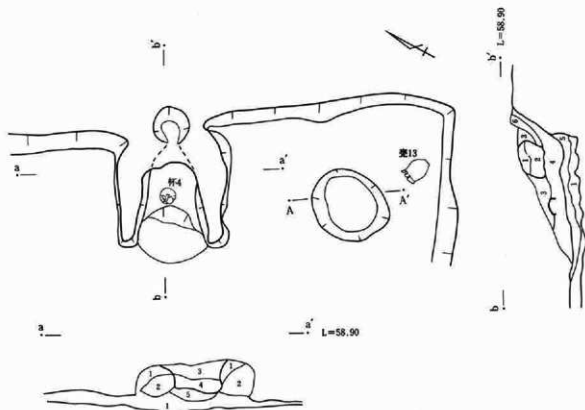
第7図 1号住居跡掘り方断面



第8図 1号住居跡掘り方



1 竪穴住居跡



土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロックを主とする。
- 2 暗灰褐色粘土 ややロームブロックを含む。
- 3 暗黄褐色土 粘土とロームの混入土粒を含む。
- 4 暗黄褐色土 焼土、ローム、粘土粒を少量含む。
- 5 灰黄色土 ロームブロック、焼土を含む。上面は火床面。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックが多く、しまりなし。

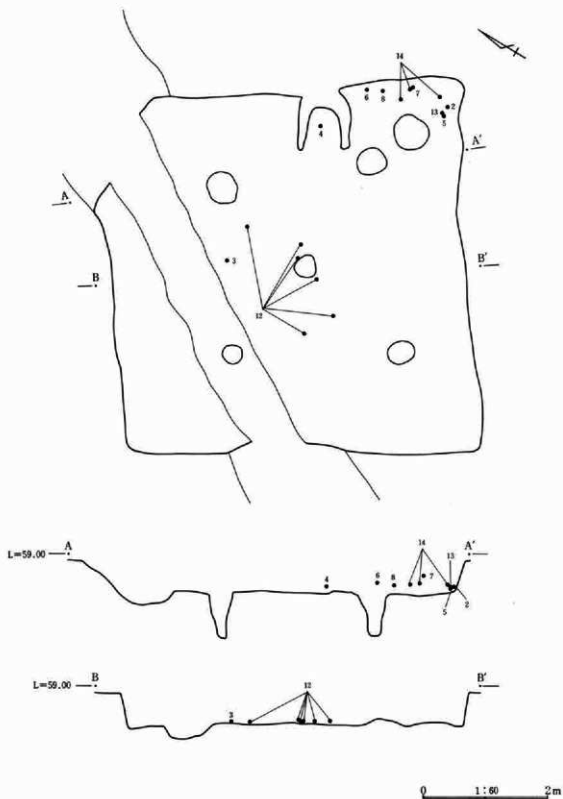


土層説明

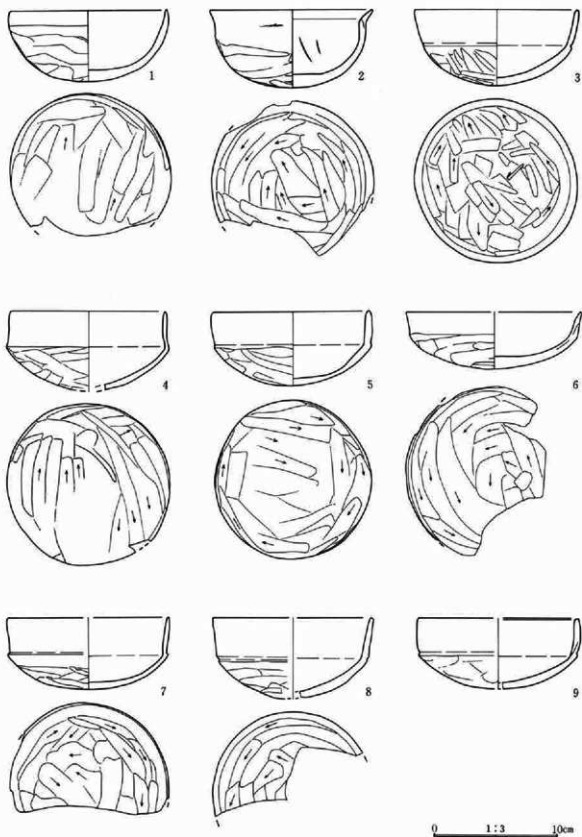
- 1 暗黄褐色土 焼土ブロック、ローム粒を含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックが主体。

0 1:30 1m

第9図 1号住居跡カマド及び貯蔵穴と焼土ピット断面

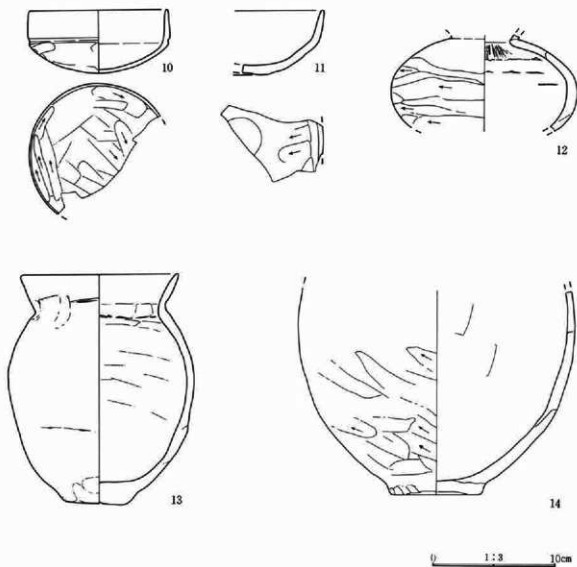


第10図 1号住居跡遺物出土状況



第11圖 1号住居跡出土遺物(1)

第三章 上洞名義神谷遺跡の調査



第12図 1号住居跡出土遺物(2)

## 2号住居跡 (第13~17図 PL.4・5・37・38)

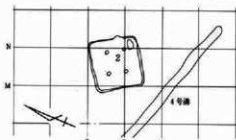
位置 M・N-7・8

平面形 ほぼ正方形。

規模 5.32×5.25m

面積 24㎡

主軸方向 N-53°-E



**床面の状態** ハードルーム面を地山としており、貼床は認められない。中央部がやや凹み、全体に硬質面を残すが、カマドに対面する西壁際中央部で長さ70cm、幅80cmの範囲は軟質であった。

**壁の状況** 高さは56.5cmで、やや外傾気味に立ち上がる。

**カマド** 東壁南寄りで見出され、煙道部を除いて遺存状況は良好。規模は長さ135cm、幅98cm、燃焼部長112cm、燃焼部幅40cmを測る。軸は住居主軸よりやや南へ傾く。床面の上にロームブロックを主として基盤を作り、その上に粘土で本体を構築する。遺存する高さは30cm強である。燃焼部奥壁は火床面から25cmほど立ち上がり、そこから階段状に煙道部が掘り込まれる。外部への煙道の立ち上がりは約80°とかなりきつく、開口部の位置は壁から40~50cmと近い。火床面は焚口から奥へとやや高くなるが、全体的に平坦である。火床面中央部に2個体の杯を重ねて伏せ、臺の支脚としている。燃焼部から検出された臺は完形で正立していたことから、使用状態を示すと考えられるが、支脚が火床面からやや浮き、臺が焚口方向に傾くことから、廃絶後煙道からの流入土によって押し出されたと推定される。

**貯蔵穴** カマドの右隣、南東端で見出され、平面は隅丸長方形で、規模91×72cm、深さ72cmを測る。底面はほぼ平坦で整っている。ローム粒を含む土が堆積する。

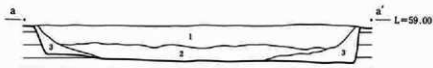
**ピット** 主柱穴が4基検出されている。ほぼ垂直に掘り込まれ、深さは一定している。抜き取り痕は認められず、掘り方と柱痕跡の差は不明瞭である。柱の直径は15cm前後と考えられる。柱間寸法は東西方向が50cm強長いことから、棟方向は主軸方向と一致すると推定される。

**壁溝** 認められない。

**埋没状況** 第1次埋土としてローム粒、ロームブロックを含む土が壁際に堆積する。これは壁や周境が崩落したものであろう。その上にFPを含む土が全体を埋めているが、遺物のほとんどがその下位から出土していることから、住居廃絶、遺物廃棄後ある程度の時間を経て自然埋没したと考えられる。

**出土遺物** カマド燃焼部で使用状態のまま検出された臺と支脚の杯を除けば、投棄あるいは流れ込んだものだろう。貯蔵穴からは脇から落下した甌が出土した。なお北壁際に東寄りで祭祀用とみられる滑石製勾玉(13)が1点出土しており注目される。時期的にはほぼ単一で、古墳時代後期に限定される。

**重複遺構** なし。

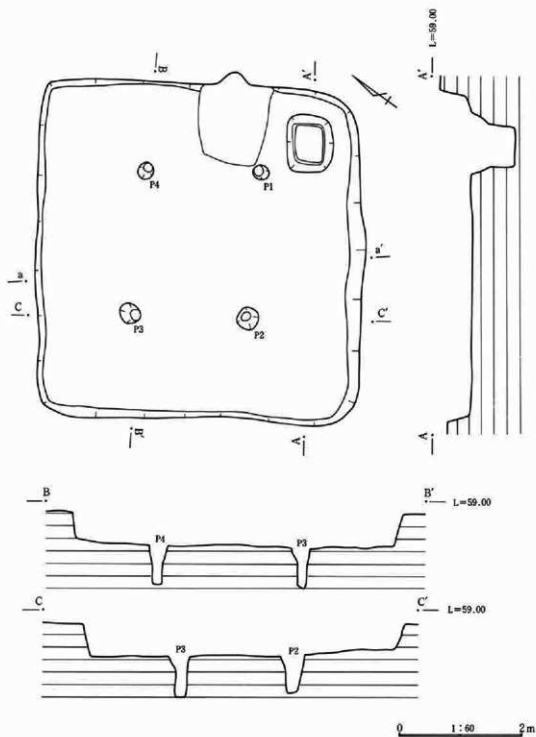


## 土層説明

- 1 黒褐色土 小礫、FPを含む。
- 2 暗褐色土 FPを含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームの流れ込みと思われ、ローム土粒、ブロックの量が多い。

0 1:60 2m

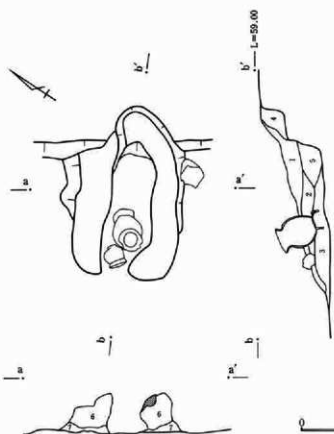
第13図 2号住居跡土層断面



no	上層径	下層径	深さ	柱間寸法(m)	
P1	25×23	16	61	P1-P2	2.30
P2	25×34	16×12	64	P2-P3	1.76
P3	23×28	17×15	67	P3-P4	2.33
P4	26×25	14	62	P4-P1	1.76

第14図 2号住居跡

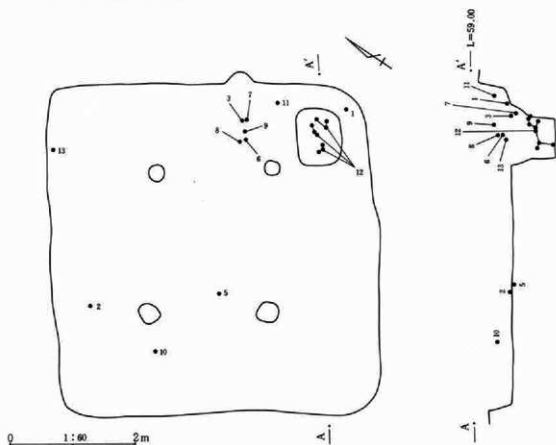
1 竪穴住居跡



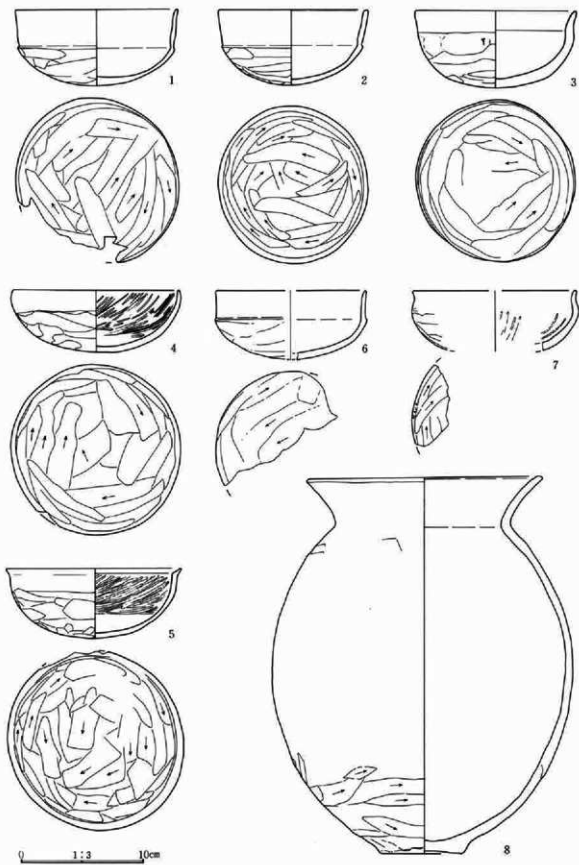
土層説明

- 1 暗黄褐色土 白色粘土をかなり多く混入する。焼土を若干含む。
- 2 暗灰褐色土 粘土塊の流れ込み、焼土塊を多く含む。
- 3 灰褐色土 灰色粘土を主体とし、焼土塊を多く含む。
- 4 灰褐色粘質土 灰色粘土の流れ込み、若干のローム粒を含む。
- 5 淡灰褐色土 ローム土粒と灰色粘土の混合土。
- 6 灰色粘土 粘土を主とする。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを含む。粘土粒を含む。

アミがけ部分は焼けている事を示す

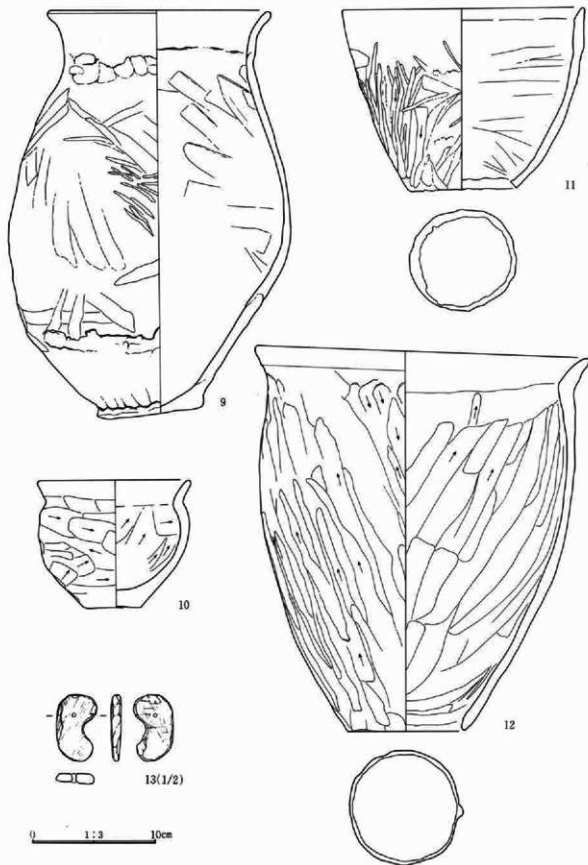


第15図 2号住居跡カマド及び遺物出土状況



第16図 2号住居跡出土遺物(1)





第17圖 2号住居跡出土遺物(2)

3号住居跡 (第18-24図 PL.6・7・38-39)

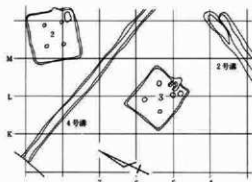
位置 K・L・4・5・6、住居群の南端に位置し、  
南西側に隣接して円形周溝遺構がある。

平面形 はほぼ正方形。

規模 5.26×4.75m

面積 20m<sup>2</sup>

主軸方向 N-103°-E



床面の状態 地山のロームをそのまま床としており、中央部がややくぼみ以外はほぼ平坦。中央部は硬質。

壁の状況 高さは68cmで、やや外傾する。壁線はほぼ直線で目立った崩落は見られない。

カマド 東壁のやや南寄りで検出され、煙道部は底面のみ遺存する。規模は全長152cm、幅106cm、燃焼部長84cm、燃焼部幅55cm、燃焼部高45cmを測る。軸部は灰白色粘土とロームの混合土で構築し、芯には粘土のみを使う。焚口から燃焼部前方にかけては掘り方にローム土粒を埋めて、火床面としている。火床面は焚口から奥へ次第に深くなり、焚口のレベルより15cmほど低い。煙道部は火床面から約50°の傾斜で高さ50cmほど立ち上がり、そこから地山をほぼ水平に掘り込む。なお燃焼部中央には、火床面から6cm浮いた状態で粘土塊を充填した杯(第22図-10)が伏位で出土しており、支脚として用いられたと推定される。燃焼部内の塵土は粘土や焼土の本体崩落土が主で、灰の堆積はほとんど見られなかった。

貯蔵穴 カマドの右脇、南東隅で検出。不整円形を呈し、規模は径65×58cm、深さ52cmを測る。埋土には粘土粒や焼土、ローム粒が多くみられることから、住居埋没時には空洞で、カマド崩落土が流れ込んだと考えられよう。

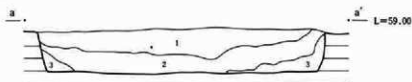
ピット 主柱穴が4基検出されている。深さはほぼ同一で、垂直に掘り込まれる。抜き取り痕は不明。柱間寸法は主軸方向のP1-P2、P3-P4がやや長く、この方向に棟があったと推定される。

壁溝 認められない。

埋没状況 はほぼ均質な土がレンズ状に堆積することから、自然埋没と考えられる。埋土上層には榛名山二ツ岳給源と思われるバミス(FPかFA)が混じる。

出土遺物 カマド燃焼部から出土した杯は再利用されたもので、またカマド右脇からは杯(2)を壺口縁部(23)に載せて据えた状態で出土した。他は破片が大部分で、壁際に第一次埋没土が堆積した後に南側から投棄あるいは流れ込んだと思われる。古墳時代後期のものに限定されており、南東隅からは剣形3点と鏡形1点の石製模造品が出土している。

重複遺構 なし。

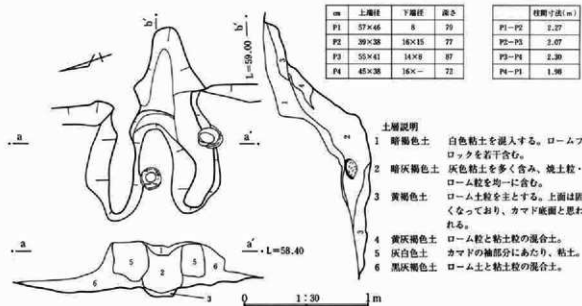
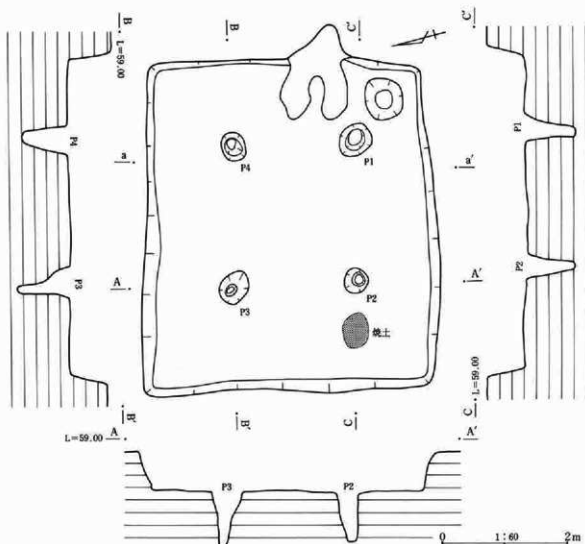


土層説明

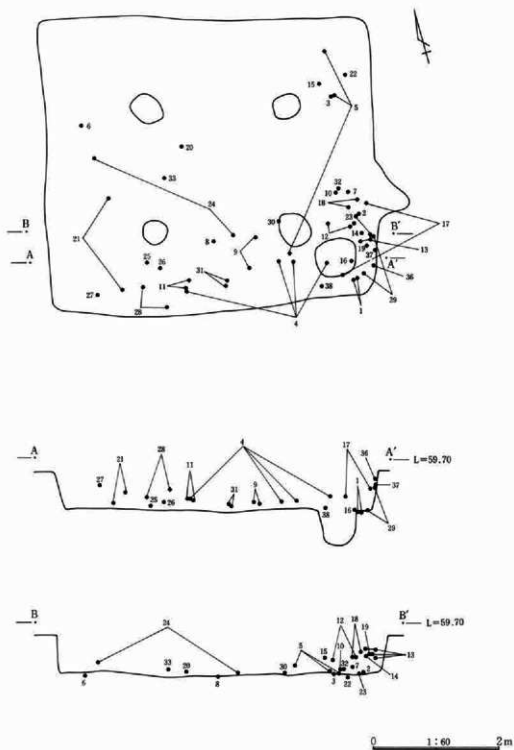
- 1 黒褐色土 やや砂質で軽い土粒。粘性、しまりなく、サラサラ。ローム粒とFPを混入。
- 2 暗褐色土 土粒は1と同じ。FPも若干含むが、やや黄色味を帯びた小バミスも混じる。
- 3 褐色土 ローム粒とFAを混じる。

0 1:60 2m

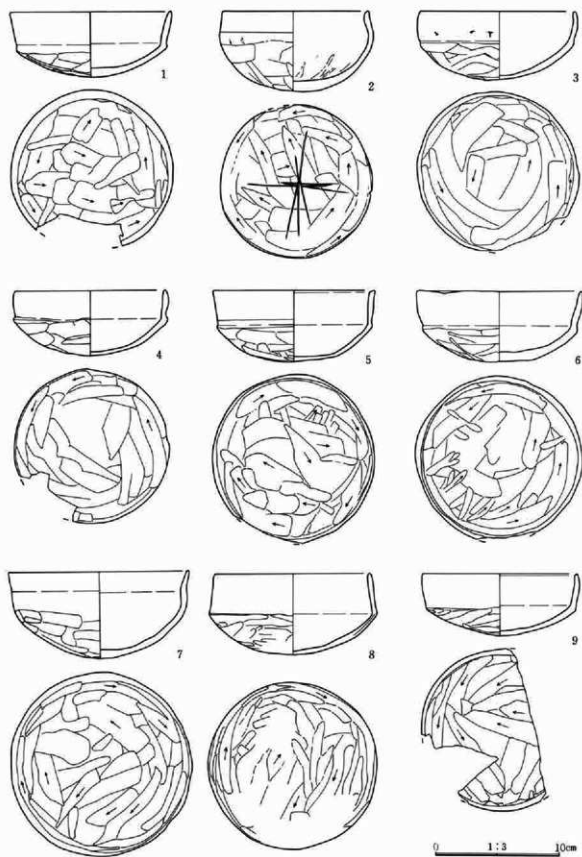
第18図 3号住居跡土層断面



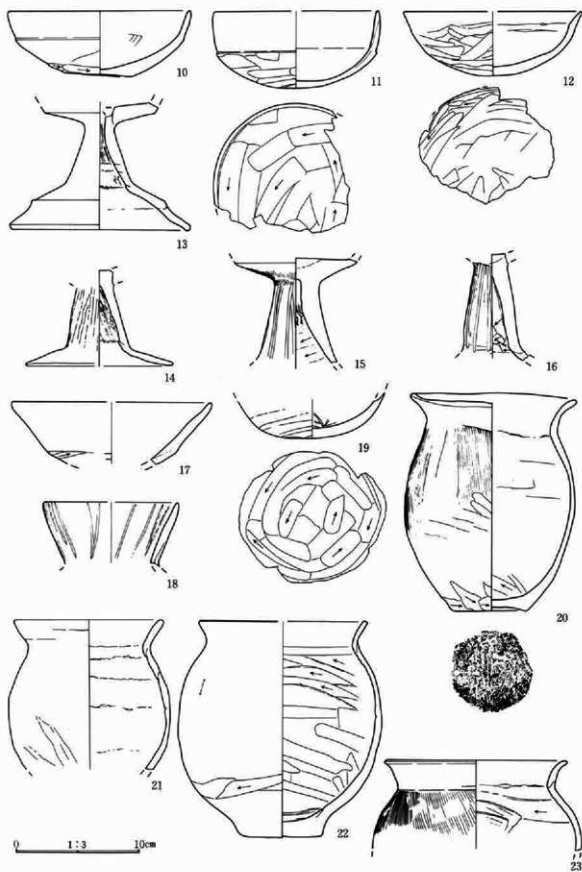
第19図 3号住居跡及びカマド



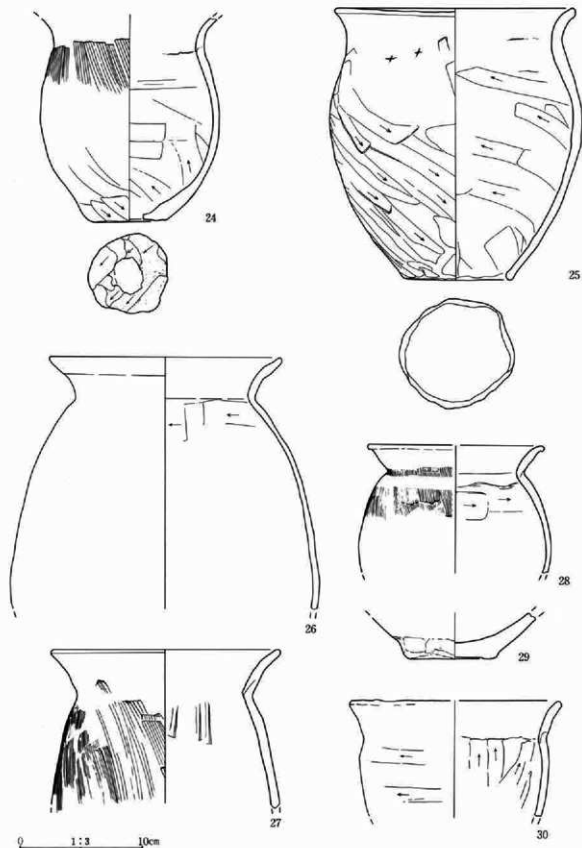
第20図 3号住居跡遺物出土状況



第21图 3号住居跡出土遺物(1)

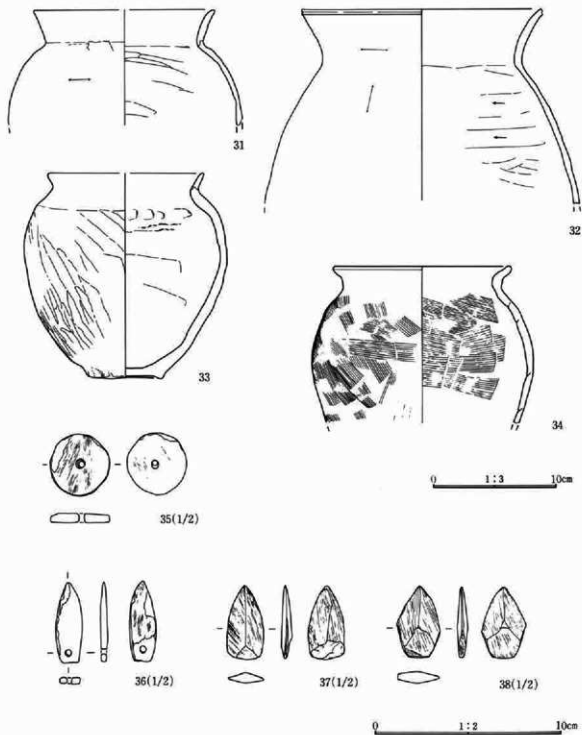


第22図 3号住居跡出土遺物(2)



第23图 3号住居跡出土遺物(3)

第三章 上洞名表神谷遺跡の調査



第24図 3号住居跡出土遺物(4)



## 4号住居跡 (第25-29図 PL 8・9・39)

位置 IV区P・Q・R-10・11

平面形 ほぼ正方形で、南東辺のみがやや他辺より長い。

規模 7.00×5.60m

面積 29㎡

主軸方向 N-53°-E

床面の状態 地山のロームをそのまま床としており、ほぼ水平で平坦。

壁の状況 ほぼ垂直に立ち上がり、上半がやや崩落して外傾する。壁線はほぼ直線的。

カマド 北東壁のほぼ中央で検出。天井部と煙道部は崩落により遺存しない。規模は全長118cm、幅86cm、燃焼部長37cm、燃焼部幅49cmを測る。火床面は掘り方にロームブロックを埋めて平坦に構築したと思われる。その上に粘土とロームの混合土で本体を構築するが、中に焼土ブロックが見られることから、作り替えの可能性がある。燃焼部奥壁は掘り方の壁に厚く粘土を盛って40°で傾斜する煙道部へ続く。焚口面は灰掻き出しのため浅くくぼみ、火床面は奥へ行くに従い次第に高くなる。堆積する焼土量は比較的少ない。使用期間は短い。

貯蔵穴 東隅で壁から30~40cm離れて検出された。平面は不整形円で、規模は径63cm、深さ47cmを測る。底面は方形に近く、平坦。埋土上層にはロームブロックを含んでおり、住居周壁の土が流れ込んだものか。

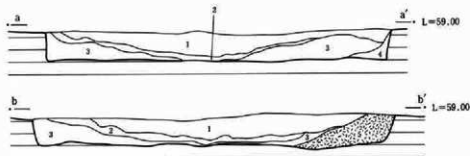
ピット 主柱穴4基が検出されており、掘り込みはいずれも筒状で、抜き取り痕も認められない。位置は住居プランの対角線上にのる。柱間寸法は北東-南西方向がやや長く、これが棟方向と考えられる。

壁溝 認められない。

埋没状況 ほぼ均質な土がレンズ状に堆積する。埋土上層には榛名山二ツ岳給源のバミス(FP)が混入する。

出土遺物 カマド左袖に食い込んで筒(1)が出土したが、それ以外は壁際に埋土が堆積した後の投棄あるいは流れ込みと思われる。分布状況は北東側に偏る。出土土器は古墳時代後期に限られるが、新旧の様相を呈するものが混在する。また土器以外では、滑石製勾玉(14)、白玉、葎石と思われる礫(16)等が出土している。掲載しない破片は壺類441点(うち底部9個体分含む)、壺・埴輪11点、杯類149点である。

重複遺構 なし。北東側に6号住居跡が主軸方向を同じくして隣接する。

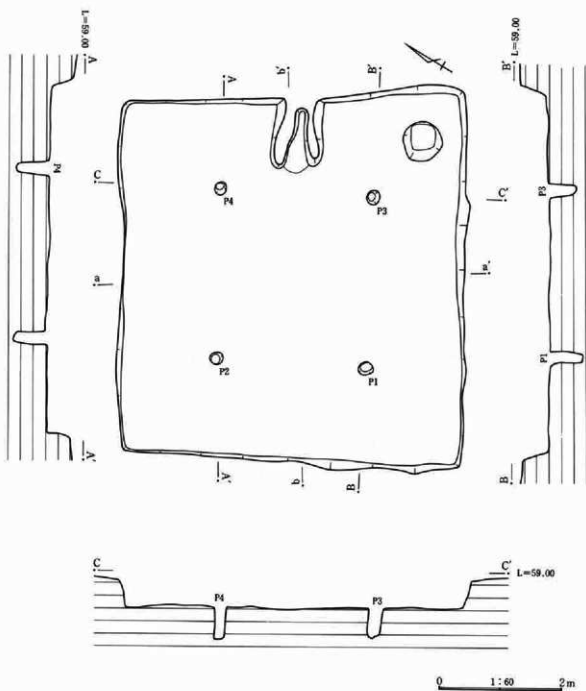


## 土層説明

- 1 暗褐色土 3層の土を混入し不均一な色調を呈する。FP粒を多く含む。粘性はほとんどない。
- 2 暗黄褐色土 1層と3層の混合土。FP粒をわずかに含む。遺物の出土が多い。
- 3 黄褐色土 ロームが流れ込み、FP粒はほとんど含まない。粘性を有する。若干1層の土を混入する。
- 4 明黄褐色土 3層とはほぼ同質だが、ロームブロックの量が多い。
- 5 カマド粘土

0 1:60 2m

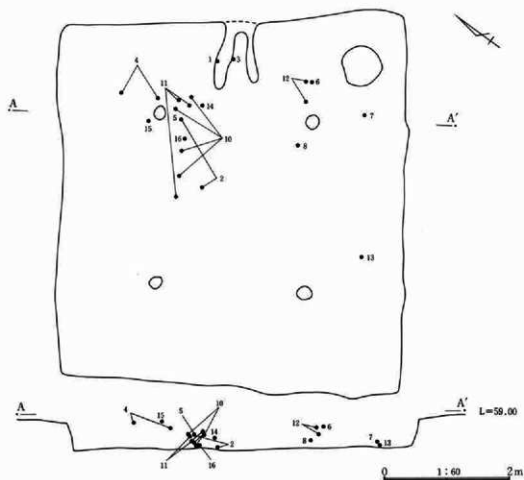
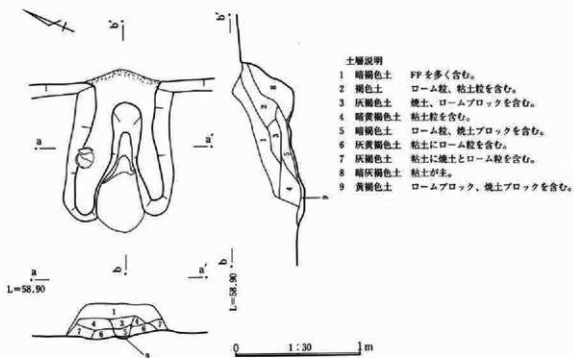
第25図 4号住居跡土層断面



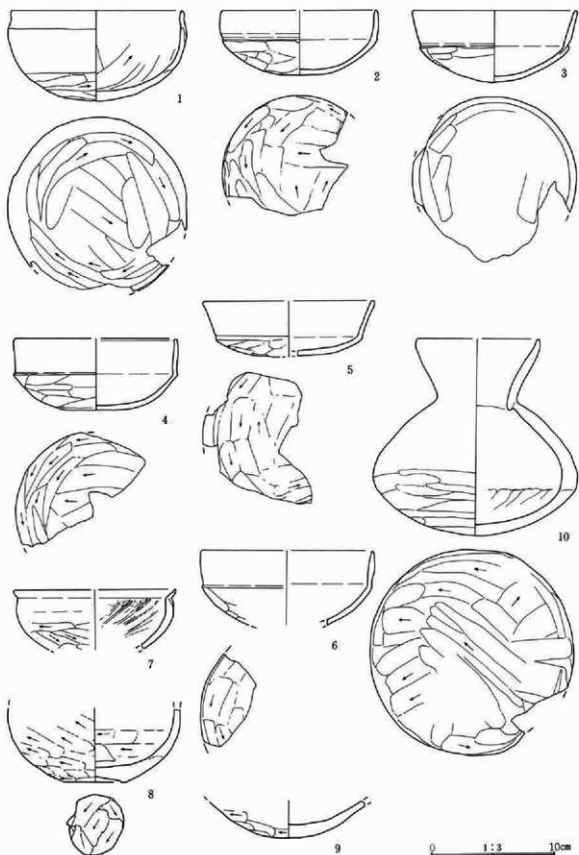
室	上端径	下端径	厚さ
P1	22	23×14	55
P2	30	15	54
P3	22	15×11	44
P4	23×18	14	52

柱間寸法(m)	
P1-P2	2.42
P2-P4	2.73
P4-P3	2.43
P3-P1	2.69

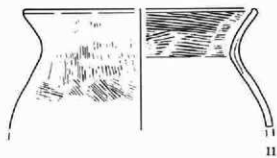
第26図 4号住居跡



第27図 4号住居跡カマド及び遺物出土状況



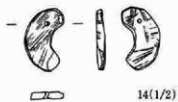
第28図 4号住居跡出土遺物(1)



11



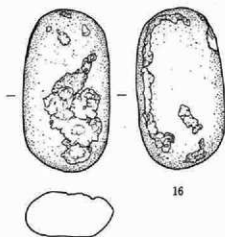
12



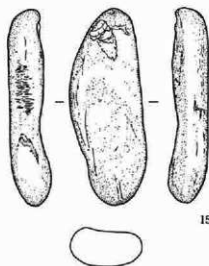
14(1/2)



13



16



15

0 1:3 10cm

第29图 4号住居跡出土遺物(2)

5号住居跡 (第30～35図 PL10・11・40)

位置 N区Q・R-15・16・17

平面形 はほぼ正方形。

規模 5.59×5.55m

面積 26m<sup>2</sup>

主軸方向 N-45°-E

床面の状態 地山のロームを床としており、中央部がやや硬質。なお、北西部で4cmほどの厚さでローム土が見られるが、貼床ではない。

壁の状態 はほぼ垂直に立ち上がり、壁線も直線的で乱れない。

カマド 北東壁の南東寄りで検出。煙道部は遺存しない。規模は全長116cm、幅108cm、燃焼部長93cm、燃焼部幅70cmを測る。燃焼部は壁から粘土と暗褐色土の混合土で構築し、火床面は奥部をピット状に深く掘り込み、ロームを埋填し構築する。火床面は使用によりかなり赤変、硬化しており、焚口部分では補修した可能性がある。袖部は白色と黒色粘土を混合して用い、芯材としている。なお燃焼部中央には8cmの高さの土製支脚が立位で検出された(PL.10参照)。煙道部は燃焼部奥壁から30～50°で立ち上がる。埋土には比較的焼土が多い。

貯蔵穴 長方形を呈し、規模は74×60cm、深さ58cmを測る。埋土にはロームブロックが多く見られる。

ピット 主柱穴4基が住居対角線上で検出された。規模はほぼ同一で、柱位置もほぼ左右対称である。柱間寸法は主軸方向と同一方向がやや長く、これが椽方向と思われる。

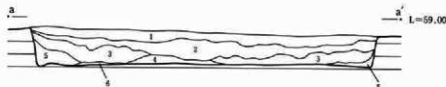
壁溝 認められない。

他の施設 北西壁のやや北東寄り、方形に張り出した掘り込みが検出された。規模は幅107cm、奥行き72cm、深さ20cmで、床面との比高差は37cmを測る。底面は凹凸があり、硬化はしていない。埋土は下層がロームブロック主体で、上層は堅穴内と同一土であることから、本住居に伴う施設の可能性がある。性格は不明。

埋没状況 主に北西半の床面と下層に焼土、炭化材片が散在しており、焼失家屋の可能性もある。中層はロームブロックを多く含むことから、人為的埋土と考えられる。上層は標名山二ツ岳給源のバミス(FPあるいはFA)を含む土で、自然堆積によるものだろう。

出土遺物 カマド内から出土した土器片を除けば、ほとんどが人為的埋土と考えられる2層及びその下位の3層から出土する。すべて破片で、投棄あるいは流れ込んだものだろう。土器以外では、管玉、白玉と銅形石製模造品が出土している。

重複遺構 なし。



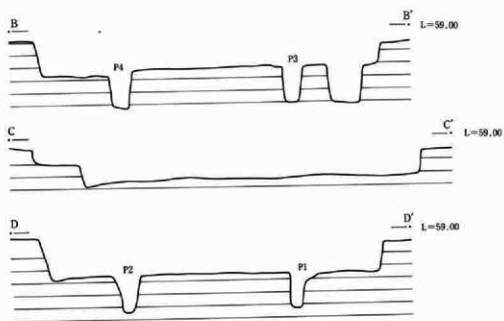
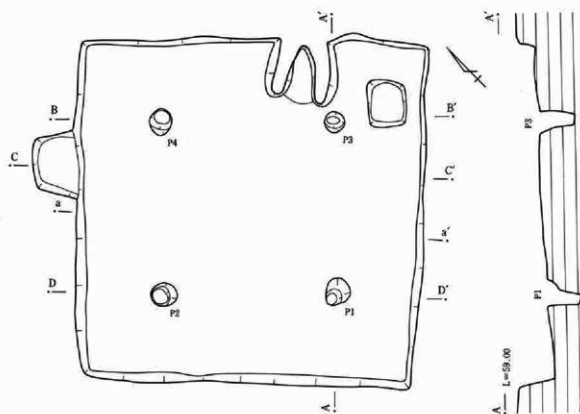
土層説明

- 1 暗褐色土 やや粗く、標名山二ツ岳給源の径1～5ミリのバミスを多く含む。
- 2 暗赤褐色土 ロームブロック多い。バミスを少量含む。
- 3 黒褐色土 やや粘性を帯び、ローム粒、バミスを少量含む。
- 4 暗褐色土 粘性を帯び、ローム粒を含む。
- 5 黄褐色土 粘性を帯び、ローム粒を多く含む。
- 6 黒褐色土とロームの混合土。

0 1:60 2m

第30図 5号住居跡土層断面

1 竖穴住居跡

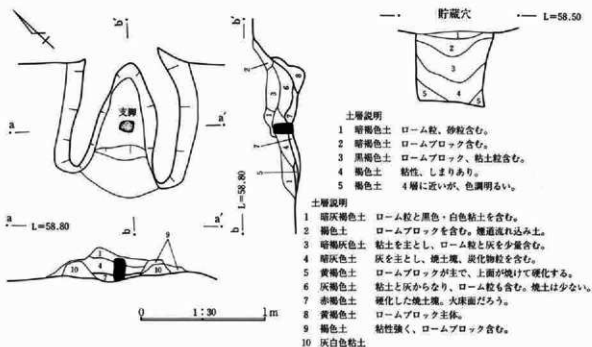


0 1:60 2m

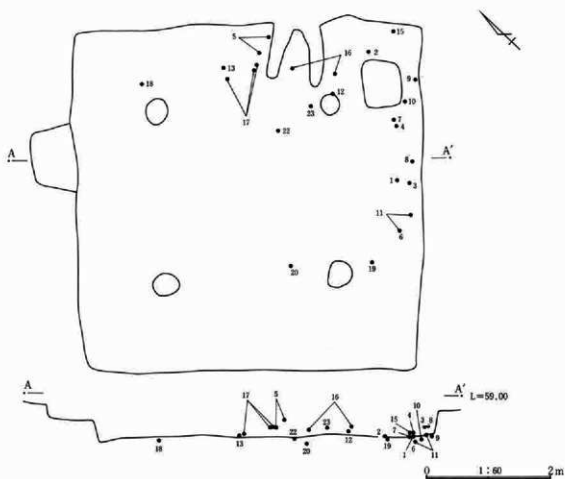
名	上層径	下層径	高さ
P1	44×36	18×16	55
P2	41×34	26×22	59
P3	33×30	20×11	59
P4	42×36	24×20	60

柱間寸法 (m)	
P1-P2	2.77
P2-P4	2.85
P4-P3	2.72
P3-P1	2.83

第31図 5号住居跡

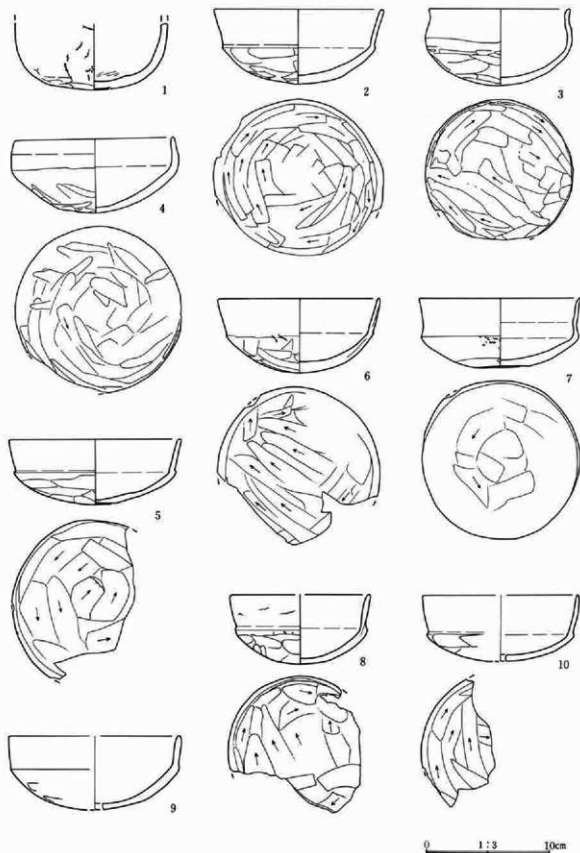


第32図 5号住居跡カマド及び貯蔵穴断面

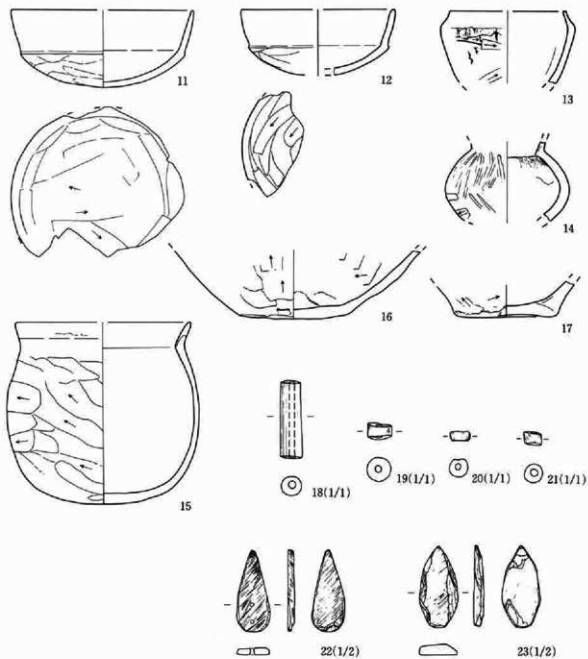


第33図 5号住居跡遺物出土状況





第34图 5号住居跡出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第35図 5号住居跡出土遺物(2)

6号住居跡 (第36~40図 PL12・13・40・41)

位置 N区R・S-11・12

平面形 正方形と思われる。北東辺不明。

規模 5.20×5.62m

面積 不明。

主軸方向 N-47°-E

床面の状態 ハードローンを掘り込んで、そのまま床面としている。小さな凹凸が多く、中央部分がややくぼむ。

壁の状況 掘り込みはほぼ垂直で、高さは49cmを測る。部分的に崩落による乱れが見られるが、ほぼ直線的である。

カマド 北東壁の中央付近で焚口部分が検出された。全体の規模は不明。灰白色粘土を主に用いて構築している。燃焼部中央からはカマドで使用された可能性のある壺、杯が潰れた状態で出土している。

炉 住居のほぼ中央でF1と柱穴P2-P3間でF2の2基が検出された。径40~60cm、深さ10cm強の皿状の掘り込みで、埋土に焼土が混入する。火熱による硬化面は見られない。本住居跡は焼失家屋と考えられるため、この部分の焼土からただちに炉とは断定できないが、掘り込みの形状と位置からその可能性のあるものとして扱った。

ピット 主柱穴4基と南東壁際に不整形の掘り込みが検出された。柱穴はほぼ垂直な掘り方で、規模に大きな差はない。柱間寸法はやや異なるが、住居プランの対角線上に乗ったほぼ正方形構成の配置を示す。南東壁際のピットP5は規模75×70cmで、深さ13cmを測る。底面はやや凹凸がある。位置と形状から、階段等の出入り口に伴う施設の支柱穴掘り方の可能性が考えられる。

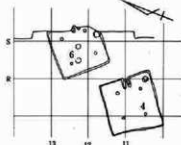
壁溝 認められない。

埋没状況 壁際で壁崩落ブロックが見られる。下層に暗褐色土、中層にロームを含む黄褐色土、上層に暗褐色土がレンズ状に堆積する。いずれにも棒名山給源のテフラが含まれており、上層ほど量が多い。

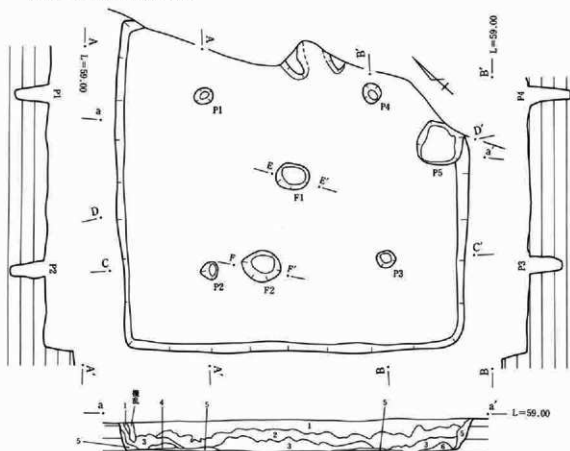
出土遺物 カマド内と東隣床面から比較的大きな土器片が出土するが、他は埋土からの小片が大部分である。時期は古墳時代後期のものに限られる。床面上には上屋根の垂木の根部分と柱穴P1-P2間の桁と思われる炭化材が検出された。いずれも形状はかなり崩れており、原形を知り得ない。また北西壁に沿って床面から、一辺20cm大の粘土塊が2個出土した。混入物のほとんどない灰白色粘土で、方形に近い形状を呈することから、採取した状態のものと考えられる。

重複遺構 調査区においてはなし。4号住居跡と隣接する。

1 壁穴住居跡

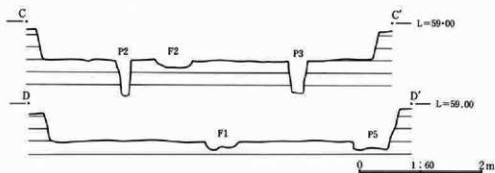


第三章 上田名表神谷遺跡の調査



土層説明

- 1 暗褐色土 やや黒球を帯びる。FP粒を含む。覆土中ではFPの含有量が最も多く、粘性ない。
- 2 黄褐色土 ローム粒を多く含む、不均一。
- 3 暗褐色土 軽石（FAかFP）を含む、均一。
- 4 黒褐色土 3層に近い土で炭化物を多く含む。
- 5 暗黄褐色土 ローム土粒を主とする。最初の流れ込みと思われる。
- 6 暗赤褐色土 焼土粒を多く含む、炭化物を含む。



m	上層径	下層径	深さ
P1	31×25	15×10	53
P2	26	20×11	56
P3	31×27	16	51
P4	31×28	17×12	71

	柱間寸法(m)
P1-P2	2.78
P2-P3	2.77
P3-P4	2.55
P4-P1	2.49

第36図 6号住居跡

E. F1 E' L=58.60 F. F2 F' L=58.60



土層説明

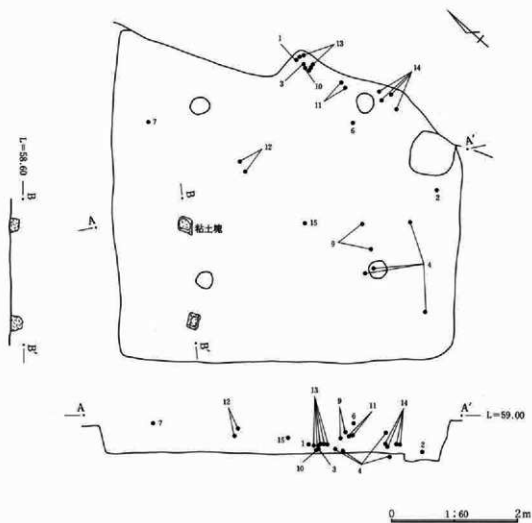
- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。  
2 黄褐色土 ローム粒を主とする。

土層説明

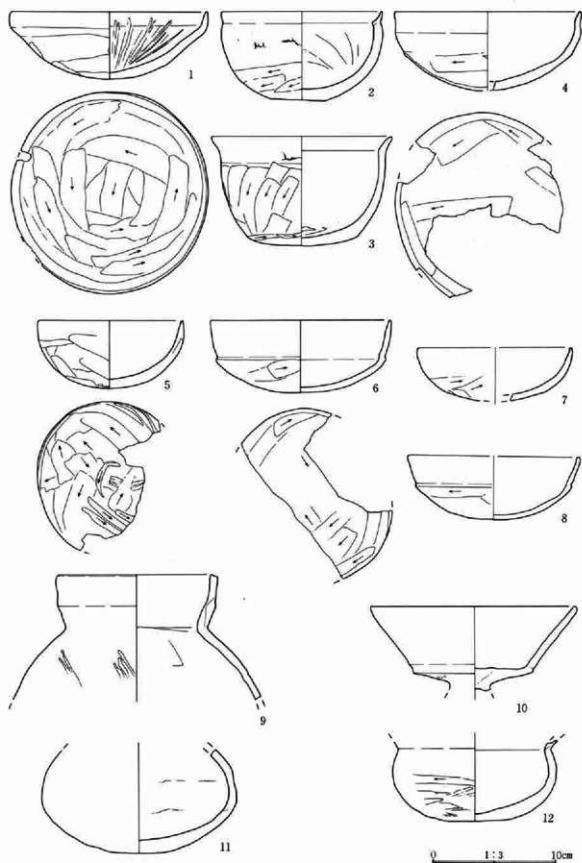
- 1 暗黄褐色土 黒褐色土とローム土が混合する。  
上面に若干焼土粒を含む。  
2 黄褐色土 ローム粒を主とする。

0 1:20 1m

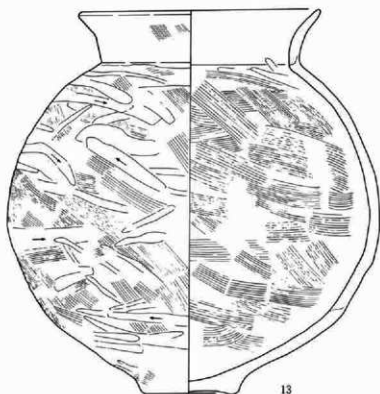
第37図 6号住居跡炉跡断面



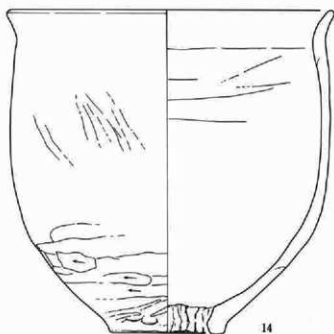
第38図 6号住居跡遺物出土状況



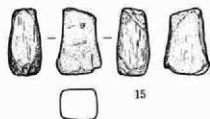
第39図 6号住居跡出土遺物(1)



13

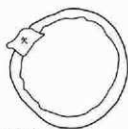


14



15

0 1:3 10cm



第40圖 6号住居跡出土遺物(2)

7号住居跡 (第41~45図 PL14・41)

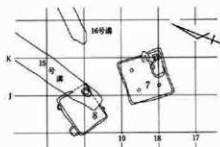
位置 IV区J・K-17・18

平面形 正方形。

規模 4.97×4.78m

面積 20m<sup>2</sup>

主軸方向 N-50°-E



**床面の状態** ハードロームを掘り込み、そのまま床面とする。全体にほぼ平坦であるが、貯蔵穴から南東壁際に沿って、長さ1.8m、幅1.4m、高さ10cm弱のやや盛り上がった部分が検出された。これは断面の観察から、1次的な床面の上に更にロームブロック等の土が踏み固められて形成されたものであることが判明した。これから、出入口部分は南東側と考えられよう。

**壁の状況** 高さは67cmで、ほぼ垂直に掘り込まれる。遺存状況は良好で、目立った崩落部分は認められない。  
**カマド** 北東壁の南東寄りで検出され、燃焼部天井が遺存する。規模は全長109cm、幅81cm、燃焼部長76cm、燃焼部幅50cmを測る。燃焼部奥壁から煙道部へは約50°の傾斜角で立ち上がる。燃焼部から煙道部への移行部分は径6cm前後の筒状を呈する。掘り方面にローム主体の土を貼って契口より5cmほど高い火床面を構築している。燃焼部本体は粘土を芯に、暗褐色土で覆って構築する。乾燥による割れを防ぐためであろうか。燃焼部内壁はかなり火熱変化を受けている。

**貯蔵穴** 東隅で検出。平面は隅丸長方形で、規模は69×62cm、深さ50cmを測る。断面形状は逆台形状で、底面は狭いが、ほぼ平坦。埋土は下層にローム主体、上層にローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土が堆積し、いずれも住居廃絶後の流入と思われる。

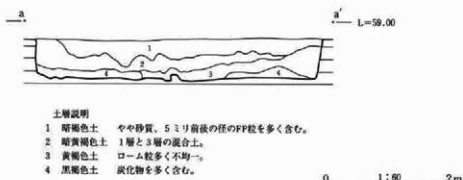
**ピット** 主柱穴4基が検出され、いずれも住居プランの対角線上に位置する。ほぼ垂直に掘り込まれており、抜き取りの痕跡は認められない。深さはP2が他より浅い。柱間寸法は住居主軸方向のP1-P3、P2-P4がやや長い。

**壁溝** なし。

**埋没状況** 床面上に焼土、炭化物が散乱しており、焼失家屋の可能性はある。その上層の土は自然堆積と思われる。

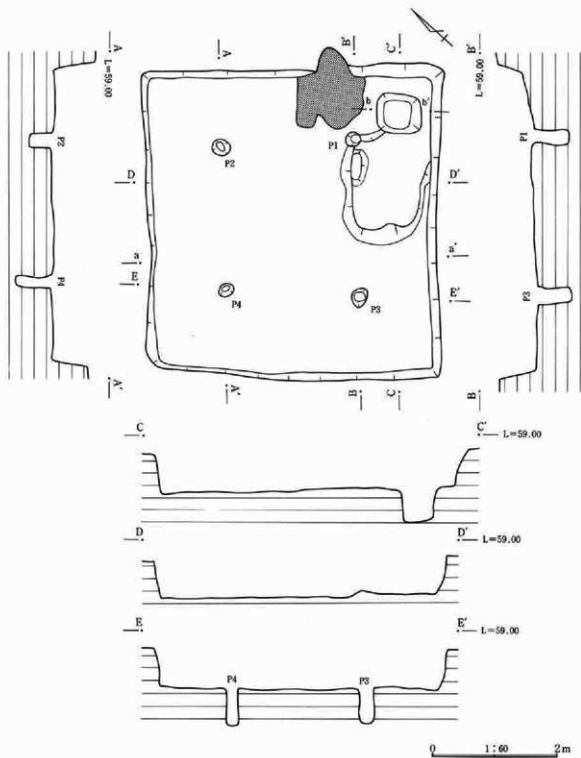
**出土遺物** 完形に近い欠損品も見られるが、カマド燃焼部からのものを除けば、大部分は埋土からの出土であり、使用時のまま置かれたものはない。

**重複遺構** なし。西側に隣接して8号住居跡が位置する。



第41図 7号住居跡土層断面

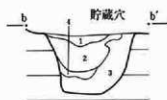




no	上層径	下層径	深さ
P1	25	18	60
P2	30	16×10	37
P3	32×25	17×14	35
P4	27×20	14×8	58

柱間寸法(m)	
P1-P2	2.17
P2-P1	2.26
P4-P3	2.16
P3-P1	2.48

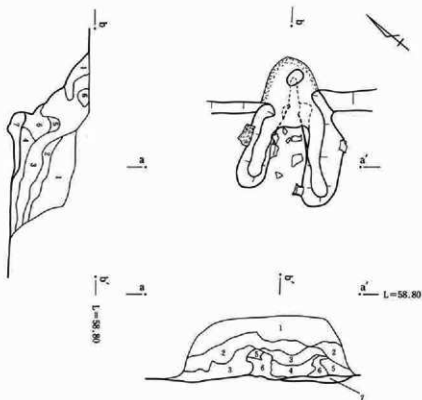
第42図 7号住居跡



0 1:30 1 m

土層説明

- 1 暗褐色土 住居下層埋土。
- 2 暗褐色土 1層よりロームブロック、ローム粒が多い。
- 3 黄褐色土 ロームを主とする壁の崩落土。
- 4 暗褐色土 粘土粒を含む。

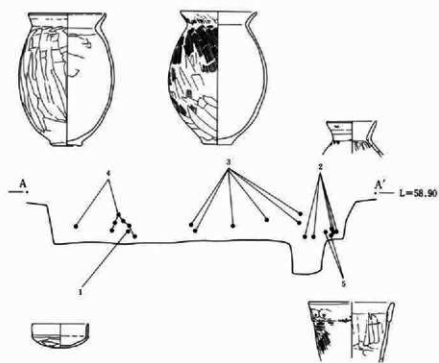
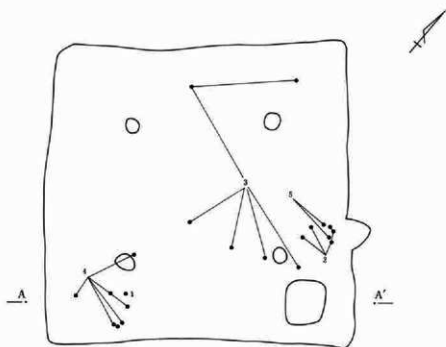


土層説明

- 1 黄褐色土 住居埋土3層に相当。
- 2 暗黄褐色土 1層に近似するが、ロームブロック多い。
- 3 暗灰褐色土 粘土粒、焼土を多く含む。
- 4 灰褐色土 焼土ブロックが多く、灰、粘土粒も含む。燃焼部内壁崩落土だろう。
- 5 黄灰褐色土 粘土、ローム、暗褐色土の混合土。
- 6 灰白色土 粘土を主とし、内壁面は焼成変化を受ける。
- 7 暗褐色土 掘り方埋土。ロームを多く用いて火床面を構築。

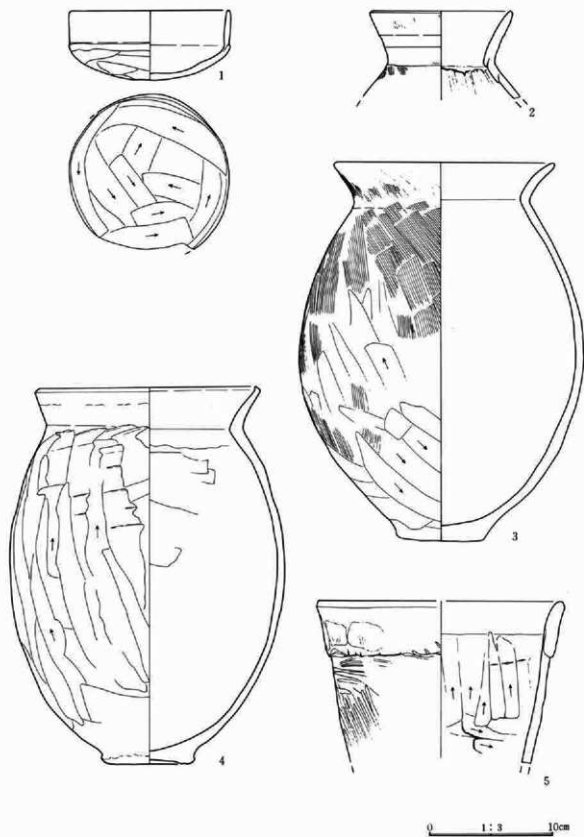
0 1:30 1 m

第43図 7号住居跡貯蔵穴断面及びピカマド



0 1:60 2m

第44图 7号住居跡遺物出土状況



第45図 7号住居跡出土遺物

## 8号住居跡 (第46~48図 PL15・42)

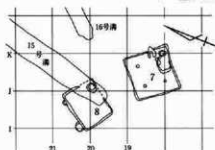
位置 N区1-19・20

平面形 長方形。

規模 4.53×3.87m

面積 (14) m<sup>2</sup>

主軸方向 N-38°-E



**床面の状態** 地山のハードローンを床面とするが、壁際は幅40cm前後、深さ1~9cmでやや深く掘り込まれている。この部分には、ルーム主体の土が埋填される。全体に平坦でレベル差は少ない。

**壁の状態** 高さは64cmで、上半部がやや崩落しており、弱く外傾する。本来は垂直に近いと思われる。

**カマド** 北東壁の中央付近で左袖部が検出された。燃焼部主体は重複する15号溝に切られて遺存せず。規模と形状は不明。袖の芯は粘土をそのまま使用。

**貯蔵穴** 東隅で15号溝と重複する部分で検出。平面は隅丸長方形で、規模98×76cm、深さ60cmを測る。壁崩落土と思われるロームが堆積している。

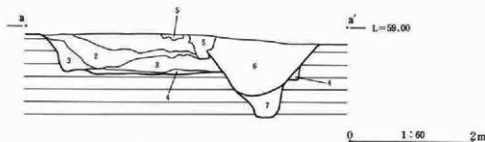
**ピット** 床面精査の段階では柱穴等のピットは検出されなかった。床硬化面を削除した段階で、規模の不揃いなピット6基が検出された。そのうちP1~P3は主軸上にはほぼ等間隔で位置しており、これが棟持柱の当初は柱穴であった可能性もあるが、廃棄時点では埋土により床が形成されている。また、南西壁際の2基のピットP4とP5はほぼ同規模で並列しており、出入り口施設に伴う支柱穴の可能性もある。なおこの部分は硬化した床面は認められなかった。

**壁溝** 認められない。

**埋没状況** ほぼレンズ状の堆積状況を示し、自然埋没によるものと思われる。下層にはルーム土粒を含み、上位の層ほど標名山二ツ岳給源のテフラを多く含む。

**出土遺物** 床面から甕が潰れた状態で、また南東隅から完形の小形杯が出土している以外はほとんどが破片である。他に精円礫2点、土製円盤、白玉欠損品が見られる。時期は古墳時代後期に限定できよう。

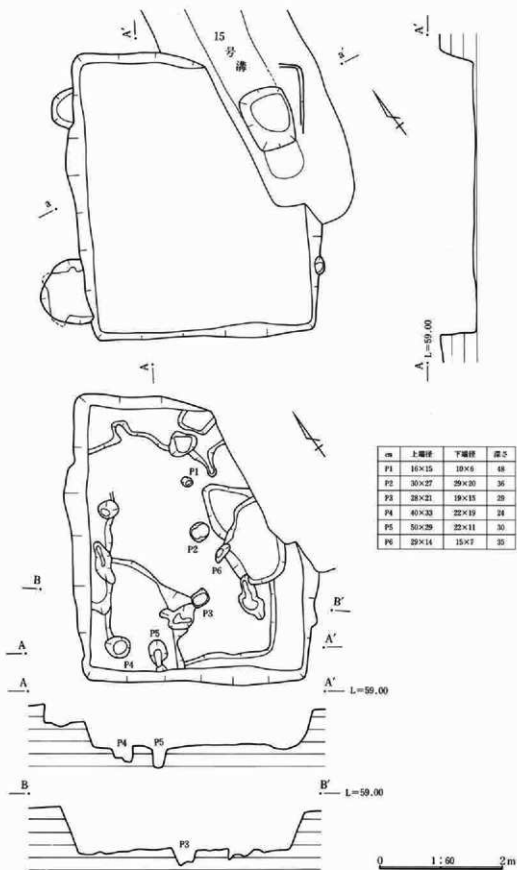
**重複遺構** 北西壁と南東壁に3基のピットと重複しており、埋土の状況から、いずれも本住居跡より新しいことが判明している。



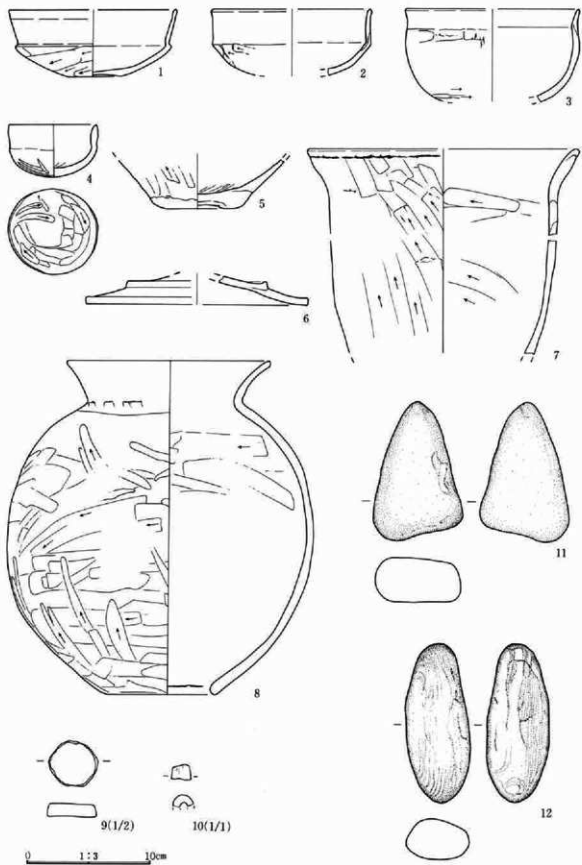
## 土層説明

- 1 黒褐色土 径5ミリ以下の軽石 (FA か FP) を含む。
- 2 暗褐色土 軽石 (FA か FP) を少量含む。色調は不均一。
- 3 暗黄褐色土 ロームを主とし、土粒は粗い。
- 4 黄褐色土 ロームを主とし、3層より粘性が高い。
- 5 木の根による擾乱
- 6 暗褐色土 15号溝埋土。
- 7 暗褐色粘土 貯蔵穴埋土。

第46図 8号住居跡土層断面



第47図 8号住居跡



第48图 8号住居跡出土遺物

9号住居跡 (第49～56図 PL16・17・42・43)

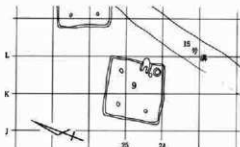
位置 IV区J・K-24・25

平面形 ほぼ正方形。

規模 6.20×6.32m

面積 35㎡

主軸方向 N-74°-E



**床面の状態** 地山のロームを床土としており、貼床は認められない。主柱穴に閉鎖された部分が特に硬質で、土間的に使われたことが明らかである。全体にレベル差はほとんど無く平坦。床下の柱穴やピットの存在から部分的に床面補修した可能性が高い。

**壁の状態** 高さは64.0cmで、やや外傾気味に掘り込まれているが、壁線には乱れがない。南壁中央の上部分がやや崩れている。

**カマド** 東壁のやや南寄りで煙道部を除く本体を検出。規模は全長160cm、幅110cm、燃焼部長87cm、燃焼部幅55cmを測る。燃焼部は細長い平面形を呈し、焚口はややくぼんでおり、火床面はほぼ平坦。奥壁は約60°で外傾し、煙道部は約30°で立ち上がる。掘り方は、壁にかけて摺鉢状に掘り込み、粘土とロームの混合土を埋填して火床面から煙道部にかけての下面を構築し、その上に袖部や天井部を築く。なお火床面の下位にはロームブロックを含む暗褐色土を埋填している。燃焼部内には崩落した内壁と思われる焼土ブロックが多量に堆積している。燃焼部内からは、焚口付近に2点の高杯、中央付近に甕、奥に把手付き甕が出土しており、特に高杯と甕は潰れてはならず、正立していたことから使用状態に近いものと考えられる。ただし甕の下位には甕は見られなかった。

**貯蔵穴** 南東隅、カマド右脇で検出。円形を呈し、径80cm、深さ55cmを測る。断面は台形状で、底面はほぼ平坦。埋土は自然堆積によるものと思われる。

**ピット** 主柱穴8基、北東柱穴脇でP9、北西隅で貯蔵穴とも考えられるP10、南壁際中央付近でP11の計11基が検出された。主柱穴はP1～P4が住居廃絶時に開口しており、P5～P8は床下から検出されたことから、柱が据え替えられたことが明らかである。主軸方向に柱間を広げただけで上屋構造への影響は少ない。P10は楕円形を呈し、径65×55cm、深さ59cmを測る。壁はオーバーハングしており、小ロームブロックを含む暗褐色土、黒褐色土が堆積する。床面形成との先後関係は確認できなかったが、これが人為的埋土とすれば柱穴P5～P8に伴う初期段階の貯蔵穴の可能性もあろう。P11は壁溝埋土を切っているが、粘土主体の人為的埋土で上面に厚く踏み固められた硬化面が形成されていることから、出入り口関連施設の掘り方との見方ができよう。

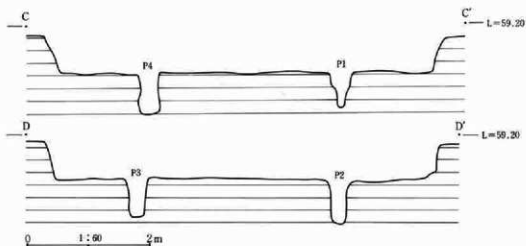
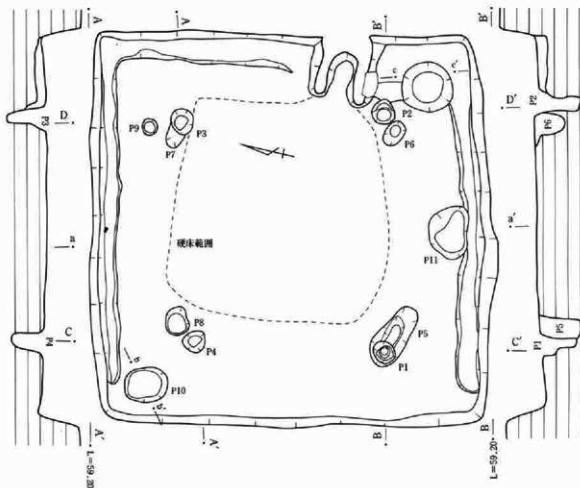
**壁溝** 西壁を除く壁に沿って走り、幅はカマド付近で最も広く32cmを測り他の部分は18cm前後を測る。深さは6～15cmで底面は一定していない。人為的埋土と思われるローム主体の土で充填しており、一部で床面が形成されていることから、溝としての機能より擁壁材等を据えた掘り方と考えたい。

**埋没状況** 壁際にロームの堆積が見られ、中央にはローム粒を含む暗褐色土がレンズ状に堆積する。中層には榛名山二ツ岳給源のテフラ (FP) が混在し、上層にはAs-Bが見られる。自然堆積だろう。

**出土遺物** カマド付近を中心に土器の完形品が多く出土しており、特に貯蔵穴脇の甕2個体 (第56図-23・24) は正立の状態検出されており (PL17)、使用時の状況を示している。破片は埋土からが多く、提案あるいは流れ込んだものと考えられよう。時期は古墳時代後期に限られる。

**重複遺構** なし。

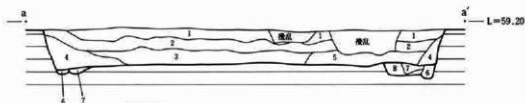




cm	上層径	下層径	深さ
P1	38×32	11	57
P2	40×36	21×18	71
P3	40×35	22×20	63
P4	35×38	30×15	30
P5	105×47	—×15	71

P6	40×28	17×14	81
P7	—	—	57
P8	45×35	32×28	77
P9	24×23	16	16
P10	78×55	55×44	61
P11	81×60	61×47	15

第49图 9号住居跡

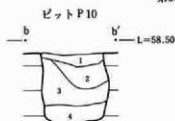


土層説明

- 1 黒褐色土 As-Bを多く含む。
- 2 暗褐色土 FAかFPの軽石を少量含む。
- 3 暗褐色土 2層に近似するが、黄褐色の斑紋が見られる。
- 4 黄褐色土 ロームを主とする。
- 5 褐色土 3層に近似するが、ロームの含有量が多い。
- 6 黄褐色土 ロームが主体、周溝土。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む人為的埋土。
- 8 黒灰色粘土 カマド構築土と同質。上面は床面。

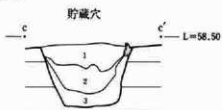
第50図 9号住居跡土層断面

0 1:60 2m



土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒を含み、軟質。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 4 黄褐色土 ロームを主とし、粘性強い。

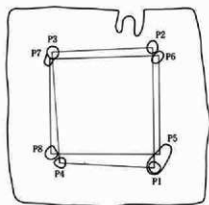


土層説明

- 1 暗褐色土 やや粘質で灰褐色の土粒を混合する。ロームブロックを若干含む。
- 2 暗褐色土 1よりもやや暗い色調を呈する。粘性を有する。
- 3 暗黄褐色土 ロームの流れ込みの土と2層の混合土。粘性を有する。

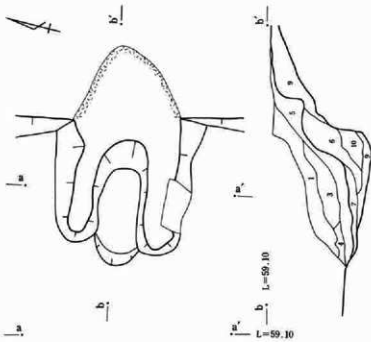
0 1:30 1m

第51図 9号住居跡ピットP10及び貯蔵穴断面



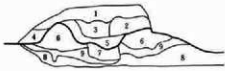
	柱間寸法(m)
P1-P2	3.85
P2-P3	3.20
P3-P4	3.55
P4-P1	3.05
P5-P6	3.15
P6-P7	3.50
P7-P8	3.05
P8-P5	3.50

第52図 9号住居跡柱穴配置図

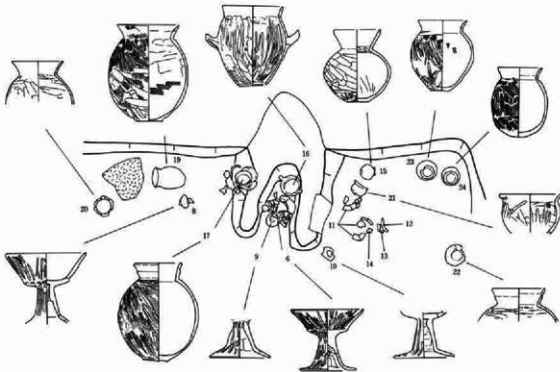


土層説明

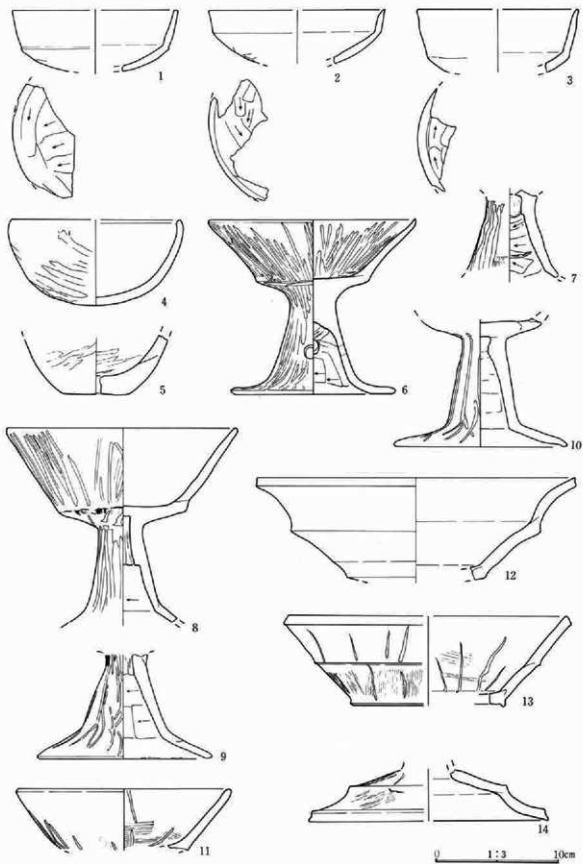
- |    |       |                    |
|----|-------|--------------------|
| 1  | 暗褐色土  | ローム粒、粘土粒を少量含む。     |
| 2  | 暗褐色土  | 粘土粒を多く含む。          |
| 3  | 暗褐色土  | 焼土ブロックを含む。         |
| 4  | 暗褐色土  | ロームブロックを含む。        |
| 5  | 赤褐色土  | 焼土が主体。             |
| 6  | 灰色粘土  | 袖部分。               |
| 7  | 暗褐色土  | ローム粒を含む。上面は火床面。    |
| 8  | 黄褐色土  | ロームブロック、ローム粒を主とする。 |
| 9  | 暗褐色土  | 粘土粒を多く含む。          |
| 10 | 灰黒褐色土 | 粘土が主、炭化物粒とローム粒を含む。 |



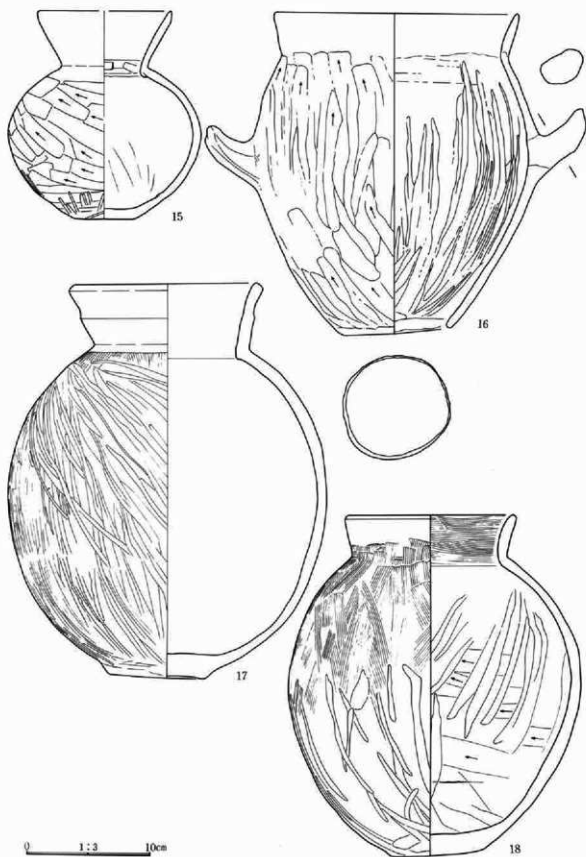
0 1:30 1m



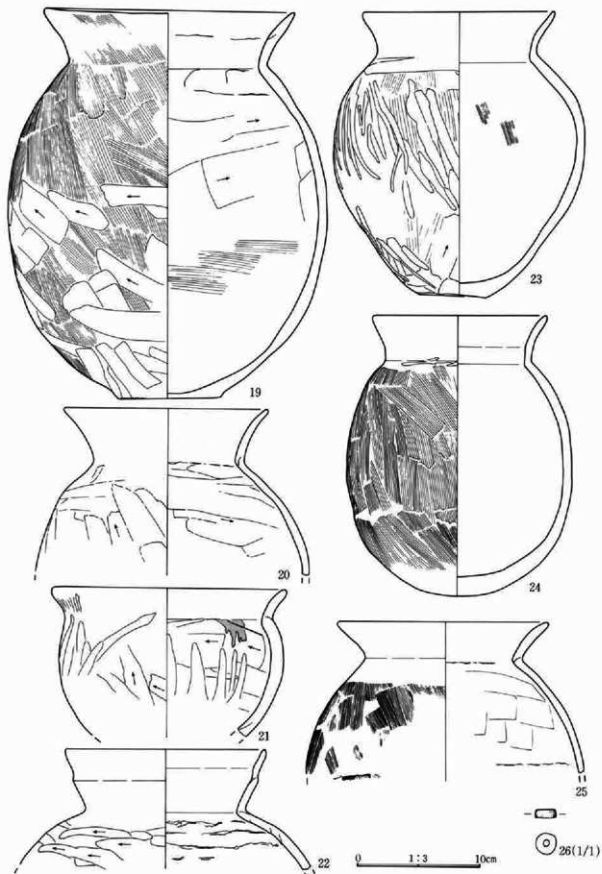
第53図 9号住居跡カマド及び遺物出土状況



第54図 9号住居跡出土遺物(1)



第55图 9号住居跡出土遺物(2)



第56図 9号住居跡出土遺物(3)

10号住居跡 (第57-63図 PL18-19-44-45)

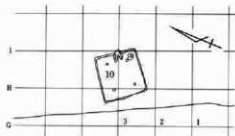
位置 V区G・H-2・3

平面形 正方形。

規模 4.92×4.90m

面積 20m<sup>2</sup>

主軸方向 N-57°-E



**床面の状態** ロームを主とした埋土で15-20cmの厚さの貼床を構築する。一定していないが、部分的に地山を床としているところから全面的な貼床ではなく、床を平坦にする目的だろう。西隅が軟質で、南東からカマド前面にかけてが特に硬質。レベル差は少なく、ほぼ水平である。

**壁の状態** ほぼ垂直で、遺存状況は良好。高さは61cmを測る。とくに変化は見られず、直線的に掘り込まれる。

**カマド** 北東壁のほぼ中央で検出。煙道部を除いて遺存状況は良好。規模は全長110cm、幅92cmを測る。燃焼部は平面楕円形で長さ68cm、幅55cmを測り、横断面は「U」字状を呈する。火床面は焚口よりややくぼんだ皿状で堅く焼きしまっている。奥壁は60°で外傾し30cmほどのテラスをおいて45°で傾斜する煙道部に続く。掘り方は壁から竪穴内まで摺鉢状に掘りくぼめ、粘土とロームの混合土を埋填して基盤を構築する。その上に同様の土で本体を築く。なお本体構築材の中に焼土が散見されることから、1次的なカマド材を利用して再構築した可能性がある。器設部から完形ないしそれに近い土器が出土したが、なかでも中央やや左よりから内傾して検出された壺(12)は懸けられたままの使用状態に近いものとして注目される。右寄りからは鉢(14)が検出されており、これも使用状態と解すれば左右2個懸けのカマドの可能性が高い。

**貯蔵穴** 東端、カマドの右脇で検出された。平面形は不整形円で、径86×77cm、深さ61cmを測る。埋土は壁の崩落土のロームを主にした土が流れ込んだと推定される状態で堆積している。

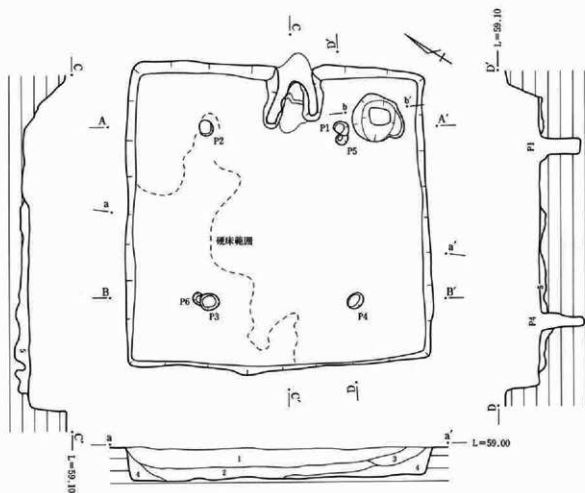
**ピット** 主柱穴6基が検出された。P1とP5、P3とP6は同位置にあることから同じ目的によるものと考えられるが、新旧関係は不明。ほぼ垂直に掘り込まれ、抜き取りのための掘削痕は認められない。底はほぼ平坦で、径は最小で14cmを測る。柱間寸法は住居主軸方向が50-60cm長く、この方向が桁、棟であったことが推察される。

**壁溝** 認められない。

**埋没状況** 大きくは壁際の流入土とその後に堆積した暗褐色土に2分される。暗褐色土には榛名山二ツ岳給源テフラが見られ、上層ほど多い。なお埋土にロームブロックが散見されるが、数cm大の小さなもので、人為的埋土とは断じがたい。

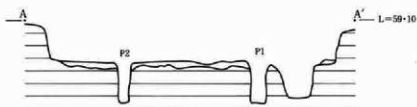
**出土遺物** カマドとその周辺床面から出土した遺存状態の良好な土器は、使用状態に近いと判断された前述の壺を始めとして、本住居に伴うのは明らかである。南東から南端の壁際に沿って出土した土器破片は埋土中位のものが大部分であることから、住居廃棄後やや時間を置いてからの流入だろう。時期は総て古墳時代後期初頭に限られる。

**重複遺構** なし。



土層説明

- 1 黒褐色土 軽石 (FA か FP) を多量に含む。ローム粒、赤色粒等も見られる。
- 2 暗褐色土 軽石、炭化材、焼土ブロック、赤色粒を含む。
- 3 暗褐色土 軽石、ローム粒を含み、しまりなし。
- 4 暗褐色土 軽石を若干、ロームブロック、焼土、炭化物を含む。
- 5 粘土層土



番号	上層径	下層径	深さ
P1	25×19	17×14	67
P2	25×20	24×20	62
P3	25	22×18	45
P4	28×20	23×14	71
P5	—	—	11
P6	—	—	18

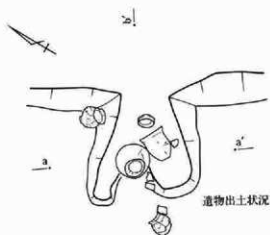


	柱間寸法 (m)
P1-P2	2.14
P2-P3	2.78
P3-P4	2.30
P4-P1	2.74

0 1:60 2m

第57図 10号住居跡





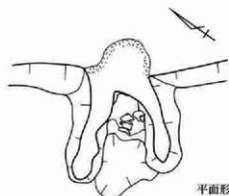
遺物出土状況

0 ———— a' ———— L=99.00 ———— a

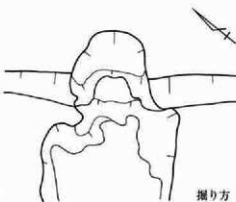


## 土層説明

- 1 赤褐色土 焼土、軽石 (FA か FP) 含む。
- 2 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 3 灰褐色土 粘土、焼土、炭化物、灰を含む。
- 4 黄灰褐色土 粘土とローム粒の混合土。
- 5 黄褐色土 粘土を主としローム粒を含む。
- 6 暗褐色土 焼土、炭化物を含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック、炭化物を含む。
- 8 黄褐色土 ローム粒を含む。焼遺埋土か。

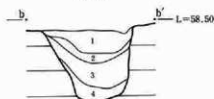


平面形



掘り方

## 貯蔵穴

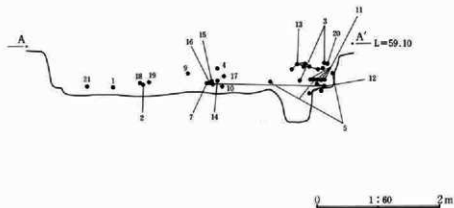
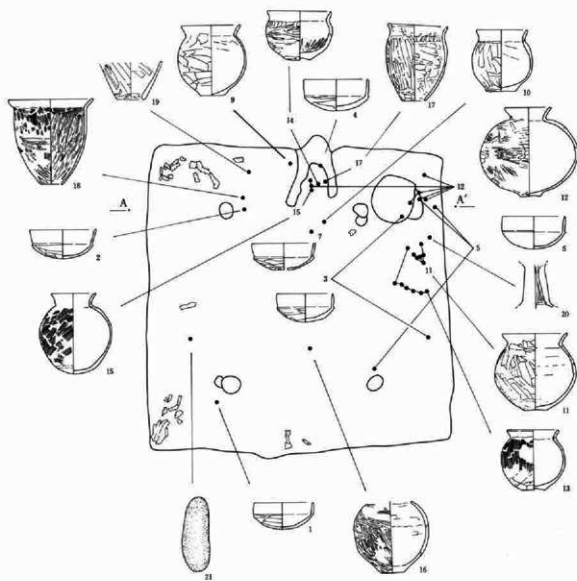


## 土層説明

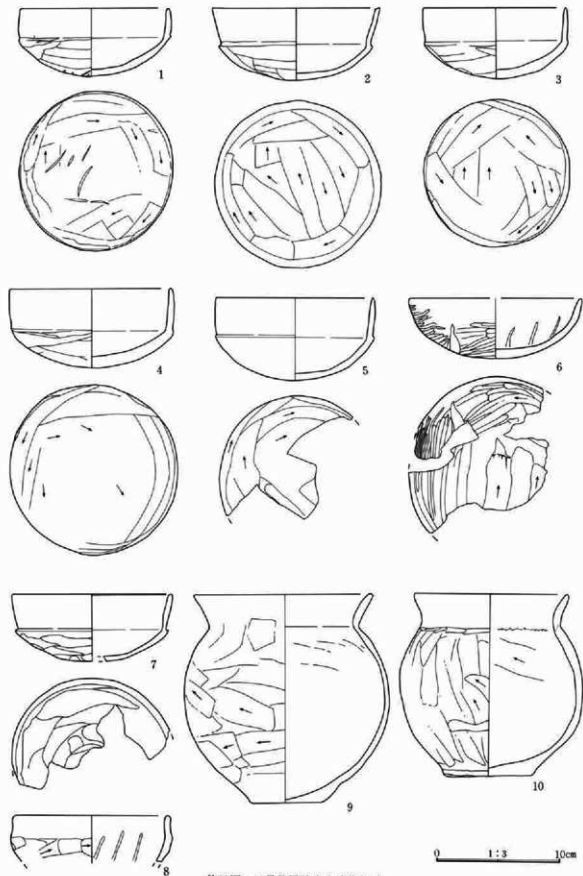
- 1 黒褐色土 炭化物粒、焼土粒を含む。土粒はやや粗い。
- 2 暗褐色土 ローム土粒を混入する。やや粘性を有する。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒を多く混入。下位ではロームの色調がやや灰色を帯びる。
- 4 黄褐色土 粘性が強く、やや灰色を帯びる。炭化物を含む。

0 ———— 1:30 ———— 1m

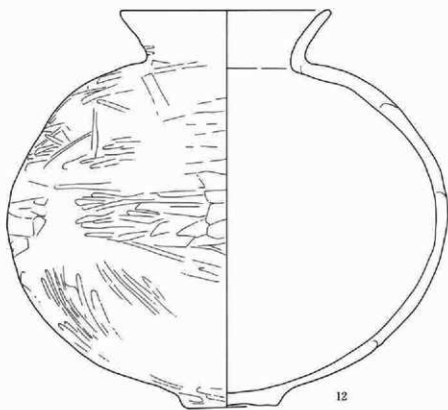
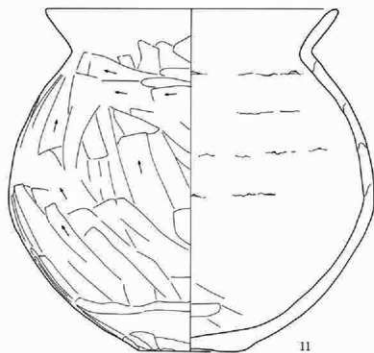
第58図 10号住居跡カマド及び貯蔵穴断面



第59図 10号住居跡遺物出土状況



第60图 10号住居跡出土遺物(1)

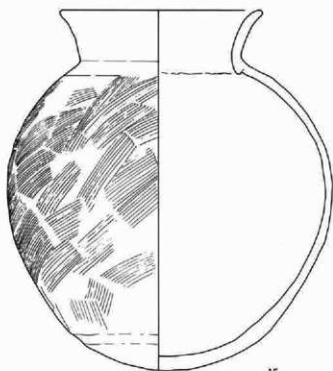


0 1:3 10cm

第61図 10号住居跡出土遺物(2)



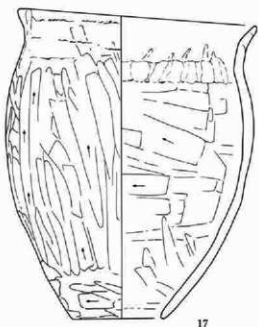
13



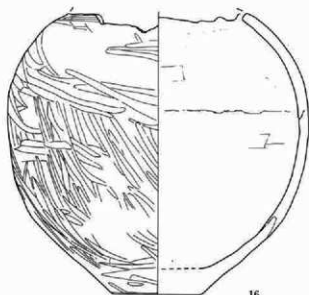
15



14



17

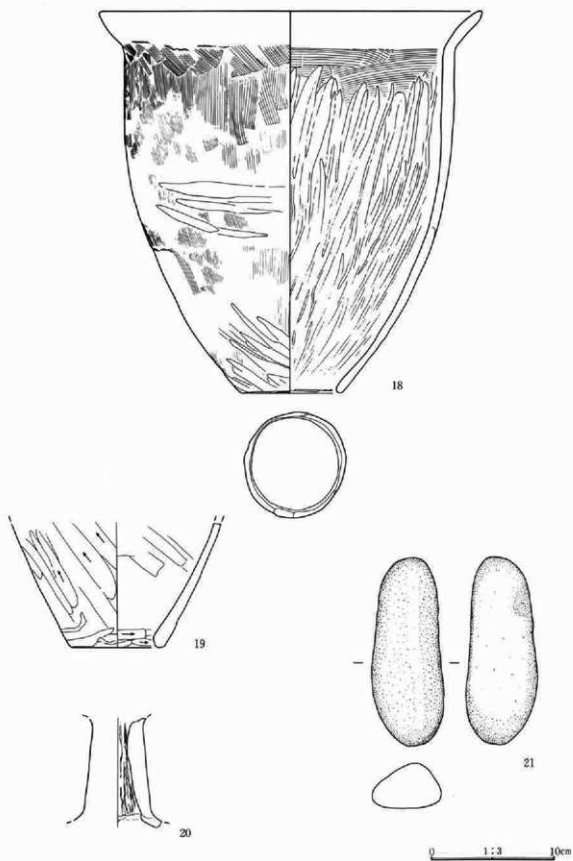


16



0 1:3 10cm

第62図 10号住居跡出土遺物(3)



第63図 10号住居跡出土遺物(4)

## 11号住居跡 (第64~69図 PL20-21-46)

位置 IV・V区L・M-25・1

平面形 横長長方形。

規模 5.30×5.69m

面積 25m<sup>2</sup>

主軸方向 N-67°-E



**床面の状態** 地山のロームをそのまま床としている。中央部分が特に縦横で凹凸が激しい。レベルはほぼ均一で、南側にやや低く傾斜する。

**壁の状態** ほぼ垂直に掘り込まれ、高さは63cmを測る。南東壁は崩落が見られる。

**カマド** 北東壁の中央で検出。東半を15号溝、上半は擾乱により削平されて遺存状況は不良。壁から90cmほどの規模で竪穴内に張り出す。床より10cmほど皿状に掘りくぼめ、ここにロームと暗褐色土の混土を埋填した後に灰色粘土で本体を構築する。燃焼部の幅は25cm前後で、火床面は平坦で硬化している。燃焼部奥には高杯(1)を伏せ、この上に壺(6)が載った状態で検出された。

**貯蔵穴** カマドの左脇で検出。不整形を呈し、径60×53cm、深さ68cmを測る。底面は平坦で円形を呈する。

**ピット** 住居対角線上に4基の主柱穴が検出された。ほぼ垂直の掘り込みで、抜き取り穴は見られない。直径はいずれも20cm以下で、下端では12cm以下とかなり小規模である。柱間寸法は主軸方向より直交方向が17~27cm長い。北端には床下から不整形の浅いピットP5が検出され、ロームブロック混入の暗褐色土が埋填されていた。上面で硬化面は明確でなかったが、住居生活時には黒められていたと思われる。

**壁溝** 北西と南東壁に沿って、それぞれ隅から1.3m、1.15mの間をあけている。幅は25~12cm、深さ9~3cmを測る。ロームを主とした黄褐色土が堆積する。

**間仕切り溝** 各柱穴から各壁に延びて検出された。深さや幅の規模は不均一で、底面も凹凸が見られる。埋土はロームが多く、床面検出時には確認できなかった。このことから根太のような材を寝かしたのではなく、立位に材を立て並べたのではない。

**掘り方** 床下からは南東壁際で深さ15cmほどの不定形の浅い掘り込みが検出された。埋土はロームブロックを主とする。出入口施設に伴うものか。

**埋没状況** 埋土はレンズ状に堆積しており、上層には樺名山二ツ岳給源のバミス(FPと思われる)が多く混入する。

**出土遺物** カマド内出土の壺5・6と高杯1、床直の壺4以外のものは第1次埋没後に投棄されたと考えられる。時期は古墳時代後期初期に限られる。

**重複遺構** 15号溝に切られる。

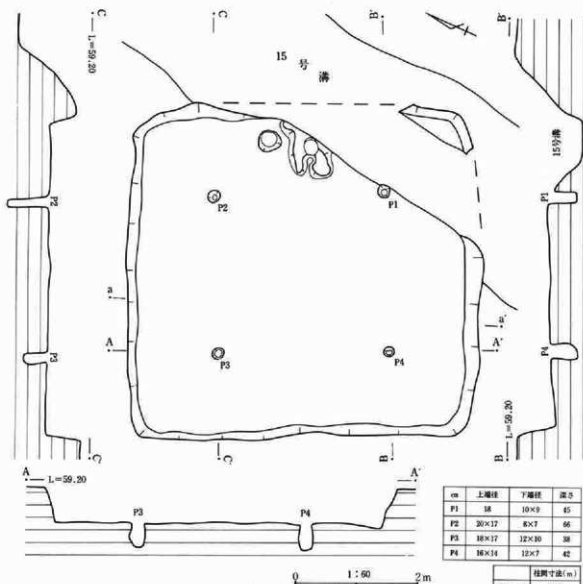


## 土層説明

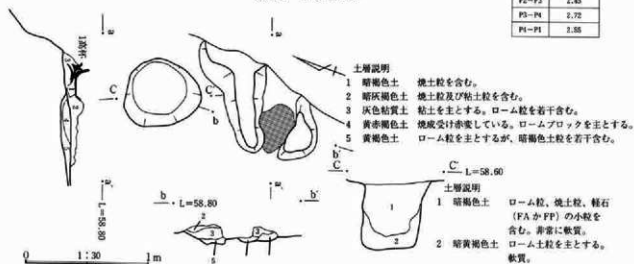
- 1 黒褐色土 ローム粒を若干含む。FP粒(2~3ミリ)を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む。軽石(FAかFP)及び淡黄色のバミスを含む。
- 3 黒褐色土 黒色の有機質土にローム土粒が不均一に混入する。淡黄色の小バミス、FAを含む。
- 4 黄褐色土 ローム土粒を主とする。ローム土内の小バミスを含む。

第64図 11号住居跡土層断面

0 1:60 2m

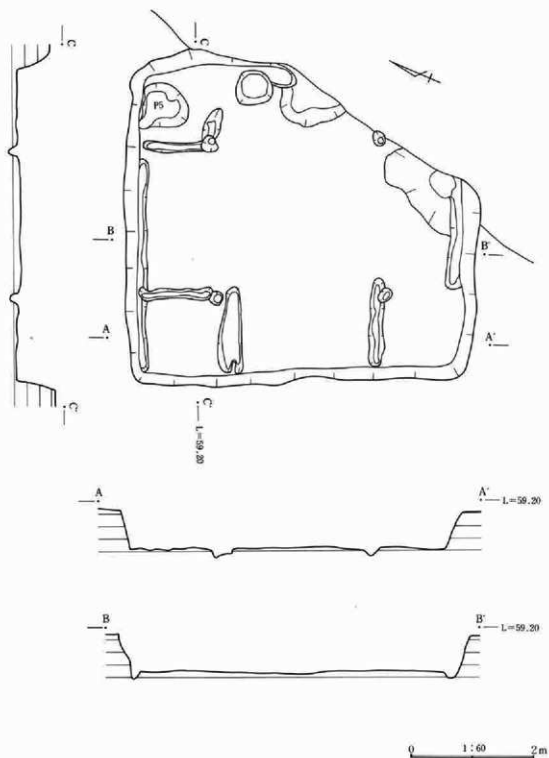


第65図 11号住居跡

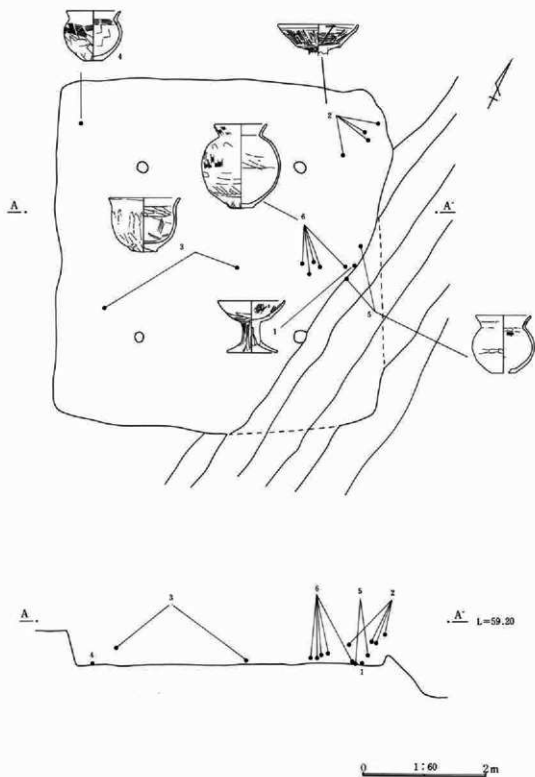


第66図 11号住居跡カマド及び貯蔵穴断面

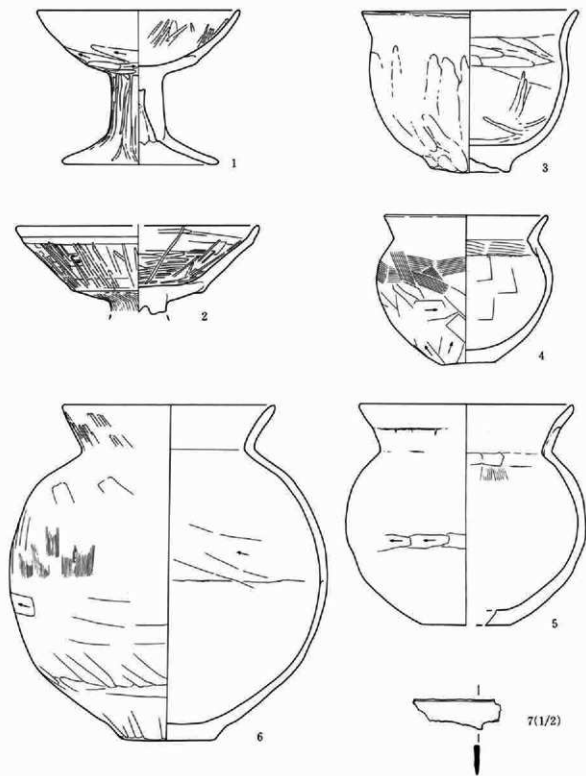




第67図 11号住居跡掘り方



第68図 11号住居跡遺物出土状況



0 1:3 10cm

第69図 11号住居跡出土遺物

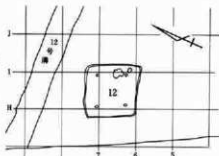
12号住居跡 (第70～77図 PL.22・23・47・48)

位置 V区I-5・6 平面形 ほほ正方形で北東部が丸い。

規模 6.2×6.2m 面積 33㎡ 主軸方向 N-71°-E

床面の状態 ソフトロームまで掘り込んでほほ地山のまま使用。

中央を境に東西で状態が異なる。東半は壁際を除いて堅緻でレベルがやや高い。一方西半は比較的平坦で軟質である。第70図に示した破綻部分が硬質な床面にあたる。壁付近の床面にはローム粒やロームブロックを含む土が見られるが、その分布範囲や深さに一定の企画性が認められないことから貼床として故意に埋めたのではなく土間として使用し部分的に補修した結果と考えたい。南壁際の床面が最も堅緻で盛り上がっていることからこの部分が出入り口、東半が土間、西半が寝所と想定されよう。



壁の状況 高さは28.5cmで、東半部分の遺存状況が比較的よい。やや外傾気味だが崩落は少ない。

炉 東壁寄りで約40cm離れており、やや南に偏って検出された。形状はドーナツ状の盛土に囲まれた燃焼部と土俵頭状に盛り上がった背後部分からなり、全体に粘土とロームの混合土で構築してある。規模は全長106cm幅99cmで、楕円形の燃焼部内圍は径50×76cmを測る。火床面は周囲の床面よりやや深く皿状に掘りくぼめてあり、薄く粘土を貼つたらしい。燃焼により硬化した面は検出されなかったが、燃焼部には粘土を主とする焼土ブロックが厚く堆積していた。この焼土を燃焼部を囲む盛土が崩落したものとすれば、使用当時には高さ20cm前後の盛土であったと推定される。なお北側は遺存状況が不良であるが、断面では5cm程の盛土が確認されていることから、この盛土が燃焼部を全周したと考えられる。燃焼部の南側に接続する背後の部分は床面から8cm程の高さの盛土でほとんど火熱を受けていない。中央部は後世の擾乱で破壊されて全形を検出できなかったが、遺存部分から上面が平坦な壇状の盛土であったと考えられる。なおこの壇状盛土の背後に密着して台座として再利用された甕の口縁が検出されたことから、この部分が土器類を据え置く場所と想定されよう。これは立体構造をもつ燃焼施設であることからカマドの初潭形態とも考えられるが、煮沸具の懸架構造が明瞭でないこと、吹き口や煙道部が認められないことから使用方法は従来の炉とほとんど同一と考えられ、カマド採用直後の時期にその形状にのみ影響を受けて造られたものと解釈したい。また住居の中央にも不整形楕円形の炉を検出した。径97×50cmを測り、深さ10cm程の皿状に掘りくぼめられる。火床面が硬化しており、焼土ブロックが堆積することから炉として使用されたのは間違いないが、軟質床面と近似する暗黄褐色土が上面に見られることから、途中で廃絶された可能性がある。

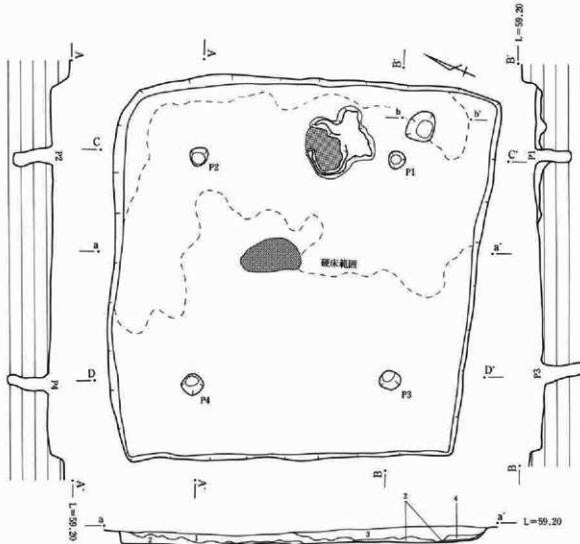
ピット 検出された4基はいずれも主柱穴で、深さは東側の2基がやや浅い。柱穴断面は外傾気味だが底面の位置から柱はほほ垂直に立てられたと考えられる。

貯蔵穴 南東部の南壁と炉の中間位置で検出された。上半は擾乱を受けて不整形、底面は小さな円形を呈する。径は55×45cmで深さは61cmを測る。埋土の大部分は周辺からの流入による自然堆積によるものであることから、廃棄時には開口していたと考えられる。

埋没状況 南側からの流入土が多く、偏った堆積状況を示す。自然堆積による埋没と思われる。

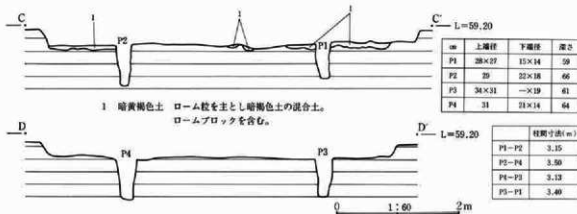
出土遺物 ほとんどの遺物は東半の壁際から集中して出土しており、出土レベルは床面からやや浮いた埋土下層が多い。この出土状況から、本住居廃絶後やや時間を置いて廃棄したものと考えられよう。本住居跡に確実に伴うのは、炉と壁の間に据え置かれた甕口縁 (25・28・30) で、いずれも台座として再利用されたものである。土器以外では、白玉、小玉、土玉、砥石が出土している。土器はほほ同一時期の所産と考えられ、各器種を比較した場合に他の住居出土土器より古式の線相をもつものが多い。

重複遺構 なし。

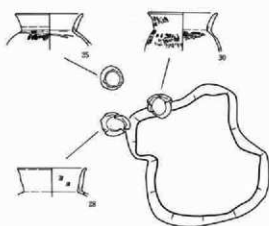
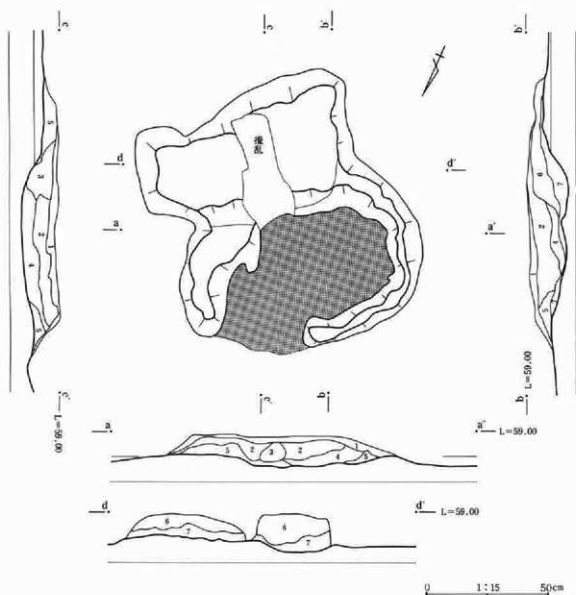


## 土層説明

- 1 暗黄褐色土 粒子は粗く粘性をもたない。FP 粒はほとんど含まない。黄色の小パミス若干含む。
- 2 黄褐色土 ローム土粒を主とする。若干1層の土粒を含む。パミスほとんど見られない。
- 3 暗褐色土 軽石 (FA か FP)、ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土 軽石 (FA か FP) と若干のロームブロックを含む。3層に類似する。



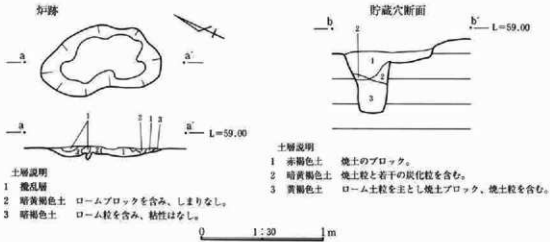
第70図 12号住居跡



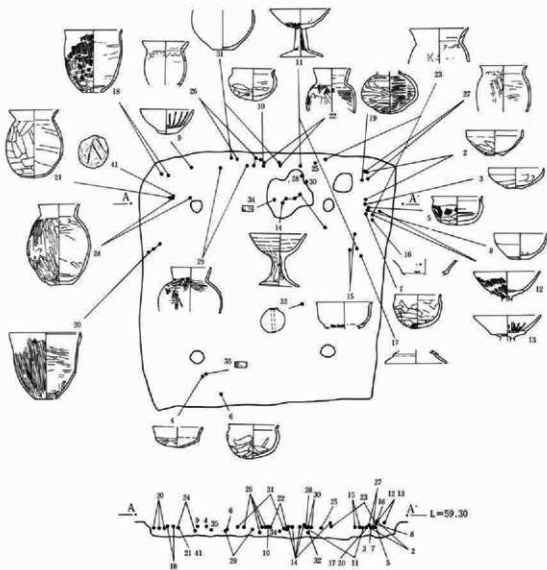
土層説明

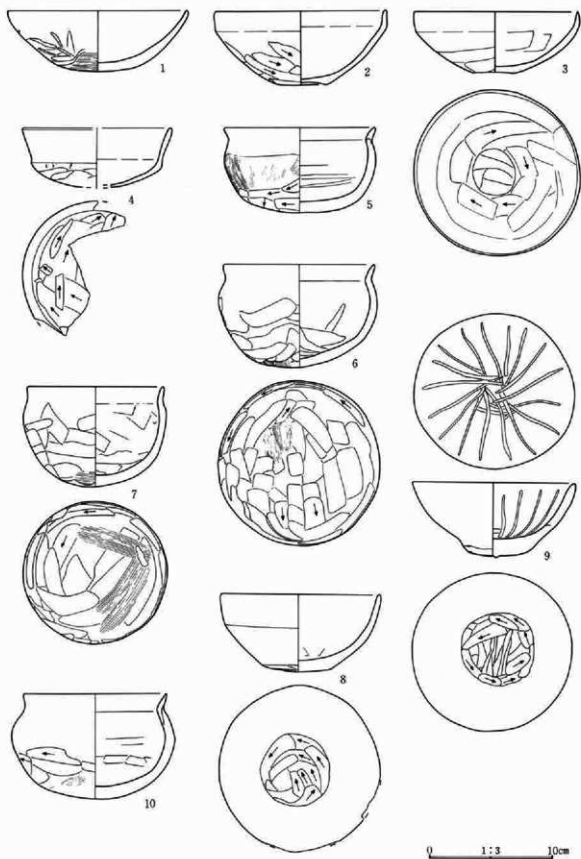
- 1 暗灰褐色土 灰及び焼土を若干含む。
- 2 赤灰褐色土 粘土粒を主とし、焼土のブロックを含む。
- 3 黄褐色土 焼土を若干含むが、ローム土粒を主とする。  
機瓦と思われる。
- 4 黄赤色土 粘土、ロームの焼けたブロックを含む。
- 5 灰黄色土 粘土を主とする。ローム粒もかなり混合する。  
カマドの地床と思われる。
- 6 灰褐色土 やや赤味がかっている。粘土粒を主とする。
- 7 黄灰褐色土 ローム土と粘土の混合土。

第71図 12号住居跡及び遺物出土状況



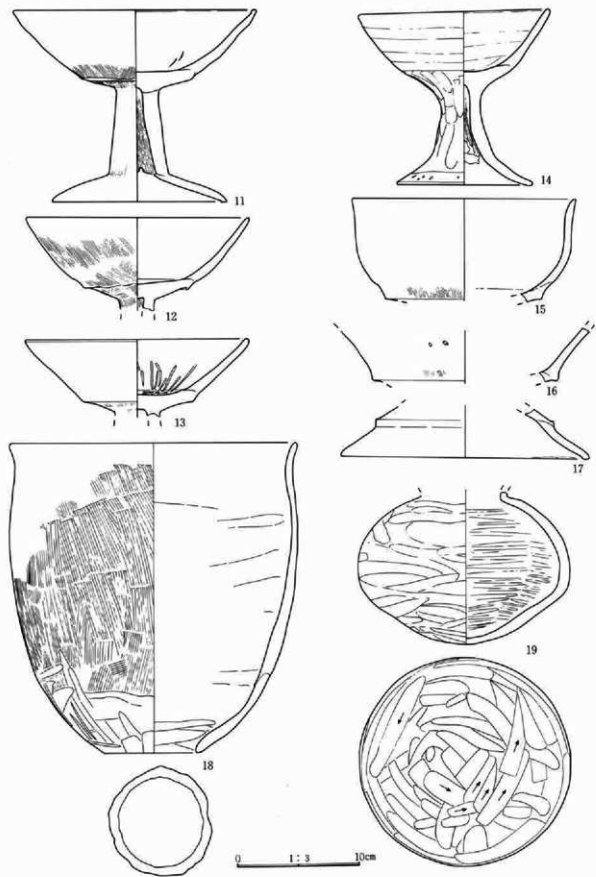
第72図 12号住居跡印及び貯蔵穴断面



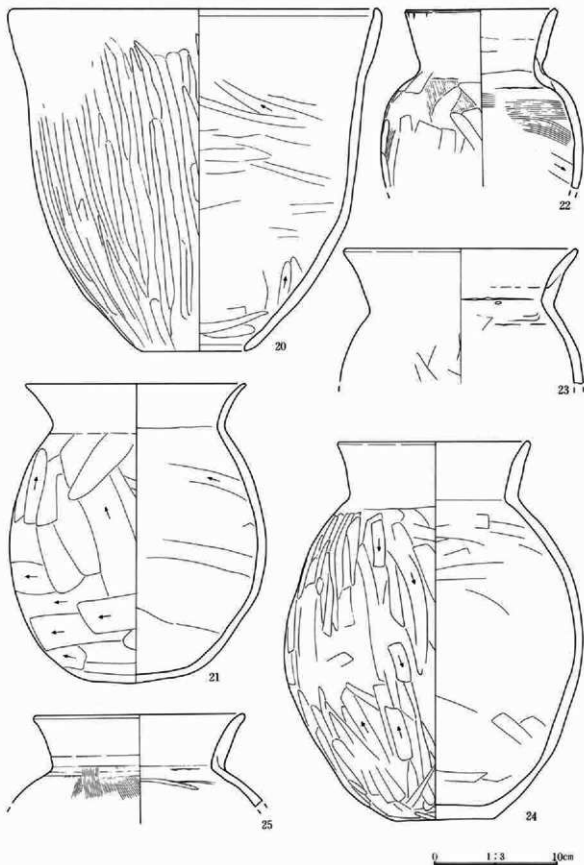


第74図 12号住居跡出土遺物(1)

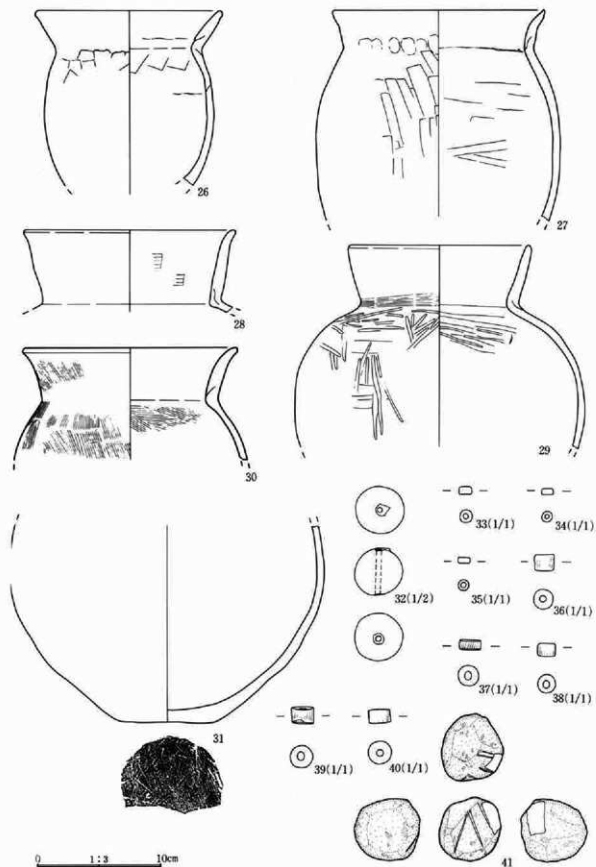




第75図 12号住居跡出土遺物(2)



第76図 12号住居跡出土遺物(3)



第77図 12号住居跡出土物(4)

13号住居跡 (第78-81図 PL24・49)

位置 V区0・P-5・6

平面形 ほぼ正方形

規模 6.40×6.16m 面積 (35) m<sup>2</sup>

主軸方向 N-58°-E

床面の状態 ロームをそのまま床面としており、レベルはほぼ均等。

東壁際から中央部(第78図破線部分)はやや硬質。補修等はない。

壁の状況 ほぼ垂直で直線的に掘り込まれ、深さは63cmを測る。

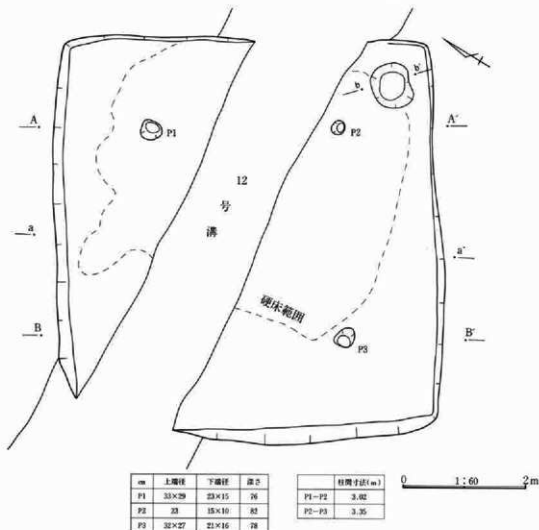
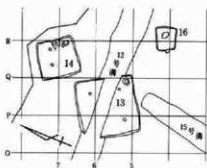
カマド 検出されず。貯蔵穴 南東隅で検出。楕円形で径72×58cm、深さ62cmを測る。

ピット 主柱穴3基が検出された。断面は筒状で細く、特にP2は柱と大差ない大きさと考えられる。

埋没の状況 壁際から下層には地山のローム粒を主体とする流入土が厚く堆積する。自然埋没と思われる。

出土遺物 南東隅の貯蔵穴脇から甕1個体が潰れた状態で出土した。土器以外では楕円形の滑石製模造品が埋土から出土している。埋土中からの遺物は極めて少なく、他の住居と異なり廃棄場所ではないらしい。

重複遺構 12号溝に切られる。

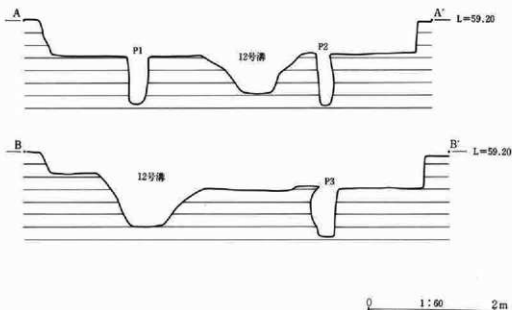


第78図 13号住居跡

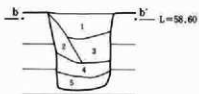


## 土層説明

- 1 黒褐色土 As-Bを含む。砂質。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。As-Bを少量含む。
- 3 褐色土 大粒のロームブロックが西側、南側に散在する。



第79図 13号住居跡土層断面

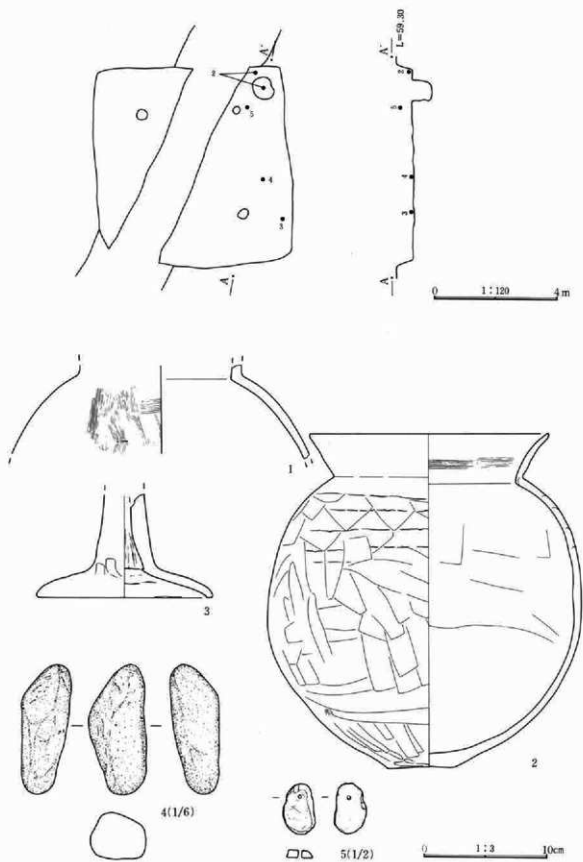


## 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒を含み、しまりなし。
- 2 褐色土 ローム粒、ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 ややしまりあり。
- 4 暗黄褐色土 ややしまりあり。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを含み、しまりあり。

0 1:30 1m

第80図 13号住居跡貯蔵穴断面



第81図 13号住居跡遺物出土状況及び出土遺物

## 14号住居跡 (第82~85図 PL25・49)

**位置** V区Q-6、住居群の再北端に位置する。

**平面形** やや片側の辺が開く正方形。

**規模** 3.95×4.30m 面積 14㎡

**主軸方向** N-51°-E

**床面の状態** 地山のロームをそのまま床面としており、貼床は見られない。床面レベルは大きな差はないが、やや凹凸が目立つ。全体に軟質な床で、他の住居に見られるような硬質部分は不明瞭である。補修等は見られない。

**壁の状況** 西側の一部で崩落が認められるほかは遺存状況は良好で、ほぼ垂直に掘り込まれる。高さは48cmを測る。東階部はやや外側に突出気味で丸みを持たせている。

**カマド** 北東壁の中央付近で検出。規模は長さ84cm、幅85cmで、平面縦長楕円形を呈する燃焼部内側は径70×40cmを測る。燃焼部は粘土を主とする土で構築しており、袖部は左側が10cmほど長い。火床面は10cmほど掘りくぼめられほぼ平坦。ここには埋土あるいは内壁崩落土が堆積しており、この上面がその都度火床面となったらしい。なお中央部分には長さ18cmの土製支脚を直立させている。袖部の高さは崩落部分を復元して40cmほどと推定される。煙道部は奥壁に粘土を埋填することで50°ほどの傾斜面に整形している。カマド独自の掘り方はほとんど見られず、堅穴の粗掘り面に10-7cmの厚さでロームブロック主体の土を貼って基礎としている。

**貯蔵穴** 東隅で検出。平面は楕円形で径60cm、深さ61cmを測る。断面形は箱形で底面はほぼ平坦である。柱穴のP1の掘り方と連続しており、この部分の壁はP1埋土である。貯蔵穴内の埋土はローム粒やロームブロックを含むが自然堆積によると思われる。なお内部中位には完形の罌(5)が横転した状態で出土した。

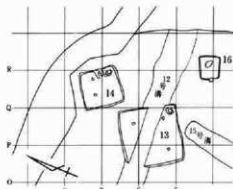
**ビット** 柱穴4基と、カマド左脇に重複した2基の浅いビットが検出された。柱穴P1-P4はカマドの設けられる北東壁に偏っているのが特徴である。また柱間寸法も1.5-1.6mと他と比較して著しく短い、柱穴から壁までの長さは他とほぼ同じ1.2mを測る。これは本住居跡が小規模なため、寝所空間を確保するために柱位置を偏らせた結果と考えられる。カマド左脇のビットは深さ10cm前後と浅く貯蔵穴や柱穴とは考えにくい。性格は不明。なおP3とP4の間に長さ1.2m幅36cmの溝状ビットP5が検出された。深さは10cm前後で底面はやや凹凸がある。埋土は柱穴と同じであり、生活時には埋めてあった可能性がある。

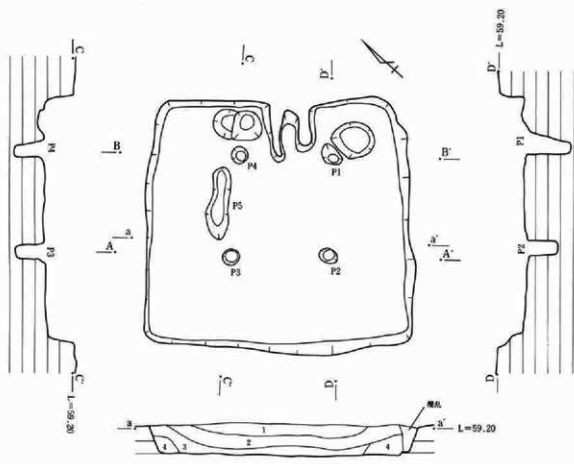
**掘り方** 南西半部は床土がやや軟質であり、掘り方埋土の可能性もあるが、床面下の土の状態は全体にほぼ同質であり、掘り方の痕跡は検出出来なかった。

**埋没状況** 埋土は全体にレンズ状の堆積状況を示す。壁際から下層はローム粒を多く含むが人為的埋土とは考えにくい。中層には微小な棒山二ツ岳給源テフラを少量含む。上層にはAs-Bを含んでいることから、くぼみがなくなり完全に埋没するまで数百年を要したと考えられようか。

**出土遺物** 遺物の出土位置は東側の壁際に集中している。床面直上かやや浮いた位置のもので、大部分は投棄されたものと思われるが、住居廃絶時からさほど間をおかない時期のものと考えられる。土器以外では石皿、砥石、管玉がある。

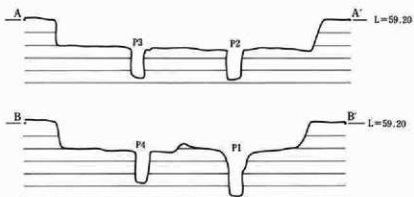
**重複遺構** 直接重複する遺構はないが、南西に隣接する13号住居とは距離が1mと近い事から上層が重複する可能性が高く、同一時期に存在した建物とは考えにくい。





土層説明

- 1 黒褐色土 ローム層、As-Bを含み、粘性、しまりなし。
- 2 黒褐色土 ローム層が上層より多く、粘性、しまりあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量に含み、ロームブロック数個。焼土、炭化物等も含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を含み、焼土ブロックが入る。



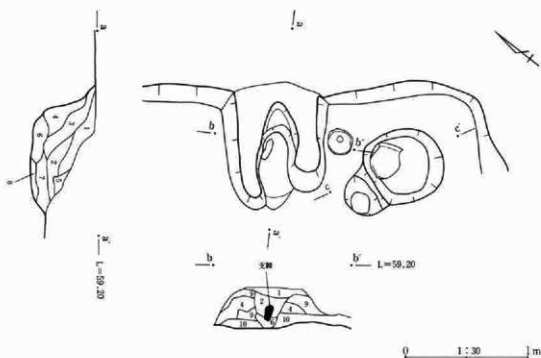
no	上層径	下層径	深さ
P1	—	18×13	69
P2	29×24	19×15	48
P3	25×24	19×18	48
P4	26×24	16×15	49

	柱間寸法(m)
P1-P2	1.55
P2-P3	1.55
P3-P4	1.62
P4-P1	1.50

0 1:60 2m

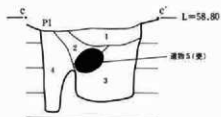
第82図 14号住居跡





## 土層説明

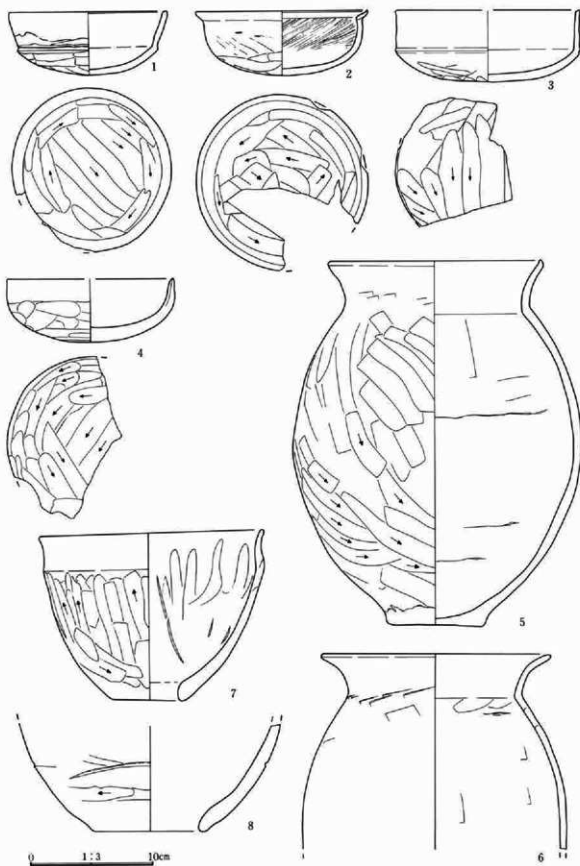
- 1 暗褐色土 ローム粒を含み、軟質。
- 2 暗黄褐色土 焼土ブロックを含む。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒、焼土を含む。埋道埋土。
- 4 灰白色粘土
- 5 黄褐色土 ローム粒、焼土を少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒、焼土を含み、軟質。
- 7 黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。下面は火床面。
- 8 黄褐色土 ロームブロック主体。
- 9 暗灰褐色土 ローム粒、焼土、粘土を含む。
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック主体。8層とはほぼ同質。



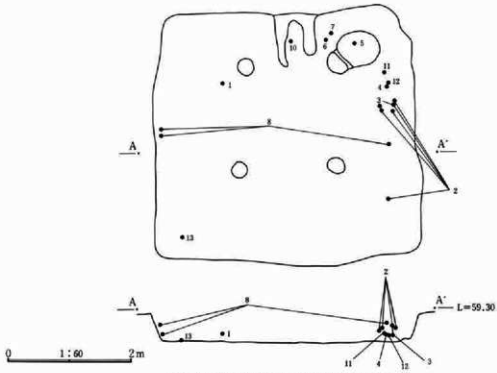
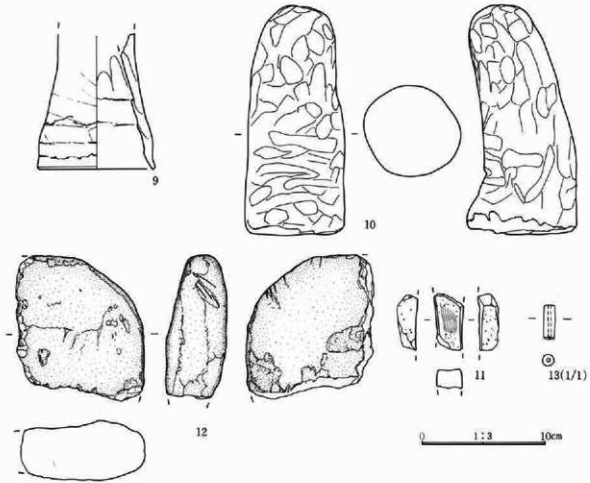
## 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒が多く、軟質。
- 2 暗褐色土 ローム粒、炭化物、焼土を含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む。
- 4 褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。PI埋土。

第83図 14号住居跡カマド及び野竈穴断面



第84図 14号住居跡出土遺物(1)



第85图 14号住居跡出土遺物及び出土状況

15号住居跡 (第86~92図 PL.26・50~52)

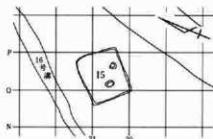
位置 N区N・O-20・21

平面形 やや歪んだ長方形。

規模 5.26×4.47m

面積 21m<sup>2</sup>

主軸方向 N-43°-E



**床面の状態** 地山のソフトローム面を床面としており、明確な貼床はない。中央部分がやや高く、周縁ほどレベルが低くなる。南東壁際で直径30cm強、高さ6cmの円形に高まった部分が検出された。これはロームブロックを踏み固めたもので、出入口に関連する可能性がある。

**壁の状態** 他の住居跡に比べて浅いが、遺存状況は比較的良好。ほぼ垂直に掘り込まれ、北隅はやや丸みをもつ。

**炉** 主軸上に2基検出された。F1は南西壁から約1.3m離れる。径90×68cm、深さ7cmの楕円形の掘り込みを持ち、下層にロームブロック混土を埋めてその上位に浅くはんだ火床面を形成する。F2は北東壁から約1m離れており、径70×56cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みで、F1と同様の火床面を持つ。なおF2はビットP1と重複してこれに切られている。従ってP1が柱穴の場合、F2は機能を失っていたと考えられる。なお中央部北西寄りに焼土の分布が見られるが、これは床面の上に堆積したもので炉ではない。

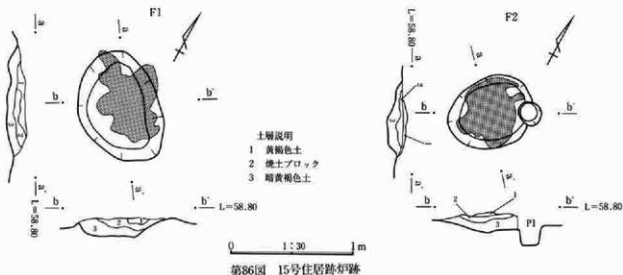
**ビット** 主軸方向から17°ほど傾いた軸線上に2基P1・P4と北西壁際に複合するビット1基P2・P3が検出された。P1・P4は床面からの深さが20cm程で、他の住居跡主柱穴に比べると著しく小規模なものである。しかし屋根を地面まで葺き降ろした場合の樫を支える程度の柱穴の可能性はある。P2・P3も規模が小さく性格は不明。P1の北東側に攪乱坑があり、これと同様のものか。

**壁溝** 認められない。

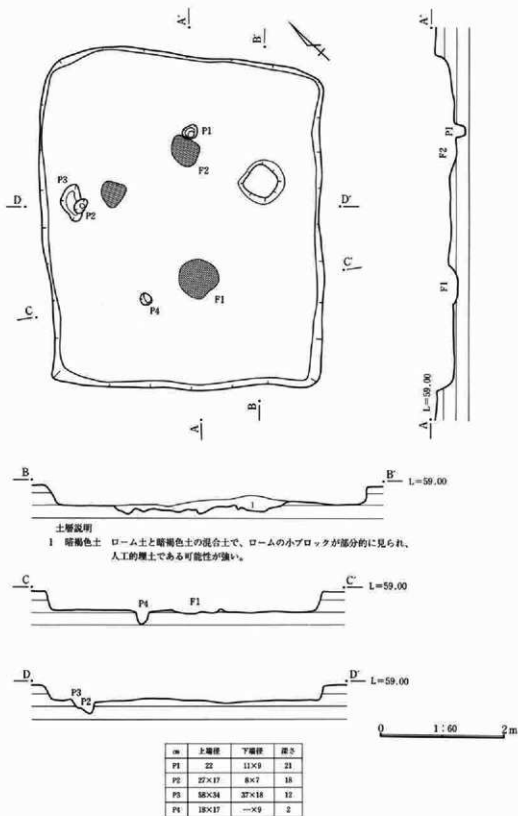
**埋没状況** ほぼレンズ状にローム粒子混入の暗褐色土が堆積する。

**出土遺物** 完形品も含めて多量の土器が北西壁際に沿って出土している。出土レベルは床面からやや浮いた状態で、壁からやや離れているものが大部分であることから、住居壁の第1次埋没が始まった後に投棄されたと考えられ、本住居跡使用時に伴うとの確証はない。時期は古墳時代後期初頭に限られる。

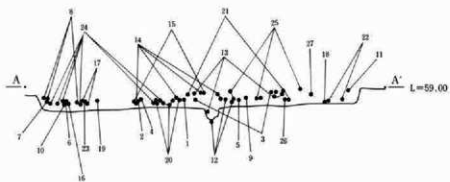
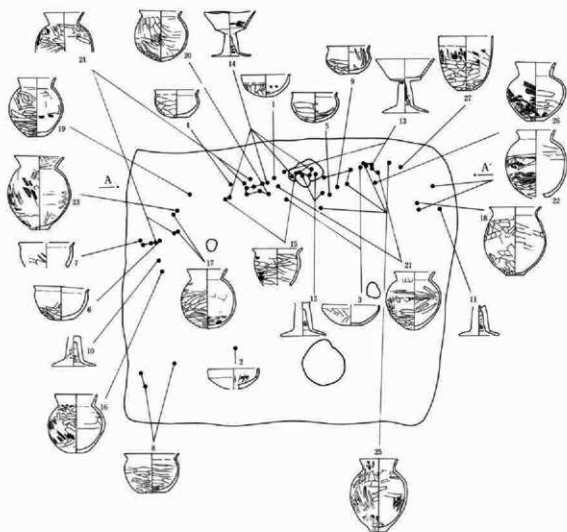
**重複遺構** なし。



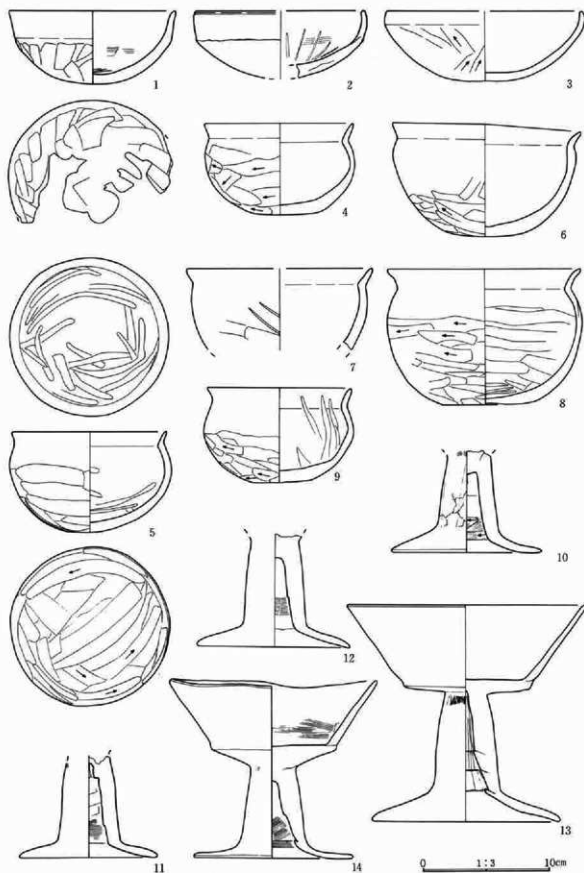
第86図 15号住居跡平面



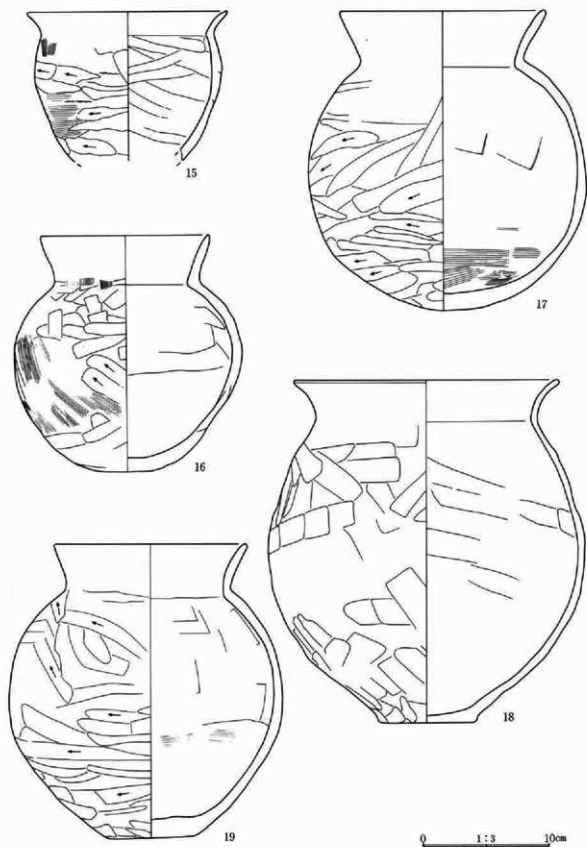
第87図 15号住居跡



第88図 15号住居跡遺物出土状況

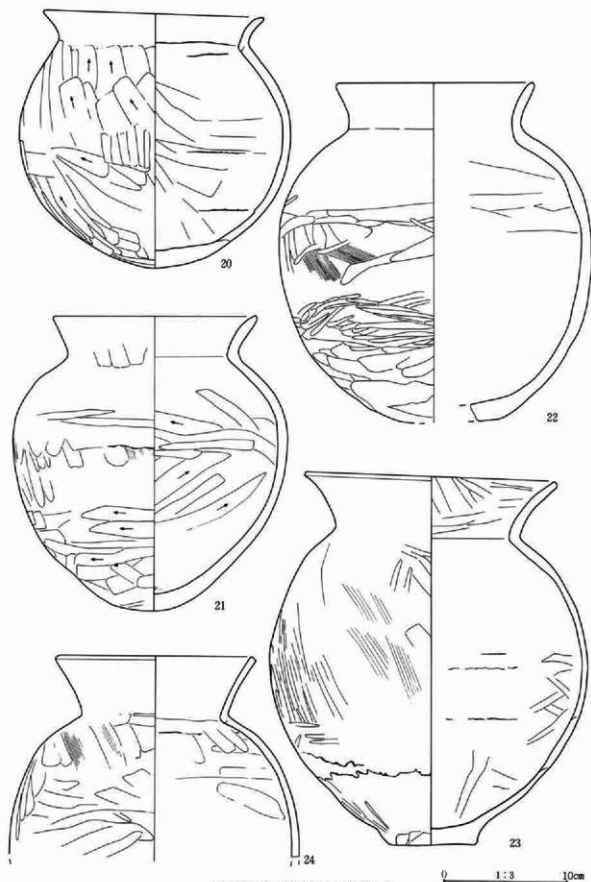


第89図 15号住居跡出土遺物(1)

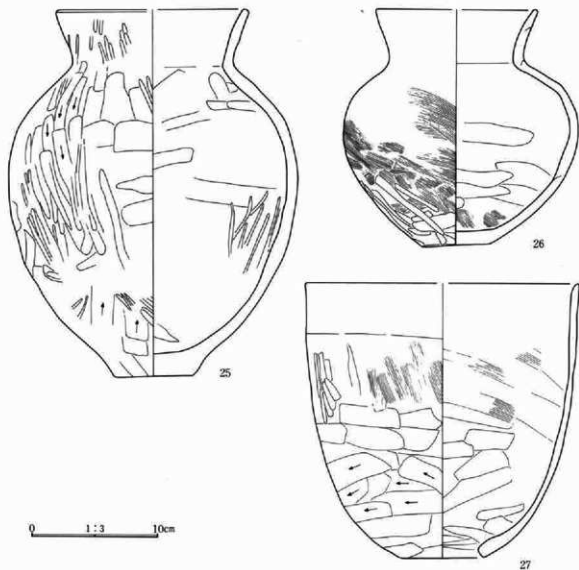


第90図 15号住居跡出土遺物(2)





第91图 15号住居跡出土遺物(3)



第92図 15号住居跡出土遺物(4)

16号住居跡 (第93～95図 PL27・52)

位置 VXS・R-3・4 平面形 やや歪んだ長方形

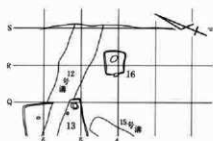
規模 2.61×2.28m 面積 5m<sup>2</sup> 主軸方向 N-67°-E

床面の状態 地山のロームをそのまま床面としている。凹凸は見られるが傾斜はなくほぼ水平。南壁付近から中央部にかけて硬質な床面が見られ、壁際は軟質。床面レベルは標高59.1m前後で他の住居跡に比べて20cm以上高い位置にある。

壁の状況 高さは10cmで、壁線はやや乱れた直線である。目立つ崩落は認められないが、他の住居跡ほど整っていない。

炉 住居主軸線上の東寄りで楕円形の炉1基が検出された。径は62×53cmで深さは13cmを測る。底面は浅い皿状で下半には焼土のブロックが8cmほど堆積し、その上が最終段階での火床面となっている。

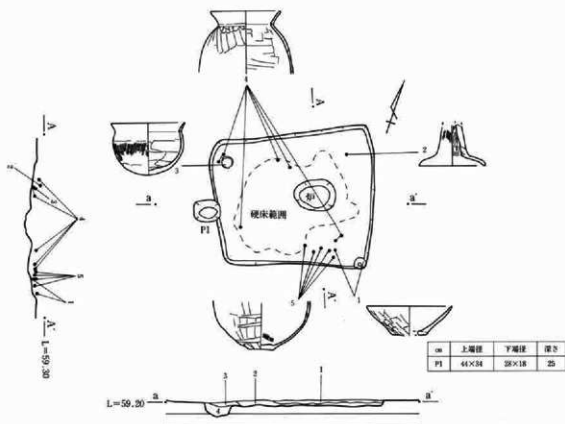
**ピット** 北西壁のほぼ中央部、竪穴の外側で1基が検出された。径は44×34cm、深さ25cmをはかり、断面形は楕円状を呈する。竪穴外にあること、1基のみの検出であること、浅いことなどから柱穴とは考えにくく、時期の異なる遺構の可能性もある。埋土には自然堆積と思われるローム粒を多く含む暗褐色土が見られ、その上を住居埋土が覆っている。



**埋没の状況** ローム粒の多い暗褐色土が主に堆積しており、自然埋没と考えられる。上層にはAs-Bが認められるが後世の耕土作業における攪拌の結果か。

**出土遺物** ほとんどの遺物が床面直上から出土しており、現位置に遺棄されたままのものも見られる。鉢(3)は北西隅部で甕を転用した台座(4)の上に置いて潰れた状態で出土した。高杯の杯部破片(1)は南東隅部から立位で出土したが、これも台座への転用品の可能性もある。遺物の出土量は少ないが、坏がほとんど見られないのが特徴である。

**重複遺構** なし



**土層説明**

- 1 暗褐色土 As-Bを含み、しまりなし。
- 2 黒褐色土 ローム粒が入り、1層よりしまりあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 褐色土 ローム流れ込みの土である。

0 1:60 2m

第93図 16号住居跡及び遺物出土状況

第三章 上洞名真神谷遺跡の調査



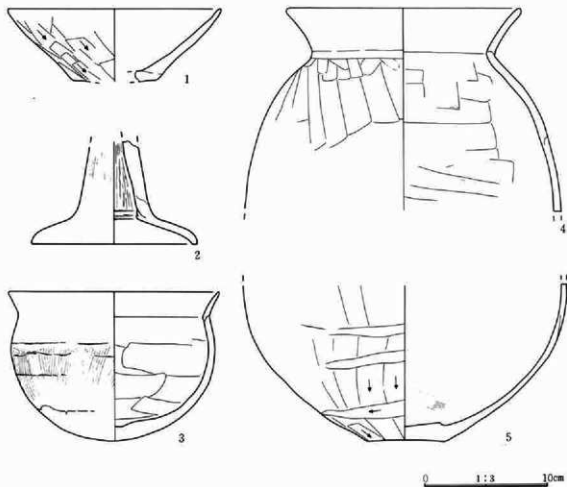
土層説明

- 1 暗褐色土 焼土ブロック、ローム粒を含む。
- 2 赤褐色土 焼土ブロックが主体。
- 3 黄褐色土 ロームブロック主体、焼土粒含む。



0 1:30 1m

第94図 16号住居跡切跡



第95図 16号住居跡出土遺物

## 2 古墳・円形周溝遺構

## 1号古墳 (第96-98図 PL28)

位置 Ⅲ区J・K・L-10-18。「上毛古墳総覧」采女村第48号に相当すると思われる。

形状 西側調査区外に遺存する墳丘と検出された周堀から円墳と思われる。

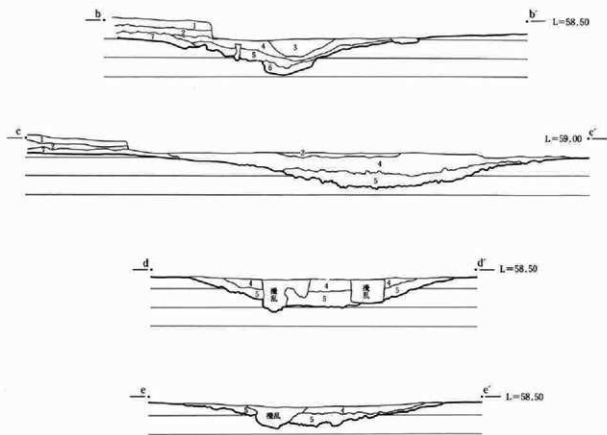
規模 周堀の幅は6.5-7.0mで、北東部分では9mとやや広がる。周堀の直径は57m前後と推定される。墳丘規模は、直径40m前後、周堀底から墳頂部までの高さは2.4mと推定される。

主体部 1.5mのボーリングステッキで主体部の確認を行ったが、石室等の存在は確認はできなかった。

埋没の状況 周堀堆積土は上下にはほぼ三分される。埋土にFAとFPは見られず6世紀後半以降と推定。

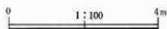
出土遺物 堀底から古墳時代後期の土器片、東部分の皿状にくぼんだ底から耳環と紡錘車が出土した。

重複遺構 周堀の北東部分を18号溝が切る。

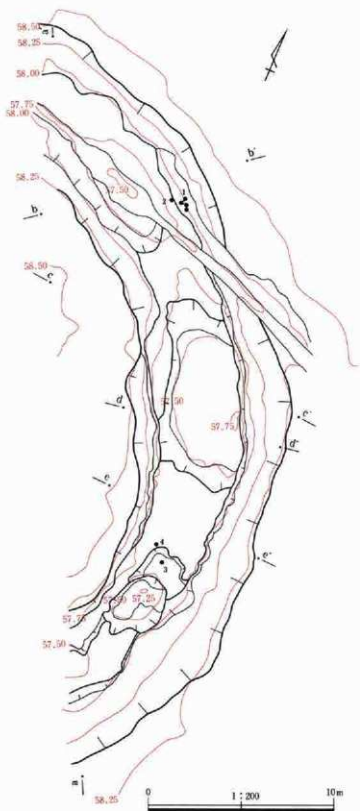


## 土層説明

- 1 暗褐色土 浮石を含み、砂質。現表土。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、黄色斑紋が見られる。
- 3 暗褐色土 1層に近似するが、やや粘性あり。18号溝埋土。
- 4 黒褐色土 As-Bを多く含む。
- 5 暗黄褐色土 粘性強く、As-B、ローム粒を含む。
- 6 暗黄褐色土 ロームを主体。
- 7 暗褐色土 粘性を帯び、ローム粒を少量含む。古墳盛土の可能性あり。



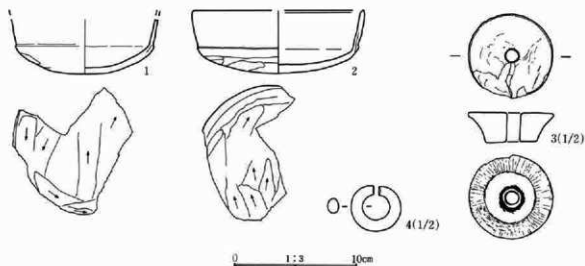
第96図 1号古墳土層断面



第97图 1号古墳

10m

第97图 1号古墳



第98図 1号古墳出土遺物

## 円形周溝遺構 (第99図 PL32)

位置 IV区 I-4

平面形 歪んだ円形で南側がやや突出気味。

規模 外区の直径は5.65×5.30m、内区は4.95×4.65mで、周溝の幅は45~35cmで深さは10cm前後を測る。

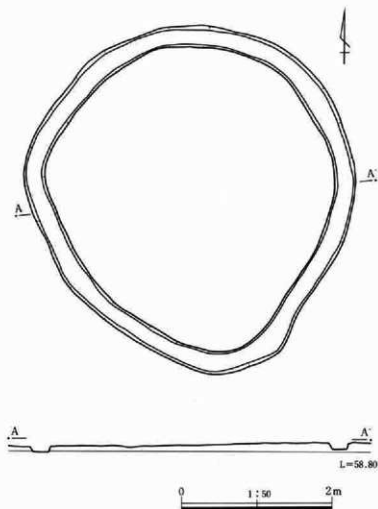
周溝の状況 断面形状は逆台形に近く、底面はほぼ平坦でレベルも大きな差はない。

主体部 内区には何らの施設らしき落ち込みは認められなかった。マウンドの有無は確認できなかった。

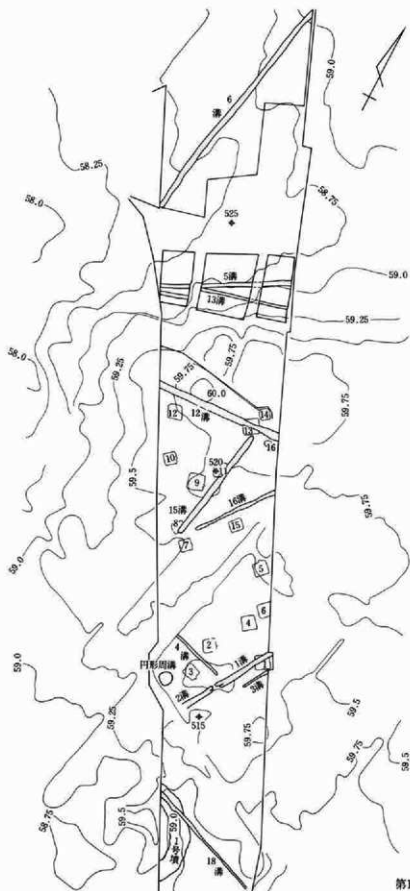
埋没の状況 周溝内に一律な黒色土が堆積しており、人為的埋土か自然流入によるものかは不明。

出土遺物 なし。

重複遺構もないため本遺構の時期は不明である。



第99図 円形周溝遺構



第100図 IV区・V区溝位置図

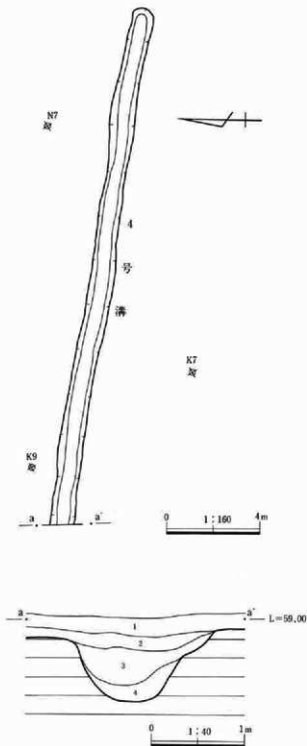
### 3 溝

#### 概要

調査区域南半の台地部分から北西へ緩く下る傾斜地形にかけて18条の溝が検出された。調査地区ではⅢ～Ⅴ区に及んでおり、これらは区毎ではなく全域を対象として通し番号で呼称した。各溝の時期や性格はそれぞれ異なると推定されるため、以下個々についての詳細を記す。なお溝同士の位置関係は第100図を参照されたい。







土層説明

- 1 褐色土 明るい色調を呈し、土質しまりなく軟弱。
- 2 暗褐色土 1に比し、色調若干暗いが、土質等同様。
- 3 褐色土 ローム粒が少量ではあるが、全体的に混在する。軟面土解。
- 4 褐色土 ロームの量が3に比し多く、黄色味が強い。土質軟弱。
- 5 ソフトローム

第102図 4号溝

1号溝 (第101図)

位置 IV区K2-S8 規模 長40m以上幅3.5m深1.25m。途中で1.1mの断絶部分が見られる。

走向 N-38°-E。断絶部から両方向へやや傾斜。

埋土の特徴 As-A(浅間山給源、天明三年降下)を多く含み、近世以降に完全に埋没したものであろう。

出土遺物 中世以前の土器片16点。

重複遺構 1号住居跡を切る。2号溝との新旧不明。

2号溝 (第101図)

位置 IV区L2-S8 規模 長40m以上幅2.4m深0.8mで3.8mの断絶あり。

走向 1号溝に並行。断絶部から両方向へ傾斜。

埋土の特徴 1号溝と同質。水流痕跡少ない。

出土遺物 古墳時代土器片59点と土鍾1点。

重複遺構 1号溝との新旧不明だが、本来同一目的を果したと思われる。

3号溝 (第101図 PL29)

位置 IV区Q4-S5 規模 長9.9m幅1.1m深0.5m。走向 N-38°-E。底ほぼ水平。

埋土の特徴 軟質な地山土が流入。水流痕跡なし。

出土遺物 古墳時代後期土器片42点。

重複遺構 1号住居跡との新旧不明。

4号溝 (第102図 PL29)

位置 IV区J8-N5 規模 長22m以上幅1.5m深0.7m。走向 N-67°-W。

埋土の特徴 3号溝に近似し、地山土が流入。

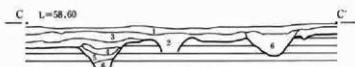
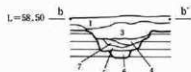
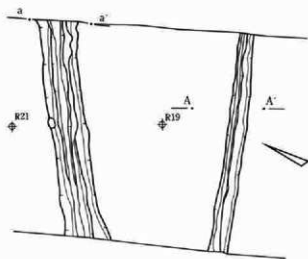
出土遺物 なし。 重複遺構 なし。

5号溝 (第103図 PL29)

位置 V区F19-S20 規模 長52m以上幅2.5-1.5m深0.7m。断面は逆台形状。

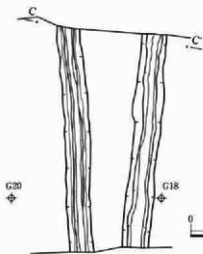
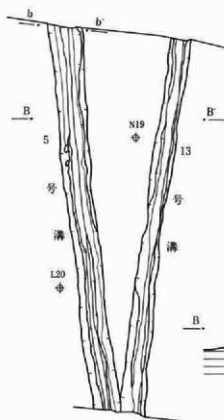
走向 N-78°-E。西方向に10cm以内のレベル差でやや傾斜。

埋土の特徴 下層はロームブロックと水流痕跡を示す砂、中層には As-B (推定1108年降下)を多く



## 土層説明

- 1 表土
- 2 暗褐色土 ローム粒、砂粒を含む。13溝はこれより切り込まれる。
- 3 黒褐色土 ローム塊、砂粒を含み、しまりなし。
- 4 黒褐色土 砂を多量に含む。As-Bか。
- 5 黒色土 ローム粒を含み、しまり有り。
- 6 黒色土 径5ミリ程度のロームブロックを含む。鉄分も若干含む。
- 7 砂 As-Bか。



0 1:3 10cm

第103図 5号・13号溝及び5号溝出土遺物

0 1:200 6m

### 第三章 上洞名表神谷遺跡の調査

含む。平安時代に埋没か。

**出土遺物** 須恵器を含む古墳時代の土器片3点。

**重複遺構** 13号溝と交差ないしは合流するが、土層からは5号溝が古いと判断される。

#### 6号溝 (第104図 PL30)

**位置** VI区E2-S22 **規模** 長96m以上、幅2.5m深0.9m。断面形状は逆台形状。

**走向** N-18°-E。ほぼ直線。底面は約30cmのレベル差で南方向へ傾斜する。

**埋土の特徴** 下層にはロームの多い土が堆積し、水流痕跡は少なく黒泥土が多いことから滞水した可能性も高い。最上層にはAs-Bの純層が堆積しており、この時点(1108年頃)にはほとんど埋没している。なお土層の状況から2回前後の掘り直しが認められる。

**出土遺物** 底面で古墳時代後期初葉の高杯片(2)と上層のAs-B下から椀(1)が出土した。

**重複遺構** H7付近で径1m前後のピットと重複したが、本溝に伴うか否かは確認できなかった。

#### 7号溝 (第105図)

**位置** VI区O1-S1 **規模** 長17.5m以上、幅0.7m深0.2m。断面は「蒲鉾」状。

**走向** S状に湾曲し北東-南西。底面ほぼ水平。 **出土遺物** なし。 **重複遺構** 8溝との新旧不明。

#### 8号溝 (第105図)

**位置** VI区Q25-VI区R4 **規模** 長17m以上、幅0.7m深0.15m。断面は「蒲鉾」状。

**走向** N-4°-E **出土遺物** なし。 **重複遺構** 7溝・11溝と重複、新旧不明。

#### 9号溝 (第106図 PL31)

**位置** VI区F2-I6 **規模** 長23m以上、幅2.7-1.5m深0.46m。断面は皿状。

**走向** N-23°-E。ほぼ直線で、南方へ約10cmのレベル差で下降。

**埋土の特徴** 大部分は削平で、下層部分のみ遺存。砂質土のラミナ状堆積で、洪水・泥蓋埋没の可能性あり。

**出土遺物** 埋土から近世天目茶碗が出土している。

**重複遺構** 10号溝を含め、掘り直しと思われる数条の並行する溝が存在したらしい。新旧関係は不明。

#### 10号溝 (第106図)

**位置** VI区F3。南西端で底面の一部を検出したが、ほとんど削平で遺存せず、詳細不明。

#### 11号溝 (第105図)

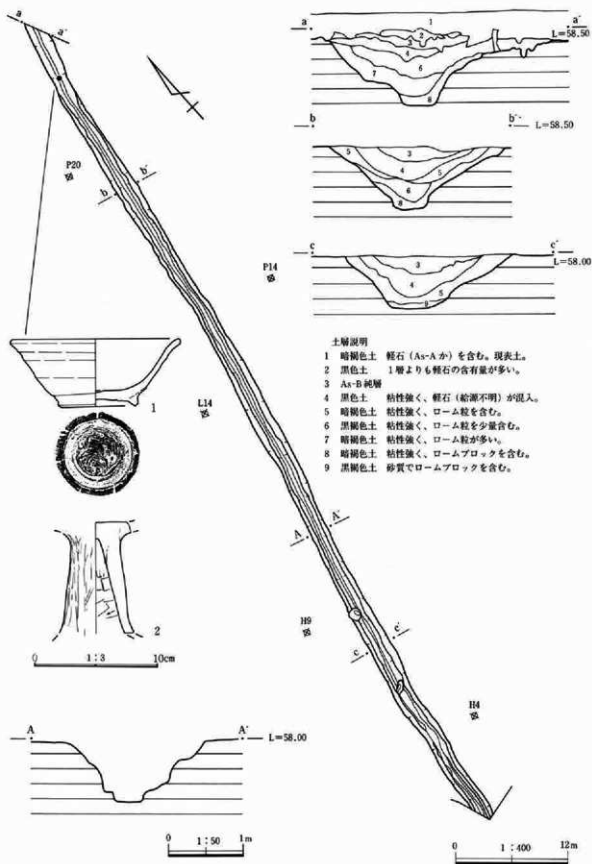
**位置** VI区Q4-R4 **規模** 長6m以上、幅1.2m深0.3m。断面は浅い「葉研堀」状。

**走向** N-87°-W。直線で底面レベルはほぼ水平。 **出土遺物** なし。

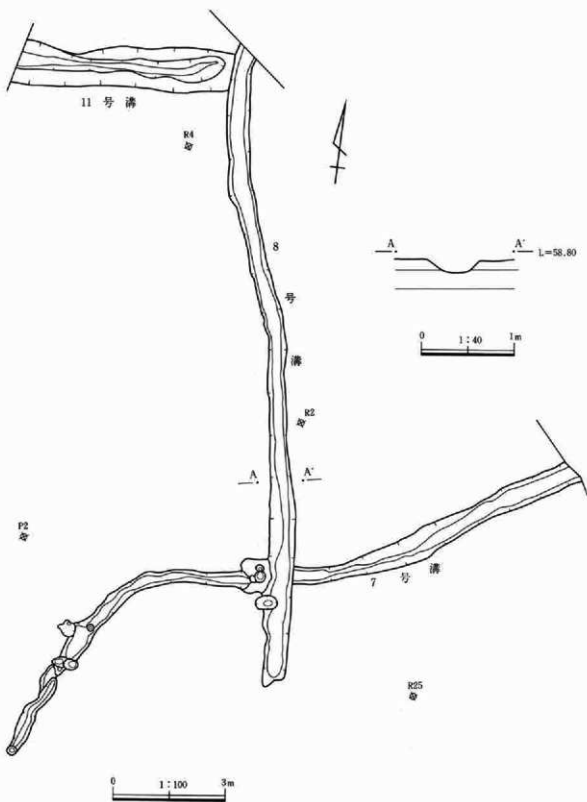
**重複遺構** 8溝と重複するが新旧関係不明。

#### 12号溝 (第107図 PL30)

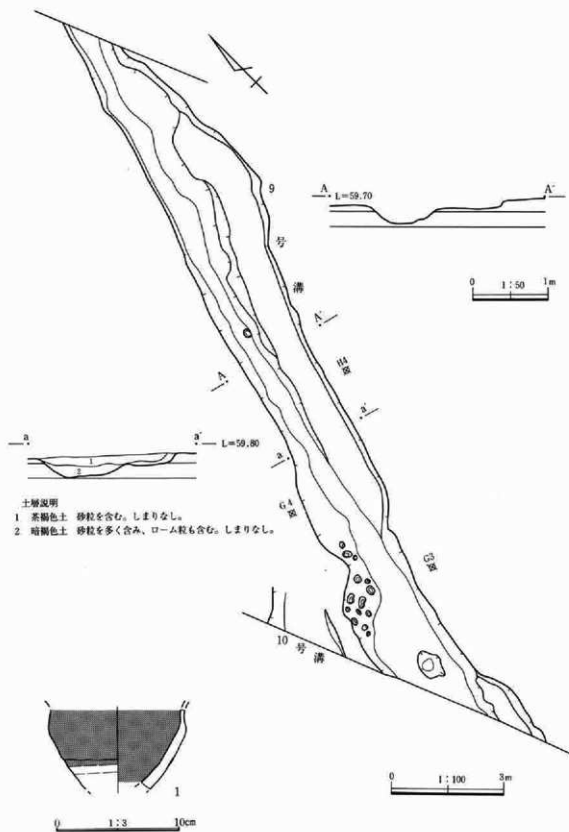
**位置** V区R4-G9 **規模** 長52m以上、幅3.3m深1.5m。断面は「葉研堀」状。



第104図 6号溝及び出土遺物



第105図 7号・8号・11号溝



第106図 9号・10号溝及び9号溝出土遺物

### 第三章 上面名表特谷遺跡の調査

**走向** N-87°-W。直線で、底面は西方にわずかに下降する。なお、本溝の西方延長線上には十三宝塚遺跡の方形区画北限ラインが位置している（第4図）。

**埋土の特徴** 地山のローム粒を主とする流入土が厚く堆積し、底面には水流痕跡といえる砂層は認められなかった。また、純層ではないが上位にAs-Bを多く含む層が堆積する。

**出土遺物** 埋土から古墳時代後期土器片、近世陶磁器片55点が出土した。

**重複遺構** 13号住居跡を切る。

#### 13号溝（第103図 PL29）

**位置** V区J18～R17 **規模** 長35m以上、幅1.4m深0.8m。断面は逆台形状。

**走向** N-83°-E。西方向に15cm以内のレベル差で傾斜。

**埋土の特徴** 軟質な地山土の流入土で、ロームブロックもめだつ。As-B降下以後のものだろう。

**出土遺物** なし。 **重複遺構** 5号溝より新しいと推定される。

#### 14号溝（第108図 PL31）

**位置** VI区H・I-3 **規模** 長4.3m以上、幅1.7m深0.75m。断面はU字状。

**走向** 北東-南西。底面は凹凸あり。 **埋土の特徴** ロームブロックとローム粒が多く、他の溝埋土と異なり人為的埋土の可能性もある。 **出土遺物** なし。 **重複遺構** なし。

#### 15号溝（第109図 PL31）

**位置** IV区J20～V区P4 **規模** 長49m幅2.8m深1.1m。断面は「箱梁研堀」状。

**走向** N-17°-E。直線で、底面レベルはほぼ水平。 **埋土の特徴** 上層にAs-Bを多く含む層あり。

**出土遺物** 古墳時代後期と奈良時代の杯の他土器片36点が埋土から出土している。

**重複遺構** 8号・11号住居跡を切る。

#### 16号溝（第108図）

**位置** IV区I19～R24 **規模** 長34m以上、幅2.2m深0.2m。断面は浅い皿状。

**走向** N-43°-E。直線で、底面レベルは8cmの比高差で南西方へ下降する。

**埋土の特徴** 下層部分しか確認できないが、底面から10cmの高さにAs-Bが堆積する。

**出土遺物** 古墳時代後期以降の土器片36点が埋土から出土している。 **重複遺構** なし。

#### 17号溝（第108図 PL31）

**位置** VI区S9～I17 **規模** 長4.4m幅1.4m深0.3m。土坑重複の可能性あり。

**走向** 東西方向で、中央で屈曲。 **埋土の特徴** ロームブロックが多く短期間の埋没か。

**出土遺物** なし。 **重複遺構** 9溝と重複するが新旧不明。

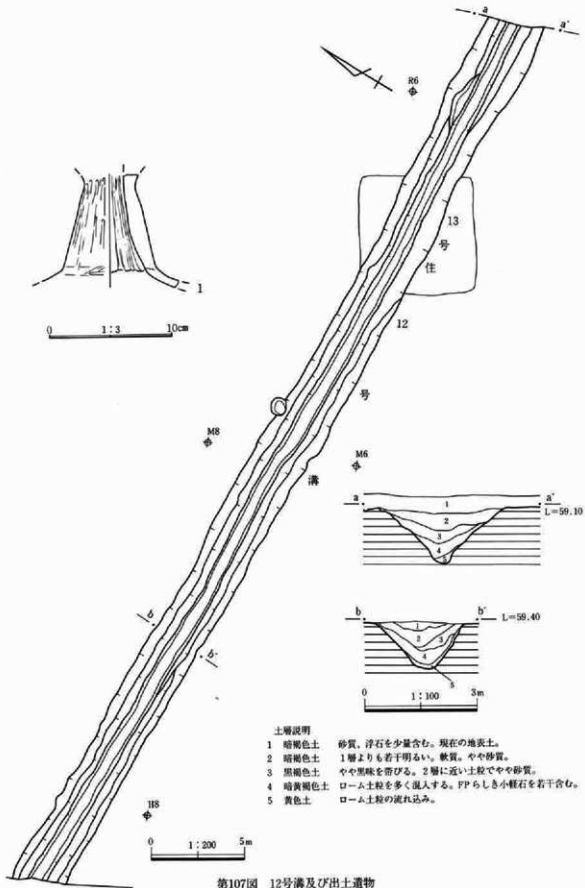
#### 18号溝（第110図 PL31）

**位置** III区S9～I17 **規模** 長51m以上、幅1.6m深0.8m。断面は浅い「薬研堀」状。

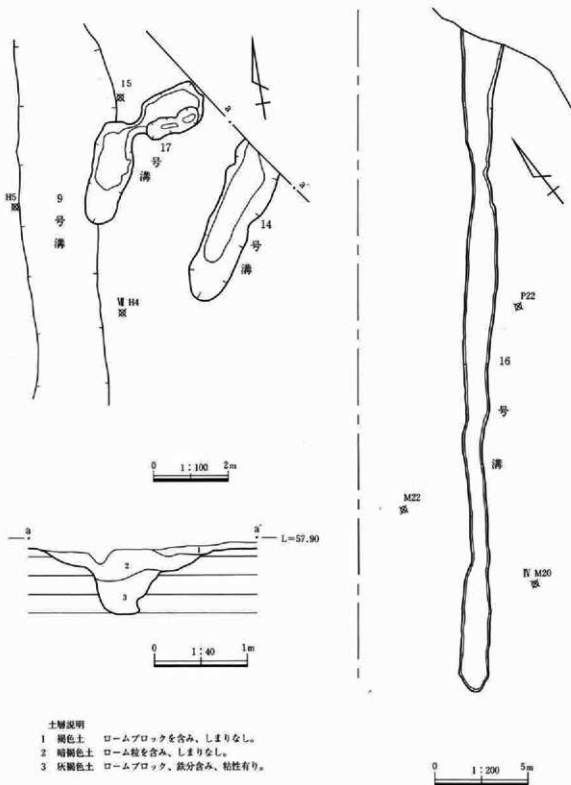
**走向** N-64°-W。直線で底面は43cmの比高差で西方へ下降。

**埋土の特徴** 地山流入土が主。 **出土遺物** なし。 **重複遺構** 1号古墳周屋を切る。

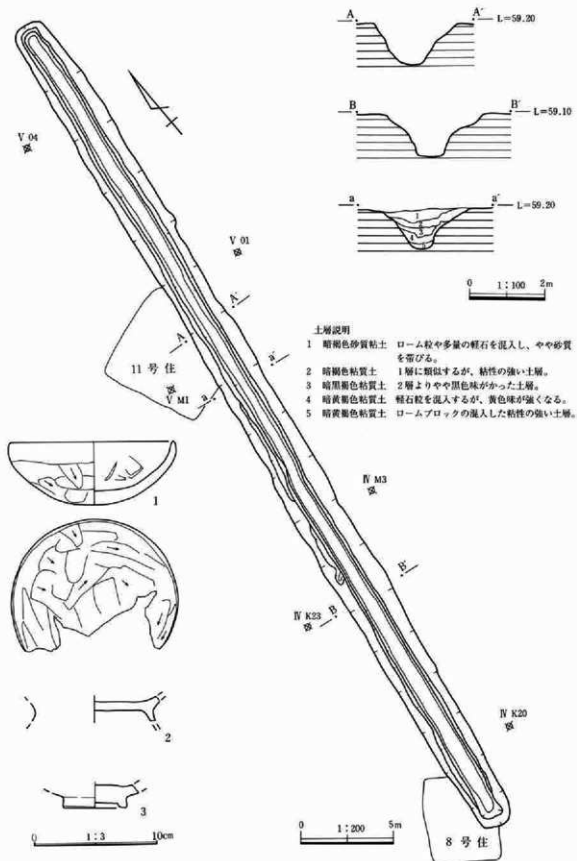




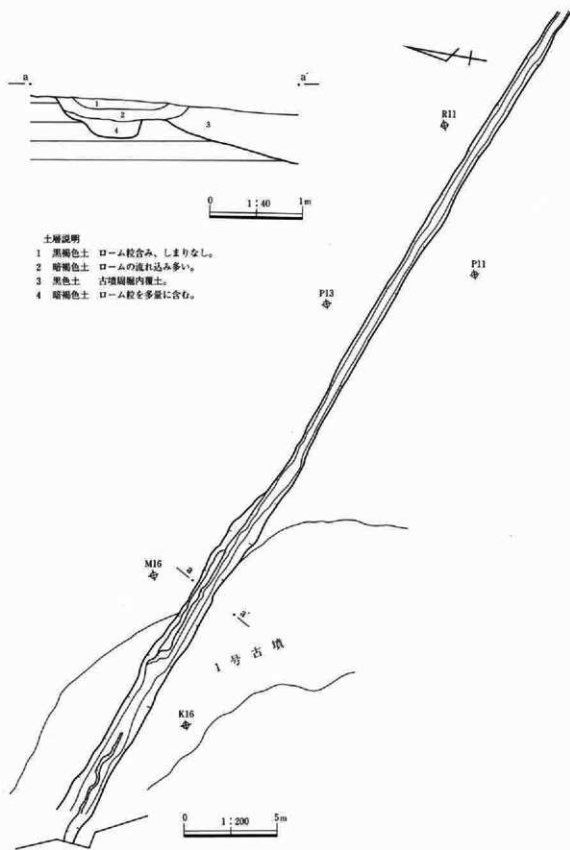
第107図 12号溝及び出土遺物



第108図 14号・16号・17号溝



第109図 15号溝及び出土遺物



## 4 井戸・土坑

## 1号井戸 (第111図 PL32)

位置 VI区F23 形状 平面は楕円形、内法面は長方形に近い。壁はほぼ垂直で、底面は平坦。

規模 平面規模は上端で2.75×1.68m、内法で1.56×0.90m、深さは1.95mまでを確認できた。なお、底面は礫を含む滞水層に達しており、ここからの湧出水を利用していらしい。

埋没の状況 地山土と黒褐色土の互層によって埋没する。

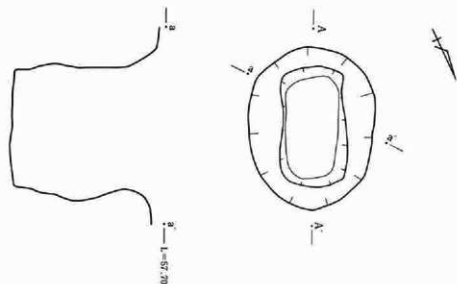
出土遺物 なし。 重複遺構 なし。また、周辺には本井戸に伴うような施設は検出されなかった。

## 1号土坑 (第112図 PL33)

位置 VII区K17・18 形状 やや削がれた長方形で、断面は箱形で底面は平坦。

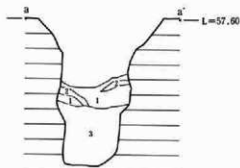
規模 長4.5m、幅2.4m、深0.65m、容積約5.7m<sup>3</sup>を測る。

埋没の状況 ほとんど流入土が堆積しており、人為的埋土の可能性はない。上層にAs-Bの純層が堆積してお



## 土層説明

- 1 黒色土 ロームブロック、ローム粒が多い。
- 2 黄色土 壁崩落土。
- 3 黒色土 ローム粒、地山の小礫を含む。



0 1:50 2m

第111図 1号井戸

り、本土坑は前述した水田趾に伴うかそれ以前のものと考えられよう。

**出土遺物** なし。 **重複遺構** なし。

**所見** 北西隅に水田方向に延びる長さ1mの短い溝が検出されており、位置的にも水田との関係は無視できない。ただし、底面が滞水層に達していないこと、平面形状が整っており底面深度を一定にしていることから、「溜井」のような灌漑施設ではなく、「肥料溜」のような施設を考えたい。

2号土坑 欠番

3号土坑 (第113図)

**位置** W区G3 **形状** 不整楕円形土坑重複の可能性あり。 **規模** 3.15×2.60m、深0.46m。

**埋没の状況** ほとんど地山土の流入による堆積。 **出土遺物** なし。 **重複遺構** 9溝、新旧不明。

4号土坑 (第113図 PL33)

**位置** IV区O25 **形状** 不整楕円形。断面は「蒲葺」状。 **規模** 1.57×1.27m、深0.47m。

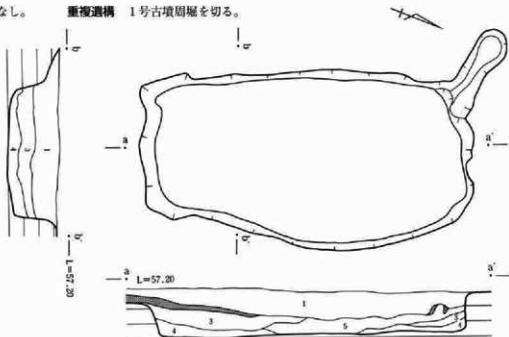
**埋没の状況** ロームブロックも見られるが、粗没は自然堆積だろう。 **出土遺物・重複遺構** なし。

5号土坑 (第113図 PL33)

**位置** III区K10・11 **形状** 楕円形、断面は皿状。 **規模** 1.75×1.38m、深0.35m。

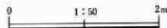
**埋没の状況** 底面付近に焼土や炭化物あり、中層以上は古墳周堀内のため不明。

**出土遺物** なし。 **重複遺構** 1号古墳周堀を切る。

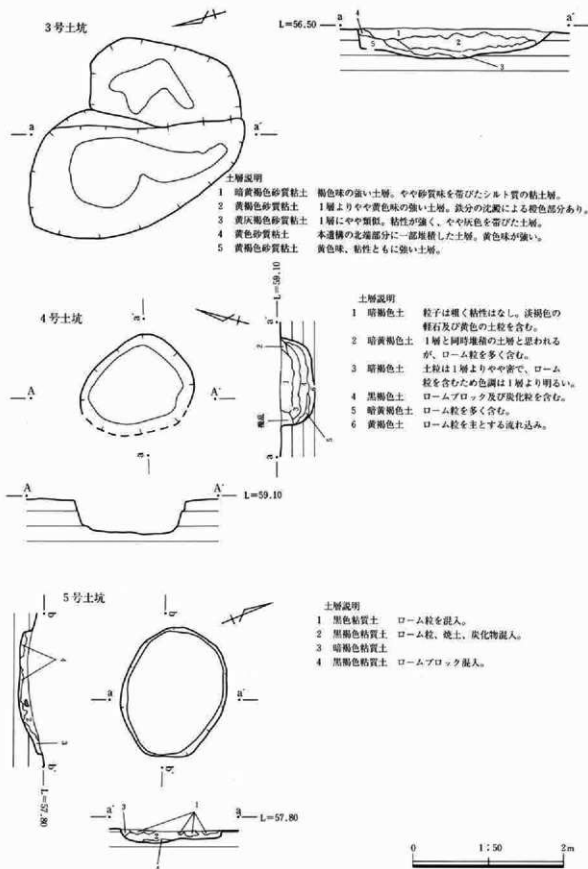


土層説明

- 1 暗褐色土 鉄分を多量に含んでいる。
- 2 灰褐色砂質土
- 3 灰褐色土 ロームブロック及び黒味を帯びた泥を含んだ砂質土。
- 4 暗灰褐色土 3層同様にロームブロックを含む、砂質土。
- 5 黒褐色土 鉄分を1層より多量に含み、砂粒を含む。



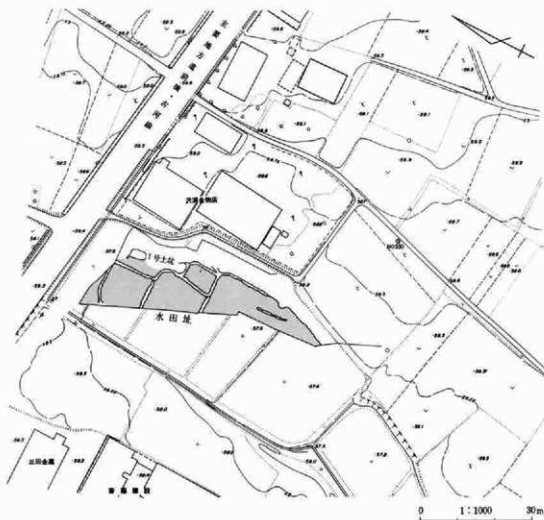
第112図 1号土坑



第113図 3号・4号・5号土坑

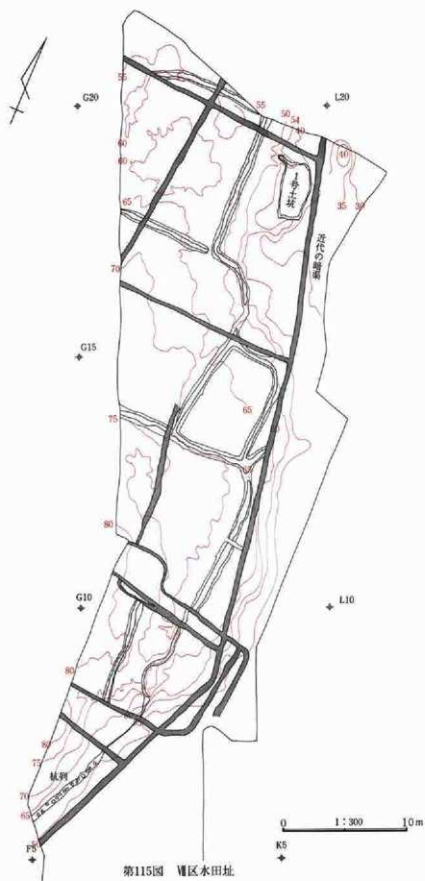
## 5 水田址 (第114・115・119・120図 PL34-36)

調査区の北端、Ⅱ区で畦で6面に区画された水田が検出された。本地区は、低台地に挟まれた30-40mの幅の狭小な解析谷にあたる。Ⅳ・Ⅴ区の集落址から350m程離れており、現在の水田面下50cm前後に浅間山噴出テフラAs-B(天仁元年1108年)の純層が堆積しており、直接水田面を覆っていた。耕作土は黒色粘土で夾雑物は少ない。畦は幅60-100cm、高さ6cm前後で、ほぼ東西南北に走る。東側は地形変換線に沿っており弱く湾曲する。谷は東西方向の畦で12-14m毎に区画されており、南北方向の畦は東縁部以外は不明である。面積は、緑辺部の最小区画で40㎡、他は谷の狭小に応じて大小があり均一ではない。なお、これに伴う水路は検出されない。図上の畦を横切る水路は近現代のもので、東端には竹や木の枝を埋置した暗渠排水路が設けられる。水口は南東隅に切られているのが1カ所確認された。また、畦に沿って溝状に浅くぼんでおり水まわりを良くする工夫と推定される。水田面には10-15cm大の馬蹄痕を主とする小穴が多数残されているが(PL35)、規則性はなく分布密度にも特徴は見られない。この状況から「馬鋤」等を使用した痕跡とは考えにくい。南縁辺部では地形変換線に沿って15本ほどからなる杭穴列が検出されたが、As-Bに覆われていないことから、本水田址に伴うとの確認はない。なお、更に下層で黒色土が堆積しFAに相当する黄白色粘質土層等が確認されたが、畦等の水田面は確認できなかった。



第114図 Ⅱ区水田址と周辺の地形

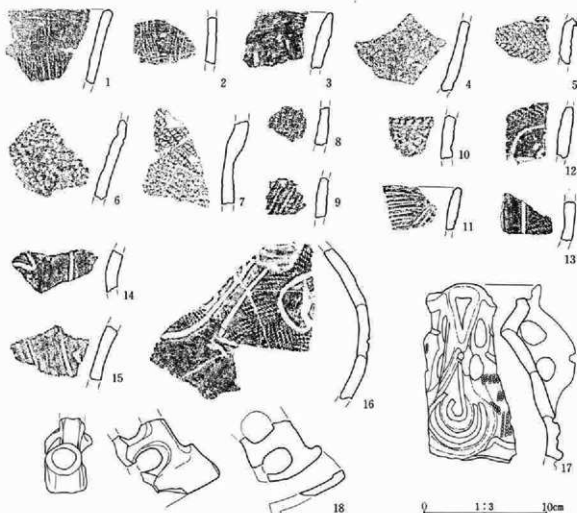




## 6 遺構外出土遺物 (第116~120図)

### (1) 縄文土器 (第116図)

草創期後半~後期初頭にいたる断片的な遺物が少量出土している。1~4は草創期後半の熱系文系土器群である。いずれも胎土に大粒の片岩を多量に含む共通性が認められる。1・2は1段R縄の熱系文をやや間隔をおきながら施すもので、稲荷台式に比定される。3・4は無文のもので、4は擦痕状の整形痕を明瞭に残している。5~10は前期前半の土器群で、いずれも胎土に多量の繊維を含んでいる。5は0段3条のRLとLRで羽状縄文を構成するもので、上端に縄文を施した隆帯が見られる。6は斜縄文、7は羽状縄文、8・10は斜施文による縦位縄文を施すもので、原体は6・10がRL、8がLR、7はRLとLR、9は7と同個体。6・8・10は胎土に大粒のチャートを含んでおり、8・10の条を縦位に施す特徴から、5と共に花積下層式に、7・9は黒浜式に比定されよう。11は集合沈線で文様を描く諸磯b式土器である。12~18は後期前半の堀之内I式土器である。14・15は沈線のみで文様構成する。その他は同一個体で、2つの円孔が付いた一對の把手をもつ注口付土器である。体部上半の渦巻文の区画内を縄文LRで充填している。(藤巻 幸男)



第116図 遺構外出土縄文土器

## (2) 石器 (第117図)

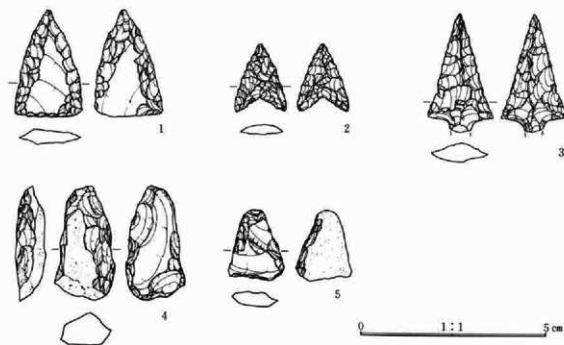
石鏃が6点、小形の片刃石斧2点出土している。石鏃には平基無茎鏃1点、凹基無茎鏃4点・平基有茎鏃1点と形態の相違が見られ、各々の形態の石鏃を選択して図示した。4点の凹基無茎鏃は、3点が黒曜石で、残り1点が黒色安山岩を用いている。

1は薄手の剥片の縁辺に浅く加工を加え作出しており、基部の加工は弱く、側縁に丁寧な加工を施している。2は表裏両面とも器体の全面を覆う丁寧な加工を施している。明瞭な「挟り」を持つ。3は器体の幅に比べ身が長い。表裏両面とも器体の全面を覆う丁寧な加工を施す。基部を欠損している。4・5は表面に礫面を残す剥片を素材に用いている。調整加工は側縁加工に比重を置いており、加工の在り方は概ね一致している、と判断されよう。刃部加工は弱く、素材の形状を上手に利用している。刃部形態は、4が若干偏刃に、5は直刃に近い形態を呈す。

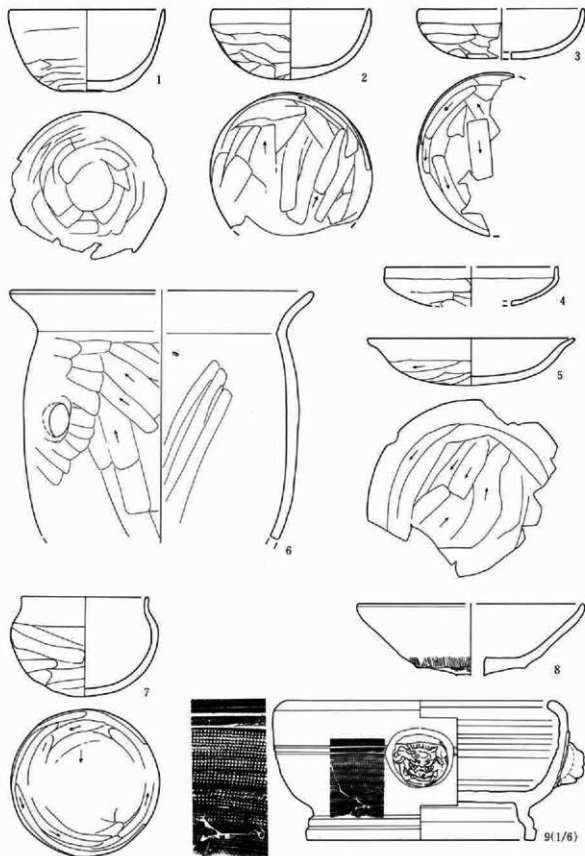
(岩崎 泰一)

## (3) 古墳時代以降の遺物 (第118～120図)

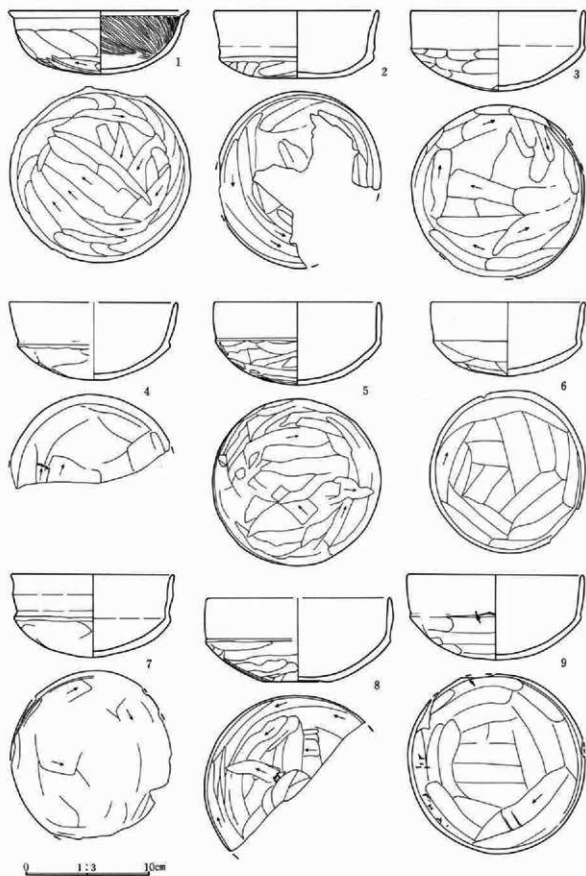
Ⅳ・Ⅴ区から古墳時代後期初頭と奈良時代の土器が出土しており、そのうち器形が判明した代表的な器種を選んで実測、掲載した。古墳時代後期初頭の土器は完形か比較的大きな破片の状態で出土していることから、ここで検出された壺穴住居跡のいずれかに属するものと考えられよう。奈良時代土器の帰属する遺構は不明であるが、時間的にはⅣ区で検出された15号溝出土遺物に近い。他にⅤ区の北向傾斜面で近世の火鉢が遺存良好な状態で出土したが、これに伴う遺構は不明であった。なお、Ⅳ区水田址下層の黒泥土層からは杯を主とした古墳時代後期初頭の土器が出土した。分布は調査区に広く散在しており、投棄された状況を示す。これらはⅣ・Ⅴ区で検出された壺穴住居跡出土土器と同時期であることから、この谷が約350m離れた同集落の生活圏に含まれることを示している。



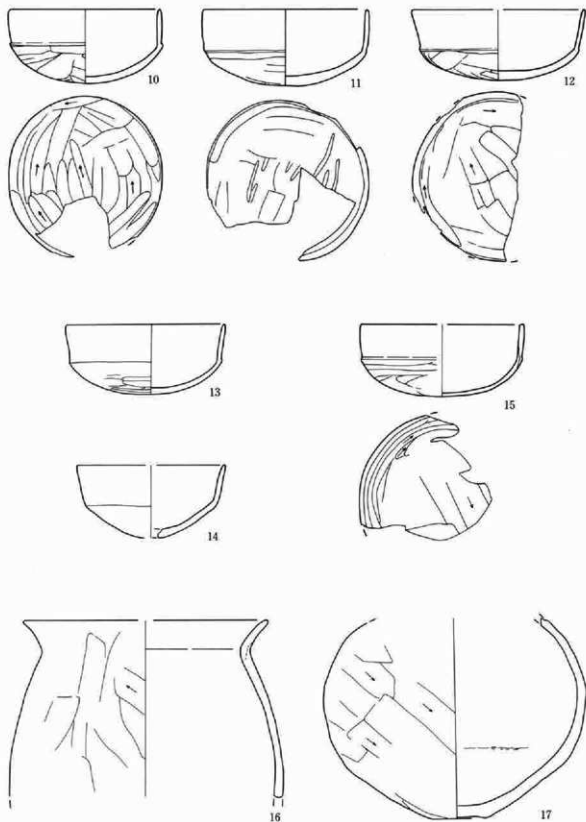
第117図遺構外出土石器



第118図 IV・V区出土遺物



第119图 M区水田面下層出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第120図 V区水田面下層出土遺物(2)

## 第Ⅳ章 三室間ノ谷遺跡の調査

### 概要

三室間ノ谷遺跡は、現主要地方道前橋-古河線を挟んで上湖名裏神谷遺跡の北側に位置する。調査区域は上武国道の計画路線幅で長さは1.03kmに及ぶ。調査の便宜上、道路等を境に全体をⅠ-Ⅳに4区分しており、Ⅰ・Ⅳ区は埋没谷でⅡ・Ⅲ区は台地の東縁部分にはは相当している。

Ⅰ区の埋没谷からは、古墳時代に埋積したと思われる多量の自然木と木道状遺構、浅間山給源軽石As-Bに覆われた水田址、近世以降と考えられる灌漑用水路、堤跡、池跡等が検出された(第160図)。このⅠ区の埋没谷は調査区東側を蛇行してⅣ区で再び姿を現す。

Ⅱ区では、館址とも推定される屈曲した溝跡とⅢ区にまで広がる古墳時代後期の集落址が検出された。遺構は堅穴住居跡が主体で、Ⅱ区で9軒、Ⅲ区で2軒が検出された(第161図)。なおⅢ区の2軒は他よりも古く5世紀代と思われる。

Ⅲ区では2軒の堅穴住居以外に近世以降の用水路が見られるが、他に目立つ遺構は検出されなかった。

Ⅳ区では埋没谷の谷頭が検出されており、湧水跡とこれに伴う小規模な環状遺構、橋、杭列等が見られる(第162図)。これらの時期は、覆土の様相からいずれも古墳時代初頭~後期のなかに含まれると考えられる。なお上層にはⅠ区と同様にAs-Bが堆積するが、水田址と推定できるような遺構は検出できなかった。

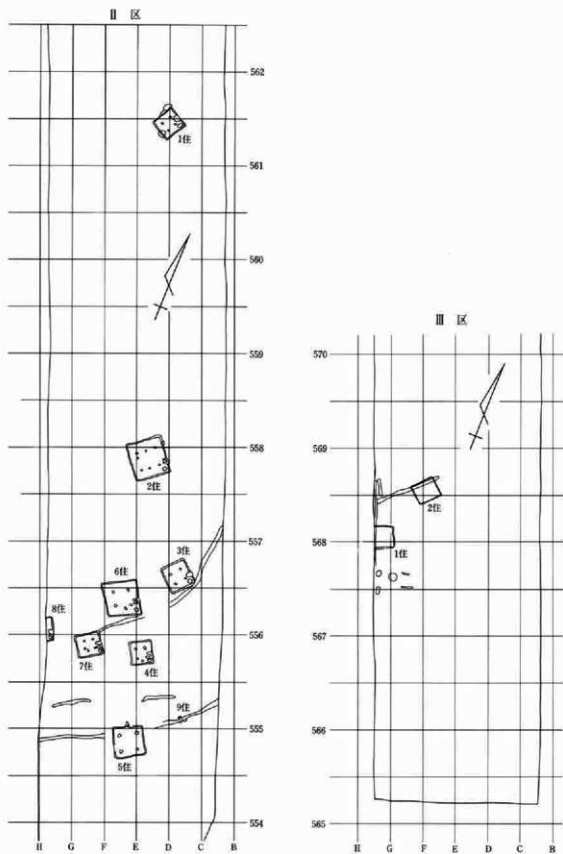
なお井戸は各区から5基、土坑は34基が検出されている。いずれも出土遺物に乏しく、時期判定の有力な証拠となるテフラを埋土に残すものが少ないことから、時期を限定するのは困難であるが、古墳時代を越えるものはないと考えられる。むしろ大部分は近世以降の墓や農耕に伴う貯蔵施設等の可能性が高い。また、時期は不明であるが、Ⅱ区から石製骨蔵器が1基検出された。

出土遺物は、堅穴住居からのものが大部分であるが、Ⅰ区埋没谷からは古墳時代後期の土器、Ⅳ区からは古墳時代初頭の土器が集中して出土している。また、これらに伴って農具や用途不明の木製品、桃や瓢箪等の果実と種子が出土している。遺構に伴わない遺物として縄文時代に属する土器と石器が数十点出土したが、特に集中する部分は認められなかった。

以下各遺構毎に詳細を記す。

### 1 堅穴住居跡

Ⅱ区及びⅢ区から検出された堅穴住居群の位置関係を第121図に示した。Ⅱ区の1-9号住居跡はいずれも古墳時代後期に属するもので、特に1・2・3・4・6・7・8号住居跡は非常に良く似た構造を示しており、6世紀前~中葉に限定される短期間での集落景観の一部を示すものと考えられる。Ⅲ区の1・2号住居跡はこれよりもやや古く、5世紀代と想定される。Ⅱ区5・9号住居跡は住居群南端の低地に近い地点にあり、7世紀代と考えられることから他の住居群とは時期的な断絶があったと解される。これら堅穴住居群の様相から、古墳時代を通して断続的に営まれた数軒からなる小規模集落であったと推定される。



第121图 II・III区住居跡群位置图



## II 1号住居跡 (第122~124図 PL 54・90)

位置 C・D-561。同時期住居群の北西端に1軒のみ離れて位置する。

平面形 正方形 規模 5.04×5.00m 面積 20㎡

主軸方向 N-30°-E

床面の状態 地山のロームをそのまま整えて床面としており、ほぼ水平で平坦。中央部はやや硬質であるが、周辺軟質部分との明瞭な境は見られない。

壁の状況 ほぼ垂直な掘り込みで、壁線は直線的。高さは最大部分で80cmを測り、下半の遺存状況は良いが西と南側の壁の一部は後世の擾乱により崩壊している。また東側の壁上半はかなり外傾しているが、この部分のロームの堆積状況から崩落によるものと考えた。

カマド 北東壁中央部で検出。煙道部は検出できなかった。全長1.2m、幅1.0mで主軸線は壁に直角ではなく東にやや傾く。また上面の遺存状況から、高さは40cm前後と推定され、この部分の壁高の約1/2に相当する。燃焼部は平面が縦長楕円形で、規模は70×35cmを測る。火床面は住居床面や炊口部よりも3cmほど高く平坦である。燃焼部奥壁は粘土を盛って急角度の傾斜をつけている。なお燃焼部中央やや左に偏って小形甕(10)が伏せられ、支脚として用いられている。袖部は左側がやや長く、炊口部分は幅18cmである。底面の掘り方は浅い皿状で埋土によって火床面を整え、この上に粘土を主とした本体を構築している。構築部分の壁への掘り込みは見られず、直接カマド本体を造り付けたと考えられる。このことから煙道部はかなり高い位置(火床面から60cm)から延びたと想定される。燃焼部内壁と火床面は加熱変化のため硬化しており、内部には崩落した焼土ブロックが多く堆積している。黒色土等の外部からの流入土はほとんど見られないことから、天井部は廃棄後かなり早い段階で崩落したと推定される。

貯蔵穴 東隅で検出され、平面は隅丸長方形で、規模は90×80cm深さ45cmを測る。上半は段状に外傾し中位以下はほぼ垂直に掘り込まれる。この上半部の形状から貯蔵穴を覆う蓋の受け部があった可能性がある。

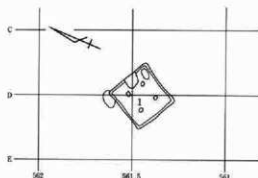
ピット 主柱穴4基が検出された。径30cm前後の円形掘り方に柱を据えて埋土により固定したらしい。底面には柱を据えた圧痕が残っており、いずれも北側に偏った位置で径8-10cmを測る。柱間寸法は主軸方向のP1-P3、P2-P4がP1-P2、P3-P4より25-35cm長い。

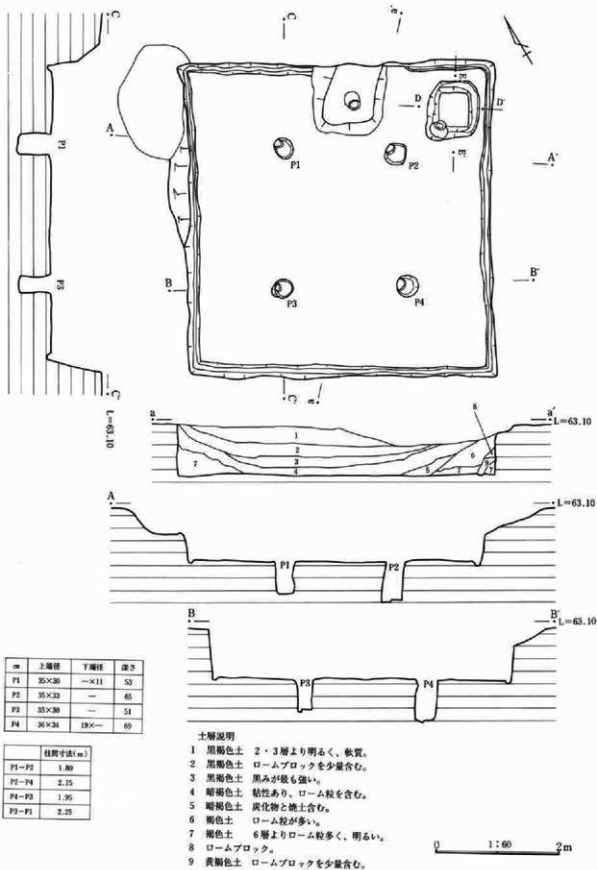
壁溝 カマドの部分を除いて全周し、幅10-15cm、深さ3-8cmを測る。溝底からピットは検出されなかった。埋土はロームを主とする土が堆積する。

埋没状況 埋土は全体にレンズ状の堆積状況を示しており、壁際のロームを主体とする土と住居中央部に厚く堆積する小さなロームブロックを含む黒色土に2分できる。この黒色土内には炭化物が混入しており、中央部では床面にまで達している。なお埋土にはこの時期の重要な鍵層となるテフラFP・FAはほとんど認められなかった。

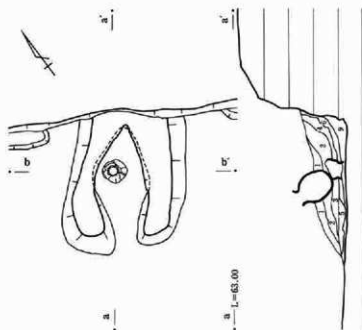
出土遺物 出土量は比較的小さいが、カマドで懸架された状態のまま放置されたと推定される甕(9)や貯蔵穴脇で台座として再利用された壺上半部(6)など本住居跡に伴うのが明らかなものとして注目され、また小破片でも床面から出土したものが大部分である。またカマド右袖の壁際部分で壺上半部(8)が半ば埋め込まれた状態で検出されたが、口縁部を上に向けて据え置かれたと考えられ、これも他の土器類の台座であった可能性がある。

重複遺構 なし。



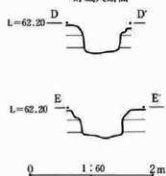


第122図 II 1号住居跡



1 竪穴住居跡

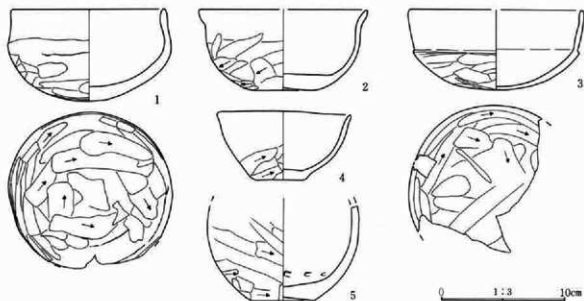
貯蔵穴断面



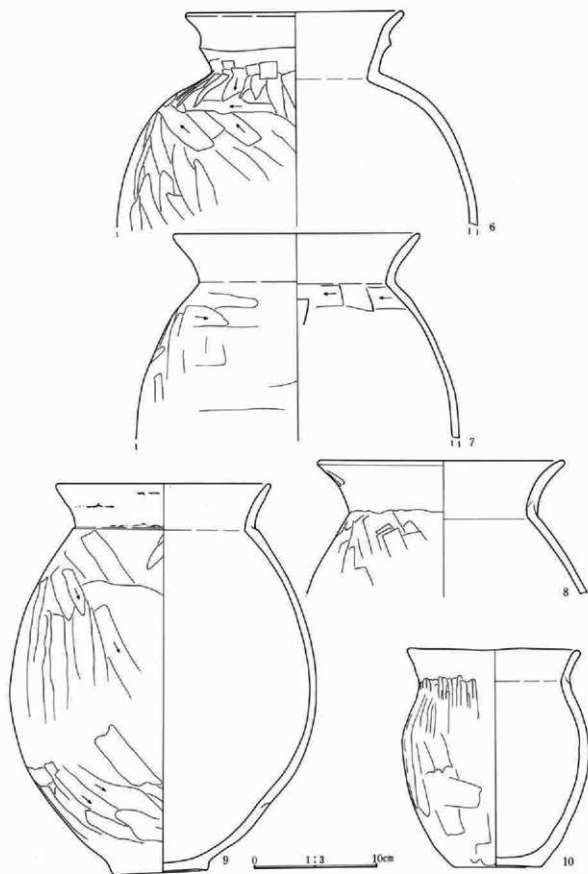
土層説明

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 1 黄褐色土 | ローム粒を主とし、焼土を含む。     |
| 2 赤褐色土 | ロームブロックと焼土の混合土。     |
| 3 赤色土  | 焼土が主体で、灰化物を少量含む。    |
| 4 赤褐色土 | ロームブロック、焼土ブロックが主体。  |
| 5 赤色土  | 焼土ブロック、内壁崩落土。       |
| 6 赤褐色土 | ロームの焼けた面。           |
| 7 赤褐色土 | 燃焼部内壁面。             |
| 8 灰色粘土 | 箱底。                 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロックを主とする。腐り方壤土。 |

0 1:30 1m



第123図 II 1号住居跡カマド及び出土遺物(1)



第124図 II 1号住居跡出土遺物(2)

## II 2号住居跡 (第125~130図 PL 55・91)

位置 D-557.5 平面形 正方形

規模 7.80×7.95m 面積 54.5㎡

主軸方向 N-52°-E

**床面の状態** 地山のロームをそのまま床としており、小さな凹凸は見られるが全体に平坦でレベルもほぼ水平である。中央部が硬質であるが、周辺軟質部分との境は明瞭ではない。

**壁の状況** ほぼ垂直の掘り込みで、壁線は直線的。崩落は北西壁の上半で僅かに認められるのみで、遺存状況は極めて良好。高さは80cm前後で最大値は90cmを測る。

**カマド** 北西壁の東隅に偏って検出。竪穴内に張り出した本体部分の規模は長さ100cm幅120cmを測る。主軸線は壁線に直交ではなくやや東に傾く。天井部の崩落が激しく、高さの推定は不可能である。燃焼部は平面縦長楕円形に近く、長さ60cm幅40cmを測る。炊口から燃焼部中央にかけてが最も幅広く、奥ほど狭くなる形状を呈する。火床面はほぼ平坦でレベルも住居床面とはほとんど変わらない。奥壁は壁掘り方の下部に粘土を貼って約70°の傾斜をつけている。炊口と燃焼部中央の間に小形甕(12)を伏せて支脚としている。炊口部に偏っているのは縦方向に複数の臺を懸けたためであろうか。炊口の幅は約30cmでわずかに床が盛り上がり、煙道部は燃焼部奥壁からそのまま立ち上がり、70°前後の急角度を保ってそのまま延びる。袖部は浅い掘り方に堀土で基礎を整え、その上に粘土で構築する。内部には燃焼部内壁の崩落土が厚く堆積するが、早い段階で煙道からの流入と思われる黒色土の堆積が見られる。カマドの構造や規模、形状の特徴はII 1号住居跡例と近似していることが注目される。

**貯蔵穴** 東隅に壁から30cm離れて検出された。平面は不整形円形を呈し、規模は径90×83cm深さ59cmを測る。上縁部や周囲には蓋受けを想定するような形状の変化は認められなかった。

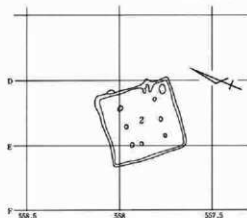
**ピット** 7基が検出されており、柱穴と考えられるP1・P7・P6とP2・P3・P4は住居主軸線を中心にして左右対称位置に掘り込まれる。深さは20~40cmと本住居群のなかには最も浅い。掘り方の径は20~30cmだが、底面に残る圧痕から柱径は10cm前後と推定される。この柱位置から住居主軸方向がそのまま様方向と考えられよう。なおP5はP4とP6の柱間にP4から1.05m離れて掘り込まれており、その位置から主柱穴とは考えにくい。規模がP4とほぼ同じであることから、梁等の屋根構造を支える支柱穴であった可能性がある。

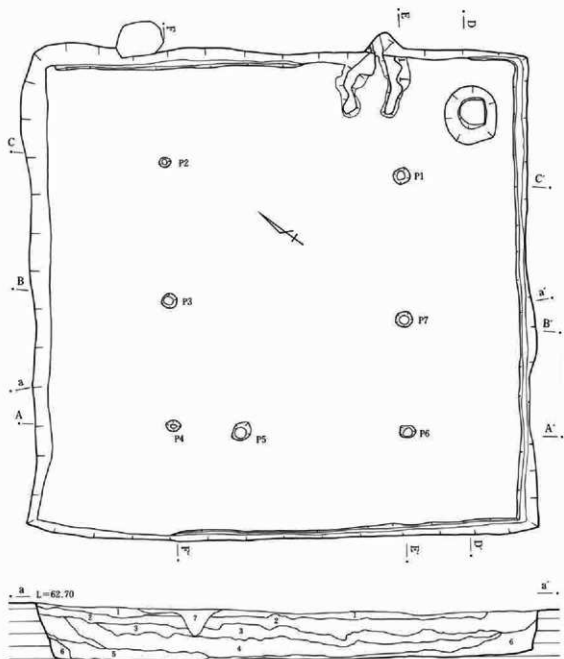
**壁溝** 北東と南東から南西にかけての壁に沿って設けられる。カマドの部分は2.5mほど途切れる。幅は約20cm以下で深さは10~15cmを測る。底面には小さな凹凸は見られるが、ピット等は認められなかった。

**埋没の状況** 下層にはローム粒や小さなロームブロックを主とする黄褐色土が堆積するが、土質が密でしまっていることから、人為的な埋土というより壁際の地山や盛土が流入したと考えたい。中位には榛名山二ツ岳給源のテフラが混入する。なお最上層にはAs-B(AD1108年降下と推定される)を多く含む層が認められた。これは純層ではないが、本住居跡が少なくとも12世紀初頭までは浅いくぼみとして残っていたことを示すものと考えられよう。

**出土遺物** 遺物の出土位置は南東壁際に集中しており、レベルは床直かやや浮いた位置からのものが大部分を占める。カマドの右袖脇からは瓶(14)が横転状態で出土しており、本住居で使用後廃棄したものと捉えられよう。土器はほぼ一時期のものと考えられ古墳時代後期初頭に属する。なお土器以外では紡錘車、滑石製模造品、白玉、礫がある。

**重複遺構** なし。





土層説明

- 1 暗褐色土 As-Bを主とする。
- 2 暗褐色土 As-Bと、白色軽石 (FAかFP) を含む。
- 3 黒褐色土 軽石 (FAかFP) を含む、比較的均質。
- 4 暗褐色土 3層に近似するが、ローム粒も含む。
- 5 黒褐色土 粘性強く、ロームブロックを含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロックが主で、床面を覆う。

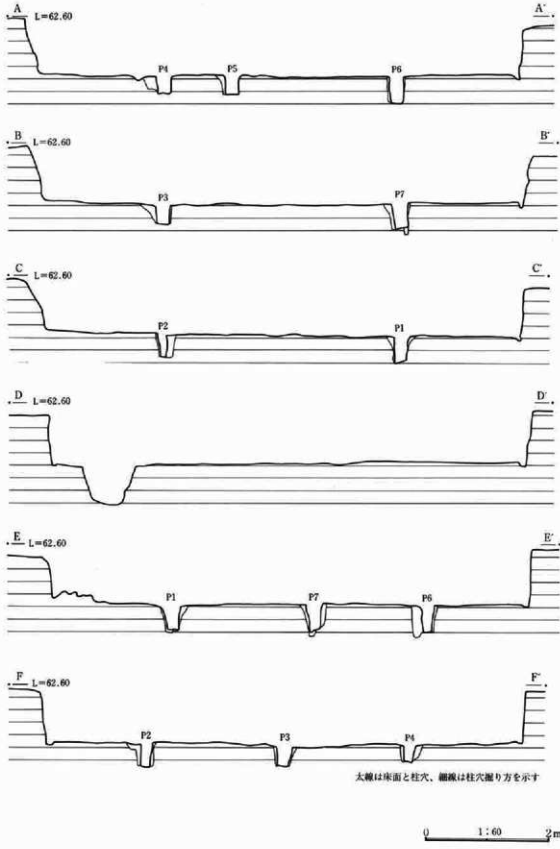
no	上層径	下層径	深さ
P1	28×24	14×13	43
P2	18×16	9×8	38
P3	24	14×12	32
P4	18	10×8	28
P5	34×28	18	31
P6	25×18	16×12	44
P7	28×24	16×12	44

	柱間寸法(m)
P1-P2	3.80
P3-P7	3.75
P4-P6	3.72
P1-P7	2.25
P6-P7	1.85
P2-P3	2.20
P3-P4	1.95

0 1:60 2m

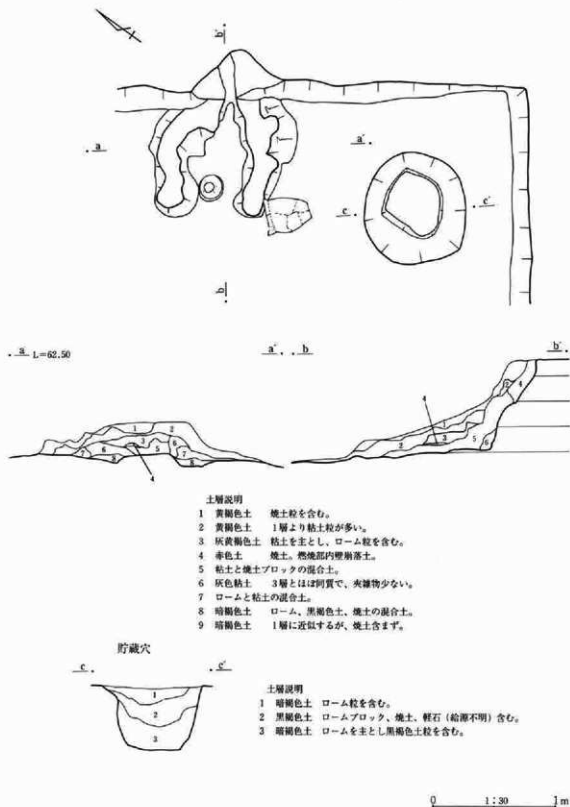
第125図 II 2号住居跡

1 整穴住居跡



第126図 II 2号住居跡断面

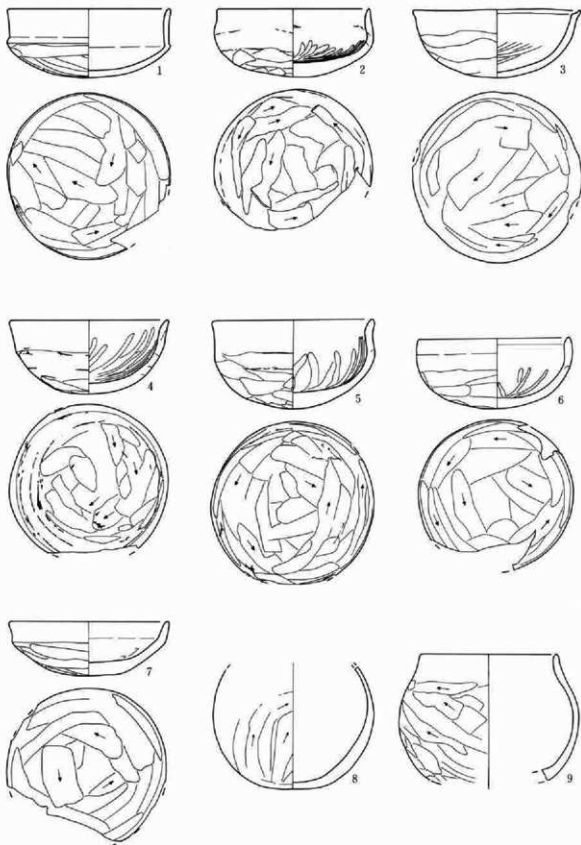
第IV章 三空間ノ谷遺跡の調査



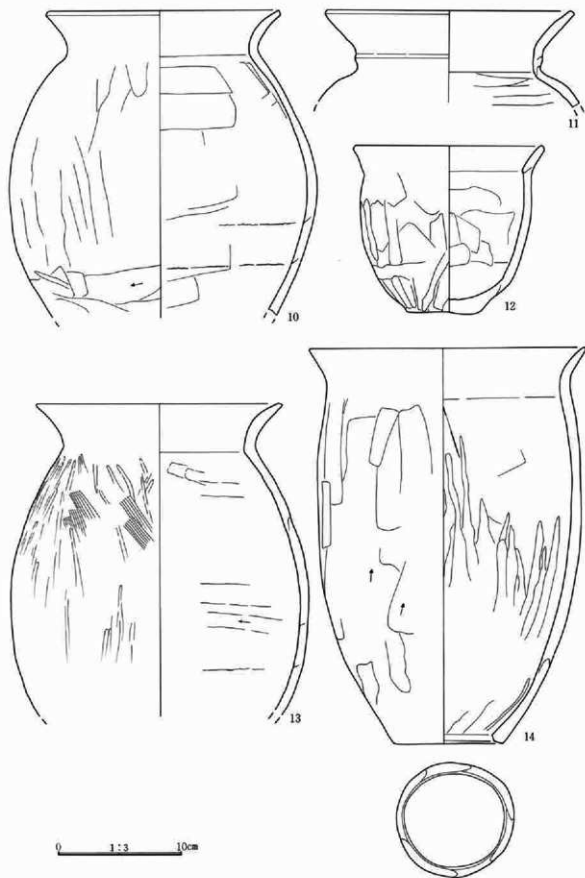
第127図 II 2号住居跡カマド及び貯蔵穴断面



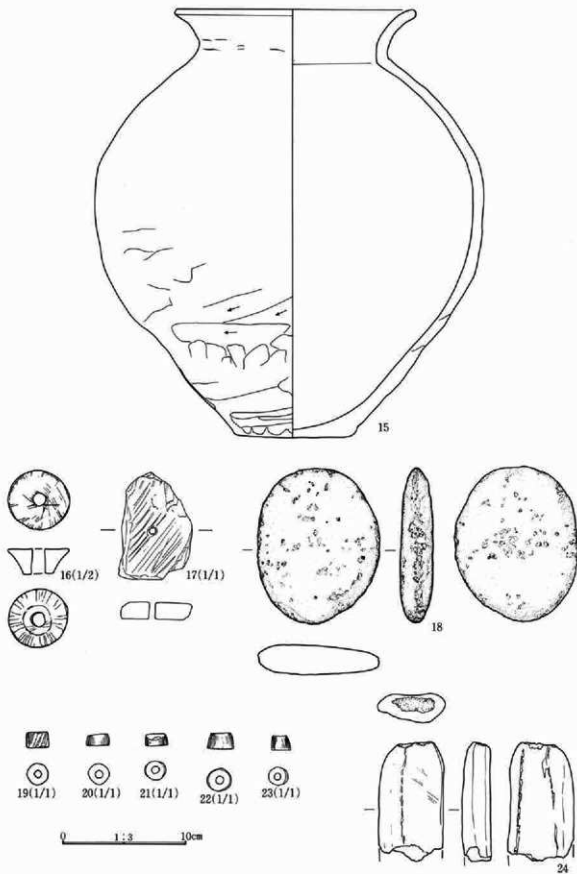
1 竖穴住居跡



第128图 II 2号住居跡出土遺物(1)



第129図 II 2号住居跡出土遺物(2)



第130图 II 2号住居跡出土遺物(3)

II 3号住居跡 (第131～136図 PL 56・92)

位置 C-556.5 平面形 正方形

規模 5.75×6.10m 面積 27.5m<sup>2</sup>

主軸方向 N-39°-E

**床面の状態** 地山のロームをそのまま床としており、周縁部に比べて中央部が硬質でレベルもやや高い。

**壁の状況** ほぼ垂直の掘り込みで、高さは75cmを測る。大きな崩落はほとんど見られない。

**カマド** 北東壁の南寄りで見出。堅穴内へ張り出した本体部分の規模は、長さ100cm幅90cmを測る。主軸線は壁に直交せずやや南側に傾く。燃焼部は縦長長方形を呈し、長さ90cm幅40cmを測る。火床面は炊口から次第に低くなり奥部では炊口より15cmほど低い。奥壁は30cmの高さで垂直に立ち上がり、外傾する煙道部に続く。燃焼部中央にはロームを盛り上げて10cm大の礫を立てており、この部分が強く焼けていることから支脚と考えられる。煙道部は地山を掘り込んで40°の傾斜角をつけている。炊口幅は燃焼部幅とほぼ同じで45cmを測る。掘り方は長さ110cm幅80cmの不整長方形の皿状に掘り込み、この部分はそのまま火床面として、また両側に粘土で袖部を構築している。

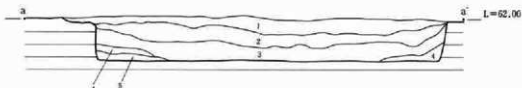
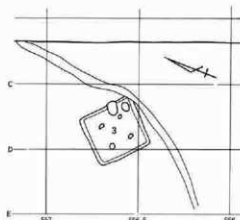
**貯蔵穴** 東隅で見出され、平面は不整形を呈する。径92×78cmで深さ68cmを測る。断面は台形状で底面は平坦。貯蔵穴のある東隅はカマド部分の床面から5～8cmの比高差で緩い段状に掘り込まれている。埋土はローム粒を多く含むが人為的に埋めた痕跡は認められない。

**ピット** 主柱穴4基が住居の対角線上で見出された。規模はほとんど同じ、柱間寸法はやや主軸方向が長い。

**壁溝** カマド部分以外は全周する。幅は20～10cm深さ10cm前後を測り、底面には小さな凹凸が見られる。  
**埋没の状況** 壁際に垂木と思われる炭化材や焼土塊が見られることから、上層が焼失崩壊したのは明らかである。その上に焼土粒を多く含む暗褐色土が堆積するが、ブロック状ではないことから屋根に載せた土とは考えにくい。

**出土遺物** カマド燃焼部から出土した7の鉢形土器は実用の器ではなく、支脚として用いられたと思われる。床直や埋土での大形破片が多いが、南東壁際からの投棄と思われるものが大部分である。なお器形や部位は不明だが須恵器の小破片が1点出土した。

**重複遺構** なし。

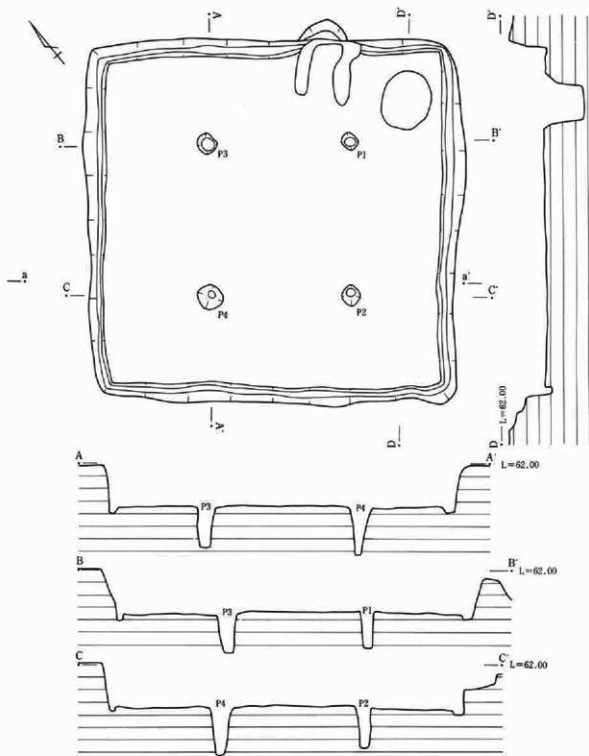


土層説明

- 1 黒褐色土 砂質で、軽石 (FA か FP) を含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似するが、ローム粒、軽石が多い。
- 3 暗褐色土 ローム粒と焼土を多く含む。
- 4 黄褐色土 ローム粒が主体で、焼土、炭化物を含む。
- 5 黒色土 炭化物、炭化材を含む。

第131図 II 3号住居跡土層断面

1 豎穴住居跡

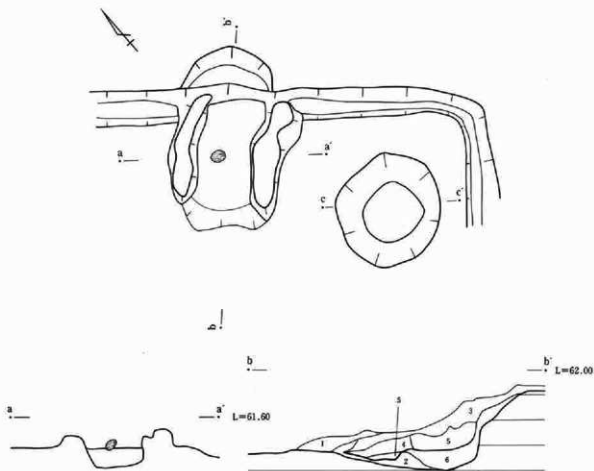


番号	上層径	下層径	深さ
P1	22×22	18×14	59
P2	28	16×14	65
P3	22×26	20×18	66
P4	39×36	12	75

柱間寸法(m)	
P1-P2	2.35
P2-P4	2.30
P4-P3	2.40
P3-P1	2.25

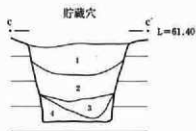
0 1:60 2m

第132図 II 3号住居跡



土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 2 黄褐色土 ロームを主とする。
- 3 黄褐色土 ロームを主とし、粘土、炭化物含む。
- 4 暗褐色土 焼土、灰を含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロックと粘土の混合土。下面は火床面。
- 6 黒灰色土 粘土を主とする。

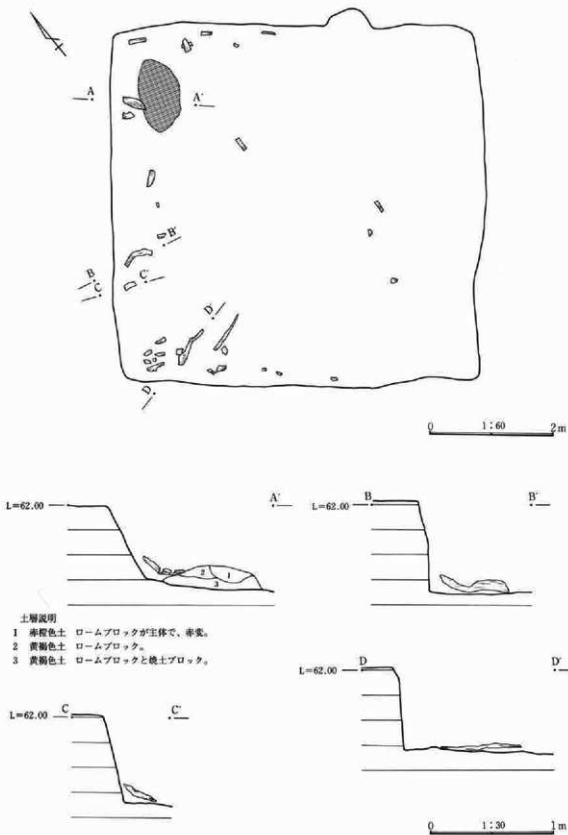


土層説明

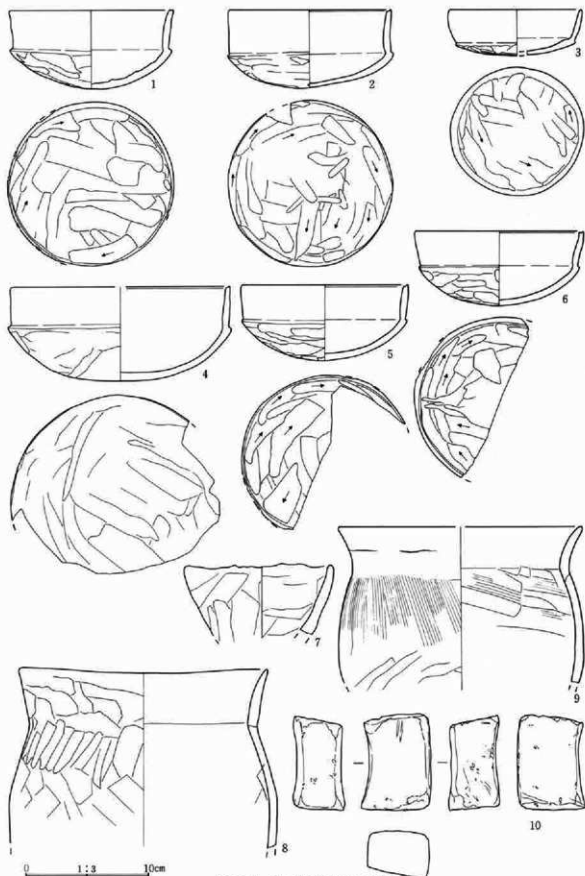
- 1 暗褐色土 焼土とローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒が多い。
- 3 黄褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

0 1:30 1m

第133図 II 3号住居跡カマド及び貯蔵穴

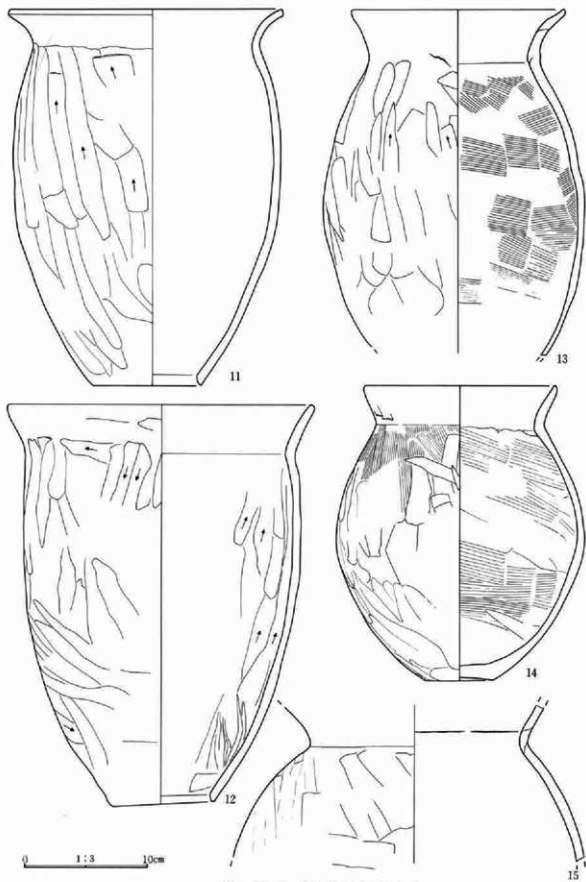


第134図 III 3号住居跡炭化材出土状況



第135図 II 3号住居跡出土遺物(1)





第136图 II 3号住居跡出土遺物(2)

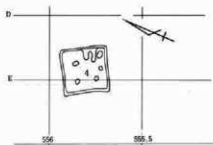
II 4号住居跡 (第137~141図 PL 57・93)

位置 D・E-555.5 平面形 正方形

規模 4.95×5.20m 面積 19m<sup>2</sup> 主軸方向 N-62°-E

床面の状態 ロームブロックを主とした厚さ5~10cmの貼床を施しており、ほぼ平坦。中央部は硬質だが周縁部との境は不明瞭。

壁の状況 ほとんど垂直の掘り込みで、深さは最深部で110cmを測る。



カマド 東壁のやや南寄りで見出。崩落部分が多く遺存状況は不良。壁穴内への張り出し部分は長さ150cm幅130cm。燃焼部は縦長の不整形円形で長さ110cm幅50cmを測る。火床面は不整形長方形の浅い掘り方に埋土して整える。中央部は加熱変化により赤変硬化している。奥壁は30cmほどの高さで段状に立ち上がり、傾斜する煙道部に続く。炊口は幅30cmほどで燃焼部よりやや高い。なお炊口と燃焼部の間は灰掻きの為と思われる円形の浅いほみが残る。煙道部は壁を掘り込み、燃焼部奥壁から25°の傾斜で延びて70°の急角度に変わる。煙道部には外部からの流入土が堆積するが、燃焼部は廃棄の早い段階で崩落したと思われる。

貯蔵穴 東端隅で見出。不整形長方形で、規模は83×67cm深さ41cmを測る。断面は台形状。西側には幅40cm高さ5cm前後の盛土によって区画している。壁とカマド右袖、盛土によって区画されたスペースは一辺1.1mの方形であり、この部分に蓋をした可能性が考えられる。また、南壁沿いの壁溝が貯蔵穴に連続する。貼床面下位で見出されたピットP6とも小規模な溝で連続するが、これは生活時には埋められていた。

ピット 6基検出されたうち、P1~P4が支柱穴と考えられる。P1とP4は掘り方がやや大きい。P2はカマド右袖端部に位置している。P5は南壁中央付近の壁から70cm離れた位置に掘り込まれ、下端部規模から推定される柱径が4~5cmで、深さも他の柱穴より浅いことから出入り口施設に関わる支柱穴と推定される。なお、北壁からP3に延びる浅い間仕切り溝が見出された。内部には人為的埋土が認められた。

壁溝 カマドと貯蔵穴部分以外は全周する。幅10~15cm深さ5~10cmを測り、底面には小さな凹凸あり。埋土はローム粒を主としており、貼床構築後に埋められている。

埋没の状況 レンズ状の堆積状況を示しており、埋土が比較的均質でしまっていることから自然堆積と思われる。中位にはFAがブロック状に見られる。北端には焼土化したロームブロックが堆積しているが、本住居跡が焼失した痕跡とは考えにくい。

出土遺物 カマド周辺部から南壁際にかけて集中するが、他の住居跡よりは少ない。3の壺はカマド右脇から出土しており本住居跡に伴うものであろう。土器以外では管玉2点が注目される。

重複遺構 なし。

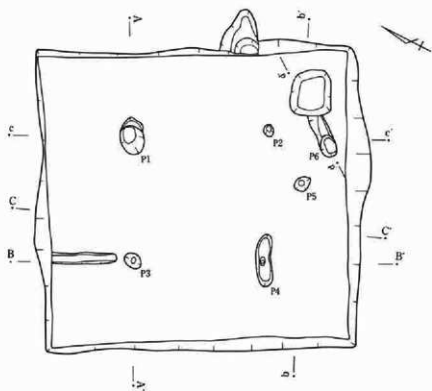
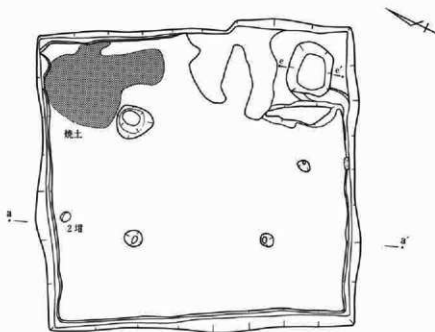


土層説明

- 1 暗褐色土 Ax-Bを多く含む。
- 2 暗褐色土 軽石 (FAかFP) を多く含む。
- 3 黄褐色土 FAとローム粒で、降下した純層ではない。
- 4 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。

0 1:60 2m

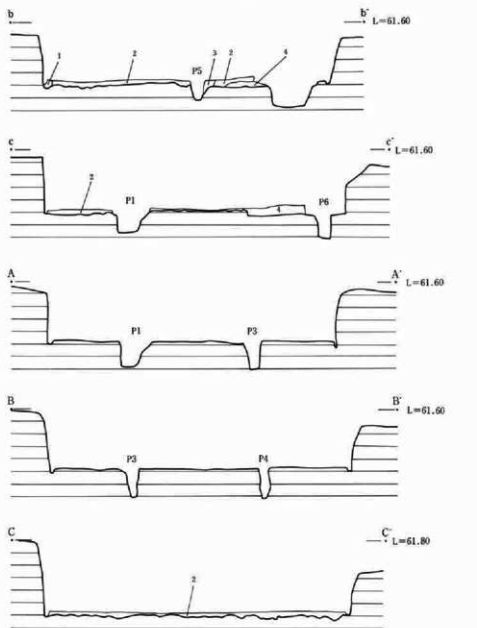
第137図 II 4号住居跡土層断面



0 1:00 2m

第138図 II 4号住居跡及び掘り方

第IV章 三空間ノ谷遺跡の調査



土層説明

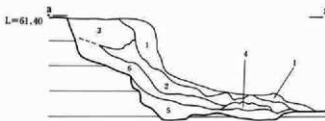
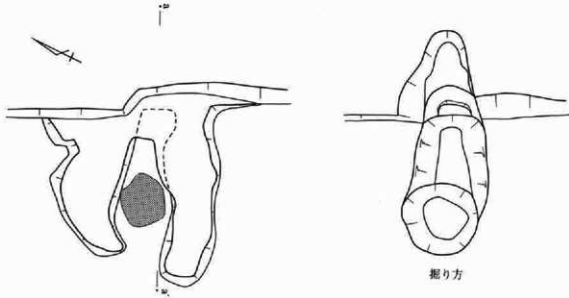
- 1 黄褐色土 ロームが主で、黒褐色土粒含む。壁溝埋土。
- 2 黄褐色土 ロームブロックが主。黒褐色土と粘土含む。
- 3 黄褐色土 1層とほぼ同じ。P5埋土。
- 4 黄褐色土 2層に近似するが、ロームブロックが少ない。

cm	土層種	下層厚	深さ
P1	30×17	5×4	38
P2	58×52	20×14	43
P3	38×26	15×7	46
P4	31×19	10×7	45

柱間寸法(m)	
P2-P3	2.00
P3-P1	2.10

0 1:60 2m

第139図 II 4号住居跡貼床断面



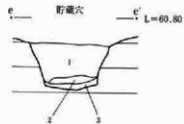
土層説明

- 1 暗褐色土 ロームブロック、焼土、粘土を含む。
- 2 灰褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 3 灰褐色土 粘土を主とし、褐色土粒を含む。
- 4 焼土ブロック
- 5 棕色土 地山のロームで、赤変する。
- 6 ローム、粘土、焼土の混土層で、下位に灰が堆積。



土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロック、粘土を多く含み、上面は硬化床面。

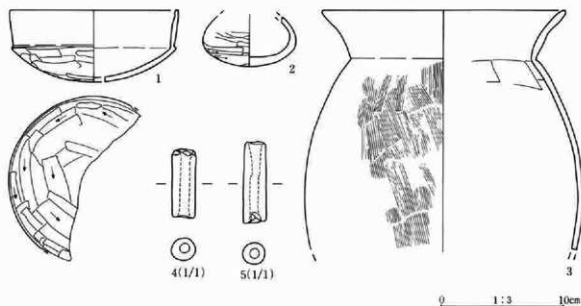


土層説明

- 1 暗黄褐色土 ロームを含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックが主体。
- 3 灰黄褐色土 焼土ブロックが主体。

0 1:30 1m

第140図 II 4号住居跡カマド及び貯蔵穴断面



第141図 II 4号住居跡出土遺物

II 5号住居跡 (第142図 PL 58・93)

位置 D・E-554.5 平面形 やや歪む正方形

規模 6.85×6.45m 面積 37.5m<sup>2</sup> 主軸方向 N-24°-W

床面の状態 地山は黒色泥土で、5cm前後のロームによる貼床を施す。全体に軟質で凹凸は少ない。床面標高は60.9m前後で、最も近い4号住居跡より30cmほど高い。これは深く掘ることによる地山の湿気を嫌ったものだろう。

壁の状況 高さは最も遺存状況の良い北壁で30cmを測る。南壁では浅く、地山との境が不明瞭である。

カマド 北壁の中央部で検出。壁を掘り込んで本体を構築しており、堅穴内に張り出す部分は重複する21号溝に切られて検出されなかった。燃烧部内面の幅は35cmで奥行きは60cmほどを測る。火床面は加熱変化により硬化しており、緩い傾斜で煙道方向へ立ち上がる。煙道部は40°前後の傾斜角で外上方に延びる。なお煙道部の直上からは完形の杯(1)が出土している。

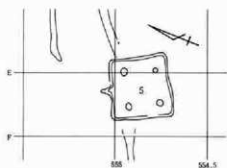
ピット 4基が検出され、いずれも主柱穴と思われる。平面は円形で明確な掘り方をもつ。ここから更に10~30cm掘り下げて柱を据えている。柱穴の位置は、やや歪んだ住居平面形と相似しており、柱間寸法も他の住居跡と比べて不均等である。

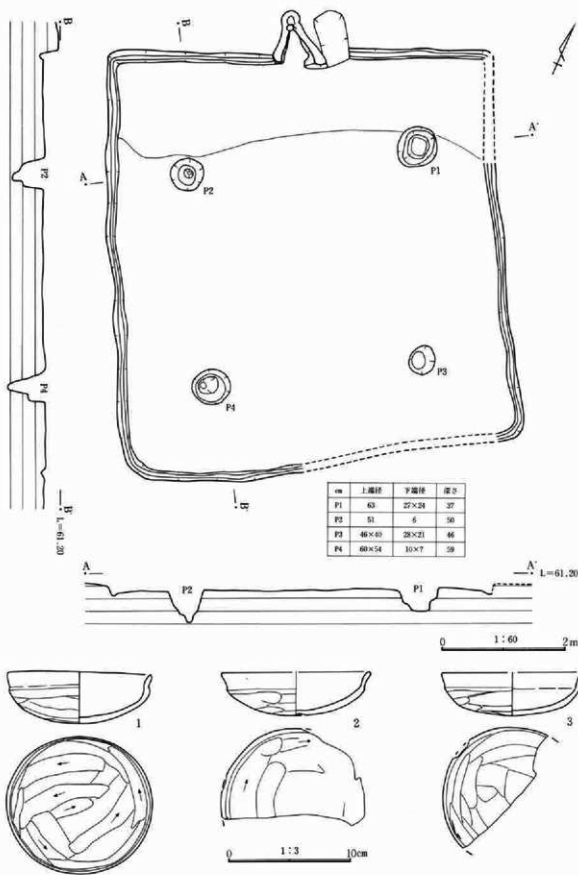
壁溝 カマド部分以外は全周しており、幅20~10cm深さ8~15cmを測る。底面に凹凸は見られるが、ピットは確認出来なかった。

埋没の状況 全体に黒褐色土が厚く堆積し、地山に含まれるバミスや砂が混入するため、地山土の流入による埋没と考えたい。

出土遺物 カマドから出土した完形杯(1)以外は床直か埋土下層のものである。器種は壺と杯のみで、壺は図化できるものはないが60点ほどの破片が出土している。時期は他の住居跡と異なり、古墳時代後期の新しい段階(7世紀代)と思われる。

重複遺構 21号溝に切られる。





第142図 II 5号住居跡及び出土遺物

Ⅱ6号住居跡 (第143~148図 PL 59・60・93・94)

位置 E-556・556.5 平面形 正方形

規模 7.45×7.52m 面積 46㎡

主軸方向 N-64°-E

床面の状態 地山のロームのまま床面としており、ほぼ平坦。

壁の状況 ほぼ垂直の掘り込みで、高さは80cmを測る。

カマド 東壁の中央よりやや南寄りの位置で検出。全長150cm幅110cmを測り、主軸線は壁に直交せずやや南に傾く。燃焼部は細長く幅35cm奥行き100cmを測る。火床面は地山面をそのまま利用し、ほぼ平坦。燃焼部奥壁は15cmほど垂直に立ち煙道部に続く。袖部は直線的で、炊口の幅は燃焼部とはほぼ同規模。煙道部は30°の傾斜で立ち上がり次第に急角度で屈曲する。この部分の煙道径は17cmを測る。

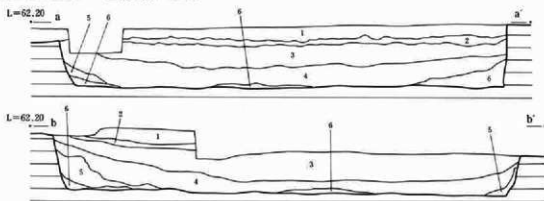
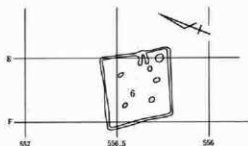
貯蔵穴 南東隅で検出され、不整形形で径80×72cm深さ70cmを測る。断面は台形で底面は平坦。なお貯蔵穴の周囲には長さ120cm幅110cm深さ10cmの方形の掘り込みがあり、葦受けと推定される。内部には住居跡下層と同質の暗褐色土が厚く堆積するが、この上位部分で北側から落ちた状態で甗(6)が出土している。

ピット 5基検出され、P1-P4が主柱穴である。柱位置はやや歪んだ住居壁線に平行しているため、柱間寸法は東側のP1-P2間がやや長い。これは正確な方形配置よりもカマドの使い勝手、柱と壁間の必要スペースの確保等が優先した結果と考えられよう。柱穴の掘り込みは垂直よりやや内側に傾斜し、柱の径は柱穴底面に残る圧痕から10cm強と思われる。P5は深さが浅く、位置も南壁から1.2mと近い位置にあることから、4号住居跡と同様に出入り口施設に関わる支柱穴だろう。

壁 溝 全周しており、幅5~10cm深さ8~10cmを測る。ピットは確認できなかった。

埋没の状況 上層が焼失して炭化材が床面に遺存する。その上にローム粒やロームブロックを含む暗褐色土が堆積するが人為的な埋土ではない。周囲の盛土の流れ込みだろう。最上層にはAs-Bが多く見られる。

出土遺物 炭化材は北と西側に多くほとんどが垂木で壁際の初期埋没土堆積後に崩落したことが分かる。西壁際では壁に平行する数本の横木が検出された。土器は南壁際埋土中に多く、子持勾玉(9)は床から60cm上位で出土した。 重複遺構 なし。



土層説明

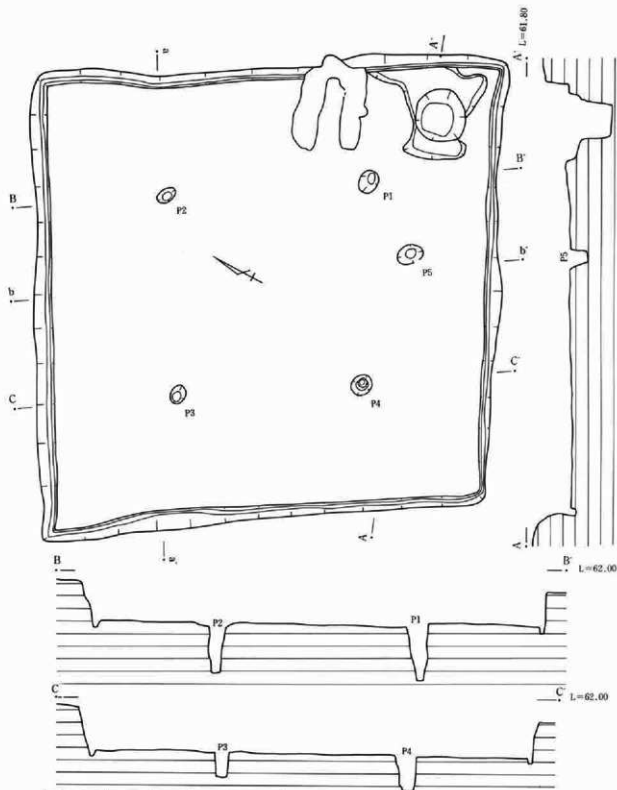
- 1 暗褐色土 As-Bを多く含む。
- 2 黒色土 軽石(FAかFP)を含む。
- 3 黒褐色土 軽石(FAかFP)を多く含む。黄褐色の環紋が見られる。
- 4 暗褐色土 焼土、ローム粒を多く含む。
- 5 黄褐色土 ロームを主とする。
- 6 黄褐色土 ロームを主とし、炭化物と焼土を含む。

第143図 Ⅱ6号住居跡土層断面

0 1:60 2m



1 竖穴住居跡

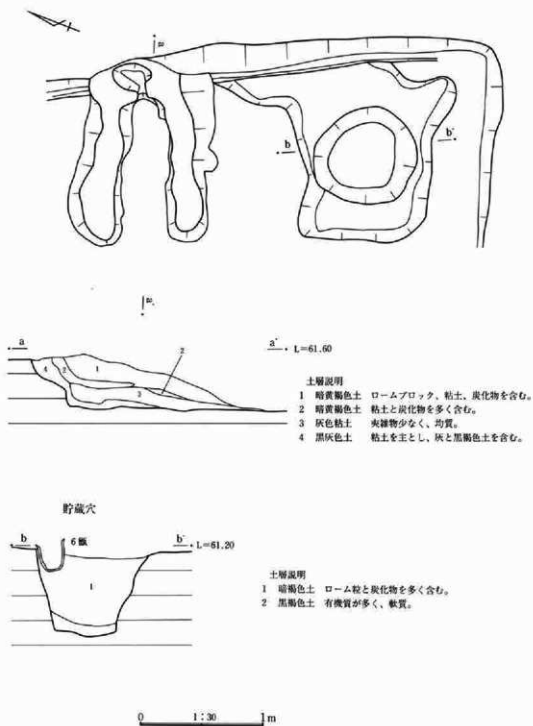


m	上層径	下層径	深さ
P1	37×30	18×12	79
P2	32×22	16×12	-
P3	30×24	15×14	40
P4	34×32	8	58
P5	40×30	18×16	30

柱間寸法(m.)	
P1-P2	3.60
P2-P3	3.30
P3-P4	3.00
P4-P1	3.50

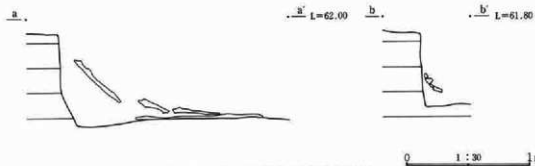
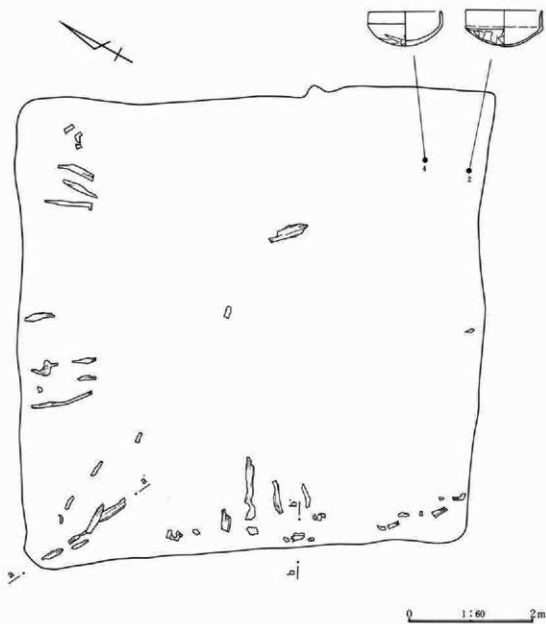
第144图 II 6号住居跡

0 1:50 2m

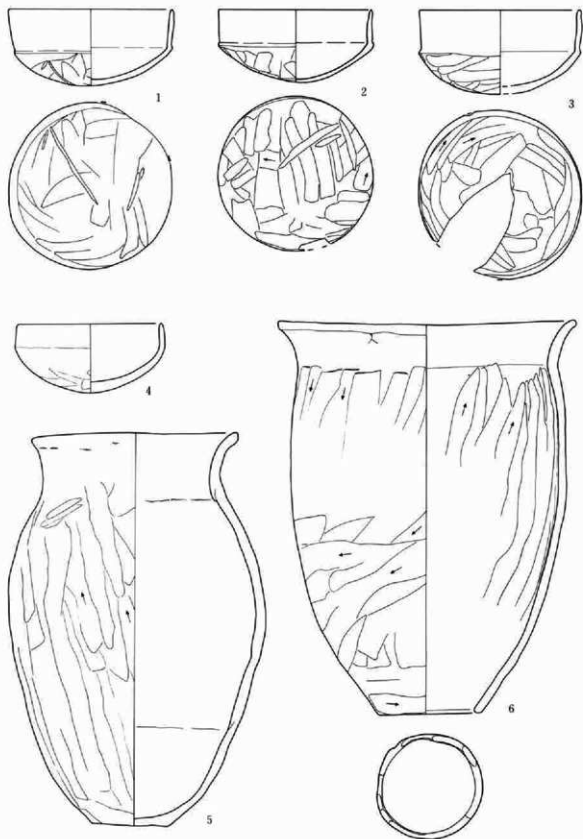


第145図 II 6号住居跡カマド及び貯蔵穴

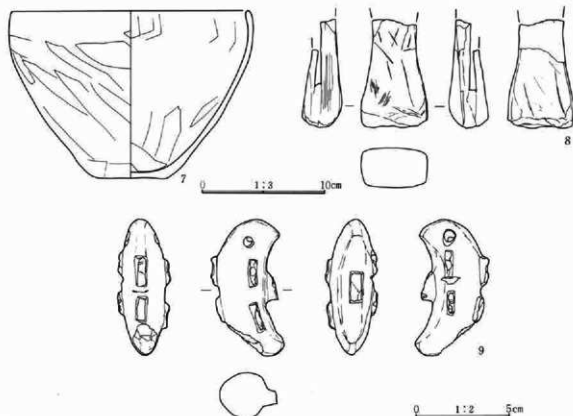
1 整穴住居跡



第146圖 II 6号住居跡炭化材出土状況



第147图 II 6号住居跡出土遺物(1)



第148図 II 6号住居跡出土遺物(2)

## II 7号住居跡(第149・150図 PL 61・94)

位置 F-555.5 平面形 正方形

規模 5.45×5.15m 面積 21㎡ 主軸方向 N-52°-E

床面の状態 ロームを床とし、中央がやや高くやや硬質。

壁の状況 やや外傾するが遺存状況は良好。高さは75cmを測る。

カマド 北東壁で検出。全長110cm幅100cmを測り、主軸線は住居主軸よりやや南へ傾く。燃焼部は不整形円形で径50×40cmを測る。火

床面は浅くくぼみ、最奥部ではさらにビット状にくぼむ。奥壁は30cmの高さで急角度で立ち、ここから煙道が20cmほど水平に延びてから約80°の傾斜で上方に立ち上がる。燃焼部の掘り方は浅い皿状で壁際ほど深い。なお壁溝はカマド構築以前に掘り込まれている。

貯蔵穴 東隅で検出。不整形形で規模は73×61cm深さ46cmを測る。周囲は他の床面より5cm前後高くテラス状になる。

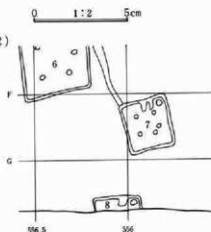
ビット P1-P4は支柱穴で、P1はカマド正面からややずらした位置に掘り込まれる。P5は南東壁に面した出入り口施設に関わる支柱穴だろう。

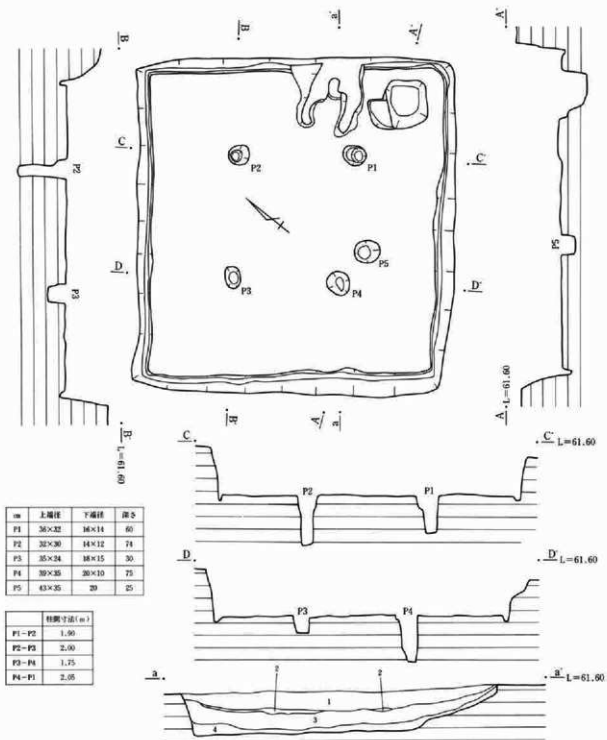
壁溝 カマド下も含めて全周しており、幅15-10cm深さ15-5cmを測る。ビットはない。

埋没の状況 レンズ状の堆積で下層にはローム粒が多い。中位にはFAがブロック状に見られる。

出土遺物 カマド内と南東壁際の床直から大形破片が出土する。しかし使用状況のまま遺棄されたものは見られない。掘土には7世紀以降の土器も混入している。

重複遺構 なし。





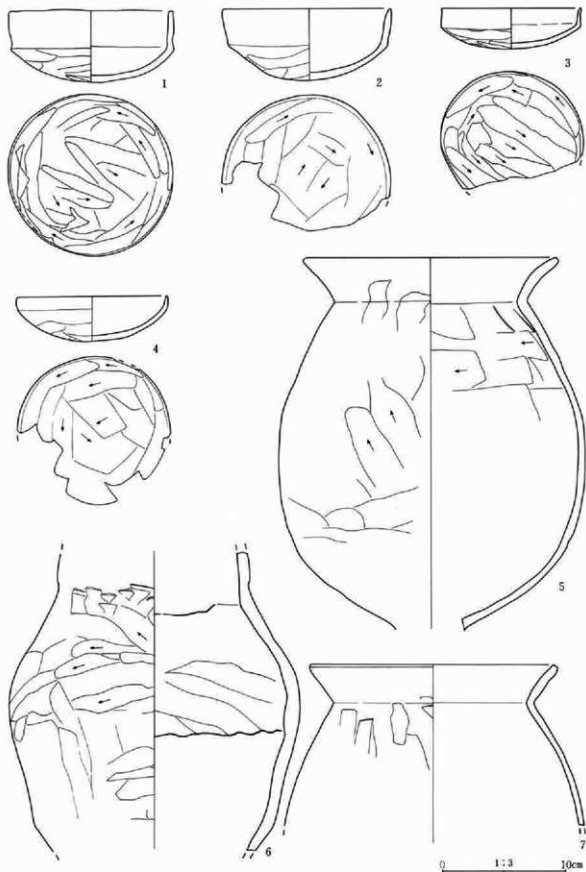
土層説明

- 1 黒褐色土 軽石 (FA か FP) を含む。
- 2 黄褐色土 FA と思われる。
- 3 暗褐色土 ローム粒が多く、不均質。
- 4 暗褐色土 3層に近似するが、ローム粒が多い。

0 1:60 2m

第149図 II 7号住居跡

1 整穴住居跡



第150图 II 7号住居跡出土遺物

Ⅱ8号住居跡 (第151～153図 PL 62・95)

位置 G-556 平面形 方形と思われる。

規模 東辺5.14m 主軸方向 N-(69°)-E

床面の状態 ロームを床としており、貼床は認められず。

壁の状況 ほぼ垂直の掘り込みで上半は崩落のためかやや外傾する。高さは80cmまでは判明。

カマド 東壁の南寄りで壁穴内に張り出した本体と壁を掘り込んだ煙道部を検出。壁にはほぼ直交して構築されており、全長130cm幅95cmを測る。燃焼部は幅25cmほどで細長く、中央に器設部の跡が見られ、ここには支脚に利用された礫と伏せた甕(6)が検出された。火床面は炊口から燃焼部の間が平坦で硬く焼成変化を遂げている。燃焼部奥の底面は掘り方の段階でピット状に掘り込み、ここに埋土をして整える。この部分は炊口よりもくぼむ。煙道部は地山を掘り込んで30°、中位で70°に屈曲して立ち上がる。煙道径は13cm前後を測る。

貯蔵穴 不整形円形。径80×75cm深さ45cm。上縁部はわずかに段状にくぼむ。

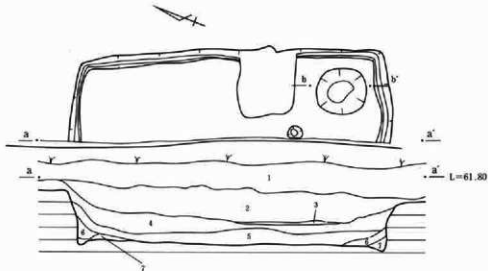
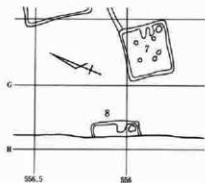
ピット カマド右手前で柱穴1基を検出。径25×20cm。

壁溝 カマド下を含めて全周する。幅15cm以下、深さ8cm前後。内部は流れ込みのローム2次堆積土。

埋没の状況 下層は地山の流入土が堆積。中位にはFAの小ブロックが挟まれる。

出土遺物 カマド-貯蔵穴周辺の遺物はほとんど床直かやや浮いており、住居廃棄時に伴うと考えられる。

重複遺構 なし。



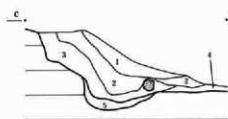
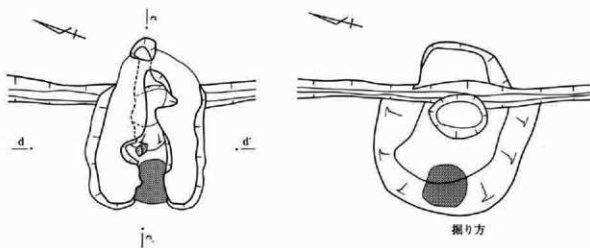
土層説明

- 1 暗褐色土 As-AとAs-Bを多く含む。現耕作土層。
- 2 黒褐色土 粘性弱く、軽石(FAかFP)を少量含む。
- 3 黄褐色土 ブロック状に堆積するFA。
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 6 黒色土 粘性強く、ローム粒を含む。
- 7 黄褐色土 地山のロームの流れ込み。

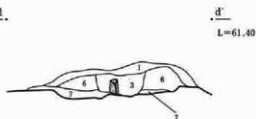
0 1:60 2m

第151図 Ⅱ8号住居跡

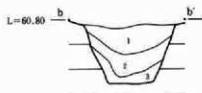




.c' L=61.40 d.



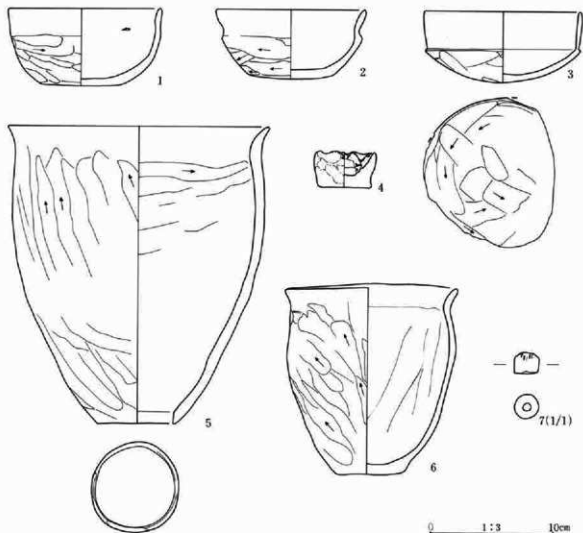
- 土層説明
- 1 黒褐色土 明るい斑紋が見られる。
  - 2 灰褐色土 粘土を主とし、下面は焼けている。
  - 3 黒褐色土 粘土と焼土を多く含む。
  - 4 橙色土 赤変したローム、大球面。
  - 5 黒褐色土 ロームブロックを含む。
  - 6 灰色粘土 カマド袖部。
  - 7 黄褐色土 ロームブロックを主とする。



- 土層説明
- 1 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
  - 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
  - 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。

0 1:30 1m

第152図 II 8号住居跡カマド及び貯蔵穴断面



第153図 II 8号住居跡出土遺物

II 9号住居跡 (第154図 PL 62・95)

**位置** C-555 平面形・規模 主軸方位は不明。床面は検出されなかった。

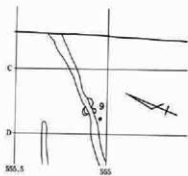
**カマド** 三角形の燃焼部が検出された。北壁に付設されたものと考えられる。遺存するのは燃焼部底面部分のみで袖部や煙道部は検出できなかった。浅く皿状の底面に焼土がブロック状に堆積しており、燃焼部が崩落したものと考えられるが、21号溝埋土のうえに載っており流れ込みの可能性もある。

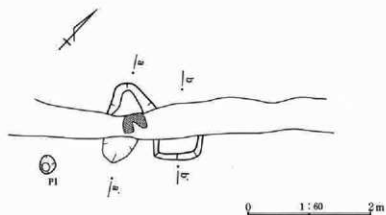
**貯蔵穴** カマドの右側で検出。形状は方形と思われる。一辺75cmで、深さは25cmだが削平を受けており本来の深さは不明。

**ピット** カマドから南西に約0.9m離れて1基が検出された。径30×25cm深さ37cmで柱穴とも考えられるが、対応する3基は検出できなかった。

**出土遺物** カマド焼土内から小形甕の破片が出土したのみ。

**重複遺構** 21号溝と重複する。土層では溝よりも新しいが、本住居跡よりも形態や出土土器から新しいと思われる5号住居跡が21号溝に切られることから、新旧関係は不明確。



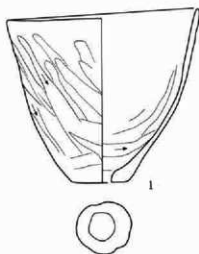


- 土層説明  
 1 暗褐色土 軽石 (FA か FP) を少量含む。  
 2 暗褐色土 1 ミリ以下の細かい軽石 (FA か) 含む。



- 土層説明  
 1 暗褐色土 粘土、焼土を含む。  
 2 暗褐色土 FA と思われる火山灰が見られる。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第154図 II 9号住居跡及び出土遺物

Ⅲ1号住居跡 (第155・156図 PL.63・95)

位置 G-567.5-568

平面形 方形と思われる。西半は調査区外のため不明。

規模 東辺5.12m 面積 不明 主軸方向 N-67°-E

床面の状態 18~23cmの深さでロームブロックを含む埋土で貼床をほぼ全面に施す。床面レベルはほぼ水平で小さな凹凸がある。

礎石の質の違いは明確でない。

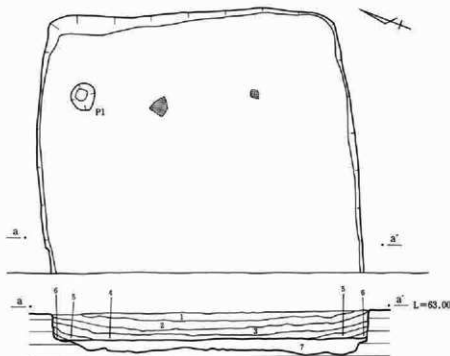
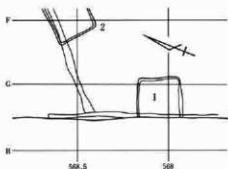
壁の状況 ほは垂直の掘り込みで、高さは45cmを測る。壁線は北と南にやや膨らみをもち、隅部は僅かに弧を描く。

炉 不明。東壁から1.3mほど離れた位置で焼土が見られたが、掘り込みは見られず火床面も不明確。炭化材もあることから、堆積物と思われる。

ピット 北東隅付近で1基を検出。径は43×39cm深さ40cmを測る。確認されたのは床面下の精査時であったため、これが柱穴か床下ピットかは判別できない。

掘り方 平面は隅丸方形で中央がやや盛り上がるように掘り込み、壁際に15~40cmのテラスを残す。

出土遺物 主に古墳時代中期(5世紀代)の土器が出土。 重複遺構 なし。



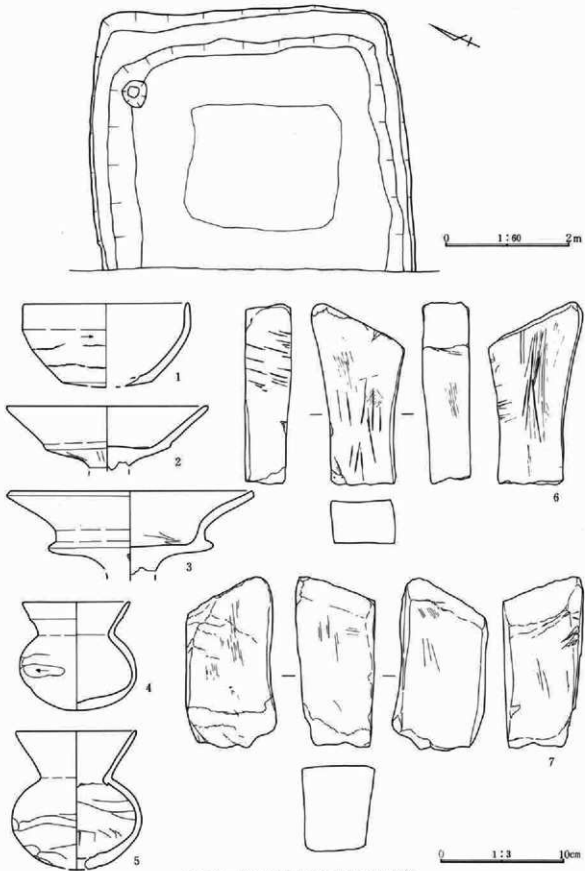
土層説明

- 1 暗褐色土 砂質。
- 2 黒褐色土 砂質で、軽石(FAかFP)が多い。
- 3 黒褐色土 2層に近取するが、やや灰色がかっている。
- 4 暗褐色土 やや粘性あり。
- 5 黒褐色土 粘性あり、炭化物と焼土含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒を主とする。
- 7 黄褐色土 ロームブロックを主とする掘り方埋土。

層	上層径	下層径	深さ
P1	42×38	18	27

0 1:60 2m

第155図 Ⅲ1号住居跡



第156図 III 1号住居跡掘り方及び出土遺物

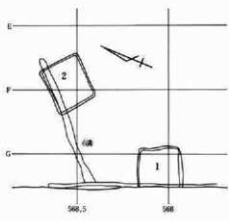
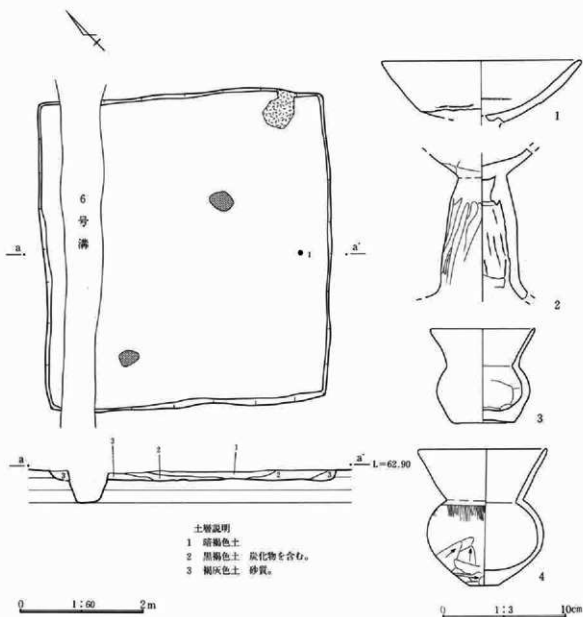
Ⅲ 2号住居跡 (第157図 PL.63・95)

位置 E・F-568.5 平面形 長方形

規模 5.05×4.55m 面積 21.5m<sup>2</sup>

主軸方向 N-45°-E 床面の状態 わずかにロームブロックを含む埋土で貼床を施すが、Ⅲ 1号住居跡ほど明確ではない。小さな凹凸があり、レベルはほぼ水平。

壁の状況 上半部は削平される。遺存部の高さは20cm以下である。出土遺物 東隅に粘土塊、東西対角線上に焼土2カ所が検出された。堆積物だろう。土器は5世紀代である。重複遺構 6号溝に切られる。



第157図 Ⅲ 2号住居跡及び出土遺物

## 2 溝

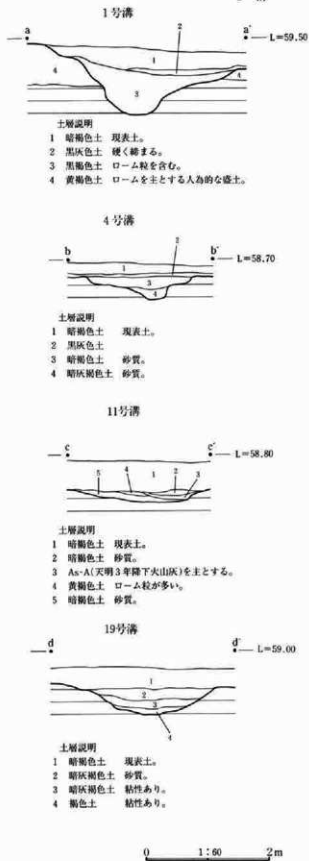
本遺跡で検出された溝の大部分はそれぞれ独立して存在するのではなく、分岐や合流によってひとつの用水系あるいは堀として機能していると思われる。従ってここでは個々の溝の記述は避け、関連する溝を総括してその特徴を述べる。

## I 区の溝群 (第158-160図 PL 65・66・96)

調査区中央には南北方向に幅の狭い谷が形成されており、古墳時代後期以後は主に水田として利用されてきたと推定される。この谷の東側を走る1号溝と西側を走る47・56号溝は水田の灌漑・排水を目的とした主要水路である(第160図)。この両者の間は谷を横断する4~5条の小規模な溝で結ばれており、直接水田の各区画に水を回しあるいは排水を行っている。谷を横断する溝の間隔は北側から48・15・33mと一定ではないが、これらの溝の時期が同時期に存在したとの確証がないこと、また検出できなかった溝も存在し得ることから、これらがそのまま水田区画を示すものではないと考えられる。

1号溝は谷の東側に沿って走り、規模は最大幅3m前後、深さ1m前後を測る。掘った土で溝の両側に堤を築いている。また本溝は現在でも使用されているが、土層断面の状況から数度にわたって掘り直しをしたことが明らかである。この用水系の水源地は谷の上流部にある湧水を利用している。流水方向は北から南へ下り、谷を横断する小溝の底面レベルは47・56号溝から1号溝へ下っている。このことから、最も規模の大きい1号溝は主に排水路として機能したと考えられる。なお1号溝からは陶磁器・砥石・鎌と思われる鉄片が出土しており、中世の陶磁器小片も数点見られるが、大部分は18世紀-現代に含まれる。このことからこの用水系は18世紀代にはすでに使用されていたと考えられ、さらにその上層は中世にまで遡上する可能性がある。

I 区北部の56号溝と谷に挟まれた部分で、2条一対で並行して走る4条の溝(62・84・68・80号溝)が検出された。これは5-3mの幅を保って断続的に南方へ走っており、各溝の規模が水路よりも小さいこと



第158図 I 区溝土層断面(1)

#### 第IV章 三室岡ノ谷遺跡の調査

から、道路に伴う側溝と考えられる。D545.5グリッド付近では10mほど断絶してからふたたび谷に沿って走る溝と、西に折れて56号溝を越えてから再び南下する溝に分岐する。これ以降は4条だった溝が6～7条に増す部分もある。これらは路線の拡張や移設に伴う掘り直しと考えられよう(第160図右下)。なお、この側溝は541グリッド付近で調査区西方に出るが、H538グリッドで近似する溝が東方に延び、路面と推定される硬質面が土層断面で確認されていることから、前者に連続する道路跡とも考えられる。

I区北部の谷西側で検出された方形区画の溝(第160図右下)は倉に伴う溝と思われるが、一部II区に連続して館址を巡る堀の可能性もある。

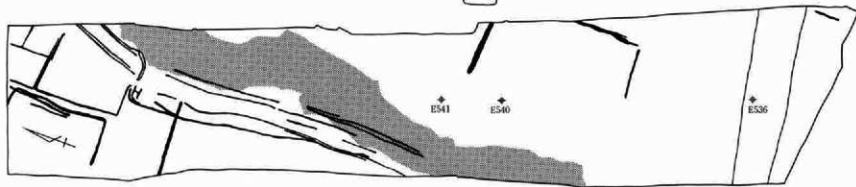
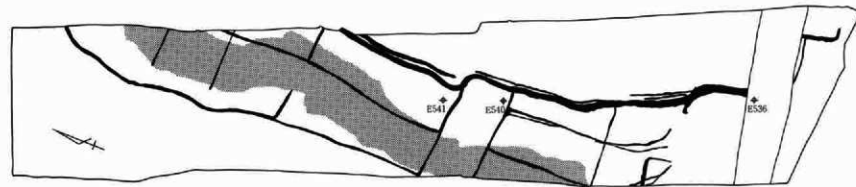
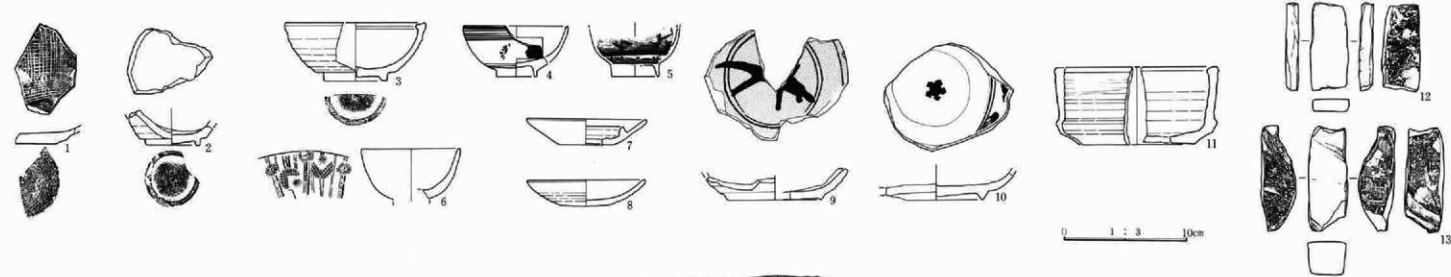
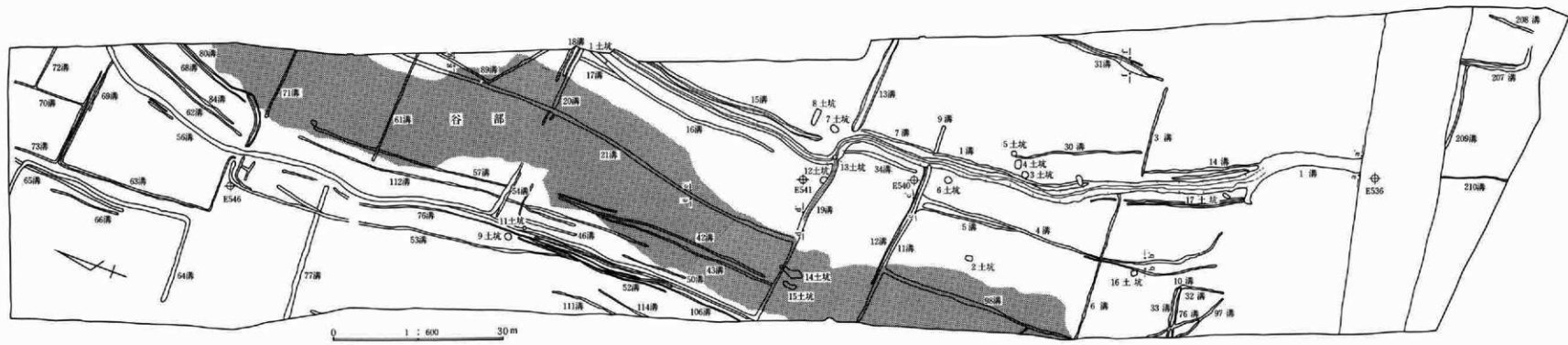
II区では546～552グリッドの間で西側の区画を方形に囲繞する溝が6条検出された(PL67上)。最も規模の大きいII4号溝はE550グリッド付近で屈曲しており城館の堀に見られる「折り」に相当するものだろう。このII4号溝は幅2m前後、深さは確認面から0.8m前後で、断面形は底面の広い「箱堀」状ないしは「箱堀」状を呈している。これはC549.5グリッドで南方に屈曲してE548枕付近で断絶している。この内部を東西方向の溝2条、その内側を更に南北の溝2条で区切っている。これらはいずれもT字状に合流するが交差はしていないため、同時存在の可能性が高い。なお4号溝と8号溝の交差部南端部埋土からは、石臼と内耳珣の破片が出土している。これより本溝の時期は16世紀代まで遡る可能性がある。なお現地には館の存在を推定させる地名として「牛堀」があるが、これは東西に走る古代の大規模な水路を示すとの解釈(1985 坂爪久純「境町「牛堀」遺跡について」『群馬文化』203)もある。

553グリッド付近では1・2・3号溝が並行して東西に走っており、断面形は1号溝が「葉研堀」状、2・3号溝が「箱堀」状と異なるが、埋土堆積状況からは同時期か近い時期のものと考えられる(PL67下)。前述の館堀と推定される溝群から約50m離れており、走向がほぼ一致することから、館址に関連する外堀あるいは地籍区画の溝であろうか。なおこれ



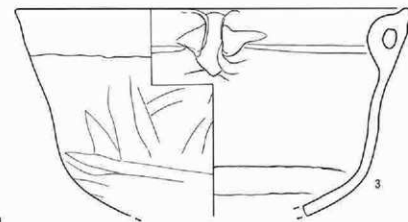
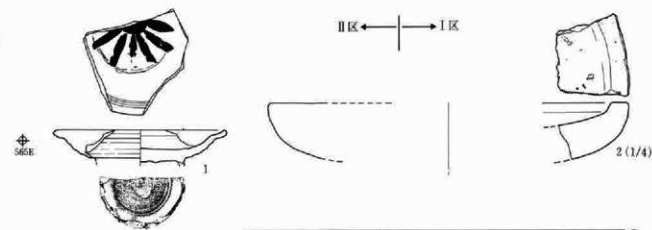
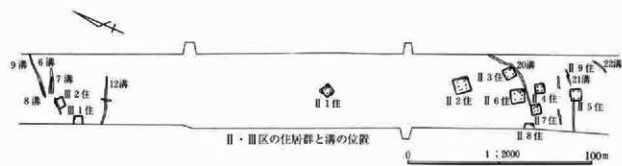
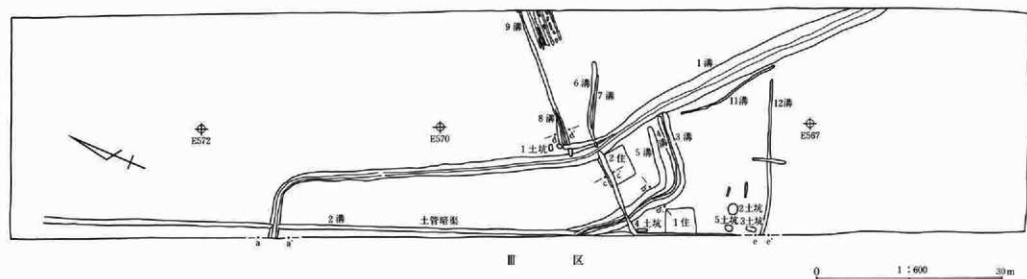
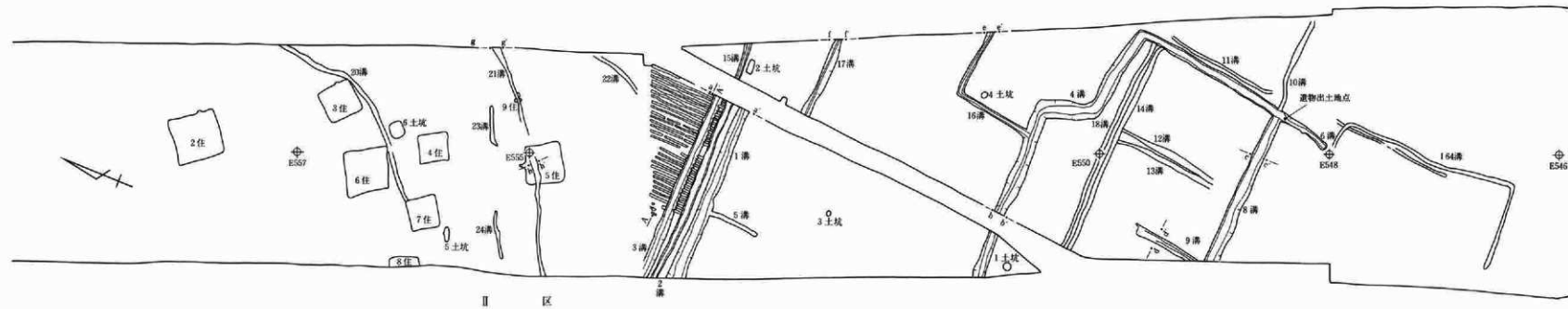
第159図 I区溝土層断面(2)





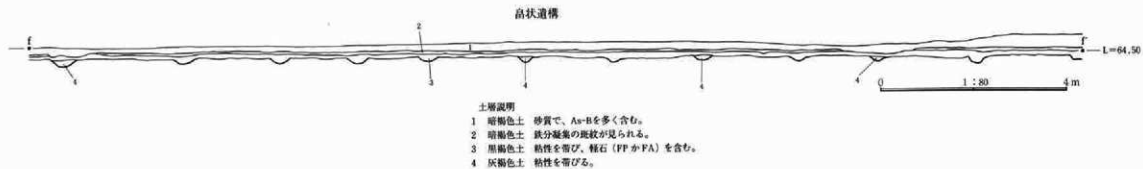
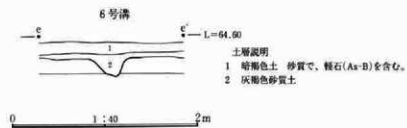
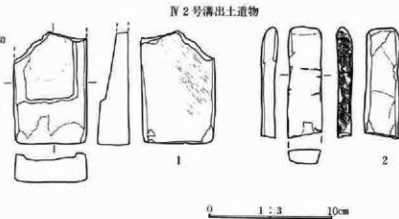
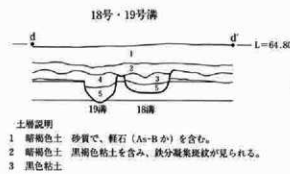
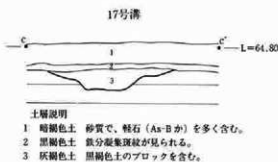
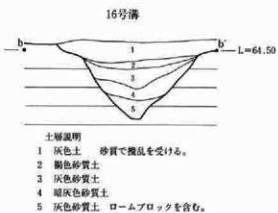
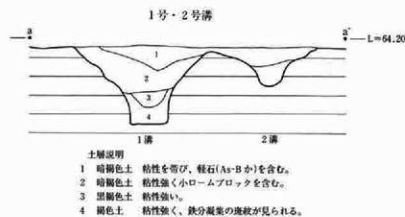
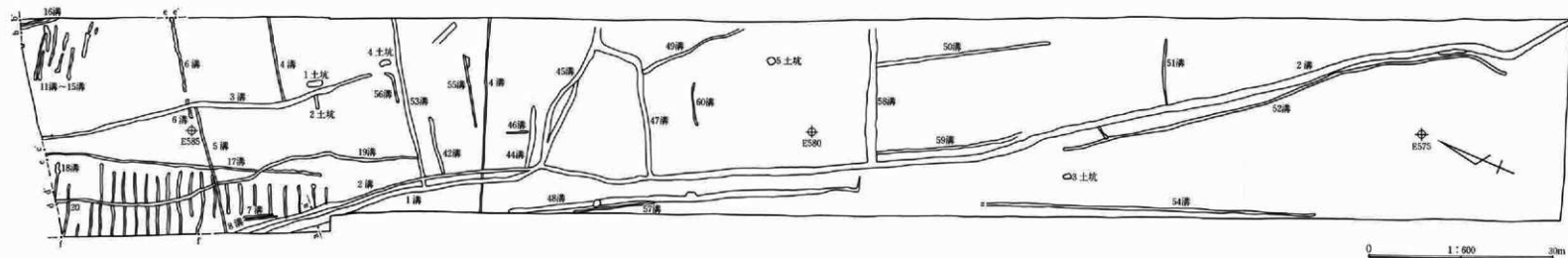
第160図 I区の溝と土坑及び1号溝出土遺物





第161図 II・III区の溝と土坑及び出土遺物

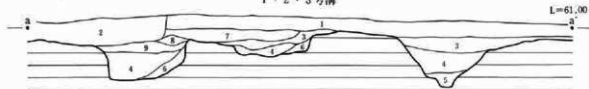




第162図 IV区の溝と土坑及び2号溝出土遺物



## 1・2・3号溝



## 土層説明

- |                        |        |                   |
|------------------------|--------|-------------------|
| 1 灰暗褐色砂質土              | 5 黒褐色土 | 粘性を帯び、ロームブロックを含む。 |
| 2 暗褐色砂質土 現代の耕作による掘り込み。 | 6 暗褐色土 | 粘性を帯びる。           |
| 3 黒褐色砂質土               | 7 暗褐色土 | 砂質で、黒色粘土ブロックを含む。  |
| 4 黒褐色土                 | 8 黒褐色土 | 粘性強く、ブロック状。       |
|                        | 9 暗褐色土 | 砂質。               |

## 4号溝



## 土層説明

- 1 暗褐色土 As-A を多く含む。
- 2 暗褐色土 やや粘性を帯びる。
- 3 褐色土 2層より粘性に富み、明るい。
- 4 As-B を主とする。
- 5 黒褐色土 粘性が強い。

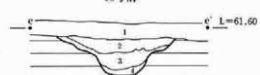
## 8号溝



## 土層説明

- 1 暗褐色土 As-A をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 1層に近似し、ローム粒を含む。

## 16号溝



## 土層説明

- 1 暗褐色土 砂質。
- 2 暗褐色土 As-B を多く含む。
- 3 黄褐色土 黄色の微小軽石を含む、締まる。
- 4 黒褐色土 ローム粒を含む。

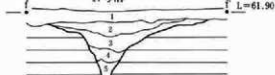
## 9号溝



## 土層説明

- 1 暗褐色土 砂質で、As-B を含む。
- 2 As-B の純層。
- 3 暗褐色土 粘性を帯び、ローム粒を含む。
- 4 暗褐色土 黒みが強く、粘性に富む。

## 17号溝



## 土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロックを含む硬土。
- 2 暗褐色土 砂質で、As-B等の軽石を含む。
- 3 暗褐色土 地山の暗褐色土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 軟質で、均質。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。

## 21号溝



## 土層説明

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 軽石 (FA か FP) を少量含む。
- 3 黒褐色土 粘性を帯び、ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黄褐色土 地山の流れ込みと思われる。

## 21号溝



## 土層説明

- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 この地点の地山で粘性強く、均質。
- 3 赤褐色土 赤化した灰色粘土で、Ⅱ区5号住居カマドの流れ込みだろう。

## 20号溝



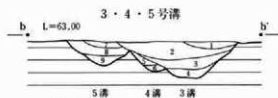
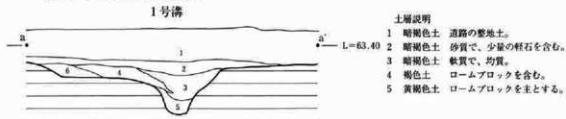
## 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒を含む。

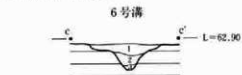


第163図 Ⅱ区溝土層断面

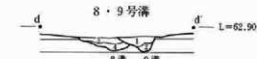
第IV章 三空間ノ谷遺跡の調査



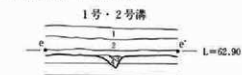
- 土層説明
- 1 暗褐色土 やや粘性帯びる。
  - 2 暗褐色砂質土
  - 3 暗褐色土 ローム粒を含む。
  - 4 黒褐色砂質土
  - 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。
  - 6 黒褐色土 粘性帯び、ロームブロック含む。
  - 7 暗黄褐色土
  - 8 暗褐色土 粘性帯びる。
  - 9 黒褐色土 粘性強い。



- 土層説明
- 1 暗褐色土 粘性を帯びる。
  - 2 黒褐色土 粘性強い。
  - 3 黄褐色土 ロームブロック主体。



- 土層説明
- 1 暗褐色土 ローム粒を含み、やや粘性帯びる。
  - 2 黄褐色土 ロームブロックを主とする。
  - 3 黄褐色土
  - 4 暗黄褐色土 ローム粒を含む。



- 土層説明
- 1 暗褐色土 現表土。
  - 2 暗褐色土 砂質で、軽石を含む。
  - 3 褐色砂質土
  - 4 暗褐色砂質土

0 1:60 2m

第164図 Ⅲ区溝土層断面

らの溝に沿って現道路が築かれており、現代にまで地割として遺存していたと考えられる。

Ⅱ区20・21号溝は北西側を圍繞するように湾曲しており、Ⅲ区の6・12号溝と対応して楕円形の環濠状となる可能性がある(第161図左下)。この想定の場合、長径280mに及んでおり検出された竪穴住居跡のほとんどが内区に入る。ただし重複するⅡ区の5・7号住居跡、Ⅲ区の1号住居跡を切っていることから、ただちに集落を圍繞する溝とは認定しがたい。なおこれらの溝からは遺物は出土しておらず、また埋土にも示準テフラは見られないことから、時期は不明である。

Ⅲ区の1号溝は断面「箱築堰壁」状で、調査区外から東方に延び、すぐに屈曲して南南東に走る。底面の傾斜は南南東方向に下降しており、下層埋土の状況からこの方向に水流があったと考えられる(PL70)。時期や性格は不明である。568グリッド付近の調査区西半で屈曲する3条並行の3・4・5号溝が検出された。これらは同一機能を有する溝の掘り直しと考えられるが時期、具体的な性格は不明である。なお調査区西壁に沿った溝は土管を埋置した近代の暗渠排水路である(PL70左下)。

Ⅳ区の溝のうち北北西から南南東へ走る1・2・3号溝は、Ⅰ区の1・47・56号溝に相当する水田の灌溉用水路と考えられる。またこれから東西方向に分岐する4・6・45・47・51・53・58号溝は水田の各区画に水を回し、排水するものであろう。

Ⅱ区の中央部で1・2・3号溝と重複して南北に並行して走る溝群(PL77上)、Ⅲ区ではB568グリッドで北東から南西方向の溝群、またⅣ区の北端部で東西に並行して走る短い溝群が検出された。これらはすべて畠のサクと考えられるが、時期は土層から近世以降と考えられる。

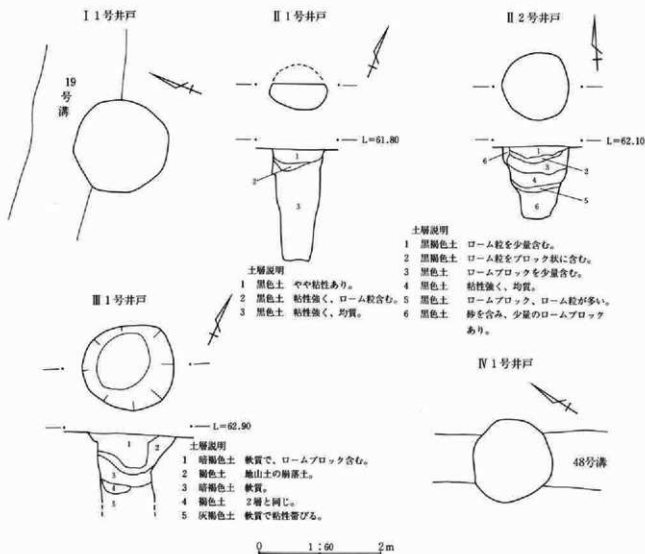


## 3 井戸・土坑 (第165-169図 PL.74-79・96)

表1 井戸一覽

遺構名	位置	平面形	断面形	径(m)	深さ(m)	埋土の状況	出土遺物
I 1号井戸	D540.5	円形	ほぼ垂直	1.55×1.45	不明	不明	なし
II 1号井戸	B549.5	円形	ほぼ垂直	0.90	1.25	単一の埋土で埋没	なし
II 2号井戸	C550.5	円形	やや上半開く	1.05	1.20	ロームと黒色土の互層	なし
III 1号井戸	F565.5	円形	上開き下垂直	1.50×1.35	不明	ロームと黒色土の互層	なし
IV 1号井戸	F581.5	円形	ほぼ垂直	1.35	不明	不明	なし

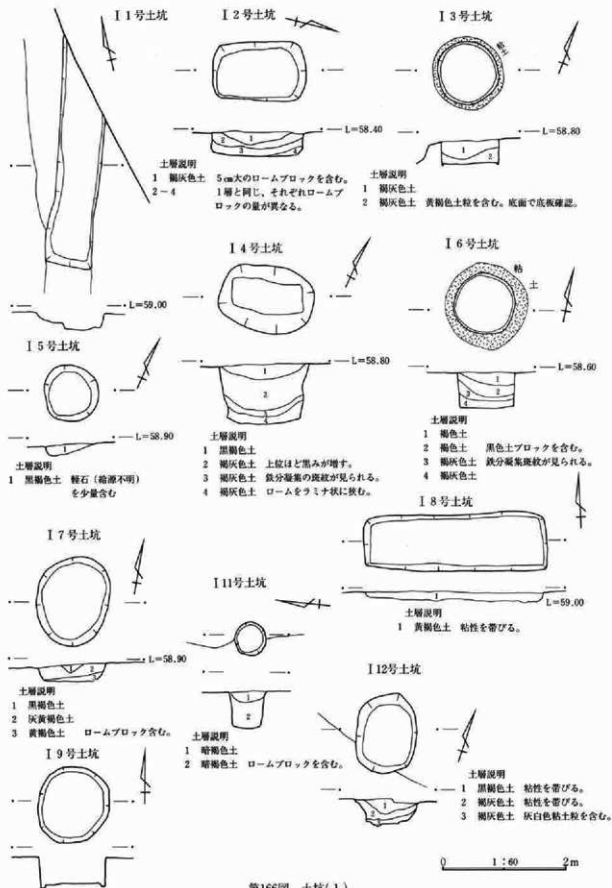
なお、I 1号井戸とIV 1号井戸は、溝とともに掘削調査を行ったため、埋土と深さが判明しなかった。



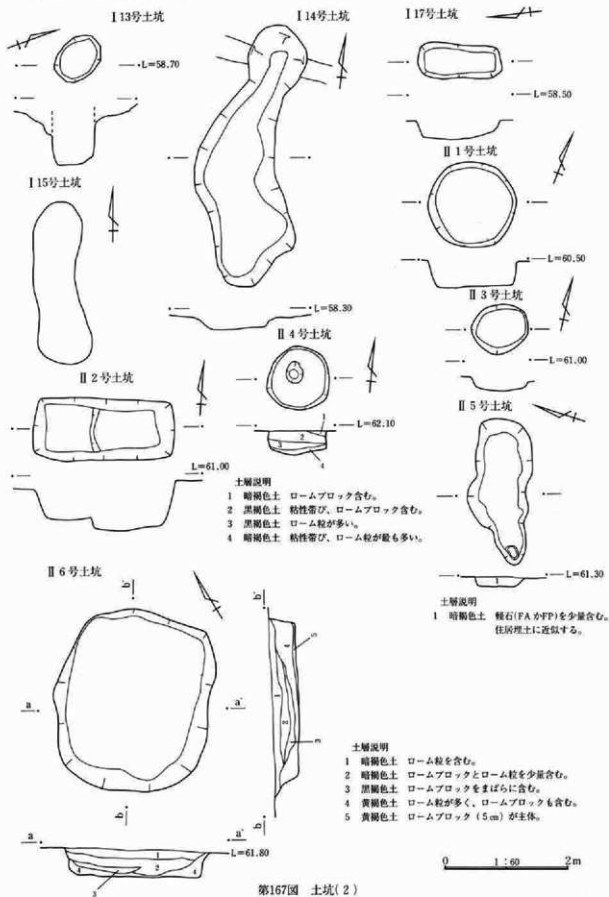
第165図 井戸跡

表2 土坑一覽表

遺構名	位置	平面形	平面規模(m)	深さ(cm)	主軸方向	備考
I区 1号土坑	I 542.5A	長方形	-×0.71	26	N-19°-E	
I区 2号土坑	I 539.5F	長方形	1.45×0.97	39	N-8°-W	
I区 3号土坑	I 539.0D	円形	1.00×0.96	40	N-37°-W	
I区 4号土坑	I 539.0D	長方形	1.51×1.07	97	N-76°-E	
I区 5号土坑	I 539.0D	円形	0.89×0.85	37	-	
I区 6号土坑	I 539.5E	円形	1.00×0.96	58	-	
I区 7号土坑	I 540.5C	楕円形	1.43×1.15	35	N-9°-E	
I区 8号土坑	I 540.5C	長方形	2.90×0.88	31	N-87°-W	
I区 9号土坑	I 543.5F	円形	1.25×1.17	53	-	
I区 11号土坑	I 543.0F	円形	0.52×0.49	59	-	
I区 12号土坑	I 540.5E	楕円形	1.29×0.96	39	N-1°-W	
I区 13号土坑	I 540.5D	楕円形	0.81×0.64	67	N-9°-W	
I区 14号土坑	I 541.0G	不定形	4.20×0.68	31	N-10°-E	
I区 15号土坑	I 541.0G	長方形	2.58×0.78	-	N-2°-W	
I区 16号土坑	I 538.0G	楕円形	1.12×0.85	73	N-16°-W	
I区 17号土坑	I 537.0E	長方形	1.35×0.53	30	N-8°-E	
II区 1号土坑	II 550.5G	円形	1.40×1.36	46	N-70°-E	
II区 2号土坑	II 553.0B	長方形	2.25×0.97	81	N-89°-E	
II区 3号土坑	II 552.0F	円形	0.90×0.80	23	-	
II区 4号土坑	II 551.0C	円形	1.01×0.96	43	-	
II区 5号土坑	II 555.5F	不定形	2.35×0.93	26	N-67°-E	
II区 6号土坑	II 556.0D	長方形	2.87×2.40	53	N-43°-E	
III区 1号土坑	III 569.0E	長方形	0.95×0.68	23	N-63°-E	
III区 2号土坑	III 567.5F	円形	1.75×1.51	41	-	
III区 3号土坑	III 567.0G	長方形	1.52×0.70	61	N-14°-W	
III区 4号土坑	III 568.0G	長方形	3.30×0.59	51	N-11°-W	
III区 5号土坑	III 567.5G	楕円形	1.22×0.91	34	N-24°-E	
III区 6号土坑	III 566.5E	円形	1.39×1.36	36	-	
IV区 1号土坑	IV 584.0C	長方形	1.76×0.66	20	N-30°-W	
IV区 2号土坑	IV 584.0D	長方形	1.67×0.39	22	N-59°-E	
IV区 3号土坑	IV 577.5E	長方形	0.93×0.63	7	N-30°-W	陶器皿 2
IV区 4号土坑	IV 583.0C	長方形	1.25×0.60	17	N-37°-W	
IV区 5号土坑	IV 580.0C	円形	0.96×0.90	61	-	

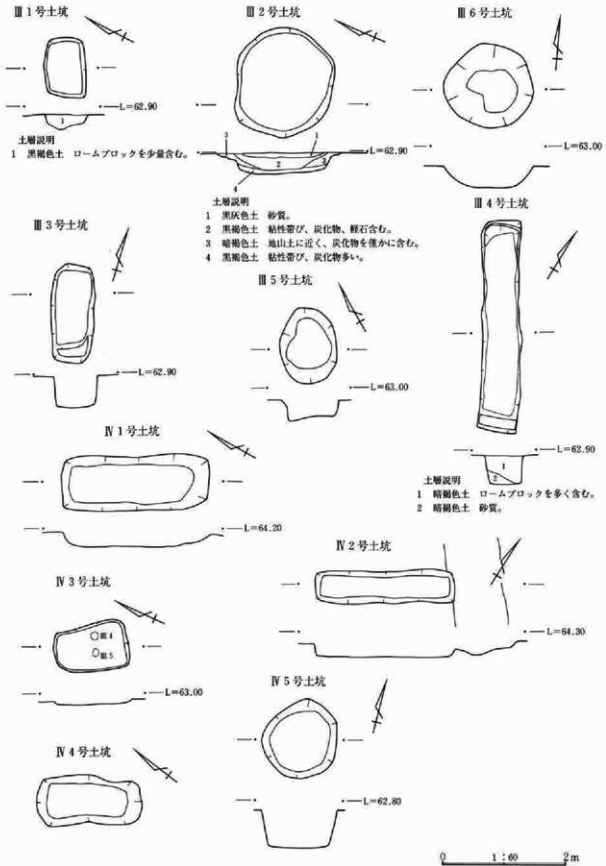


第166図 土坑(1)

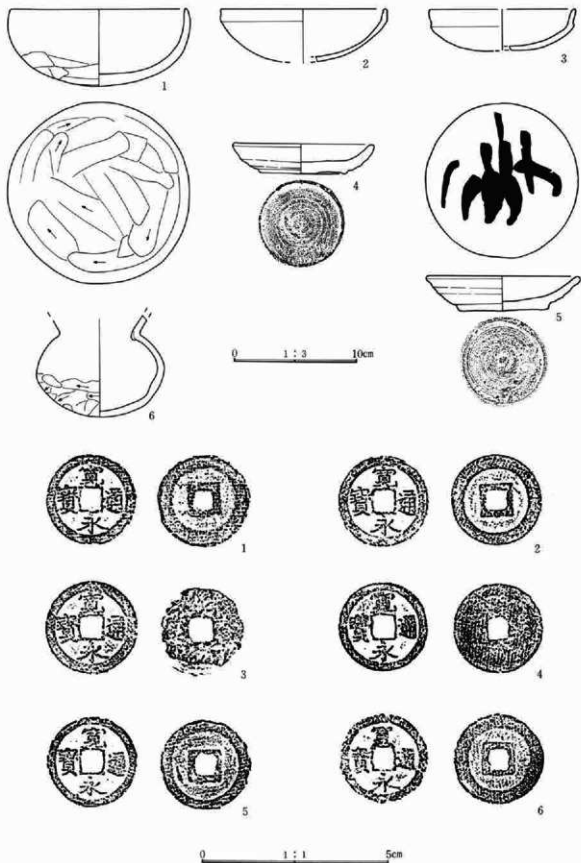


第167図 土坑(2)

3 井戸・土坑



第168図 土坑(3)



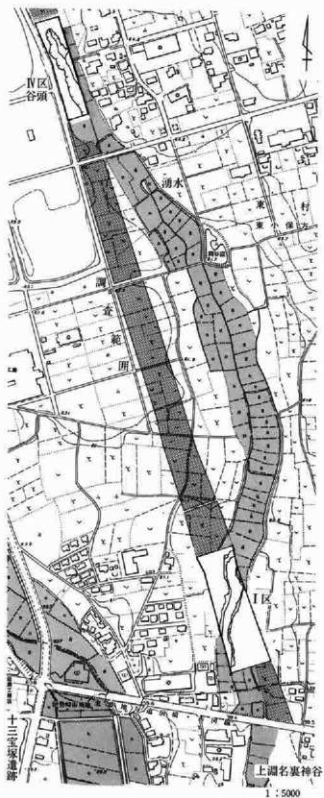
第169図 土坑出土遺物

## 4 埋没谷 (第170図)

調査区の東側に弱く蛇行して南下する幅80～50mの小規模な解析谷が形成されている。I区では谷中央部、IV区では谷頭が検出された。この谷は地表から1.5mほどの深さで、地山のローム層を解析して全体に泥炭土や黒色粘質土が堆積している。この地域は地下水位が高く、調査時の冬季でも谷低位では滲出するほど水量が豊富である。底から30cm前後上位に浅間山給源軽石As-C、60cm前後でFAが、90cm前後でAs-Bが堆積する。ただし純層として認められるのはAs-Bのみである。このことから、完新世での谷の侵食と堆積作用はAs-C降下よりやや前、すくなくとも4世紀より古い段階に始まったと考えられる。これには大間々層状地I面の扇端部における湧水が大きく関与していたと推定されるが、本谷の上流延長上の地点（三室坊主林遺跡：1989財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『三室坊主林遺跡』）で八崎バミス（HP）以前に更新世の泥炭土の堆積が確認されたことや、周辺の地形が緩やかにくぼんでいることから、更新世にはすでに谷地形が形成されていたと考えられる。遺構としては、I区でAs-Bに覆われた水田面とFA以下で木道状遺構と自然木の堆積が検出された。またIV区ではFA以下、As-C堆積レベルで小規模な堰や橋等の施設が検出された。

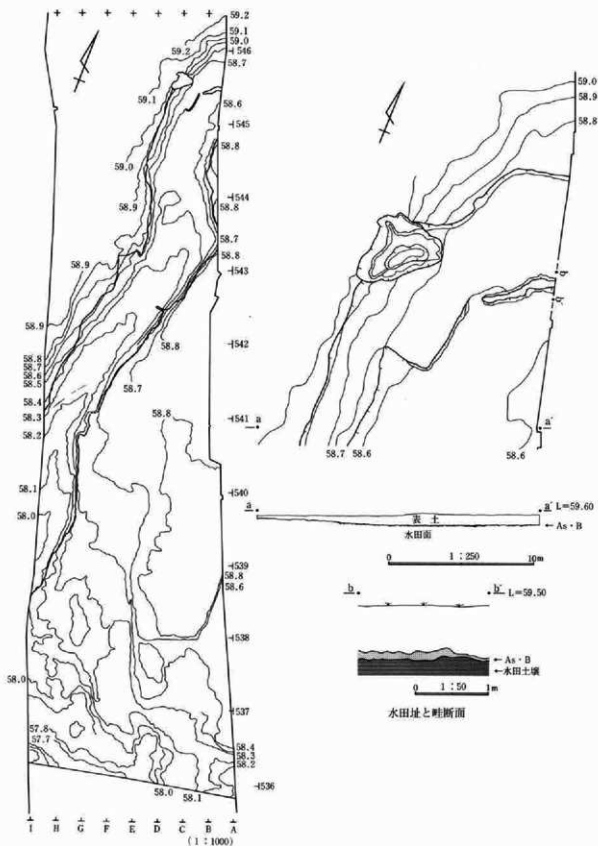
## (1) 水田址 (第171図 PL 64)

A545グリッドの東壁で、5～15cmの厚さのAs-B純層に覆われた幅70cm、高さ8cmの畦を検出した。畦は谷の地形に沿って西方から南へ湾曲している。これは5m程直線的に延びた後、畦は高さを減じ方形テラス状に変化する。この畦の北と西側にはわずかな段差が作られ、畦との間に幅7.5～5mの水平な田面が形成されている。これより下流で畦は検出されなかったが、谷上面は横方向で



白ヌキ部分は検出された谷地形。細かいアミ部分は水田から想定される谷地形を示す。

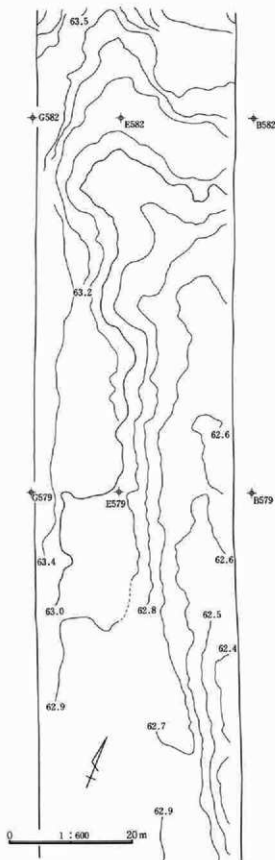
第170図 埋没谷と調査範囲



I区谷等高線

第171図 I区水田址





第172図 N区As-B下面の地形

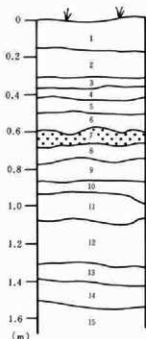
ほぼ水平、縦方向では長さ100mで50cmほどの標高差をもつ緩い傾斜面となっている。同一の谷でこの地点から南方20mでは上瀬名義神谷遺跡のAs-B水田が検出されている(p114)ことから、畦確認の有無に関わらずこの間の谷も水田であったと推定できよう。なお耕作土であるAs-B直下の土は最も黒味が強く、イネのプラントオパールが高い数値で検出された(P224)。谷面中央部の最も低位の部分には幅80cm前後の浅い溝が検出された。底面にはAs-B純層が堆積することから水田面と同時期に存在したのとは明らかに異なるが、規模が一定せずには蛇行することから自然の流路と考えられよう。未分解植物や泥炭層の堆積状況からAs-B堆積以前におけるこの谷は過水性であり、そのため本水田址では排水を必要としたと推定される。この場合、本溝が排水機能を果たしたことは十分に考えられる。

畦の検出された部分の西側B・C545.5グリッドでは平面三角形深さ1m前後の落ち込みが検出された。底面には小規模な地下水湧出による侵食が見られる。溜井等の人為的な掘り込みの可能性もあるが、As-B堆積時には浅いくぼみと考えられる。

一方、N区におけるAs-B下面は浅くくぼんだ谷地形を呈しており、水田を形成するに十分な平坦面であるが、畦は検出されなかった。土壌はI区と同様に黒色泥土であるが、やや乾燥が進んでいる。この地点は谷頭にあっており、As-B堆積時には湧水池はN区以南の谷下流側に存在したと推定されることから、I区と異なり乏水地点である。このことからI区と同様なAs-B下の水田の存在は疑わしい。なお、調査時は谷の中央部に水量の豊富な「間谷沼」が存在し、更に100m上流には小規模な湧水池が見られる(第170図)。これは形態的な特徴から自然に形成された湧水池の可能性が高く、本谷の水田灌漑に重要な役割を果たしている。

② 木道遺構 (第174～175図 PL 82～84)

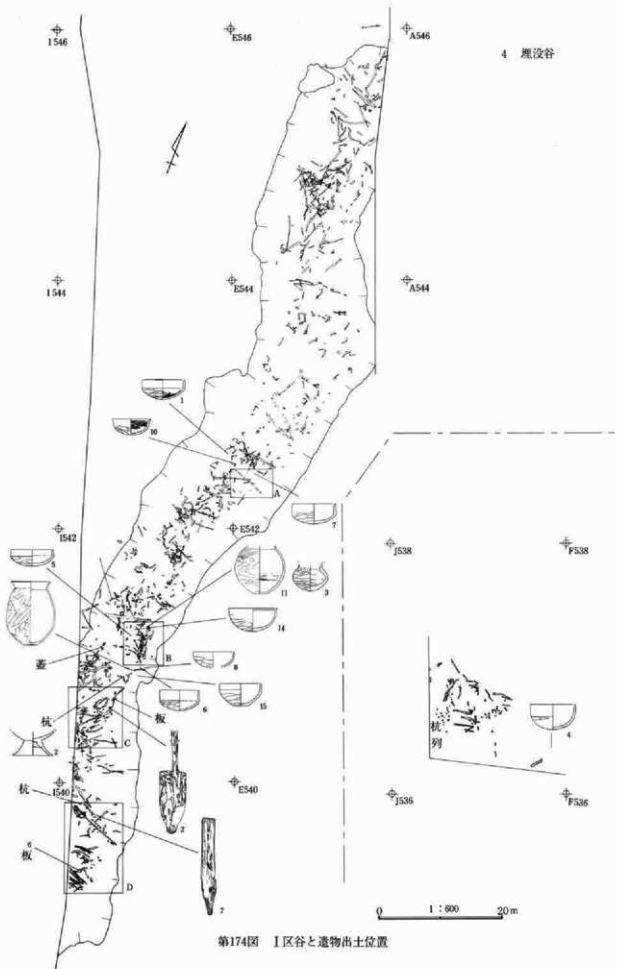
I 区の埋没谷には85cm前後の厚さで黒泥土、泥炭土が堆積しており、底から約40cmまでの下層では、泥炭土形成と木の流動した形跡が交互に見られ、大量の木と未分解の植物体が堆積している。このうち下層から検出される木は表皮や太い枝、根を残しており、大きさや形状が多様であることから大部分は自然流木と考えられる。これより上層からは、直径10～20cmの自然木や板材を谷に横断ないしは平行して人為的に埋置したと思われる部分が見られ、これらは下層の自然流木に比べて整った並び方をしていることから人為的な木道と想定される。自然流木との識別が困難な部分もあるが、比較的明瞭な場所4地点について北から順にA～D地点と呼ぶ(第174・175図)。A地点では長さ4.8mの真っすぐな材1本を谷の東岸から谷の直交方向に渡している。B地点では長さ2.5～3mのはほぼ同一規模の20本前後の材を縦横に組み合わせている(PL 82下)。C地点ではやや乱れるが、その南のD地点の木道遺構に直交する方向に長さ6mと3mの自然木4～5本(PL 84 2段目)と一部に長さ2mで幅20cmの板材(PL 82右上・中左)を並べて、部分的に杭で固定している(PL 83右上)。D地点は谷に直交して埋置した状況が最も明確な部分である。北側に枝の付いた長さ9mの自然木(PL 84 1段目)、南側に長さ4mから2mまでのほぼ同径の木を並べている(PL 82中右・PL 84 3段目左)。方向は前者がN-70°-W、後者がN-65°-Wでほぼ平行しており、両者は7.5m離れている。これらの木道は等間隔あるいは直交するように配置されていることも想定されたが、検証はできなかった。木道は谷基準土層の第12層から検出され、わずかの間層を挟んでFA混入の灰白色粘土(第11層)に覆われる。杭31本と矢板1本が検出されたが、C地点以外では木道との関連は明確でない。なおH536.5グリッドで20本の杭が集中して検出されたが、配列は東西に5本で2列、南北に7本並ぶが、杭がかなり傾斜しておりやや動いた可能性がある。ここでは木道状施設は見られない。立位の杭の場合、土層との関係が不明瞭で時期判定は困難である。また木道と同一層位からは甕、杯等の土器と「蓋」状木製品、長柄甕、着柄陶瓶、桃、胡桃、瓢箪等の種が出土しており、これらは土器の年代観とFA含有層との関係から古墳時代後期初頭のものとして推定される。



土層説明	
1・2 灰褐色土	As-Aを含む。近・現代の耕作土。
3・4 灰褐色土	細かい鉄分凝紋が見られる。
5 暗褐色土	鉄分凝紋が見られる。
6 暗褐色土	やや粘性を帯び、微細鉄凝紋がわずかに見られる。
7 As-B純層	
8・10 黒色粘質土	FAが混在し、上位から下位へFA量が増す。
11 灰白色粘質土	2次用粘土。下位にFAが散在する。
12 黒色泥炭土	砂粒を含む。流木が見られる。泥炭化と木の流入が交互に行われた。下位にはAs-Cが見られる。
13・14 灰黒色泥炭土	繊維・粘土粒を含む。有機物を多く含む。
15 暗灰黄色砂質粘土	

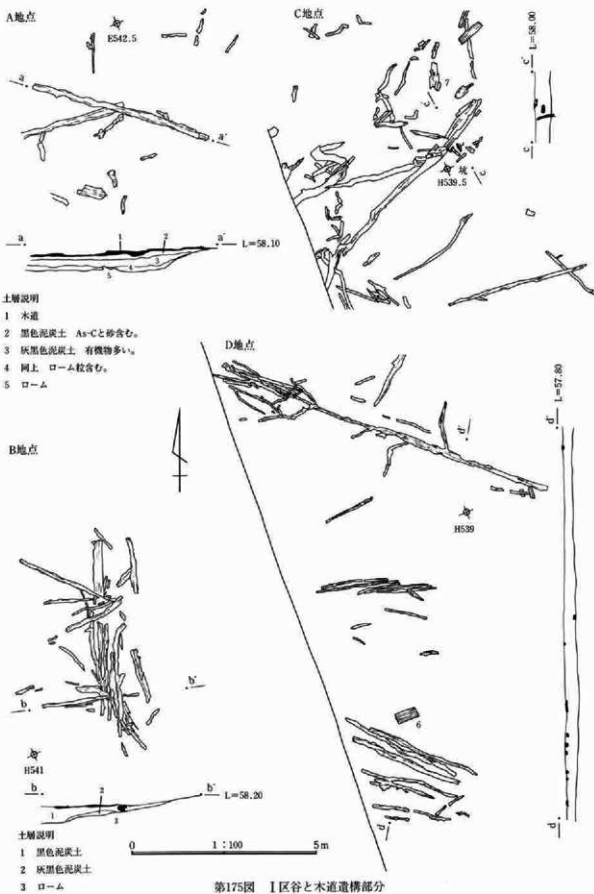
(A544.5グリッド)

第173図 I区谷基準土層



第174图 I区谷と遺物出土位置

第IV章 三室間ノ谷遺跡の調査



第175図 I区谷と木道遺構部分

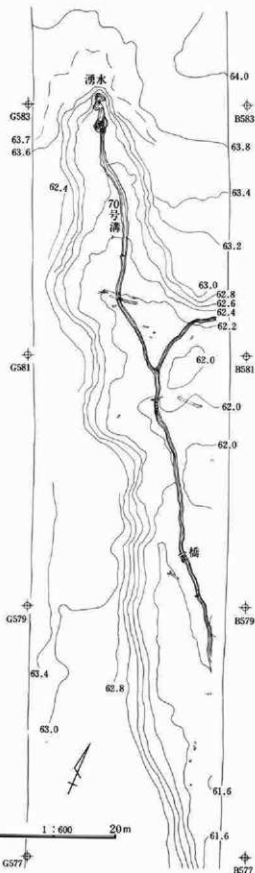
## (3) 谷頭・堰・橋 (第176-178図 PL 85)

IV区は埋没谷の谷頭となっており、I区と同様の泥炭層が堆積している。ここではFA含有層の下層、As-Cを含む土層下から湧水点とこれに伴う小規模な堰を検出した。湧水点はE582.5-583グリッド、谷の北端部に位置する。幅60-90cmの短い溝状のくぼみが3本連続しており(第177図)、底面はロームを侵食して泥炭土最上面から約140cmの深さにまで達している。これは湧水点が周辺を侵食しながら次第に北上し、谷頭を形成した状況を示すものだろう。底面には噴き上げた砂の堆積がわずかに見られたが、大部分はAs-Cを含む泥炭土が堆積する。中央のくぼみには堰によって、南西方向への溢水を遮り、南東方向に蛇行して延びる自然流路(IV70号溝)に流れ込むように調整している。堰板は長さ1.25m、幅20cmで西端が欠損する(第178図上)。周辺にはほぼ同規模の板材3枚が横転しており、本来は堰板4枚で両端を8本前後の杭で固定したと推定される。なおこの湧水点からは古墳時代前期~中葉の土器と横楯(第181図-1)が出土している。

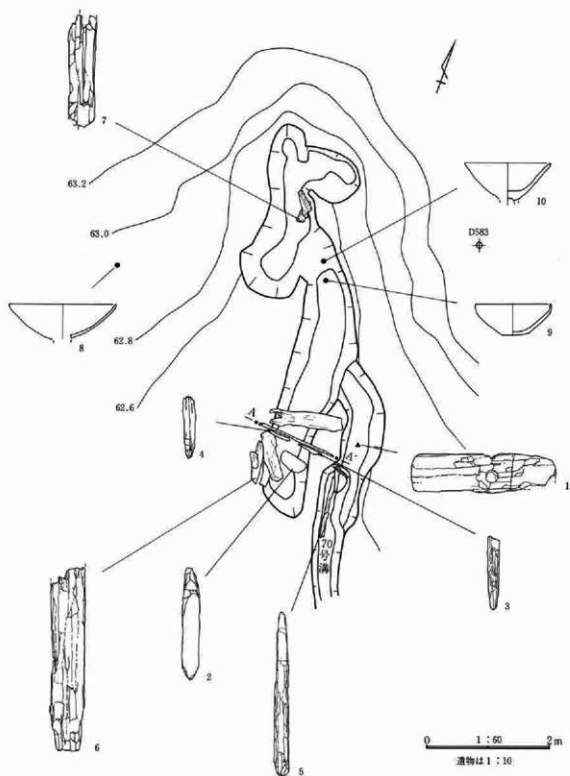
## 橋状遺構 (第178図 PL 85)

湧水点から70号溝を下って約70mの地点で、橋状遺構が検出された(第176図)。橋桁は長さ1.4mと1.0mの割材2本を90cmの間隔をあけて70号溝に架け渡し、その上に長さ1.4m前後の皮の付いたままの木端材を並べて橋板としている。この橋板の北東端部は鋭い切り口を示すが、「罫」使用の有無は判別できなかった。また橋桁と橋板は両端を丸太杭で固定したと思われるが、70号溝右岸側は橋本体、杭とも欠損ないしは腐食して原形を留めていない。この橋状遺構はFA含有層の下位で検出されたことから、古墳時代後期以前の所産と推定されるが、直接覆っている土層のAs-Cが純層ではないために、このことから時期の限定は難しい。ただし同一層位で出土する土器が古墳時代前期~中葉に限られることから湧水点と同時期と推定される。

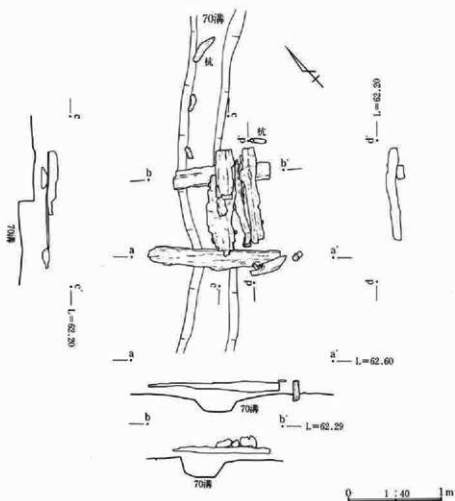
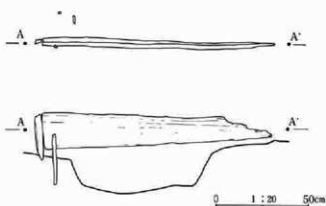
なお周辺からは廃棄されたと思われる実用品の土器片の他に果皮の残る瓢箪2個体(PL 85右上中)と桃、胡桃の種子が多数出土する。



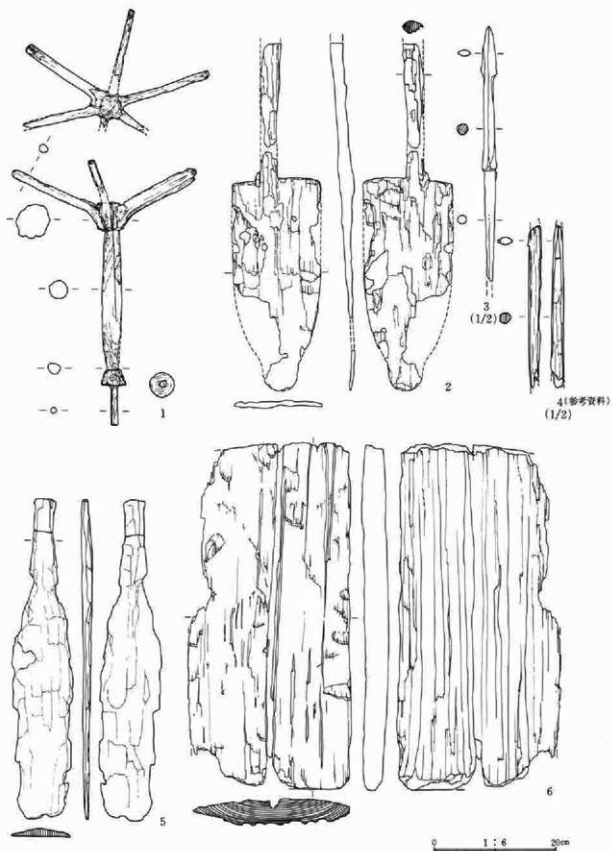
第176図 IV区谷頭地形



第177図 IV区谷頭・塚と遺物出土位置

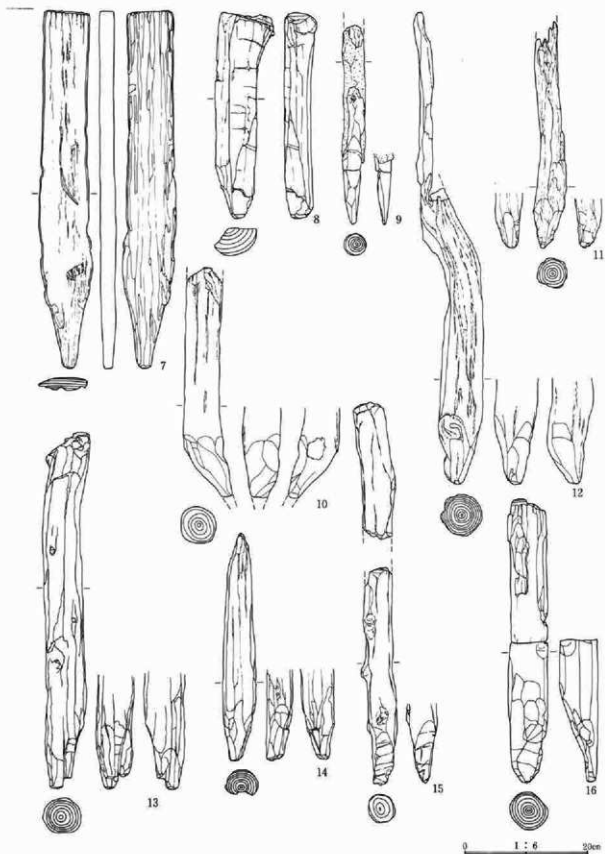


第178図 堰と橋状遺構

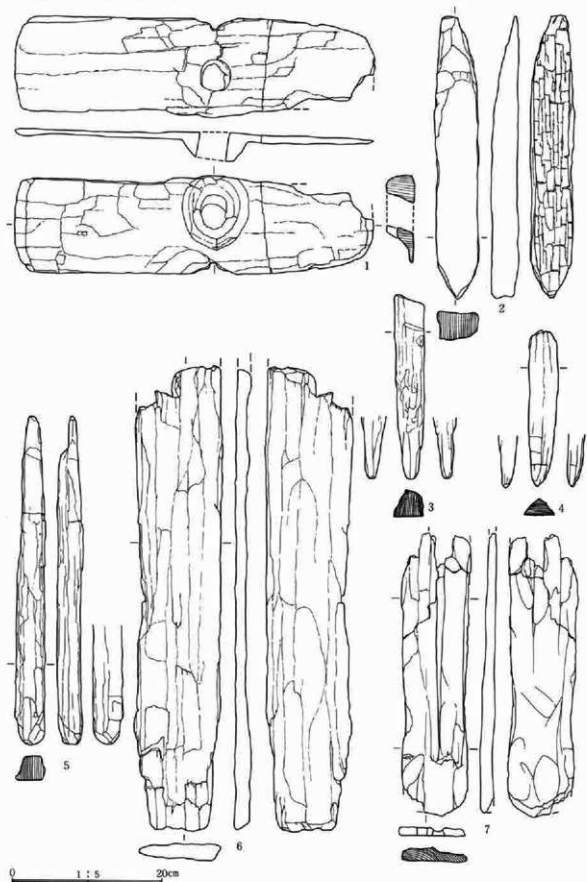


第179図 I区出土木製品(1)

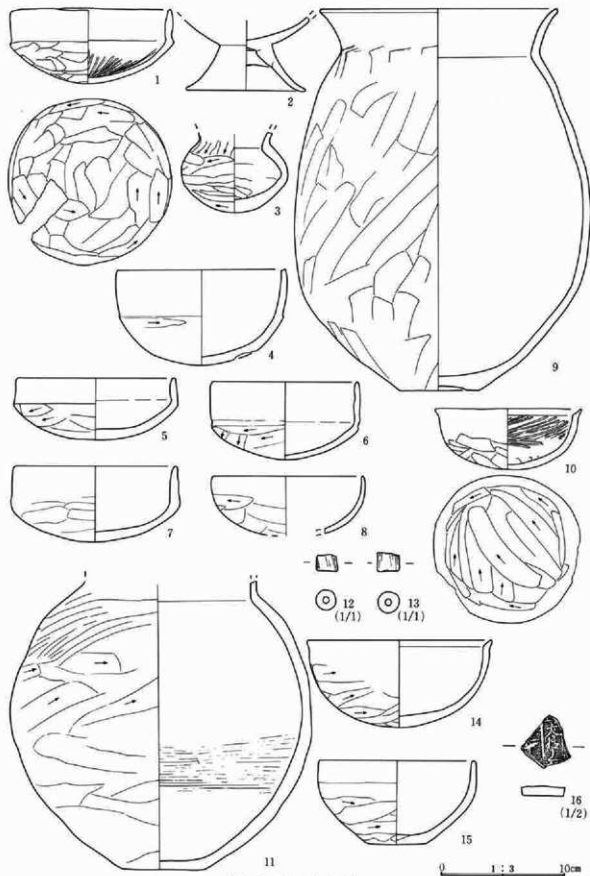




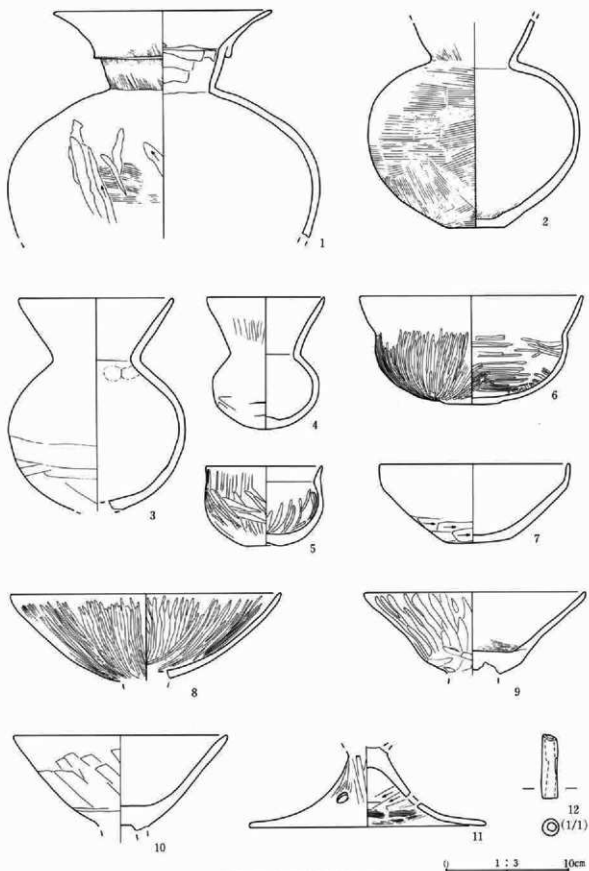
第180图 I区出土木製品(2)



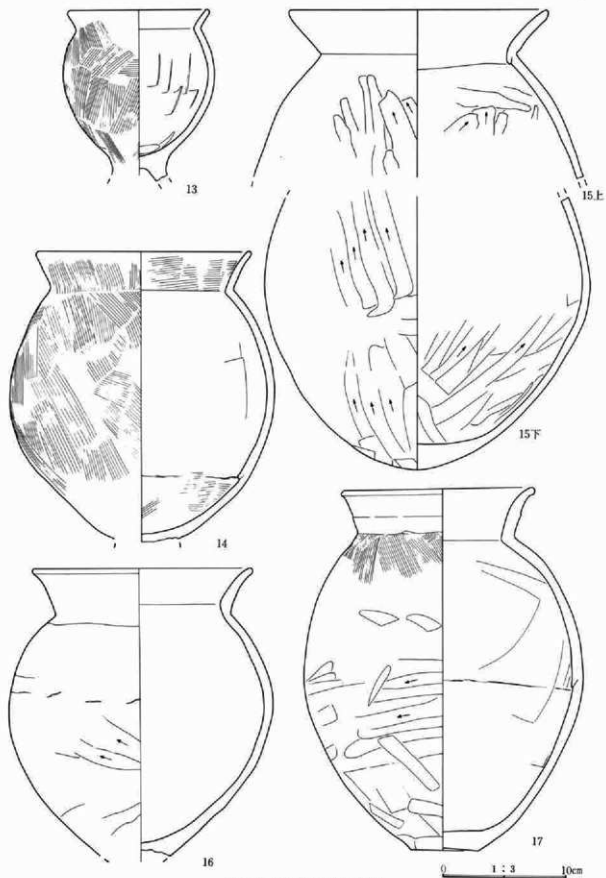
第181图 IV区谷頭出土木製品



第182图 I区谷出土遗物



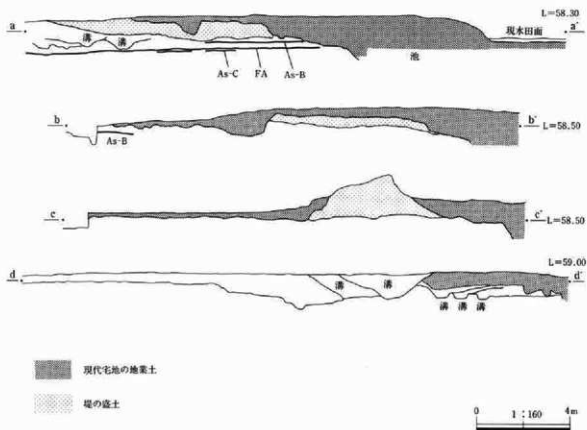
第183図 IV区谷出土遺物(1)



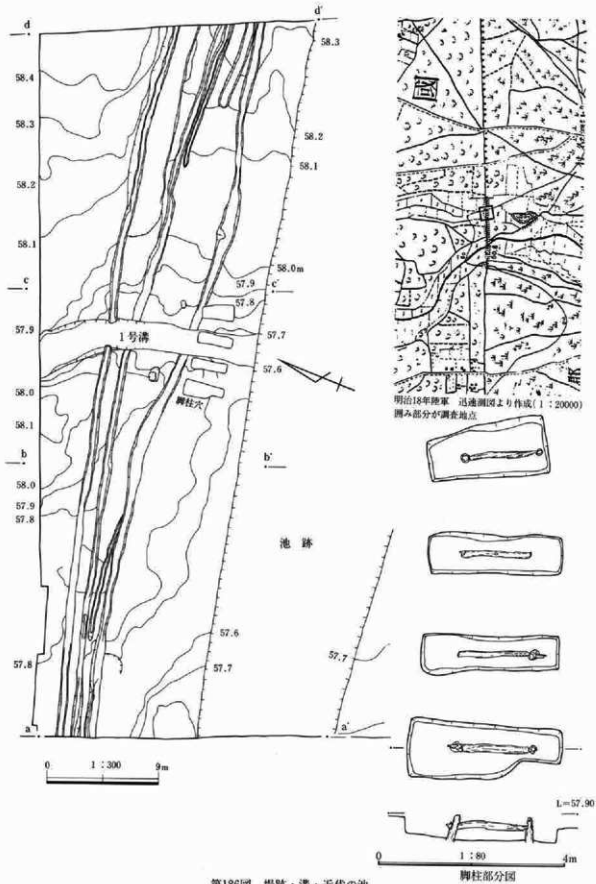
第184图 IV区谷出土遗物(2)

## 5 堤と池跡 (第185・186図 PL 87~89)

I区南端の536グリッド付近 (第160図参照) で東西に広がる堤と思われる盛土部分のみられた。これは平面的には宅地盛土に覆われてほとんど形状は不明で、直交する土層断面でのみ確認された (第185図 PL 88)。幅は西端 (a-a') で最も広く12m、中央 (c-c') 基底部で5.6mを測る。高さは削平を受けていない中央部 (c-c') で1.8m (標高約60.5m) を測る。盛土は灰色軟質土で、版築工法は見られない。時期はAs-B純層の上に80cmほどの土壌が形成された後の構築であり、近世以降と推定される。これは明治18年測量の迅速測図に記された「土堤」 (第186図右上) に相当すると思われ、昭和56年には大部分が削平されていた。延長部分の調査を行った坂爪久純氏はこれを、As-B堆積以前に使用されたと推定される水路「牛欄」を谷越えさせるための「土欄」であると想定している (1985「境町“牛欄”遺跡について」『群馬文化』203)。しかし本地点での調査ではそれよりもかなり新しい遺構であることが判明した。また調査区を東西に平行する溝6条が検出された (第186図) が、いずれもAs-B堆積以後であり、東方約800m (D地点) で氏が調査された大規模な溝に相当するものはなく、少なくとも本地点においては平安時代以前の用水路の存在は確認できなかった。なお、堤の南側には幅14m、長さ57m以上、平坦面からの深さ約1mの東西に細長い池が検出された (第186図 PL 87)。これは近代の「鯉池」との情報を地元から得ており、現代の宅地地業土で埋められていることから頷ける。なお、池中央部北側には2本一対で4基の脚柱 (第186図右下 PL 89) を確認した。これらは2.2~2.0mのほぼ等間隔で東西に並ぶ。脚柱根には1本の丸太材を差し込んで固定している。この上部構造は長さ8mほどの池に伴う張り出し施設と推定される。



第185図 堤土層断面



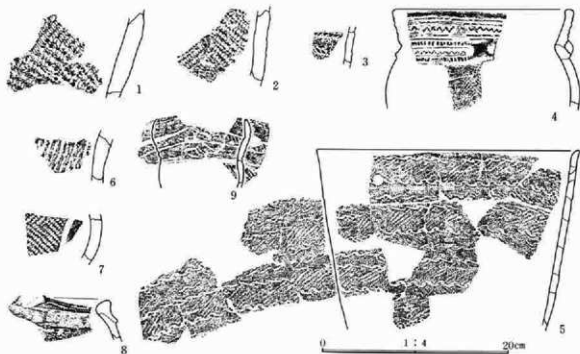
第186図 堤跡・溝・近代の池

## 6 遺構外出土遺物 (第187-191図)

## (1) 縄文土器 (第187図)

前期初頭～後期中頃にいる断片的な遺物が出土している。1は0段3条燃りのRLとLRで羽条縄文を構成する。胎土に多量の繊維を含むやや厚手の土器で、内面には指頭状の凹凸が認められる。花積下層式に比定されよう。2は附加条第1種縄文RL+LとLR+Rで羽条縄文を構成するもので、胎土には繊維の他に石英粒を多量に含んでいる。黒浜式に比定される。3は縄文RLを地文に、斜位の刻み目を施した浮線文土器である。諸磯b式に比定される。4は胴部上半が球形状にふくらむ特徴的な深鉢である。文様は、口縁部に2本の微隆線とその間に同隆線による鋸歯文をめぐらし、くの字に折れ曲がる頸部に横状突起を伴う槽凹状区画文をめぐらして文様帯を区画し、胴部には結束第1種RL・LRの羽状縄文を縦位に施している。頸部の区画文は1本の微隆線と同隆線による刻み目状の貼付文で構成し、区画内に口縁部と同様の鋸歯文を施している。なお、横位の微隆線はいずれも半截竹管による縁取り状の沈線を伴っている。5は直線的に開く単純な深鉢で、全面に結束を伴う縄文を横位施文している。原体はRL縄とLR縄を第2種の方法で結束して羽状原体とし、各々の端部を第1種で結束している。そのため一帯の施文幅は、結束部3本を含む約5cmの幅となっている。また、輪積み度が比較の明瞭な作りで、口唇から3帯目では意図的に段を付けているが、これは原体一帯の施文幅と一致している。胎土に長石、石英を多量に含み、内面はかるく研磨されている。なお、口唇下3cmのところに補修孔が見られる。4・5ともに前期末葉期に比定されよう。6はL縄の燃糸文を施した加曾利E1式土器の胴部片である。7は沈線区画外に縄文LRを充満した、加曾利E3式土器の胴部片である。8は口縁部が強く内湾し、肥厚する口唇部が小波状を呈する土器で、口縁部に縄文LRが施されている。大木7b-8a式に比定されよう。9は横位縄文帯とくずれた対角文で文様が構成される、加曾利B2式的小型精製の深鉢である。

(藤巻 幸男)



第187図 遺構外出土縄文土器

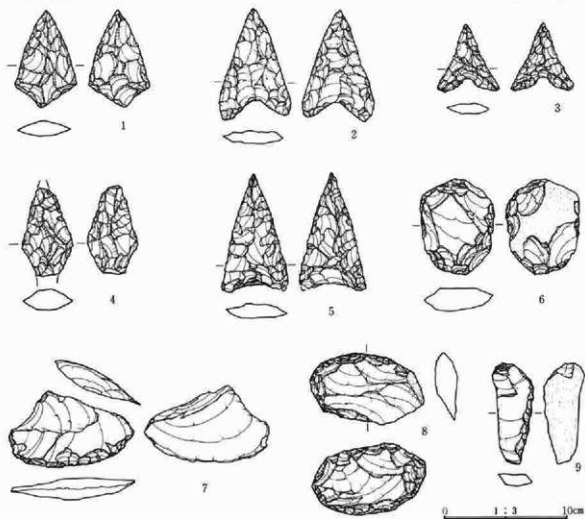


## (2) 石器 (第188・189図)

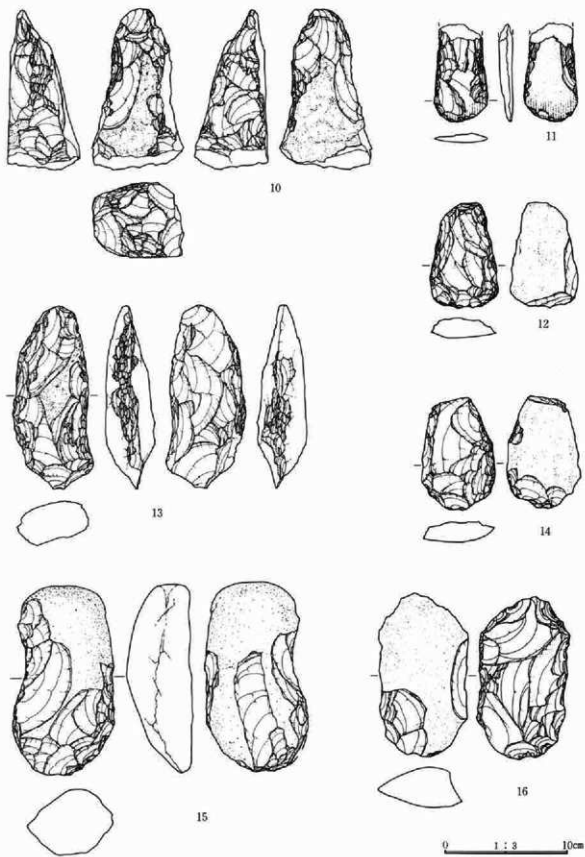
石鏃が1点、削器6点、三角錐形石器1点、打製石斧15点が出土している。このうち、石鏃には茎の有無や「抉り」の深浅を含む基部形態の相違が見られ、形態のパラツキが著しい。

石鏃は5点を図示した。1・4は茎を持ち、基部が飛び出ている凸基有茎鏃（合計4点が出土）である。基部・石器先端の一部を欠損している。図示した以外の2点は平基有茎鏃で、鋸状の側縁形態を有す。2・3・5は凹基無茎鏃だが、若干基部形態の相違が見られ、基部を $\cap$ 状に抉る石鏃(3)や浅く抉る石鏃(5)が出土している。削器は4点を図示した。剥片の側縁や末端に刃部を作成するほか、全周する加工を施し、刃部を作成するなど加工部位の相違が著しく、未製品や別器種を含んでいる可能性も強い。6・8は剥片を全周する加工を施し、石器を作成しており、器体の調整と刃部の区別が難しい。7・9は剥片の側縁に刃部を作成している。良好な縁辺を刃部に用いる典型的資料である。三角錐形石器(10)は1点が出土したのにすぎない。表裏両面に礫面を残し、多方向の剝離を施し機能部(底面部)を作成する在り方は、この石器の典型的製作法を良く示す。打製石斧は6点を図示した。刃部に摩耗の著しい打製石斧の典型的資料(11)や片刃石斧(12)、棒状の礫を用いるもの(15)など、多様な形態を含んでいる。このほか、刃部再生を示す資料(13)や礫面を大きく残し、剝離面側に加工を施す石器(14・16)も出土しており、早期的石器や中期的石器が混在している。

(岩崎 泰一)



第188図 遺構外出土石器(1)

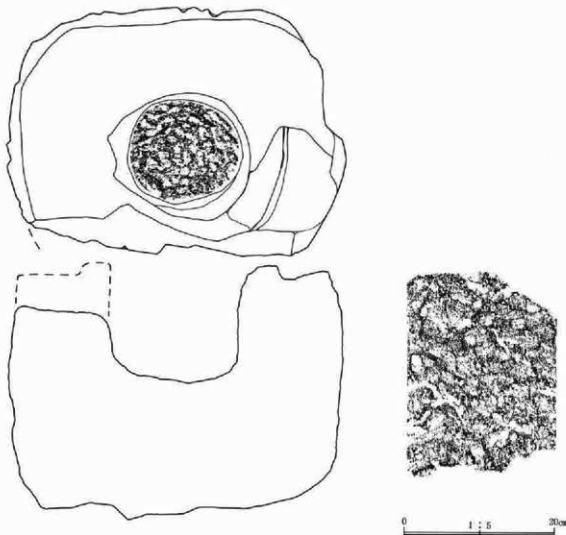


第189図 遺構外出土石器(2)

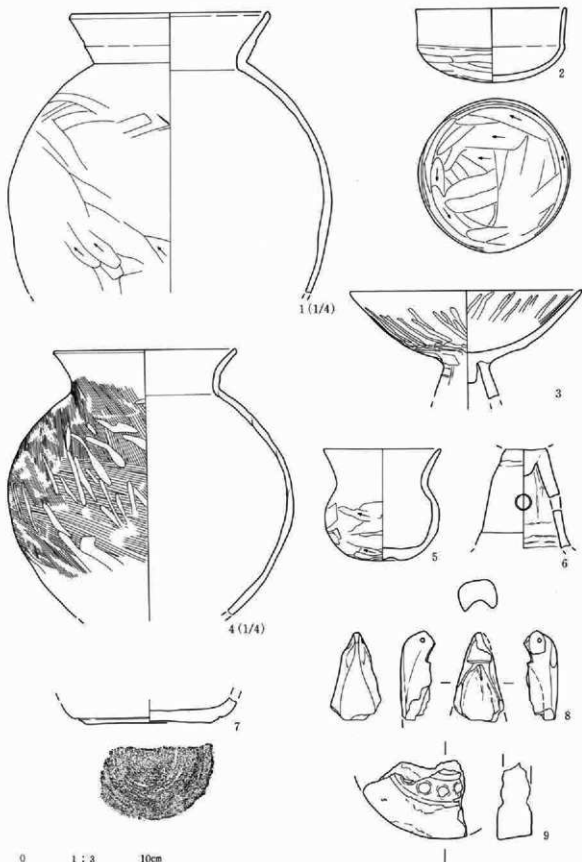
## (3) 古墳時代以降の遺物 (第190・191図)

石製骨蔵器の身石部分がⅡ区のF548グリッドから正立した状態で検出された。検出地点は埋没谷に面した低台地東端部にあたり標高60mを測る。この部分の地形は極めて平坦で周囲との相違は認められない。埋納に関連する施設は全く検出されない。底部は遺構検出面であるローム漸移層に10cmほど食い込んでいたが、この位置が埋納地点であるとの確証は得られなかった。その理由としては蓋石が認められないこと、身石にかなりの欠損部分が見られることが上げられる。おそらく埋納以後における耕作等で損壊を受け、また移動させられた可能性も考えられよう。身部分は長さ44cm、幅35cm前後、高さ32cmを測り、上面と一方の側面を欠損している。骨蔵孔は直径15cm、深さ15cmの筒状に穿たれており、上端周囲には幅5cm、高さ2cmの蓋受け突起が削出されている。全体の形状は平面が隅丸長方形で、断面形は長方形を呈する。側面は比較的丁寧に鑿で整形されており(第190図拓影)、底面は粗いが平坦に削出されている。骨蔵孔内には骨片は認められなかった。石材は灰白色の凝灰岩である。

Ⅱ～Ⅳ区の台地部分から出土した主な遺物について第191図に掲げた。土器についてはおそらく堅穴住居に伴うものと考えられる。また帰属する時期が不明であるが、匙形土製品(8)の出土が特筆される。



第190図 石製骨蔵器



第191図 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物



**カヤ** *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イナイ科 PL 101-1a-1c

仮道管および放射柔細胞からなり樹脂細胞を欠く針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。仮道管内壁にはらせん肥厚が、2本づつ対をなして斜めに走っている(放射断面および接線断面)。放射組織は、単列で1-18細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈している。

以上の形質から、イナイ科のカヤ属カヤの材と同定される。カヤは樹高20-25m 幹径80-90cmに達する常緑針葉樹である。カヤは、おもに暖帯に分布し、適潤な谷側や谷沿いで生長する。木材は、木理通直、堅硬、加工容易で、水湿に対する抵抗性もあり、浴室用材、家具材などに用いられる。

**アカマツ** *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 PL 101-2a-2c

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している(放射断面)。放射組織は、エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2-13細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈する。

以上の形質から、マツ科のマツ属アカマツと同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する常緑針葉樹で、樹高30-35m、幹径60-80cmに達する。典型的な陽樹で、かなり強い乾燥にも耐えうる。木材は、水中での保存性が良く、建築材、土木材、船舶材などに用いられる。

**モミ属** *Abies* マツ科 PL 101-3a-3c

垂直および水平樹脂道を欠き、放射仮道管を欠く針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。また、早材部仮道管は大きく厚壁で、晩材部仮道管は厚壁で扁平でかつ狭い(横断面)。放射組織は、柔細胞からなり単列で2-23細胞高である(接線断面)。また、その分野壁孔はトウヒ型で1分野に1-2個存在する。また、放射組織の壁は厚く、じょう状末端壁を有する(放射断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈している。

以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定される。モミ属の樹木には、亜高山帯に分布するシラベ(*Abies veichii*)やアオモリトドマツ(*A. mariesii*)、暖温帯に分布するモミ(*A. firma* Sieb. et Zucc.)などがある。いずれも樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。木材は、加工が容易で、割れやすく狂いがでて、保存性が低く軽軟である。木材は、建築材、器具材、下駄、製紙原料などに用いられる。

**コナラ属コナラ節** *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 PL 102-4a-4c

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は単列同性的のもと集合放射組織からなる(接線断面)。材の色調は、黒黄褐色を呈する。

以上の形質からブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Quercus serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹で、温帯から暖帯にかけて広く分布する。これら木材は重硬緻密で、建築造作材や家具材、枕木、曲木細工などに用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 PL 102-5a-5c

年輪のはじめに大型の管孔が1-2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は単列同性的ものと集合放射組織のものがある(接線断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈する。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ(*Quercus acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)があるが、識別するには至っていないが、アベマキの分布域が限定されることから、クヌギの材と考えられる。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹で、木材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、器具材や車両材、下駄材、薪炭材、椎茸原木などに用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 PL 102-6a-6c

年輪のはじめに大型の管孔が1-3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は柔細胞で単列同性であり、時に2細胞幅で、3-17細胞高である(接線断面)。材の色調は、黒茶色を呈している。

以上の形質からブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高20m、幹径1mに達する。木材はやや重硬で耐朽性、耐湿性、保存性のいずれにも優れ、枕木をはじめ、土台や枕、橋梁などの土木材、下駄材、挽物、漆器木地、彫刻材など広く用いられる。

ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. タコ科 PL 103-7a-7c

年輪のはじめに大型の管孔が数列並び、そこから径を減じた小管孔が夏材部で接線方向に数個複合して分布する環孔材である。本部柔組織は周囲状である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は異性で、1-5細胞幅、3-61細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡褐色を呈する。

以上の形質から、タコ科のクワ属ヤマグワの材と同定される。ヤマグワは、樹高12m、幹径60cmの落葉広葉樹で、温帯から亜熱帯にかけ広く分布する。木材は、重硬で光沢があり、狂いが少なく、強靱であるため、建築材や家具材、彫刻材などに用いられる。

サクラ属 *Prunus* バラ科 PL 103-8a-8c

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある。道管の内部にはガム状物質が詰まっている(放射断面)。放射組織は同性にちがひ異性で、1-5細胞幅で、2-51細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈する。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の樹木と同定される。日本に分布するサクラ属の樹木には樹高25mに達するヤマザクラ(*Prunus jamasakura*)など数種類あり、暖帯から亜熱帯にかけて分布する。木材は堅硬でやや緻密、耐朽性・保存性は高く、加工容易で建築材や家具材、器具、彫刻材など広く用いられている。

ユクノキ *Cladrastis sikokiana* (Makino) Makino マメ科 PL 103-9a~9c

中型の管孔が単独もしくは5個程度複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は同性で1~3細胞幅、2~32細胞高である(接線断面)。材の色調は、淡黄褐色を呈する。

以上の形質から、マメ科のフジキ属ユクノキの材と同定される。ユクノキは樹高15m達する落葉広葉樹で、本州、四国、九州の山地に分布する。材は建築材、器具材、薪炭材などに用いられる。

## ③ 考察

本遺跡で出土する木製品の数は少ないが、表3に時期の明確な古墳時代と近世のもの、古墳時代以前と思われる杭・製品および自然木その他としてまとめた。古墳時代では、クスギ節が矢板(1)、杭(2)および加工木(2)として、クリが杭(4)として、モミ属が鋤(1)、杭(1)および板(1)として、コナラ節が杭(2)としてそれぞれ出土している。近世では、2点のみであるが、アカマツやクリが柱材として出土している。時代は特定できないが、古墳時代以前と推定されるこれ以外の杭あるいは製品では、クスギ節が40点検出され、大半は杭(16)であり、割材(6)、板材(4)、矢板(1)、鋤(1)、えぶり(1)、橋材(1)および加工材(9)として出土している。また、コナラ節が杭(4)、板(1)、矢板(1)、割材(3)、モミ属が杭(3)、板材(1)および加工材(1)、クリが加工木(1)、ヤマダワが杭(1)そしてユクノキが杭(1)、イヌガヤが蓋(1)としてそれぞれ出土している。自然木およびその他では、全体で270点検出され、クスギ節が65.6%と圧倒的に多く、つづいてコナラ節が21.5%、カヤが6.6%、クリが1.9%で、他の樹種としてモミ属、サクラ属、ユクノキがそれぞれ1%程度出土している。これら出土した樹種は、いずれも遺跡周辺に生育していたものと思われる。

表3 三室間ノ谷遺跡出土木材の樹種一覧

樹種	加工木(古墳時代)		加工木(近世)		杭・製品		自然木		合計	
	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
カヤ							23	8.5	23	6.6
アカマツ			1	50.0					1	0.3
モミ属	3	16.7			5	8.6	3	1.1	11	3.2
コナラ節	2	11.1			9	15.5	58	21.5	69	19.8
クスギ節	8	44.4			40	69.0	177	65.6	225	64.6
クリ	5	27.8	1	50.0	1	1.7	5	1.9	12	3.4
ヤマダワ					1	1.7			1	0.3
サクラ属							2	0.7	2	0.6
ユクノキ					1	1.7	2	0.7	3	0.9
イヌガヤ					1	1.7			1	0.3
合計	18	100.0	2	100.0	58	100.0	270	100.0	348	100.0



## 2 三室間ノ谷遺跡出土種子同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

## (1) 試料

試料は、三室間ノ谷遺跡の古墳時代泥炭層（FA 降下以前）より出土した種子である（No. 1-22）。

## (2) 方法

肉眼および実体顕微鏡を用いて同定を行い、写真撮影（PL 104）も行った。

## (3) 結果

本遺跡から得られた大型植物遺体は、オニグルミ・コナラ属・モモ・サクラ属・ヒョウタン類である（表4）。

オニグルミは、古くから重要な食糧の一部として用いられてきたものである。今回得られた個体は、核が縫合線から2つに割れた状態の片方のみである。PL 104の1bより核の右上と左下がわずかではあるが欠けており、人為的に割られた可能性がある。

コナラ属とした個体は、破損した1個体のみが得られただけなので、常緑広葉樹であるアカガシ亜属と、主に落葉広葉樹であるコナラ亜属との区別は困難である。したがって、遺跡周辺の山林に生育していたものが、主に暖帯要素のアカガシ亜属か、暖帯～温帯ときに亜寒帯的要素のコナラ亜属かは不明である。

モモの核の計測値を、表4に示した。モモは一般には弥生時代以降に産出するといわれ、一般に古い時代のものは小さくて丸いものが多いとされている。本遺跡から得られたモモの核は、比較的丸みを帯びており、長さに対する幅・厚さが比較的大さい。コダイモモとされる個体、ノモモとされる個体に近いもののほか、全体的に大きくやや扁平さを増す栽培モモとされる個体に近いものまで認められるが、ノモモから栽培モモの中間的な大きさを示す個体が多いことが特徴である。

以下に、各種類の特徴を述べる。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* MAXIMOWICZ subsp. *sieboldiana* MAKINO) クルミ科 核  
側面観・上面観とも楕円形。長さ36mm、幅28mm、厚さおよそ25mm。核の表面には縦方向に弱い筋が片側面に3本程度、また弱い隆起しわ状構造が認められる。核は厚く硬い。
- ・コナラ属 (*Quercus* sp.) ブナ科 果実  
果実の破片が得られた。コナラ属の中でコナラ亜属とアカガシ亜属の区別は果実上部、殻斗がなくて区別できないため、本個体はそのどちらともいえない。したがって、コナラ属にとどめる。
- ・モモ (*Prunus persica* BATSCH) バラ科 核  
側面観・上面観とも楕円形。長さ17-30mm、幅15-24mm、厚さ13-19mm。一側面には縫合線が発達し、下端には「へそ」が存在する。核の表面には、しわ状隆起構造と比較的大きな凹部が存在する。核は厚く硬い。
- ・サクラ属 (*Prunus* sp.) バラ科 核  
核は破損後、変形している。長さ10mm、幅7mm程度。核は厚い。

第V章 科学分析について

・ヒョウタン類 (Legenaria siseraria STANDLEY) ウリ科 種子

種子の側面観は広線形で下端は切形、上面観は偏平。長さ14mm、幅6mm程度。上端に明瞭な「へそ」と発芽口がある。それぞれの面に発達する淡赤褐色の2本の幅広く低い稜はやや明瞭であるので、ある程度熟成の進んだ種子であると考えられる。

・不明 (Undetermined)

小さな植物体の一部と考えられる個体。径2mm程度。暗茶褐色。

表4 三空間ノ谷遺跡出土種子同定結果

試料番号	現場登録No.	種名 その他	オニグルミ 核	コナラ属 果実	モモ 核	サクラ属 核	ヒョウタン類 種子	不明	モモ核の計測		
									長さ	幅	厚さ
1	I区 539.5-HG No. 1				1				30	24	19
2	I区 530.5-HG No. 2				1				23	19	16
3	I区 530.5-HG No. 3				1				27	20	15
4	I区 530.5-HG No. 5				1				22	17	14
5	I区 530.5-HG No. 6				1				23	21	17
6	I区 530.5-HG No. 7				1				-	-	13
7	I区 530.5-HG No. 8				1				23	19	17
8	I区 530.5-HG No. 14				1				24	19	15
9	I区 530.5-HG No. 15				1				22	18	15
10	I区 530.5-HG No. 16				1				29	23	17
11	I区 530.5-H No. 19				1				20	16	13
12	I区 530.5-HG No. 20				1				22	20	16
13	I区 530.5-HG No. 21				1				23	18	13
14	I区 539.5-H No. 24				1				27	22	17
15	I区 540-HG No. 1			1							
16	I区 540-H				1				24	-	15
17	I区 539.5-HG				11				*	*	*
18	I区 540.5-HG 12層							1			
19	I区 FA F 536.5G 泥炭層		1								
20	I区 540.5-HG 12層						多				
21	I区 540.5-HG 12層						多				
22	I区 541-HG FA F					1					

\* (長さ・幅・厚さ) : 26・19・15、25・19・15、24・21・-、26・20・-、23・18・15、19・15・14、  
24・-・13、21・-・14

## 3 三室間ノ谷遺跡出土花粉・珪藻・重鉱物分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

## (1) 試料

分析試料は、三室間ノ谷遺跡のI区埋没谷A544.5グリッドにおける土壌で、1～15に分層された各層毎に含有される花粉・珪藻・重鉱物の3種について分析を行った。また、同じ谷のやや下流H540グリッドのAs-B下水田と思われる土壌についても分析を行った。表5は、それらの試料についての一覧表である。

表5 三室間ノ谷遺跡土壌分析試料一覧表

試料番号	土質	花粉・胞子化石産出傾向※	珪藻化石産出傾向※
A544.5-1	黒褐色粘土	A	A
A544.5-2	黒褐色粘土	A	A
A544.5-3	黒褐色粘土	A	A
A544.5-4	黒褐色粘土	A	A
A544.5-5	黒色粘土	A	A
A544.5-6	軽石混じり黒色粘土	A	A
A544.5-7	黒褐色軽石層 (As-B)	A	C
A544.5-8	黒色粘土	A	A
A544.5-9	黒色粘土	A	A
A544.5-10	黒色粘土 (含FA)	A	A
A544.5-11	黒色粘土 (含As-C)	A	C
A544.5-12	黒色草炭	A	A
A544.5-13A	黒色草炭	A	A
A544.5-13B	黒色草炭	A	A
A544.5-14	黒色草炭質粘土	A	A
A544.5-15	暗灰黄色砂質粘土	A	A
H540-1	黒色粘土	A	R

※ A: Abundant 多い C: Common 普通 R: Rare 少ない

※ 試料番号はグリッドと土層番号を示す (第173回参照)。

## (2) 花粉分析

## A 分析結果

分析結果は、検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする百分率で各試料における花粉・胞子化石の割合を算出して、これをもとに第193図を作成した。

更に本遺跡試料は何れも花粉・胞子化石が非常に多かったので、樹木の変遷をよく見るため上記とは別に

全試料について樹木花粉だけを更に鑑定し、樹木花粉を基数とする百分率をもとにして第193図-2を作成した。

今回の分析によって検出された花粉・胞子化石には、以下に列挙するものがあつた。

<針葉樹花粉 (AP-1) >

イチヨウ属 (Ginkgo)、モミ属 (Abies)、トウヒ属 (Picea)、マツ属 (Pinus)、ツガ (Tsuga sieb-oldii)、コメツガ (Tsuga diversifolia)、マキ属 (Podocarpus)、スギ属 (Cryptomeria)、コウヤマキ属 (Seladopitys)、T. C. T (Taxaceae イチイ科・Cupressaceae ヒノキ科・Taxodiaceae スギ科の3つの中の何れかであるが、鑑別の困難なもの)。

<広葉樹花粉 (AP-2) >

クルミ属 (Juglans)、サワグルミ属 (Pterocarya)、ヤナギ属 (Salix)、ハンノキ属 (Alnus)、カバノキ属 (Betula)、クマシデ属 (Carpinus)、ハシバミ属 (Corylus)、クリ属 (Castanea)、クリカシ属 (Castanopsis)、ブナ属 (Fagus)、アカガシ亜属 (Cyclobalanopsis)、コナラ亜属 (Lepido-balanus)、ムクノキ属 (Aphananthe)、エノキ属 (Celtis)、ニレ属 (Ulmus)、ケヤキ属 (Zelkova)、クワ科 (Moraceae)、シラキ属 (Sapium)、ウルシ属 (Rhus)、カエデ属 (Acer)、トチノキ属 (Aesculus)、モチノキ属 (Ilex)、クロウメドモドキ科 (Rhamnaceae)、ウコギ科 (Araliaceae)、ツツジ科 (Ericaceae)、エゴノキ属 (Styrax)、トネリコ属 (Fraxinus)、イボタノキ属 (Ligustrum)、ガマズミ属 (Viburnum)、スグリ属 (Ribes)、アカメガシワ属 (Mallotus)、ブドウ属 (Vitis)。

<草本花粉 (NAP) >

サナエタデ節 (Persicaria)、タデ属 (Polygonum)、ナデシコ科 (Caryophyllaceae)、アカザ科 (Chenopodiaceae)、カラマツソウ属 (Thalictrum)、ワレモコウ属 (Sanguisorba)、アブラナ科 (Cruciferae)、フウロソウ属 (Geranium)、ツリフネソウ属 (Impatiens)、アリノトウグサ属 (Haloragis)、フサモ属 (Myriophyllum)、セリ科 (Umbelliferae)、オミナエシ属 (Patrinia)、キク亜属 (Carduoideae)、ヨモギ属 (Artemisia)、タンポポ亜属 (Cichorioideae)、イネ科 (Gramineae)、ミクリ属 (Sparganium)、ガマ属 (Typha)、カヤツリグサ科 (Cyperaceae)、ヘラオモダカ属 (Alisma)、アカネ科 (Rubiaceae)、ソバ属 (Fagopyrum)、マルバオモダカ属 (Caldesia)、ヒメハギ属 (Polygala)、イヌコージエ属 (Mosla)、スブタ属 (Blyxa)、キカシグサ属 (Rotala)、オモダカ属 (Sagittaria)、ゴマ属 (Sesamum)、マメ科 (Leguminosae)、シソ科 (Labiatae)、オキノツメ科 (Hydrophila)、ヒルガオ属 (Calystegia)、ヤエムグラ属 (Galium)、ホシクサ属 (Eriocaulon)、オオバコ属 (Plantago)。

<形態分類花粉 (FP) >

短溝型花粉 (Monocolpate pollen)、三溝型花粉 (Tricolpate pollen)、三溝孔型花粉 (Tricolporate pollen)。

<羊歯類胞子 (FS) >

ゼンマイ科 (Osmundaceae)、ウラボシ科 (Polypodiaceae)、ハナヤスリ属 (Ophioglossum)、サンショウモ (Salvinia natans)、イノモトソウ属 (Pteris)、単条溝型胞子 (Monoete spore)、三条溝型胞子 (Trilete

spore)。

#### ＜その他の微化石＞

Pseudoschizaea,  
Botryococcus。

#### B A544.5地点における主要花粉・胞子化石の産出変化

樹木花粉における記述は樹木花粉を基数とした百分率で表わし、それ以外の草本花粉・羊歯類胞子等の記述は検出された花粉・胞子化石の総数を基数とする百分率で表わすことにした。

#### ＜樹木花粉の消長＞ (すべての百分率は樹木花粉に基づくものを示してある)

##### イチョウ属花粉

1%前後と低率ではあるが、No. 3を除いてNo. 5～2に於て連続的に検出されている。

##### モミ属花粉

No. 7とNo. 2を除くと、全般を通じ1～2%前後の低率で産出が連続している。No. 9～6 (8.0～5.0%)に比較的多くみられる。マツ属花粉

下半部のNo. 15～7においては3.5%以下の低率で産出する。No. 6から増加してNo. 4で17.0%となったあと、No. 3を境にして産出は激増し、No. 3～1では58.8～64.8%と高率で安定した値を示す。

##### ツガ花粉

No. 14からNo. 1において、最大でも7.0% (No. 6試料)と低率ながら連続した産出を示す。

##### マキ属花粉

1%以下の低率ながら土層柱状断面の下部に当たるNo. 13B～8において連続的に産出する。

##### スギ属花粉

No. 15 (3.2%)からやや増加して、No. 14～13Aでは6.5～7.6%と低率で安定した値を保つ。No. 12 (20.0%)で急増し、No. 10まで20.0%前後の高率で安定したのち、No. 9 (7.5%)で一時的に減少するものNo. 8～6では11.5%～15.0%の産出値に落ちつく。No. 5 (4.5%)で極小となったのちは順調に増大してゆき、No. 1で27.2%の最大値に達する。コウヤマキ属花粉

3%以下と低率であるが、No. 10～3とNo. 13Bに産出しており、土層断面の中部に比較的集中する傾向がみられる。

##### クルミ属花粉

3.0%以下の低率ながら、全般を通じ連続的に検出された。

##### ハンノキ属花粉

No. 15 (36.8%)を最高として下部のNo. 15～13Aにおいて多産する。しかし、No. 12を境として減少し2%前後の低い値を保つ。ただNo. 7 (6.5%)とNo. 4 (7.0%)に小さな極大がみられる。

##### クマシデ属花粉

No. 14 (7.6%)を最大として上方へ減少し、No. 2 (2.0%)で最小となる。それより凹凸を繰返しながら増加し、No. 9 (6.5%)とNo. 7～5 (5.5～7.0%)で小さい極大部となっている。No. 4から上位では漸減し、No. 2および1では0.8%の値となる。

##### クリ属花粉

## 第V章 科学分析について

No.14 (6.0%) で少し多く産出するものの、全体の傾向としてはNo.5 (11.5%) の最大値に向かってゆるやかに増加して最高値に達し、そのあと単調に減少しているのが判る。

### フナ属花粉

下部において低率で産出しているが、No.12から漸増しはじめ、No.9 (9.5%) で最大に達したのち、No.8 (1.5%) で急激に減少する。No.8～4 (1.5～4.5%) では低率産出だが、No.3～1においては検出されなかった。

### アカガシ亜属花粉

No.15～12 (0.8～4.5%) において徐々に増加し、No.11～8 (7.5～8.5%) において多産する。No.7～4 (3.0%) では低率で推移し、No.3以上では殆ど産出しない。

### コナラ亜属花粉

No.15 (24.0%) から急激に増加し、No.13A (54.5%) で最大値となり、No.12で39.5%に減少する。No.9 (21.5%) において急激な減少がみられるものの、No.12～7では39.5～37.0%と高率で安定した産出を保ち、No.6～4 (28.5～32.0%) ではやや低い値で安定している。No.3を境界として急激に減少し、No.3～1においては3.6～5.6%と低率であり、また上方へ減少する傾向もみられる。

### ムクノキ属・エノキ属花粉

最下部のNo.15・14 (6.8～12.4%) で多産する。これより上位では最大でも4.5%と低率ではあるが、比較的安定した産出を最上部まで維持している。

### ケヤキ属花粉

No.14 (6.4%) を最大として緩かに減少してNo.10 (0.5%) で極小となった。No.9 (5.5%) で1つの山が存在するものの、上位へ緩かに増加し、No.6 (5.5%) で極大に達する。極大をすぎてからは上位に向けて再び緩かな減少がみられる。

### トチノキ属花粉

No.15～4において非常に微量ではあるが断続的に産出が認められる。

## <草本花粉および羊歯類胞子の消長>

### アブラナ科花粉

下部では検出されないが、上部になって0.4～3.2%と低率で産出が認められ、最上部のNo.1においては11.2%と急激に増加する。

### キク亜属花粉

No.13Aを除く他試料において2.0%以下と低率ではあるが、連続して検出される。

### ヨモギ属花粉

No.15 (1.6%) から緩かに増加し、No.11において22.4%と激増し最大となり、No.10では6.0%に減少する。それから上方に向けて再び漸増し、No.7 (12.0%) で次の山をつくり、あとは次第に減少する傾向を示すが、No.4・3 (8.0～7.6%) においてやや増加する部分が見られる。

### タンポポ亜属科花粉

No.11から上位の試料では微量ながら連続した産出がみられるが、下部においてはNo.14～13Bで少量検出されたにすぎない。

### イネ科花粉

No.15・14 (13.2～17.6%) で多く、そのあと減少してNo.13B～11で7.2～8.0%の値で安定する。

No.10から増加してNo.9 (27.6%) で1つの山、No.8 (17.6%) で1つの谷、No.7 (27.6%) で再び山、No.6 (8.4%) でまた谷と振幅の大きな増減を交互に繰返している。

No.5においては37.2%と激増して最大値を示しNo.3～1では23.6～24.4%と一定の値を維持する。

#### ガマ属花粉

No.15、No.13A～12、No.10～6およびNo.3に0.4～0.8%と非常に微量に検出され、比較的中部に連続的に産出する傾向がうかがえる。

#### カヤツリグサ科花粉

No.15・14では6.8及び7.2%の値を示す。No.13B (18.8%) で増加したあと緩かに減少してNo.11 (14.8%) で小値となり、それより上方に向かって急激に増加しNo.8 (29.2%) で1つの山に達する。No.7 (6.8%) において著しく減少、No.6 (35.2%) で増えて山、No.5 (20.0%) で谷、No.4 (35.2%) で山、と振幅の大きな増減を交互に繰返したあと、No.3～1において急減している。

#### ソバ属花粉

1%未満と微量ながら、No.5～2において連続した産出がみられる。

#### ハナヤスリ属胞子

最高でも2.4%と低率であるが、No.7～3において連続した産出を示す。

#### 単条溝型胞子

一般には2～4%前後の低率で産出するが、No.15 (11.6%)、No.12 (30.8%)、No.7・6 (22.8～24.4%) の3層準において急に多産する。

#### 三条溝型胞子

低率ながら連続的に産出がみられる。

本地域における土層断面は、樹木花粉化石群集の特徴から大きく2つに区分される。

すなわち、マツ属・スギ属を主体とするNo.3～1と、コナラ重属を主体とするNo.15～4の2区分である。No.15～4においては更にいくつかの花粉帯に細分することができる。

表6に樹木花粉の変化を主体とする花粉の分帯を示す。

表6 花粉分帯

試料番号	花粉帯	樹木花粉群集	草本花粉・半角顕胞子	古 環 境
No. 1	IV	マツ属-スギ属	イネ科-アブラナ科	ガマ属、マルバオモダカ属
2				Botriococcus
3				(池沼または湿地)
4	III	コナラ亜属-マツ属-クリ属	イネ科-カヤツリグサ科	フサモ属、ヘラオモダカ属、スプタ属、オモダカ属 (池沼または湖沼)
5				
6	II	コナラ亜属-スギ科	シダ類胞子-カヤツリグサ科-イネ科	ミクリ属、ガマ属、オモダカ属、ヘラオモダカ属、サンショウモ (池沼または湖沼)
7				
8			カヤツリグサ-イネ科-ヨモギ科	
9				
10				
11				
12				
13A	I	コナラ亜属-ハンノキ属	カヤツリグサ科	ミクリ属、ガマ属、ヘラオモダカ属、オモダカ属 (池沼または湿地)
13B			イネ科-カヤツリグサ科-シダ類	
14				
15				

表6を基に各花粉帯の古環境、古植生について以下に述べる。

#### I帯 (コナラ亜属-ハンノキ属帯) No.15-13A

本花粉帯はハンノキ属の多産とコナラ亜属の多産増加によって特徴づけられる。

それ以外の樹木では、クマシデ属、クリ属、ムクノキ属、エノキ属、ケヤキ属等の落葉広葉樹花粉No.14をピークとして産出し、針葉樹ではスギ属が比較的安定した産出を示す。

また草本ではイネ科、カヤツリグサ科が特徴的であるが、No.14とNo.13Bを境として、下部でイネ科が多く上部ではカヤツリグサ科が多い。ほかにミクリ属、ガマ属、ヘラオモダカ属、オモダカ属等の水生草本が検出されることから、これらの植物が生育可能な池沼または湿地の環境があり、その周囲に水分を好むカヤツリグサ科、イネ科が生育していたと考えられる。

また樹木でもハンノキ属の場合は池沼または湿地の環境であること、その後の水域の拡大により減少することから、カワラハンノキが多かったといえる。そして、やや乾燥した開けた場所にキク亜科、ヨモギ属、タンポポ亜科が生育していたと思われる、そのような環境を取巻くようにコナラ亜属、ハンノキ属を主体とした樹木が生育していたと推定される。

#### II帯 (コナラ亜属-スギ属帯) No.12-6

本花粉帯はハンノキ属の激減とスギ属の急増、コナラ亜属の若干の減少がみられ、コナラ亜属-ハンノキ属帯のI帯と区別できる。また本帯はコナラ亜属、スギ属が多産することで特徴づけられるが、モミ属、クマシデ属、クリ属、ブナ属、アカガシ亜属、ケヤキ属等の産出もみられる。



No. 9においてコナラ亜属、スギ属の一時的な減少がみられ、代ってモミ属、ブナ属、ケヤキ属等が増加する。またNo. 9より下位ではブナ属が比較的産出し、No. 9より上位ではモミ属がやや多い。アカガシ亜属は本花粉帯の中部で比較的多産する。

草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属が特徴的であるが、No. 7～6では羊歯類孢子が多い。

分析結果から推定される古植生は、コナラ亜属を主体としクマシダ属、クリ属、アカガシ亜属、ケヤキ属等が混ざった広葉樹林が推定され、スギ属もかなり侵入して林地を形成していたと考えられる。

草地はカヤツリグサ科やイネ科、ヨモギ属が主要な構成要素であったが、No. 12の堆積時には羊歯類が一時的に増加し、次にNo. 11の堆積期には羊歯類に代わってヨモギ属が一時的に増加したと考えられ、全体的に草地は拡大していったようだ。

またミクリ属、ガマ属、オモダカ属、ヘラオモダカ属、サンショウモ等が検出されたことから、池沼または湖沼の環境が推定される。

No. 7の軽石層の降下によって羊歯類が急激に増加し、それに伴ってははじめはカヤツリグサ科が、次いでイネ科が一時的に減少するが、その後再び回復したものと思われる。

#### III帯 (コナラ亜属-マツ属-クリ属帯) No. 5・4

この花粉帯はスギ属の減少、マツ属、クリ属の増加、およびコナラ亜属の多産によって特徴づけられる。マツ属の増加はII花粉帯とIV花粉帯との漸移的性格をもち、クリ属の増加は一つのピークを示すものである。

草本類ではイネ科、カヤツリグサ科が多産し、ソバ属も検出されている。

分析結果から推定される古植生は、コナラ亜属を主体としクリ属、クマシダ属、ケヤキ属等の落葉広葉樹と、スギ属に代って増加したマツ属の林とが存在しており、開けた草地にはイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属、ソバ属等が生育していたものと思われる。また水生草本のフサモ属、ヘラオモダカ属、スプタ属、オモダカ属が検出されることから、池沼または湖沼の環境も併せて推定される。

#### IV帯 (マツ属-スギ属帯) No. 3～1

I～IIIの花粉帯がコナラ亜属を主体とするのに対し、本花粉帯はコナラ亜属の激減とマツ属、スギ属の多産によって明確に特徴づけられる。

また草本ではイネ科が主体でアブラナ科も産出するが、カヤツリグサ科は減少する。

本帯は、ほかの花粉帯と異って花粉構成のうえで大きな変化がみられることから、植生についても当然変化があったと考えられる。すなわち、周辺では落葉広葉樹を主体とした従来の樹林からマツ属、スギ属を主体とする植生の大きな変遷が考えられ、草地においてはカヤツリグサ科が減少してイネ科が主体となり、アブラナ科なども見られるようになったものと思われる。更にこの草地は、ガマ属、マルバオモダカ属、淡水生藻類のBotryococcusが検出されることから、池沼または湿地の環境が推定される。

また本花粉帯がマツ属、スギ属が多く、表土に近いことから考えられることは、これらの花粉構成は現在の植生をかなり反映しているものということである。

故に、ソバ属、イネ科、アブラナ科等の検出は、一応農耕の対象となる栽培植物の可能性が強いと推定される。

## 第V章 科学分析について

### C H540地点の分析結果

本試料の樹木花粉としてはコナラ亜属 (37.5%) を多産するほか、クマシダ属、クリ属、アカガシ亜属、スギ属等の産出がみられる。

草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が比較的多産している。

また羊歯類胞子も比較的多産している。

更にガマ属、オモダカ属等が検出されることから湿潤な環境のもとでの堆積物と考えられ、この点からもA545のNo. 8とNo. 7の中間の試料と考えられよう。

## (2) 珪藻分析

### A 分析結果及び考察

分析結果は、検出された珪藻化石総数を基数とする百分率で各試料における珪藻化石の割合を算出した。この中で主要なものをダイアグラムで表し、第194図として添付した。更に写真図版 (PL 105・106) を作成したので参照されたい。

今回の分析によって各試料とも非常に多くの珪藻化石が検出された。また検出された珪藻化石は、すべて淡水性のものであった。

優勢種としては、浮遊性で湖沼等の止水域を好む *Melosira italica*、底棲 (付着種も含む) で同じく止水域に生育する *Fragilaria construens*、*F. brevistriata*、*Diploneis ovalis*、*Rhopalodia gibberula*、*Achnanthes lanceolata*、*Nitzschia amphibia*、*Navicula cryptocephala*、*Neidium iridis*、*Caloneis silicula*、流水域に多いとされる *Gomphonema parvulum*、*Cymbella ventricosa*、*Navicula dicephala*、*N. dicephala* var. *neglecta*、*N. radiosa* などが検出された。これらの種類はアルカリ性の水域を好む (好アルカリ性型) ものが殆どである。

また同じく優勢種で、酸性の水域を好む (好酸性型) *Pinnularia subcapitata*、*P. gibba*、*P. acrosphaeria*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*E. lunaris*、*E. tenella* なども検出された。今回の分析で検出された珪藻化石を以下に列挙する。

〈淡水性種〉 ※印の種は汽水にも生息する

*Achnanthes lanceolata*, *A. exigua*, *A. hungarica*, *A. delicatula*, *A. sp.* ※ *Amphora ovalis*, ※ *A. holsatica*, *Anomooneis exilis*, ※ *Bacillaria paradoxa*, ※ *Caloneis silicula*, *C. bacillum*, *C. Schroederi*, *Cocconeis phaeocentula* var. *euglypta*, *Cyclotella Meneghiniana*, *C. kützingiana*, *C. stelligera*, *Cymbellaventricosa*, *C. turgida*, *C. naviculiformis*, *C. affinis*, *C. sinuata*, *C. tumida*, *C. parva*, *C. cuspidata*, *C. gracilis*, *C. aspera*, *C. aequalis*, *Diatomella Balfourniana*, ※ *Diploneis ovalis*, *D. puella*, ※ *Epithemia sores*, ※ *E. turgida*, *Eunotia praerupta*, *E. praerupta* var. *inflata*, *E. praerupta* var. *bidens*, *E. bidentula*, *E. arcus*, *E. arcus* var. *bidens*, *E. parallela*, *E. manadon*, *E. pectinalis*, *E. pectinalis* var. *minor*, *E. pectinalis* var. *undulata*, *E. tenella*, *E. lunaris*, *E. lunaris* var. *subarcuata*, *Frustulia rhomboides*, *F. vulgaris*, *Fragilaria brevistriata*, *F. construens*, *F. virescens*, *F. pinnata*, *F. Harrisonii*, *F. crotonensis*, *Gomphonema parvulum*, *G. gracile*, *G. subtile*, *G. acuminatum*, *G. acuminatum* var. *coronata*, *G. ligulatum*, *G. constrictum* var. *capitata*, *G. longiceps* var. *gracilis*, *G. longiceps* var. *subclavata*, ※ *G. olivaceum*, *G. bohemicum*, *G. angustatum*, *G. helveticum*, *G. sphaerophorum*, *Gyrosigma kützingii*, ※ *Hantzschia amphioxys*, *Melosira distans*, *M. granulata*, *M. italica*, *Melidion circulae*, *Navicula cryptocephala*, *N. dicephala*, *N. dicephala* var. *neglecta*, *N. mntica*, *N. pupula*, *N. radiosa*, *N. gotholandica*, *N. bacillum*, *N. contenta*, *N. con-*

ferveacea, *N. exigua*, *N. cuspidata*, *N. rheinchocephala*, *N. Reinhardtii*, *N. viridula*, *N. placenta*, *N. coccineiformis*, *N. pusio*, *N. lacustris*, *N. americana*, *N. hungarica* var. *capitata*, ※ *N. lanceolata*, *N. contempta*, *N. sp.* ※ *Nitzschia tryblionella*, *N. tryblionella* var. *victoriae*, *N. apiculata*, *N. fonticola*, *N. amphibia*, *N. obtusa*, *N. parvula*, *N. palea*, *N. sp. Melosirans*, *Neidium iridis*, *N. affine*, *N. bisulcatum*, *Pinnularia subcapitata*, *P. molaris*, *P. acrosphaeris*, *P. gibba*, *P. gibba* var. *linearis*, *P. gibba* var. *parva*, *P. hemiptera*, *P. borealis*, *P. interrupta*, *P. microstauron* var. *minuti*, *P. maior*, *P. viridis*, *P. mesolepta*, *P. Braunii*, *P. Braunii* var. *amphicephala*, *P. divergens*, *P. divergens* var. *undulata*, *P. divergentissima*, *P. macilenta*, *P. brevicostata*, *P. streptoraphe*, *P. streptoraphe*, *P. appendiculata*, *Rhoicosphenia curvata*, ※ *Rhopalodia gibberula*, *R. gibba*, *Surirella elegans*, *S. ovata*, *S. ovata* var. *pinnata*, *S. angusta*, *S. robusta*, *S. sp. Stauroneis phoenicenteron*, *S. Smithii*, *S. anceps*, *S. acuta*, *S. parvula*, *Synedra ulna*, *S. rumpens*, *S. Vaucheriae*, *Tabellaris fenestrata*, *T. flocculosa*.

#### B 珪藻群集の特徴および堆積環境

以下に各試料について珪藻群集の特徴および堆積環境を、下部より上部へ順に述べる。

##### A544.5-15

砂質の粘土であり、優勢種として *Diploneis ovalis* が16.8%検出され多かったほか、*Rhopalodia gibberula* (6.8%)、*Eunotia tenella* (4.4%)、*Gomphonema parvulum* (4.4%)、*Amphora ovalis* (3.6%)、*Cymbella ventricosa* (3.2%)、*Nitzschia amphibia* (2.8%)、*Caloneis bacillum* (2.0%)、*Cyclotella Meneghiniana* (2.0%)、*Eunotia pectinalis* var. *minor* (2.0%)、*Navicula radiosa* (2.0%)、*Pinnularia hemiptera* (2.0%) などが良好に検出された。このほか、割合は少なかったが多くの随伴種が検出された。

以上の珪藻化石群集は流水の影響の考えられる淡水域の堆積物と考えられる。

##### A544.5-14

有機物の多数含まれた黒色の粘土であり、優勢種として *Fragilaria brevistriata* (11.2%)、*F. construens* (9.2%)、*Melosira italica* (6.0%)、*Fragilaria pinnata* と *F. Harrisonii* が各5.6%、*Diploneis ovalis* (5.2%) が検出された。このほか *Gomphonema parvulum* (3.6%)、*Navicula dicephala* (3.6%)、*N. dicephala* var. *neglecta* (3.6%)、*Rhopalodia gibba* (3.6%)、*Navicula cryptocephala* (3.2%)、*Eunotia tenella* (3.2%)、*Rhopalodia gibberula* (2.4%)、*Navicula radiosa* (2.0%) 等が検出され、底棲で好アルカリ性のものが多かった。

これらの群集は池沼等の止水域での堆積物の特徴を表していると考えられる。

##### A544.5-13B

黒色の粘土であり、優勢種として *Eunotia pectinalis* var. *minor* (10.4%)、*Achnanthes lanceolata* (10.0%)、*Diploneis ovalis* (7.2%) が検出された。

このほか *Gomphonema parvulum* (5.2%)、*Navicula pupula* (4.8%)、*Rhopalodia gibberula* (4.8%)、*Navicula pupula* (4.8%)、*Pinnularia subcapitata* (4.4%)、*Eunotia tenella* (4.4%)、*Navicula dicephala* (3.6%)、*Cymbella ventricosa* (3.2%)、*Navicula radiosa* (2.8%)、*N. cryptocephala* (2.4%)、*Fragilaria brevistriata* (2.0%)、*Gomphonema bohemicum* (2.0%)、*Neidium iridis* (2.0%)、*Pinnularia maior* (2.0%) などが検出

## 第V章 科学分析について

された。

これらの群集は池沼等の止水域の環境を表していると考えられる。

### A544.5-13A

A544.5-13Bと同じ岩相を示し、また珪藻群集も近似した産出を示す。よって堆積環境もほぼ同じと考えられる。

### A544.5-12

草炭（ビート）であり、多くの植物遺体を含んでいる試料であった。この試料からは浮遊性の*Melosira italica* (24.8%)が優占して検出されたことが特徴となる。また主要なものとして*Gomphonema parvulum* (7.6%)、*Eunotia tenella* (6.4%)、*Navicula dicephala* (5.2%)、*Gomphonema bohemicum* (4.8%)、*Achnanthes lanceolata* (4.4%)、*Cymbella ventricosa* (4.4%)が検出されたほか、*Diploneis ovalis* (3.6%)、*Eunotia lunaris* (3.6%)、*Navicula mutica* (3.6%)、*N. pupula* (3.6%)、*Hantzschia amphioxys* (2.8%)、*Navicula dicephala var. neglecta* (2.8%)、*N. radiosa* (2.0%)、*Neidium iridis* (2.0%)などが良好に検出された。

これらの群集は湖沼・止水域での珪藻群集の特徴を表していると考えられる。特に*Melosira italica*の急増は水域の拡大または水深の増加を表していると言えよう。特に*Gomphonema parvulum*、*Cymbella ventricosa*、*Navicula dicephala*など流水域に多い種が多産した点は結果と矛盾しない。

### A544.5-11

黒色粘土であり、珪藻群集の特徴は、前記のA544.5-12と同じく*Melosira italica*が非常に多く、従って水域の拡大または水深の増加が考えられる。また産出する珪藻化石もA545-12と大差はない。

### A544.5-10

黒色の粘土であり、*Melosira italica*は減少し、*Fragilaria brevistriata*、*F. construens*、*Gomphonema parvulum*、*Navicula cryptocephala*、*Pinnularia subcapitata*、*Cyclotella stelligera*、*Diploneis ovalis*などが高率で検出された。このほか*Cymbella ventricosa*、*C. naviculiformis*、*Eunotia arcus var. bidens*、*E. tenella*、*Fragilaria pinnata*、*Navicula dicephala var. neglecta*、*N. mutica*、*N. pupula*、*Nitzschia amphibia*、*Neidium iridis*、*Pinnularia gibba*、*P. interrupta*、*Rhopalodia gibberula*、*Tabellaria flocculosa*など、非常に多くの種が検出された。

これらの珪藻群集は池沼等、止水域での群集の特徴を反映していると考えられる。しかし水域の規模はA544.5-12、11と較べると小さかったと推定される。

### A544.5-9

草炭（ビート）であり、優勢種として*Fragilaria*属の割合が高く、*F. construens* (10.8%)、*F. brevistriata* (7.2%)、*Diploneis ovalis* (8.0%)、*Rhopalodia gibberula* (6.4%)、*Navicula cryptocephala* (5.2%)が検出された。このほか、*Cyclotella kützingiana* (3.2%)、*Fragilaria pinnata* (3.2%)、*Gomphonema parvulum* (3.2%)、*Pinnularia subcapitata* (3.2%)、*Neidium iridis* (2.8%)、*Eunotia arcus var. bidens* (2.8%)、*Nitz-*

*schia amphibia* (2.4%), *Navicula dicephala* var. *neglecta* (2.4%), *Cymbella naviculiformis* (2.4%) 等多くの種が検出された。

従ってこの試料は、池沼等の止水域での堆積物であると考えられる。

## A544.5-8

黒色粘土であり、*Fragilaria construens* (13.2%), *Cyclotella kützingiana* (8.8%), *Rhopalodia gibberula* (7.6%), などが優勢して検出された。その他、*Diploneis ovalis* (5.2%), *Fragilaria brevistriata* (5.2%), *Gomphonema parvulum* (4.4%), *Pinnularia gibba* (3.6%), *P. subcapitata* (3.6%), *Melosira italica* (3.2%), *Cyclotella stelligera* (2.4%), *Navicula pupula* (2.4%), *Neidium iridis* (2.4%), など多くの種が検出された。

従ってこれらの群集から推定される堆積環境は、A544.5-9と同じであると考えられる。

## A544.5-7

この試料は浅間Bの軽石を多く含んだ試料にもかかわらず、多くの珪藻化石が検出された。

主要な種として *Fragilaria brevistriata* (9.0%) が検出されたのをはじめ、*Eunotia lunalis* (7.5%), *Nitzschea obtusa* (6.0%), *Navicula pupula* (5.5%), *Eunotia arcus* (5.5%), *Navicula radiosa* (5.0%), *Pinnularia gibba* (5.0%), *Diploneis ovalis* (4.0%), *Frustulia rhomboides* (4.0%), *Pinnularia microstauton* (3.0%) が検出された。

その他、割合としては少なかったが、*Rhopalodia gibberula*, *Gomphonema angustatum*, *Fragilaria construens*, *Eunotia pectinalis* var. *minor* など多種が検出された。

これらの群集はこれまでとはほぼ同じと考えられるが高層湿原の代表種とされる *Frustulia rhomboides* が多く検出されたことから、水域が縮小し湿原化の影響が出てきたと考えられる。

## A544.5-6

砂質の黒色土であり、主要種として *Pinnularia subcapitata* (10.8%), *Diploneis ovalis* (7.6%), *Rhopalodia gibberula* (7.6%), *Gomphonema parvulum* (7.2%), *Eunotia bidentata* (6.4%), *Frustulia rhomboides* (4.4%) が検出された。また割合は低かったが *Cymbella ventricosa* (3.2%), *Gomphonema bohemicum* (3.2%), *Navicula pupula* (3.2%), *N. radiosa* (2.8%), *Pinnularia hemiptera* (2.8%), *Pinnularia gibba* var. *linearis* (2.0%) などが検出された。

これらの群集はA544.5-7に引き継ぐもので、水域の縮小と湿原化の影響が考えられる。また好酸性型の種が多く現れてきたことから水質的に酸性であったと推定される。

## A544.5-5

灰褐色土であり、*Diploneis ovalis* (10.0%), *Caloneis silicula* (6.4%), *Fragilaria construens* (5.2%), *Gomphonema parvulum* (5.2%), *Rhopalodia gibberula* (4.4%), *Navicula dicephala* var. *neglecta* (4.4%), *Amphora ovalis* (4.0%) などの底棲のものが主に検出された。

このほか低率であるが *Cymbella ventricosa* (3.6%), *Pinnularia hemiptera* (3.2%), *Eunotia bidentata* (2.4%), *Fragilaria brevistriata* (2.8%), *Navicula cryptocephala* (2.4%), *Neidium iridis* (2.4%), *Pinnu-*

#### 第V章 科学分析について

*laria acrosphaeria* (2.4%), *P. interrupta* (2.8%), *P. microstauron* (3.2%) 等が検出された。

これらは池沼等の止水域に一般に生育するものが多く、堆積環境もほぼこれに近かったと考えられる。

#### A544.5-4

灰褐色粘土であり、主なものとして *Fragilaria construens* (12.8%), *Diploneis ovalis* (10.8%) が検出された。これに次いで *Eunotia bidentula* (6.0%), *Neidium iridis* (4.0%), *Pinnularia microstauron* (4.0%), *P. subcapitata* (3.6%), *Gomphonema parvulum* (3.6%), *Navicula pupula* (3.6%), *Cymbella naviculiformis* (3.2%) が検出された。

この他、*Fragilaria pinnata* (2.8%), *Cyclotella kützingiana*, *Cymbella ventricosa*, *Pinnularia macilenta*, *Tabellaria fenestrata* が各2.4% 検出された。

これらの群集は池沼等の止水域に多く生息する種であり、堆積環境もほぼこれに近かったと考えられる。

#### A544.5-3

主なものとして底棲で好アルカリ性の *Rhopalodia gibberula* が12.4% と高率で検出されたほか、好流水棲の *Cymbella ventricosa* が9.6%、不定棲の *Diploneis ovalis* が8.8%、好酸性の *Pinnularia microstauron*、好アルカリ性の *Navicula cryptocephala* が各5.6% 検出された。

このほか、*Eunotia bidentula* が4.4%、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula amphibia*、*Caloneis silicula* が各3.6%、*Cymbella affinis*、*Rhopalodia gibba* が各3.2%、*Pinnularia gibba*、*Neidium iridis* が各2.8%、*Caloneis bacillum* が2.4% 検出された。

これらの群集を表す堆積環境はA544.5-4 とほぼ同一と考えられる。しかし好流水棲の *Cymbella ventricosa* の割合が高かったことから、近くに河川などが流れこんでいたことも推定される。

#### A544.5-2

主要珪藻化石の産出傾向はA544.5-3 と近似した構成を示す。しかし好アルカリ性の *Nitzschia amphibia* が多かったこと、および好流水棲の *Cymbella ventricosa* が減少した点が異なる。

従って堆積環境はA544.5-3 とはほぼ同じと言える。しかし流水の影響はそれほど強くなかったと考えられる。

#### A544.5-1

最上部の試料であり岩質は灰褐色粘土である。主要化石として不定棲の *Diploneis puella* (7.6%)、好酸性の *Pinnularia subcapitata* (5.6%)、好アルカリ性の *Rhopalodia gibberula* (5.6%)、同じく好アルカリ性の *Navicula cryptocephala* (5.2%)、好アルカリ性の *Nitzschia amphibia* (4.0%)、*Navicula dicephala* var. *neglecta* (4.0%) が検出された。これらの種は大部分が底棲である。

このほか *Achnanthes lanceolata*、*Diploneis ovalis*、*Navicula mutica* が各3.2%、*Cyclotella meneghiniana*、*Navicula dicephala*、*N. confervacea*、*Pinnularia molaris* が各2.4% 検出された。

従って池沼等の陸水成層と考えられる。

H540-1

黒色粘土であるが、これまでのA545の試料に比べると珪藻化石は少ない。主な種としては、好酸性の *Eunotia pectinalis* var. *minor* (15.0%)、不定棲の *Diploneis ovalis* (8.0%)、好アルカリ性の *Gomphonema parvulum*、*Tabellaria fenestrata* が各7.0%、湖沼に多く見られる *Neidium iridis*、好酸性の *Pinnularia subcapitata* が各4.0%検出された。

このほか *Amphora ovaris*、*Cymbella ventricosa*、*Eunotia praerupta* var. *bidens*、*E. lunalis*、*Gomphonema acuminatum* var. *coronata*、*Pinnularia borealis* が各3.0%検出された。

これらの群集は池沼など止水域に生息する群集を反映していると言える。

この試料は、資料によるとA544.5-8と同じ層準とされているが、珪藻群集は第194図でも明らかであるが異なった構成を示す。おそらく堆積環境が異なっていたのであろう。

### C 珪藻群集の珪藻帯分類

次に各試料の珪藻群集の特徴から、いくつかの珪藻帯に分類すると、下位よりA-Gの7帯に分けることができる。

表7にその分帯と内容を記述する。(ただし分帯はA544.5の試料のみである)

表7 珪藻帯分類

珪藻帯	試料No. (層位)	優占種または優勢種	随伴種または特徴種	古環境
G	1 2 3	<i>Rhopalodia gibberula</i> <i>Diploneis ovalis</i>	<i>Cymbella ventricosa</i> <i>Nitzschia amphibia</i> <i>Navicula cryptocephala</i>	陸成層 池沼
F	4- 5 6	<i>Diploneis ovalis</i> <i>Fragilaria construens</i>	<i>Rhopalodia gibberula</i> <i>Gomphonema parvulum</i>	陸成層 沼沢地湿地 水域の縮小が 考えられる
E	7	<i>Fragilaria brevistriata</i> <i>Navicula pupula</i> <i>N. radiosa</i> <i>Pinnularia gibba</i>	<i>Rhopalodia gibberula</i> <i>Gomphonema angustatum</i>	陸成層 沼沢地 水域の縮小
D	8 9 10	<i>Fragilaria construens</i> <i>F. brevistriata</i> <i>Rhopalodia gibberula</i>	<i>Cyclotella kützingiana</i>	陸成層 池沼
C	11 12	<i>Melosira italica</i>	<i>Gomphonema parvulum</i> <i>Eunotia tenella</i>	陸成層 水域または水 深の増大 湖沼
B	13A 13B 14	<i>Achnanthes lanseolata</i> <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> <i>Diploneis ovalis</i>	<i>Gomphonema parvulum</i> <i>Navicula dicephala</i> <i>N. pupula</i>	陸成層 池沼
A	15	<i>Diploneis ovalis</i> <i>Rhopalodia gibberula</i>	<i>Gomphonema parvulum</i> <i>Eunotia tenella</i>	陸成層 流水の影響が ある

### (3) 重鉱物分析

#### A. 分析法

試料を超音波発生装置により粘土分を除いた。

1/4mm (60メッシュ)と1/8mm (120メッシュ) の篩を用いて1/4~1/8mmの砂分を抽出し、テトラブロムエタン (比重2.96) によって重鉱物を分離した。

顕微鏡による検出は300個体程度観察し、各鉱物の比重を考慮して鉱物組成を算出した。

#### B. 分析結果

分析結果は第195図のダイヤグラムに示した。

195図-1には重鉱物量の変化、同図-2には各鉱物の産出変化、同図-3には重鉱物組成をそれぞれ図示した。

##### (a) 土質

A544.5のNo.15が暗灰黄色であることを除けば、本地点の殆どの試料が黒~黒褐色であり、下部が黒色で上部は黒褐色が多い。また本地点試料に含まれる軽石や砂分によって大きく3つに区分される。

No.15は褐灰色の軽石が多く含まれ、ごま塩状の砂分がかなり多い。

No.14~8では灰白色の軽石が含まれ、優白色のごま塩状の砂分は比較的少ない。No.7~1では褐灰色の粗粒の軽石が多く含まれ、黒味の強いごま塩状の粗い砂分がかなり多い。

H540-1の試料は黒色で、褐灰色の軽石を含み、中間色のごま塩状の砂分をある程度含む。

##### (b) 1/4~1/8mmの砂分量

重鉱物分析に用いた1/4~1/8mmの粒度の砂分量は増減の幅が大きい。

A544.5の下部のNo.15~14では13.9~14.0%と多いが、No.13B~12では草炭ということもあって0.5~3.4%と低い値を示す。No.11で13.0%と再び多くなり、上方に向かって減少し、No.8 (2.1%)で極小となる。No.7で6.8%の値を示したのち、No.6で14.8%と最大値になり、上方に向かって次第に砂分量は減少し、No.1で8.4%となる。

なおNo.7は1/4~1/8mm砂分量が6.8%と少ないが、これは砂全体が非常に粗粒であるため、1/4mmの砂分の占める割合が大きくなり、相対的に1/4~1/8mmの砂分量が減少したようにみられたものであり、注意を要する。

H540-1の砂分量は6.9%である。

##### (c) 1/4~1/8mmの砂分中における重鉱物量

含有される重鉱物量の変化は、195図-1に示されているように特徴的な線を画している。

A544.5のNo.15は40.5%である。No.12は草炭であるため1/4~1/8mmの砂分も非常に少ない。そのためか重鉱物量も5.7%と少ないが、No.12を除いたNo.14~8における重鉱物量は20.0%台でほぼ安定している。No.7 (57.7%)では著しいピークを形成し、そのあとNo.6~1における重鉱物量は34.7~40.0%と安定した値を保っている。

H540-1の重鉱物量は29.9%である。



## (d) 各鉱物の産出変化

**斜方輝石**

A544.5では小さな凹凸があるものの、No.15-10での斜方輝石は73.0-81.7%と高率で安定した産出を示す。No.9(57.2%)で急激に減少して最小値となったあと、上方に向かって急増し、No.7(85.1%)で最大値に達する。No.6-1では74.7-78.9%と安定した産出がみられる。

H540-1は76.7%の産出を示す。

A544.5地点およびH540の斜方輝石の形態は、自形から他形まで種々であるが、A544.5のNo.7-5では自形-半自形のものが多く傾向がある。

**単斜輝石**

A544.5ではNo.15(6.8%)から高低を繰り返しながら上方に向かって漸増し、No.2(18.1%)で最大となったあとNo.1で12.9%と若干減少する。

H540-1は13.9%である。

単斜輝石の形態は自形から他形までさまざまであるが、一般には半自形-他形のものが多く、A544.5のNo.7では自形-半自形のものがよく見られた。

**角閃石**

A544.5ではNo.13A(10.0%)で小さな山が存在するものの、No.15(8.0%)からゆるやかに減少し、No.12(2.6%)で谷となる。No.12からは漸増に転じ、No.9(21.7%)で急増して最大値に達する。No.8でも14.6%と比較的多産する。

No.7では検出されず、No.6-1においても2.0%未満の低率で連続産出する。

H540-1では4.4%が産出する。

角閃石の形態は、A544.5ではNo.15-8で半自形-他形が一般的であるが自形もいくらか含まれる。No.6-1では半自形-他形のみである。またH540-1では半自形が多かった。

**緑レン石・ザクロ石**

A544.5試料のNo.15とNo.10に緑レン石が各1個体ずつ検出され、ザクロ石はNo.2と1で各1個体ずつ検出された。

**不透明鉱物**

不透明鉱物はNo.11(11.3%)の最大値を除くと数%以下の低率で安定した産出を示している。

A544.5のNo.15(5.7%)から極めてなだらかに減少してゆき、No.12で3.5%となる。No.11で最大となったあと、ゆるやかに減少し、No.7-6(2.8%)を最小としたあとは上方に向かって漸増し、No.1で5.4%となる。

H540-1は4.1%産出する。

## (e) A544.5試料とH540試料の対比

分析結果から両者を対比してみる。

試料採取時点ではA544.5-8とH540-1が同層準であると云うことであり、概略において正しいと思われるが、細かい点に留意すると、A544.5のNo.8とNo.7の中間的性格を帯びているようである。

すなわち、試料に含まれる軽石が黒灰色であることや、1/4~1/8mmの砂分量が6.9%であることなどはNo.7によく似ている。しかし試料中に含まれる砂分が中間色のごま塩状であることや、角閃石が産出すること

#### 第V章 科学分析について

などはNo. 8と共通する。そして重鉱物量や斜方輝石の値がNo. 8とNo. 7との中間的な値をH540-1は示している。

以上のことから、A544.5のNo. 8とNo. 7の中間的層位がH540のNo. 1と合致し対比されると思われる。

#### 〈浅間B軽石層 (As-B) との関連〉

A544.5-7は非常に粗粒な砂分が多く、黒～黒褐色のガラス質のスコリア状の物質を含み、濁灰色の軽石も含む。一見したところ火山砂状に見えること、重鉱物量が多いこと、角閃石を含まず斜方輝石、単斜輝石、不透明鉱物から成ること等も特徴の一つである。

これらの事から、A544.5-7は浅間B軽石層に対比される。

浅間B軽石層の降下年代は天仁元年(1108年)とされている。

#### 〈榛名二ツ岳活動との関連〉

A544.5のNo.15-8において角閃石の連続した産出があり、特にNo.9では21.7%と多産する。

北関東に分布する完新世のテフラで浅間火山の起源のテフラは斜方輝石、単斜輝石が特徴的であるのに対し、榛名火山起源のテフラは角閃石を多量に含んでいるのが特徴であるとされる。

角閃石を多産するNo.9において角閃石が実際に軽石中に含まれている白色軽石を発見することが出来たことから、No.9付近には榛名火山二ツ岳の形成期のテフラが含まれている可能性が極めて強い。

二ツ岳形成期には「二ツ岳降下火山灰層 (FA)」「二ツ岳降下軽石層 (FP)」の外に、これらに伴って噴出した「二ツ岳第1軽石流堆積物 (FPF-1)」「二ツ岳第2軽石流堆積物 (FPF-2)」などが知られているが、本地域に分布する可能性があるものとしてはFAとFPの2つである。

FAは詳しくみると多数のユニットからなり、噴出源の近くでは比較的粗粒な降下軽石のユニットを夹むことが知られているが、(新井1979)、噴出源から相当離れている本地域では細粒のものとなっている可能性が強い。

このことから、No.9にみられる角閃石をとり込んだ白色軽石は、最大で2-3mmあることから、FAよりもFPである可能性がありそうである。

FPの降下年代は6世紀後半(石川ほか1979)とも7世紀初頭(新井1979)とも云われている(註1)。しかし、本地点においてFAもFPも純堆積として明瞭に認められないことから、No.9前後を6-7世紀の堆積物として大きくとらえた方が良くも知れない。

#### (4) 総合考察

花粉・珪藻・重鉱物の各分析結果から、本遺跡の古環境の変遷について考察してみる。

はじめ流水の影響下にあった本地域は、しだいに池沼的環境となって行った。この池沼にはミクリ属、ガマ属、ヘラオモダカ属、オモダカ属等の水生植物が生育し、周囲にはコナラ亜属、ハンノキ属等の落葉広葉樹林と、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等から成る草場がとりまき、その中で草炭(泥炭)の形成がゆるやかに行われていたと考えられる。ハンノキ属がその後の水域の拡大により減少することから、このハンノキ属は水辺に生育するカワラハンノキが多かったと云えよう。

その後、水位はやや上昇して水域が拡大したが、それに伴って珪藻では *Melosira italicat* が増殖し、花粉ではハンノキ属が減少し代ってスギ属が増加するようになる。しかしコナラ亜属を中心とした広葉樹林は衰えなかったようである。堆積物は有機質の黒色粘土が堆積する。

古墳時代の6世紀後半(No. 9試料の堆積期)には榛名火山から二ツ岳降下軽石層(FP)の降灰があった(註1)。水位はしだいに低下する方向に向ったが、池沼の環境は継続していた。またこの時代から平安時代にかけて飛来したと考えられるモミ属の花粉量がやや増大した。

平安時代(No. 7試料の堆積期)に入って浅間B軽石層(天仁元年 1108年)が降灰したことにより周囲の湿潤な草地には羊歯類胞子が一時的に繁茂した。

その後羊歯類胞子が減少し、再び草地にイネ科、カヤツリグサ科が繁茂する頃になると一時的にスギ属が減少し、マツ属が増加して森林破壊の兆しが出がわられる。

ゴマ属、ソバ属、イチョウ属などの栽培は、本地域で中世以後には既に行われていた可能性が高い。なお、イチョウ属(おそらくイチョウ)は神社寺院等に植えられていたものであろう。

その後急激に周囲の環境に変化がおり、今まで引続いてあったコナラ亜属を中心とする落葉広葉樹林がマツ属やスギ属などの針葉樹にとって代われ、平坦な開闊な場所にはイネ科が主体となった。この時期に及んで人間活動が急激に活発化したと考えられ、イネ科の増大は農耕の影響を示唆するものと思われる。それが現在まで継続しているようである。

本地域では上述したような池沼のあるいは湿地的な堆積環境の下で、草炭(泥炭)や有機質の黑色粘土などが、穏かに継続して堆積したものと考える。

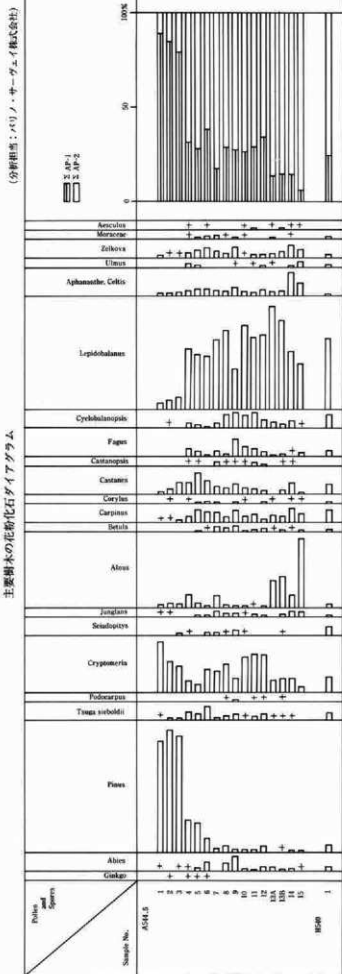
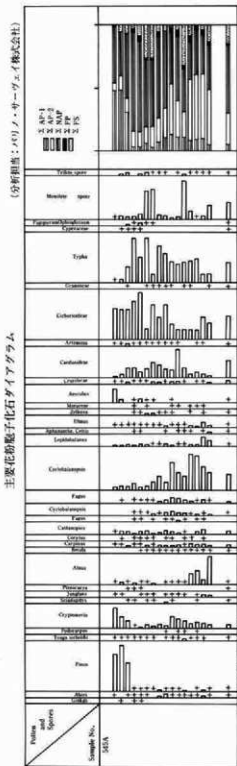
なお、このたび検出された樹木花粉のうち、マツ属、スギ属、コナラ亜属等と一緒に検出された花粉から温帯植物が多いので、マツ属は二葉型のアカマツまたはクロマツ(特にアカマツの可能性が大)、スギ、コナラ亜属はコナラ・クスギ・カシワ等に相当するものと云えよう。

### 参 考 文 献

- 新井房夫 1979 関東地方西部の縄文時代以降の示標テフラ層 考古学ジャーナル, 157 P.41-52.  
石川正之助 井上唯雄 梅沢重昭 松本浩一 1979 考古学ジャーナル, 157 P.3-40.

### 注

- 1 本分析結果は1983年に報告されたもので、FP降下年代をやや新しく比定していた推論(上記参考文献)に基づいている。しかし現段階(1991年)では、FP直下から出土した風患部の年代感から、6世紀半ばと考える見解が主流である。



第193図 花粉化石ダイアグラム

+は1%未満の値を示す



#### 4 プラント・オパール分析

##### (1) はじめに

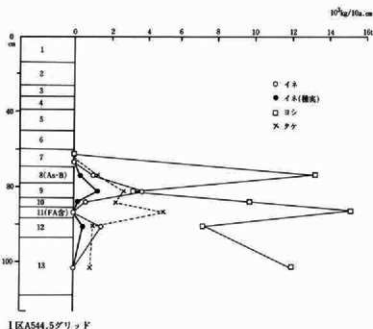
三室間ノ谷遺跡I区の埋没谷において水田址の存否を確認するために、イネのプラント・オパール有無の確認及び定量分析を行った。昭和56年5月、宮崎大学の藤原宏志氏に現地での試料採取と分析を依頼した。その結果については、同年に第196図に示したグラフと若干のコメントを頂いた。グラフは分析結果から導き出されたイネ科植物の推定量を示すもので、氏の作図されたままを掲載させて頂いた。なお、分析結果については、氏のコメントを基に大木が執筆する。従って本稿の文責は大木が負う。

##### (2) 分析試料

土壌分析（第V章3）と同じA544.5グリッドで、第7層（As-B 軽石層）以下の黒泥土～泥炭土層について、柱状に土壌を採取し、各層位毎の定量分析を行った。

##### (3) 分析結果

As-B 軽石層に覆われた8層からは、イネと多量のヨシのプラント・オパールが認められた。9層ではイネとヨシの量が逆転し、イネのプラント・オパール量のピークが見られる。イネはFAあるいはFPの混在する10・11層で減少し、下位の12層で再び高い数値を示す。なお、この部分のプラント・オパール量は藤原氏が同様の方法で分析された高崎市日高遺跡As-C下水田よりも高い数値であるという（同氏より御教示）。グラフに示された推定生産量（面積10アール、深さ1cm当たり）は、現在の水田における収穫量とプラント・オパール量の比率から得られた係数を乗じてあり、イネ（種実）量は總部分の推定重量である。



第196図 三室間ノ谷遺跡におけるイネ科植物推定生産量グラフ

## 第Ⅵ章 まとめ

### 1 上瀧名裏神谷遺跡の集落址

ここでは約120mの間に16軒の竪穴住居跡が検出された。これらはいずれも古墳時代中期～後期初頭に属しており、一定期間に存続した集落を構成したものと考えられる。また竪穴住居以外の付属施設は全く検出出来なかったが、住居跡群の南端に位置する円形周溝遺構は住居跡と同一の特徴をもつ埋土が堆積することから、これに伴う可能性がある。竪穴住居跡は互いに近接あるいは適度な間隔をもって位置しており、重複するものはない。ただし、4号住居跡と6号住居跡や13号住居跡と14号住居跡のように、上層が重なり合うほど極めて近接するものも見られる。このことから、これらはすべてが同時存在ではなく、廃絶住居を意識しながら時間的に連続して営まれた結果と考えるべきだろう。

竪穴住居跡の時間的先後関係を示すものとして、煮沸・炊飯施設として炉をもつものとカマドを設けるものに分けられる。前者は12・15・16号住居跡で、他はすべて後者にあたる。ただし6号住居跡だけは炉とカマドを兼備する点で注目に値する。この両者は住居跡形態においても以下のような相違が認められる。すなわち、炉付設住居跡は歪んだ方形か長方形の平面形で、壁の掘り込みが検出面から30～10cmと浅く、平面規模も不均一である。特に6号住居跡は面積5㎡と極端に小さく実際には居住用として不適と考えられる。また柱穴も12号住居跡にのみ見られるが、同規模のカマド付設住居跡に比べて柱間寸法が広く不均等な点が指摘できる。一方カマド付設住居跡は、平面形が整った正方形で、面積や壁掘り込みの深さ等の規模がほぼ一定していることが大きな特徴である。しかも必ずカマドの右側に設けられる貯蔵穴の存在や住居対角線上のほぼ等間隔にある柱穴配置から、これらが一定の基準に従って構築された住居であることが伺える。この両者の相違は、16号住居跡のように一般の居住用住居ではなく特殊な用途のために構築された付属建物との理解も可能であるが、ここでは十分な面積を有して柱穴や貯蔵穴を具備した12号住居跡からも明らかのように、一般的な竪穴住居間における建築様式の違いと考えたい。

出土遺物は、住居内に遺棄されたもの、廃絶直後に投棄されたと考えられるものが比較的豊富に残されており、個々の竪穴住居跡出土土器の対比によって住居跡相互の先後関係を推定することが可能である。

土器は推定される用途から杯碗類、高杯類、甕類、甔、壺類の5種に大別される。これらは更に大きさや形状の違いによって細分され、各々が専用器あるいは多目的器として用いられたはずであるが、ここでは扁平の位置付けに必要な分類に止めておく。杯碗類は、口縁が小さく外折するものと、半球形のもの、須恵器蓋模倣杯（以下「模倣杯」と記す）があり、前2者には体部が高く鉢に近い形態（第74図5、第54図4）と浅い杯形（第16図4・5）が見られる。甕類は、口縁形態で有段と単口縁の2種、胴部形態で肩張り、球形、「葉」形の3種、更に底部は丸底と平底の2種に分類することができる。壺類は比較的少なく、大形平底壺（第61図12）、球形胴の埴形（第55図15）、須恵器の影響を受けたと思われる偏平丸底壺（第28図10）には代表される。高杯は杯部下端に稜をもち、やや膨らむ柱状の脚部と大きく開く脚部をもつ形態で、この中には杯部が深い鉢形（第75図15）、杯部と脚部が有段になるもの（第54図12～14）等のバリエーションが見られる。甔は概ね大小の2種に分けられ、大形品は壺形（第48図8）や角形把手付き（第55図16）など形態差が大きく容積にも大きなばらつきが見られる。この中では、小さく口縁が外反して胴上部からしだいに底部にむけてすぼまる形態（第17図12）が次第に定型化していくと想定されるが、須恵器を模倣したと思われる丁寧なヨコナデを施した例（第40図14）は、定型化の前段階をしめすものとして理解したい。

以上の土器分類をもとに、住居一括遺物のなかで各器種の組成をみると、これらは大きくA類、B類に2分することが出来る。両者を区分する示標は杯碗類の様相である。すなわち、前者は前段階における土師器鉢あるいは碗の系統に位置付けられる器高の深い碗が主体、後者は新来の要素として捉えられる模倣杯が過半を占める点に大きな相違がある。A類は12・15号住居跡出土土器、B類は1・2・10号住居跡出土土器に代表される。また甕については、A類ではやや肩の張る器形(15号住居跡 第91図21)が見られ、B類は「粟」形類部(2号住居跡 第16図8)のものが多いという特徴があげられる。ただしこれは傾向として捉えられるのであって、杯碗類ほど顕著な差異はない。むしろ中間形態の球形胴をもつものが両者に見られることから、甕については非常に緩やかな変化であったと考えられる。甕は新しい要素と思われる定型化した形態(2号住居跡 第17図12)がB類に含まれる。高杯と壺については新旧を判断する形態的特徴を見いだすことができないが、高杯はA類では主要組成器種であるのに対しB類ではこの組成からほとんど欠落する。これは前段階における高杯の占める比重の高さからすれば、大きな変化と考えるべきだろう。このように各器種での変化を見る限り、土器組成におけるA類とB類の相違は古新の時間的先後関係を捉えうることがあきらかである。なお、A類からB類への過渡の様相をしめすものとして6・9・11号住居跡出土土器をあげることができる。6号住居跡(第39・40図)でみられるように、杯碗類の組成に模倣杯が定着し、甕が定型化直前の形態(穿孔は打割による)をとることはこの時期の所産であることを裏付ける。またB類は、杯の様相は一律であるが、球胴の甕や高杯をもつものを分離できる可能性がある。以上の検討から本遺跡の土器変遷には少なくとも3〜4段階に細分することが可能である。これは群馬県内における須恵器模倣土師器の変遷を再整理された塚口 一氏の分類(註1)に照合すれば、A類-I段階、AB過渡期-I段階、B類-I段階に概ね該当しよう。ただし、B類における基本的な器種組成からの高杯の欠落は氏の想定するIV段階にはみられない要素であり、このことからB類を更に新しい段階に位置付け、A類とAB過渡期をII-IV段階に比定できる可能性もあり、検討を要する。あるいは、先述のようにB類を2分して前期を氏のIV段階にあて、後期をそれ以降に比定できる可能性もある。なお実年代については、5世紀後半〜6世紀初頭を含む時期と考えておきたい。

以上で検討した竪穴住居形態と土器編年を照合すると、炉付設住居の12・15・16号住居跡はA類、カマド付設住居のうち6・9・11号住居跡はAB過渡期、1・2・5・7・14号住居跡がB類にあたる。このうち12号住居跡は新しい形態の甕が見られることからAB過渡期に近い。また3・8・10号住居跡は高杯の存在と甕の形態からB類の古段階に位置付けられるだろう。

以上の段階設定から本遺跡の集落址は、5世紀後半代を中心にして3〜4段階に亘って営まれたと推定される。集落全域の調査ではないため、住居数の増減や宅地の変遷については推測の域を出ないが、その初期には炉を付設する竪穴住居数軒から構成され、次の段階から漸次軒数を増していったと思われる。また宅地については、南北約120mの短い範囲ではあるが段階を追う毎に北から南へ移動して次第に広がる傾向にあることが、調査区内を見る限りにおいて何うことができる。

## 2 三室間ノ谷遺跡の集落址

本遺跡で検出された11軒の竪穴住居跡はいずれも重複することはないが、出土土器を見る限りかなりの時間幅が想定される。Ⅲ区1・2号住居跡の2軒は炉付設住居で、他のⅡ区で検出された9軒はカマドを付設する。平面形態や柱穴、貯蔵穴等の構造や施設の様相についても、この両者には前節の上湯名裏神谷遺跡で見られたような相異がある。



出土土器は、前節の編年観に照応させてみると、A類に相当するものではなく、Ⅱ区1・2・8号住居跡がB類に属している。しかもこれは杯輪類に古相を残しながら壺と甔の形態が新しい段階の定型化したものを採用していること、高杯がほとんど見られないことからB類のなかでも新しい段階に位置付けられよう。また、Ⅲ区の2軒は小形壺を伴うことからA類よりも古段階におくことができ、Ⅱ区3・6・7号住居跡は模倣杯を主体とする器種構成をとることから、B類よりも新しい段階に位置付けられる。A類→B類を5世紀後半～6世紀初頭とすれば、Ⅱ区1・2号住居跡は5世紀前半、Ⅱ区1・2・8号住居跡は6世紀初頭、Ⅱ区3・6・7号住居跡は6世紀前半に比定できよう。なおⅡ区5号住居跡は7世紀第2四半期頃と推定される。

これより本遺跡の集落形成は5世紀前半代に始まり、100年近くの空白期間において再形成され、再び空白期間を経た後に堅穴住居跡が構築されて、以後は断絶する経過を辿ることが明らかとなった。

### 3 集落変遷と周辺の遺跡

上淵名裏神谷遺跡と三室間ノ谷遺跡は、小規模な谷を挟んで南北に約700m離れて位置するほぼ同時代の集落址であり、互いに相前後する時期あるいは同時期に営まれた可能性が高いことから、その成立や変遷については両者の密接な関係を想定して理解すべきと考える。

まず、ここでは両遺跡で検出された集落址の形成過程を1～4期に段階区分して整理してみたい。

第1期 5世紀前半に三室間ノ谷の小谷からやや入った位置にわずかな数(2～数件)の堅穴住居からなる小集落が形成された。これは継続せず短期間(一世代)で消滅する。

第2期 5世紀後半に上淵名裏神谷で、数軒からなる小規模な集落が出現する。これは6世紀初頭頃まで3～4段階の小区分期を経て存続する。集落規模は次第に拡大する傾向にあるが、以後は断絶する。

第3期 6世紀前半代に再び三室間ノ谷で集落が形成され、2小期にわたって存続するが、その後断絶する。

第4期 7世紀前半に、三室間ノ谷において少規模集落あるいは単独の堅穴住居が構築されるが、継続せずに断絶する。

以上の堅穴住居群の動向に見られるように、この両集落は同時存在した時期は限られている。6世紀初頭頃にその可能性は残すものの、全体的には互いの空白期間を交互に補完するように存在したと解釈される。この集落の形成主体が同一集団によるものと仮定すれば、三室間ノ谷地域から始められた少規模集落が、5世紀前半から6世紀半ばまでの期間に、小谷を隔てた上淵名裏神谷地域との間を交互に移動しながら存続したものと解釈されよう。また同一集団ではなかったにしても、この小支谷の開発を目的として断続的に集落形成が試みられた結果と考えられる。

この小集落形成の母体となったのは、三室間ノ谷遺跡の北北西に約400m離れた台地上に位置する伊勢崎東流通団地遺跡と推定される(第4図)。これは中川低地の最も水田経営に有利と思われる地点に形成された典型的な伝統集落である。ここでは古墳時代初頭に開始された集落形成が後期の段階で爆発的に拡大する経過を辿ることが指摘されている(註2)。すなわち、本遺跡で検出された古墳時代集落は、この伊勢崎東流通団地遺跡の動向とは決して無関係ではなく、集落の急激な拡大に先立って、生産量の増産のために新たな生産地(水田)の開発を目的として形成された新興集落と解釈される。この場合の生産地は、三室間ノ谷と上淵名裏神谷の間にある小支谷が中川低地と合流する地点と推定される。これは、上淵名裏神谷遺跡Ⅶ区や三室間ノ谷遺跡Ⅰ・Ⅳ区の調査で、集落と同時期の土器が多く出土しており、また6世紀初頭降下のFA火山灰下の黒泥土層からイネのプラントオパールが高い密度で検出されたことから裏付けられる。

本道跡の集落と同様に位置付けられるのが、中川低地の西側対岸に存在する十三宝塚道跡である。こゝでもほぼ同じ頃に集落が形成されるが、以後断絶し8世紀に官衙的建物や集落が形成されるまで空白となるようである(註3)。これも伝統的な集落(距離的に近い伊勢崎東流通団地遺跡か)からの分村と考えられるのではないかと。なお、本集落址に対応する墓域については隣接地では見られないが、東方約500mの地域で台地東半を南北に広く分布する下谷・瀧名古墳群やそのやや南方の下瀧名塚遺跡がこれに当たる可能性が高い。かつて下谷・瀧名古墳群は石室石材から7世紀を主とする群集墳と考えられていたが、下瀧名塚遺跡で5世紀代の群集墳が検出されたこと(註4)から、本道跡の集落と同時期の古墳(5世紀末～6世紀前半)が存在することは十分に考えられる。

#### 4 特殊な遺構と遺物について

上瀧名裏神谷道跡のⅡ区12号住居跡で検出された炉は、古墳時代に一般的な床面を浅く掘りこんだだけのものではなく、粘土を用いて立体的な構造を作り出す点で異質である。しかもこれは、焼土の分布状況から、燃焼部が片側に偏っており、あたかもカマドの袖のように粘土で囲む形状を示す。このカマドに類似した形状や出土土器が本地域におけるカマド出現期に属するものであることから、これをカマドの源初形態と捉えることも出来る。しかし、壁に設置していないこと、重要な構造要素である煙道が認められないことから、ここではカマドの範疇では捉えず、炉の特殊形態と解しておきたい。他にその理由として、群馬県内ではこの時期にすでに定型化したカマドを採用した地域があり、本地域で新たにカマドを導入するにあたっては完成された形態で採用され、過渡的な形態は存在しないと考えたいからである。これはカマドが本地域で独自に生み出されたものではなく、先進地域からの伝播によるものであることから当然のことだろう。従って12号住居跡の「炉」は、旧来の炉と同様の性格をもつものであり、既に完成されていたと思われるカマドを形状のみ模倣したものであろう。これこそ新たな技術に接触した時期特有の躊躇現象といえよう。一方6号住居跡で見られるように同一住居の中で、炉とカマドを併用、あるいは炉からカマドへの急激な転換を図った例もある。このように、同一集落の中でもカマド採用にあたっては決して一律でなかったことが分かる。

三空間ノ谷道跡Ⅰ区の谷堆積土から出土した木製品、加工木はいずれも出土層位から古墳時代の4～6世紀前半にかけての農具類、杖、板類で占められる。その中で特殊な用途が想定される「蓋<sup>あご</sup>」状の木製品(第179図1)が1点検出された。これは出土層位が比較的上位のFA火灰付近であることから、6世紀初～前半のものと考えられる。形状は腕木が6本で軸は37cmと長く先端に細い突起と受け部が作り出されている。この種の木製品は全国でも類例が少ないが、ここでは「蓋」の笠骨類品として扱う。全国から出土した「蓋」笠骨の集成を行った浅岡俊夫氏によれば、これは軸に貫通孔のないⅠ類に分類されている(註5)。ただし氏の指摘するように、本例は腕木先端に廻し骨を巡らすための挟りがなく先端を水平に面取りした形状は唯一例であることから、構造的復元がある程度可能な他の「蓋」の笠骨とは異なる用途も考えておく必要がある。これは、同じⅠ類とした西日本の例がいずれも弥生時代に属しており、6世紀前半代に位置付けられる本例とかなりの時間差がある点からもこれが異質であることを示唆している。また笠骨と想定した場合、腕木が下方に向き軸先端の突起部分が上位になるが、この突起はきゃしゃなため重量の重いものを組み合わせて支えるには不十分と思われる。むしろこの形状からは上下を逆にしてほぞ穴をもつ柄状具に載せる方がふさわしいのではないかと。ただしこの場合も、農具とは考え難いにしても具体的な用途に限定できるような類推資料がほとんどみられず、現段階では用途不明とせざるを得ない。今後は重要な要素と考えられる突起と対応するべきほぞ穴をもつ木製品との組み合わせについて検討を重ねていく必要がある。

<註>

- 1 1991 坂口 一 「土器型式変化の要因—群馬県における出現期の須恵器模倣土師器の様相—」『研究紀要』8 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2 1986 坂口 一 「伊勢崎東武通団地遺跡」『群馬県史 資料編2』
- 3 具体的な墓葬の態向については近年刊行予定の発掘調査報告書に従いたい。
- 4 1991 右高和夫他 「下沼名塚遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 1990 浅岡俊夫 「きぬがさの被討—出土木製笠骨をとおして—」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢』

# 遺物観察表

## 凡 例

- ここでは、遺物毎に出土遺物をまとめて記述し、番号は採回番号と一致する。
- 記述は、容積、法量、遺存状態、出土位置、製作技法、①胎土の特徴・材質②色調③地成④胎土の順で列記する。
- 法量の単位はcmあるいはcc、gで表し、小数点以下一桁（五割、銭貨は二桁）まで示す。なお、容積は実測箇の内径と口縁から底部までを5mm単位に分割した体積の合計によって求めた。
- 推定に基づくものは（ ）で示し、不明なものについては記述していない。
- 土器製作技法の用語は以下の解釈で使用している。  
 「ヘラズリ」 へら状具の刃で器面をそぎ落とす手法で、砂粒の移動痕を残す。  
 「ヘラミガキ」 器面が乾燥した状態で、へら状具・棒状具の先端付近で平滑にこする手法、光沢を帯びることが多い。  
 「ナデ」 器面をやや固らせて平滑に整える手法の総称で、横方向に回転しながら行うものを「ヨコナデ」、また使う道具によって「ヘラ（へら）ナデ」「ヌビ（指）ナデ」等に類別した。  
 「ハケメ」 板（板目）の小口で器面をそぎ落としたり、こする手法である。技法上の効果としては、ヘラズリに近いものからナデに近いものまで見られるが、ここでは特に分けなかった。
- 胎土の特徴は、肉眼による土器断面観察により、主に組織（径2mm以上）や砂（大粒は粗砂、小粒は細砂）の混入状態、粘土の特徴を記した。
- 色調の同定は、1991年版「新定標準土色帖」農林水産省農林水産技術会議事務局・朝日色彩研究所監修を用いた。
- 石材同定は飯島壽雄氏、樹種同定は津川レオ・ラが藤沢久氏にお願いした。

## 1 上淵名裏神谷遺跡出土遺物

### 1号住居跡出土遺物（第11-12図 PL37）

1	杯	口12.9高5.5 口縁一体約1/4欠 底外面は一方基調のヘラズリ、口縁ヨコナデ。内面はナデ。①赤褐色粒と細砂を含む②橙 (5YR6/6) ③やや硬質、均一④内面のみに組織が濃い
2	碗	口13.1高6.1 口縁一体約1/3欠 南東隅、床面より8cm上 底外面は中央が多方向、周縁が同心円状のヘラズリ。内面は平滑な工具による横状ナデ。口縁一半にヨコナデ。①赤褐色粒と粗～細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③やや不均一④内外面に刺痕が見られる
3	杯	口13.0高6.0 完形 床直 底外面は乾燥が進んだ段階で多方向のヘラズリ。底内面は平滑な工具を用いたと思われるナデ。口縁ヨコナデ。①粗砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや硬質、底外面に黒斑あり
4	杯	口12.5高 (6.3) 口縁1/4欠 カマド燃焼部 底外面は一方基調のヘラズリ、口縁ヨコナデ。内面ナデ。①赤褐色組織と粗～細砂を含む②橙 (5YR6/6) ③軟調、二次的加熱を受ける④底外面に粘土付着
5	杯	口13.0高5.8 口縁の一部欠 南東隅、床面よりやや高く底外面は全体に時計回り基調のヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面ナデ。底内面はやや凸出あり。口縁下の縁は鋭く丸い。①粗～細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや軟調、二次的加熱の可能性あり
6	杯	口 (14.0) 高4.5 口縁一体約1/2破片 東壁際 底外面は反時計回りのヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面はナデと思われるが不明瞭。口縁下の縁は鋭く突出しない。①細砂～粗砂が多い②赤褐 (2.5YR4/6) ③やや軟調、均一
7	杯	口 (13.0) 高5.5 口縁一体約1/2破片 東壁際 底外面は中央部が不定方向、周縁が時計回り基調のヘラズリ。口縁～底内面にヨコナデ。口縁下の縁は鋭く突出する。①粗砂を少量含む②橙 (5YR7/8) ③やや硬質、均一
8	杯	口 (13.0) 高 (6.4) 口縁一体約1/3破片 東壁際 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面は全体に丁寧なナデ。口縁下の縁は強く沈み状。①細砂を含む②橙 (5YR6/6) ③軟調、口縁の一部に黒斑
9	杯	口 (12.8) 高 (5.6) 口縁～底約1/4破片 底外面のヘラズリは不明瞭。口縁～底内面にヨコナデ。口縁下の縁は弱い。①赤褐色粒と細砂を含む②橙 (2.5YR6/4) ③やや軟調、均一
10	杯	口 (11.2) 高5.1 口縁～底約1/2破片 底外面は時計回り基調のヘラズリ。口縁～底内面にヨコナデ。口縁下の縁は小さく突出し、沈み状。①赤褐色粒が目立つ粗～細砂を含む②赤 (5YR6/4) ③硬質、底外面に黒斑
11	杯	口径、高さ不明 口縁～底小破片 底外面は乾燥が進んだ段階でヘラズリ。底中央はケズリで平底を作る。内面ナデ。口縁下の縁は弱い。①細砂を含む②赤褐 (2.5YR4/6) ③やや硬質④二次的加熱を受ける
12	埴	口径、高さ不明 別部2/3破片 東壁際に散乱 外面は横ヘラズリ。肩部内面に絞り目を残す。側内面はナデ。①粗～細砂を含む②明赤褐 (5YR5/6) ③やや軟調、均一
13	罍	口13.0高18.2腹5.5容178cc 胴一部欠 貯蔵穴欠 外面はヘラ状具によるナデ。内面は同工具による丁寧な横状のナデ。口縁ヨコナデ。①粗砂～組織が多い②明赤褐 (2.5YR5/6) ③ヨコナデ④二次的加熱を受ける⑤腹外面に粘土付着
14	罍	底7.4 胴下半部約1/3破片 東壁際に散乱 外面は胴中位縦ナデ、下半斜ヘラズリ。底面粗いナデ。内面は平滑なヘラ状具で横状ナデ。①組織、粗砂が多い②赤 (10YR7/4) ③普通④側外面上に煤、全体に粘土付着

2号住居跡出土遺物 (第16・17図 PL37・38)

1 杯	口13.0高6.0 口縁1/4欠 南東隅床直 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面にヨコナデ。口縁下は横は高い。 ①赤褐色粒の多い粗-細砂を多く含む②燧 (5.YR7/8) ③やや軟調
2 杯	口12.0高6.0 定形 床面から12cm上 底外面は乾燥が進んだ段階で時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面にヨコナデ。口縁下は横は小さく低い。 ①赤褐色粒の目立つ粗-細砂を多く含む②燧-赤燧 (5.YR6/-2.5YR4/8) ③硬調、均一
3 杯	口13.0高6.0 口縁と底の一部欠 カマド遺残部 外面底部中央のみヘラケズリ。他はナデ。内面はヘラミガキの痕跡をわずかに残す。 ①粗砂を含む②燧 (2.5YR6/6) ③普通、均一④断面に粘土付着、支脚として再利用
4 杯	口13.4高4.9 定形 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。内面は右上がりのヘラミガキ。 ①粗砂-細砂を多く含む②燧 (2.5YR7/6) ③やや硬調、口縁の一部に黒斑
5 杯	口14.1高5.5 定形 床中央 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。内面はナデ後半上を右上がりヘラミガキ。口縁ヨコナデ。 ①赤褐色粒と粗砂を多く含む②燧 (2.5YR6/6) ③やや硬調
6 杯	口 (12.2) 高 (5.5) 口縁-底約1/3破片 カマド内 底外面は一方向基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。内面はナデ。口縁下は横は小さい。 ①赤褐色粒の多い粗-細砂を多く含む②黄燧 (7.5YR7/8) ③やや硬調、均一
7 杯	口 (13.2) 高さ不明 口縁-底約1/3破片 底外面は乾燥が進んだ段階でのヘラケズリ。内面はまばらな放射状ヘラミガキ。 ①軽石の多い粗砂を含む②明赤燧 (5.YR5/8) ③普通、均一
8 羹	口18.4高30.3底6.8貯785cc 定形 カマド器設部 胴下位は横筋ヘラケズリ。他はヘラケズリによるナデ。内面はヘラケズリによる丁寧なナデ。 ①粗砂-細砂を多く含む②白い燧 (7.5YR7/4) ③均一、やや硬調④外面全体に粘土付着、内面耐熱塗あり
9 羹	口17.8-16.8高31.0底6.5貯7010cc 口縁と胴一部欠 西隅床直 外面は軟質な布状具によるナデ。内面はヘラケズリによる粗いナデ。胴下部の接合部を明瞭に残し、この部分接合時に歪んだらしい。歪み補正のため底面に粘土塊を付す。 ①粗砂を多く含む②白い燧 (7.5YR7/4) ③胴相対位置に黒斑、下部は二次的大熱を受ける④胴部以下の外面に粘土と塗着
10 鉢	口12.3高10.1 口縁と底の一部欠 カマド遺残部 外面は横ヘラケズリ。内面はヘラケズリによるナデと粗いヘラミガキ。口縁ヨコナデ。底外面はヘラケズリで成形。 ①細燧、粗砂を含む②明赤燧 (2.5YR3/6) ③普通④断面に粘土付着
11 瓶	口19.0高12.3口径7.2容2281cc 口縁1/2欠 カマド 外面は横ヘラケズリ。内面は横位の丁寧なナデ。底孔は乾燥後に穿孔。 ①白色粘土粒、赤褐色底質が目立つ②白い赤燧 (5.YR5/4) ③やや硬調、一部に黒斑④体下部の膨らみ部分にやや摩耗あり。
12 瓶	口26.9-28.7高30.6口径8.8-9.3容9624cc 定形 貯蔵穴 外面は右上がり。内面は左上がりのヘラケズリ。比較的乾燥が進んだ段階で割っており、外面には割りに残った部分もある。 ①やや硬調で、軽石の多い粗砂を含む②燧 (5.YR6/6) ③体下部の膨らみ部分に黒斑あり
13 勾玉	長3.55厚0.50口径0.23 定形 板状の素材から磨削によって形状を作り出す。胴部の穿孔は一方から行う。胴縁の割縁は着色していることから、製時のもか。 ①赤褐色粒や黄色の微細粒を含む滑石

3号住居跡出土遺物 (第21・22・23・24図 PL38・39)

1 杯	口13.1高5.1 口縁1/4欠 南東壁型土下位 底外面は乾燥が進んだ段階で反時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。底内面はナデ、やや凹凸あり。口縁下横はヘラケズリによって角張る。 ①断面に粘土と赤褐色の細燧を含む②燧 (7.5YR6/6) ③やや硬調、底外面一部に黒斑
2 杯	口11.8高6.3 口縁一部欠 カマド右袖端 底外面は不定方向のヘラケズリ。ヘラ先による十字状の割痕あり。口縁ヨコナデ。底内面はナデ後側のヘラミガキ。 ①細燧-粗砂を多く含む②燧 (7.5YR6/6) ③硬調、外面は赤燧
3 杯	口12.6高2.2 口縁1/4欠 カマド左隅床直 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。口縁ヨコナデ。口縁下は小さく突出する。 ①やや軟質な粘土に赤褐色の細燧と粗-細砂を含む②燧 (5.YR6/6) ③硬調
4 杯	口12.1高2.2 口縁約1/3欠 南東壁型土 口縁はやや肥厚して内側気味に立ち上がる。底外面は乾燥が進んだ段階で反時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面にヨコナデ。口縁下横は小さく突出する。 ①赤褐色粒の多い粗-細砂を含む②明赤燧 (5.YR4/8) ③やや硬調
5 杯	口13.0高5.3 口縁一部欠 北東隅床直 口唇部は小さく曲がり、やや外傾する。底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面ヨコナデ。口縁下横は丸みが高い。 ①緻密な粘土に赤褐色の細燧と粗-細砂を多く含む②燧 (5.YR6/6) ③普通
6 杯	口13.3高5.8 口縁一部欠 西隅床直 口縁はやや肥厚して内側。底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面ヨコナデ。底内面は凹凸を残す。口縁下横は強い段状。 ①赤褐色の細燧と粗-細砂を多く含む②燧 (5.YR6/6) ③やや硬調
7 杯	口14.5高7.2 定形 カマド付近土 口唇部に小さな面取り。底外面中央部は不定方向、周縁は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面ヨコナデ。 ①赤褐色粒と粗-細砂を多く含む②燧 (7.5YR6/6) ③やや硬調④口縁内面に約1/3に長さ2mmの楕円形圧痕が並ぶ。
8 杯	口12.5高6.4 定形 中央床直 底外面は乾燥が進んだ段階で時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面ヨコナデ。口縁下横はやや角張る。 ①赤褐色粒の多い粗-細砂を含む②明赤燧 (2.5YR5/6) ③やや硬調、内面黒斑④底外面の割縁は型造りの粘土板接合部。
9 杯	口 (12.5) 高4.8 口縁-底約1/3欠 埋土下層 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面にヨコナデ。底内面中央は凹凸あり。口縁下横は段状で低い。 ①緻密な粘土に細砂を少量含む②白い燧 (5.YR7/4) ③普通、均一
10 杯	口 (14.7) 高5.2底5.7 口唇一部欠 カマド 小さな平底で、その周縁はヘラケズリ。体部はナデ。内面はヘラケズリによるナデ。口縁下横は小さく比較的段をなす。 ①細燧-粗砂を多く含む②黄燧 (5.YR8/4) ③二次的大熱を受けて焼④内外面に粘土付着
11 杯	口 (13.3) 高6.1 口縁-底1/3破片 埋土下層 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁反時計回りのヨコナデ。口縁下横は小さく突出する。 ①赤褐色粒の多い粗-細砂を含む②燧 (2.5YR6/6) ③やや軟調、二次的大熱を受ける

遺物観察表

12	杯	口(14.2) 高5.0 口縁-底1/3破片 埋土 底外面は乾燥が進んだ段階でヘラケズリ。内面はヘラ具による粗いミガキとナデ。①やや粗い粘土に粗い細砂を含む②燈(2.5YR6/6)③やや軟調
13	高杯	底15.0 杯部と脚部一部欠 壘障埋土下層 内外面ともナデ。脚部内面に絞りを残す。①細織と粗砂を多く含む②燈(5 YR6/6)③やや硬調と均一
14	高杯	脚径(11.6) 脚1/2破片 南東壘障埋土下位 脚内面に弱い絞りを残す。外面に弱いヘラミガキ。裾部ココナデ。①やや緻密な粘土に粗砂を含む②明赤帯(2.5YR5/6)③やや硬調
15	高杯	杯部-脚部破片 南東壘障埋土中位 脚部内面は横ヘラケズリ。外面は杯部下面にハケ目を施した後まばらなヘラミガキ。杯部内面もまばらな放射状ヘラミガキ。①細織と粗砂を含む②燈(2.5YR6/6)③やや硬調、均一
16	高杯	脚柱部破片 南東壘障埋土下位 脚部内面は丁寧なヘラケズリ。外面はまばらなヘラミガキ。①やや緻密な粘土に粗砂を多く含む②燈(7.5YR6/6)③硬調、外面に二次的の火熱を受ける④カマド支脚として再利用された可能性あり
17	高杯	杯部約1/3破片 東壘障埋土 内外面ココナデ。杯部底外面は横ヘラケズリ。①粗い粘土に粗砂を多く含む②にぶい燈(7.5YR7/4)③普通、外面一部に二次的の火熱あり
18	川	口(10.9) 口縁約2/3破片 埋土 内外面ココナデの後まばらなヘラミガキ。①やや緻密な粘土に粗い細砂を含む②にぶい燈(5 YR6/4)③やや硬調
19	底部破片	南東壘障埋土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。体中位はナデと思われる。底内面はナデと粗いヘラミガキ。①細織を多く含む②明赤帯(2.5YR5/6)③普通、均一
20	甕	口13.8-13.0 高17.4 底6.5 容1522cc 口縁一部欠 中央床直 体上半は縦の弱いハケ目、下半は斜位のナデ。底部はヘラケズリで整形する。内面は平滑な工具でナデ。口縁ココナデ。底面はヘラ先でケズリ ①細織を多く含む②浅黄橙-黄灰色③硬調、全体に二次的の火熱を受け、口縁は焼き歪む
21	甕	口12.0 胴下半部欠 埋土 胴外面は粗いナデとミガキ。内面は粗いナデで2-2.5cm幅の粘土縦接合痕を残す。口縁ココナデ。①細織を多く含む②にぶい燈(5 YR7/4)③普通、均一④口縁外面に炭化物がわずかに付着
22	甕	口(13.5) 高17.3 底6.9 容(2123) cc 口縁-胴約3/4欠 床直 外面は胴下半の接合部分のみヘラケズリ。他はナデ。内面はヘラ具による横位ナデ。①粗い細砂を多く含む②燈(5 YR6/6)③普通、口縁の一部黒炭④胴下半外面にわずかに煤付着
23	甕	口14.5 口縁-肩部破片 カマド右脇 外面は浅いハケ目、内面は板状具小口面によるナデ。口縁ココナデ。①細織-粗砂を多く含む②明赤帯(2.5YR5/6)③硬調、二次的の火熱を受ける④内外面に粘土付着
24	甕	底6.5 容(1580) cc 口縁の大部分欠 床直埋土 胴上半は縦ハケ目、下半は斜ヘラケズリ。内面はヘラ具によるナデ。底は焼成後に打割により穿孔する。①細織を多く含む②明赤帯(2.5YR5/6)④二次的の火熱を受ける④内外面に粘土付着
25	甕	口22.5 高21.7 孔7.8 容4512cc 変形 床直 胴上半外面は粗いナデ、下半は斜位ヘラケズリ、内面は斜位ヘラケズリ。底は細かいた打割で線部を調整する。①粗い細砂を多く含む②にぶい燈(5 YR7/4)③普通④外面下半に煤付着
26	甕	口18.5 口縁-胴上半約1/2破片 埋土下層 胴外面は布状具によるナデ。内面は平滑な板状具によるナデ。①細織を多く含む②燈(2.5YR6/8)③普通、二次的の火熱により赤変
27	甕	口(18.4) 口縁-胴上半約1/2破片 埋土 胴外面は縦ハケ目。内面は小口面の平滑な工具による横位のナデ。口縁ココナデ。①細織を多く含む②にぶい赤帯(5 YR5/4)③二次的の火熱をうけい
28	甕	口(14.2) 口縁-体上半約1/2破片 南壘障埋土 縦の細かいたハケ目を施す。内面は横ヘラケズリ。口縁ココナデ。①細織を多く含む②燈(2.5YR6/6)④全体に二次的の火熱を受ける
29	甕	底7.5 底部破片 南東壘障埋土 底面は無調整で弱い上げ底状。体下層は指摺押圧により成形。内面ナデ。①細織-粗砂を含む②燈(7.5YR7/6)③普通④外面に煤付着
30	甕(瓶)	口(16.9) 口縁-胴上半約1/4破片 床直 外面は横位ヘラケズリと粗いナデ。内面は縦ヘラケズリ。①細織を多く含む②暗赤褐色③二次的の火熱を強く受け、口縁は発泡して歪む
31	甕	口(14.5) 口縁-胴上半約1/4破片 埋土 外面は平滑な工具による横位ナデ。内面は板状具小口面による横位ナデ。①細織-粗砂を多く含む②にぶい赤帯(2.5YR5/4)③二次的の火熱を強く受け、やや乾割④胴外面全体に煤付着
32	甕	口19.5 口縁-胴上半約1/2破片 カマド前床直 外面の口縁は横位。胴は縦のナデ。内面は浅い横位ヘラケズリ。①細織-粗砂を多く含む②にぶい赤帯(2.5YR5/4)④二次的の火熱を受ける④肩部外面に粘土付着
33	甕	口(12.5) 高16.4 底6.2 容1857cc 口縁の大部分と体1/3欠 中央床直 体外面は弱いヘラミガキ。内面は平滑な工具によるナデ。口部部ココナデ。底面ヘラケズリ。①粗い細砂を含む②にぶい燈-黄灰色③軟調で微く、内外面とも2/3が透光
34	甕	口(14.3) 体上半約1/2破片 埋土 外面は斜位。内面は横位の粗いハケ目。口縁ココナデ。内面に5段の粘土縦接合痕を残す。①粗砂を多く含む②にぶい黄褐色③普通
35	緑形模造品	径3.2 孔0.4 厚0.5 変形 埋土 表面と側縁を研磨。片側からの回転穿孔。①緑色片岩
36	緑形模造品	径4.3 孔1.4 孔0.3 厚0.4 変形 壘障埋土 表面と側縁を研磨した後、片側からの回転穿孔。①緑色片岩
37	緑形模造品	径3.7 孔0.3 厚0.6 変形 壘障埋土 表面は研磨で端と基を表現する。側縁は基部分を研磨。①滑石
38	緑形模造品	径3.9 孔1.9 厚0.6 変形 壘障埋土 表面は研磨で端と基を表現する。基部分は小さく成形時の刺痕を残す。①滑石

4号住居跡出土遺物(第28-29図 PL39)

1	甕	口13.8 高7.0 口縁約1/3欠 カマド 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁外面は横位ナデ。内面はヘラ具による斜位のナデ。①赤褐色の粗砂を多く含む②にぶい燈(5 YR6/4)③普通、均一
2	杯	口(12.5) 高5.1 口縁-底約1/3破片 中央部床直 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁-底内面中位にココナデ。底内面中央はやや凸凹あり。口縁は内湾し、口縁下の縁は小さく突出する。①赤褐色粒の細織と粗い細砂を多く含む②燈(2.5YR6/6)③やや軟調、均一

3	杯	口13.1高5.6 口縁約2/3欠 カマド焼残部 底外面はヘラズリを施すが、摩滅のため不明。口縁下の縁は沈線状の段で鋭く突出する。①粗～細砂を含む②赤褐色(5 YR6/6)③普通、底中央に黒炭
4	杯	口(13.0) 高5.7 口縁～底約1/2破片 埴土 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁～内面はヨコナデ。口縁上半は鋭く内湾し、口唇部は内側に小さな面取り。口縁下の縁は小さく突出する。①赤褐色の多い粗～細砂を含む②(5 YR6/6)③やや軟調で、均一
5	杯	口(13.8) 高4.7 口縁～底約1/3破片 埴土 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁～内面はヨコナデ。口縁下の縁は段状。①赤褐色の多い粗～細砂を含む②(5 YR6/4)③普通、均一
6	杯	口(13.8) 高さ不明 口縁～底約1/5破片 埴土 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁～内面ヨコナデ。口縁下縁は鋭く丸い。①赤褐色の細粒と粗～細砂を含む②(5 YR6/6)③やや軟調
7	碗	口(13.0) 高さ不明 口縁～底約1/5破片 埴土 口縁は内湾気味に強く屈曲し、体上位までヨコナデ。底外面は時計回り基調のヘラズリ。内面はヨコナデ後倒位の暗文状ヘラミダキ。①ややきめの粗い粘土に粗砂～細砂を含む②(2.5YR6/6)③やや軟調。器壁は還元気味
8	(埋)	底4.5～4.8 側下半破片 埴土 側下半外面は左上方へのヘラズリ。底面はヘラズリにより上げ底に作る。内面はヘラ状具あるいは平滑な板状具による横位のナデ。胴中位の器厚は不均一。①きめの粗い粘土に赤褐色の細粒と細砂を含む②(2.5YR6/8)③やや軟調。均一
9	(埋)	底部破片 埴土 側下半外面は左方へのヘラズリ。底面はヘラズリで不安定な小さい平底を作る。内面は平滑な板状具の小口面によるナデ。①きめの粗い粘土に赤褐色の細粒と細砂を含む②(5 YR7/6)③軟調、二次的加熱を受けた可能性あり
10	埴	口(9.9) 胴最大幅16.3高16.2 口縁2/3と胴部約1/4欠 埴土 胴部下半～底は一方基調のヘラズリ。口縁～胴上半は丁寧なナデ。胴内面は下半が板状具によるナデ。上半には頂部成形時の絞り目を残す。①赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③やや軟調。一部に黒炭
11	甕	口(18.8) 口縁～肩部約1/5破片 埴土 口縁～腹部外面に縦ハゲ目、肩部は斜ハゲ目。口縁内面は横ハゲ目。胴内面は平滑な工具によるナデ。①きめの粗い粘土に粗砂を多く含む②(7.5YR6/3)③普通、二次的加熱を受ける④外面に粘土が付着
12	甕	口(12.2) 口縁～胴上半約1/5破片 埴土 胴外面は斜ヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面はヘラ状具によるナデ。①きめの粗い粘土に粗砂を多く含む②淡黄橙(10YR8/3)③軟調。均一
13	甕	底(8.0) 底部約1/3破片 埴土 外面はナデと浅いハゲ目。底面は浅いヘラズリで整形。内面はナデ。①赤褐色の多い粗～細砂を含む②(5 YR7/2)③普通、内面はやや還元④内面は細かな割傷が見られる
14	勾玉	長3.3幅1.3厚0.4丸口2.2 完形 埴土 衣表面と胴縁を粗く研磨。頸部の孔は一方からの回転穿孔。①灰白色の滑石
15	環	長15.5或400g 自然磨を整形しないで用いる。背の中央部に長さ5ミリ前後の横方向の打痕が多数残る。①灰色安山岩
16	磁石	長12.8或540g 自然磨衣表面の凸部分に敲打痕が多く残る。摩滅痕は不明確。①黄質安山岩

## 5号住居跡出土遺物(第34・35図 PL40)

1	(埋)	計測不能 側下半破片 南東壁跡土下層 跡面に残る「型はだ」状の痕を残す。「型」使用による成形の可能性あり。底外面にヘラ状具先遣による粗いナデ。内面はヘラ状具による横位ナデ。①粗砂を多く含む②(7.5YR7/6)③普通、外面一部黒炭
2	杯	口13.6高6.4 口縁約1/2欠 貯蔵穴壁床直 底外面は時計回り基調の細かいヘラズリ。口縁～内面はヨコナデ。口縁下の縁は小さく突出する。①赤褐色の多い粗～細砂を含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通
3	碗	口11.2高6.1 口縁約1/4欠 埴土 底外面は往復方向、体部は時計回りの細かいヘラズリ。口縁～内面中はヨコナデ。口縁は鋭く外反し、口縁下の縁はなく曲線的に屈曲する。①赤褐色の細粒～粗砂を含む②(2.5YR4/4)③普通
4	杯	口12.7高5.7 口縁一部欠 床直 底外面のみ乾燥が進んだ段階で反時計回り基調の細かいヘラズリ。体外面は無調整。内面は平滑な工具による横位ナデ。口縁はヨコナデで中位にわずかな後縁を残す。①赤褐色の粗砂、片岩質の細砂を含む②(10YR5/2)③やや軟調
5	杯	口(13.8) 高5.2 口縁～底約1/2破片 カマド左輪軸埴土 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。底部はヘラズリで小さな平底に成形する。口唇上半は小さな面取り。口縁下の縁は小さく突出する。底内面はくぼみ、平滑な板状具によるナデ。①赤褐色の多い粗～細砂を含む②(5 YR6/8)③普通、口縁に焼き跡みあり
6	杯	口12.8高5.9 口縁～底約1/3欠 南東壁跡土下層 底外面は二方向基調のヘラズリ。口縁～内面はヨコナデ。体部外面にわずかに縦線を残す。①赤褐色の細粒と粗砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③焼きむらあるいは二次的加熱の可能性あり④底外面に窪付痕
7	杯	口(13.0) 高5.5 口縁約1/2欠 東隅床直 口縁下の最大幅部分に「型はだ」状の痕を残す。底外面中央のみ反時計回り基調のヘラズリ。ヘラズリによりやや上げ底。口縁～内面ヨコナデ。①赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②(5 YR6/8)③普通、均一
8	杯	口(11.3) 高5.4 口縁約2/3欠 南東壁跡埴土 口縁下に「型はだ」状の痕を残す。底外面は時計回り基調のヘラズリ。口縁ヨコナデ。①赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②(2.5YR6/6)③普通、ムラあり④やや軟調⑤底外面に窪付痕
9	杯	口(13.9) 高(5.8) 口縁～底約1/3破片 南東壁跡埴土 底外面は乾燥が進んだ段階でヘラズリ。口縁～内面ヨコナデ。口縁下の縁は丸み強い。①やや緻密な粘土に赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②(5 YR6/8)③普通
10	杯	口(12.5) 高5.8 口縁～底約1/3破片 南東壁跡埴土 底外面は時計回り基調のヘラズリ。口縁～内面ヨコナデ。口縁下の縁は小さく突出する。①赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/8)③普通
11	杯	口(14.7) 高6.2 口縁約2/3欠 南東壁跡埴土 底外面中央が一方向。周縁は時計回り基調のヘラズリ。口縁～内面ヨコナデ。口縁下の縁は鋭い段状。①赤褐色の細粒と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通、二次的加熱を受けたか

遺物観察表

12	杯	口(12.4) 高さ不明 口縁-底約1/4破片 カマド手前床直 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデ。口縁下の壁は小さく突出する。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6) ③やや軟調、均一
13	鉢	口(9.3) 口縁-体上半破片 埋土 外面の体下位と肩最大幅部に横ヘラケズリ。他はナデ。口縁ヨコナデ。内面は平滑な工具によるナデ。①きめの粗い粘土に細砂を含む②ぶい橙(7.5YR5/4) ③やや軟調、外面に洗い黒斑
14	埴	計測不能 胴部約1/3破片 若殿穴直 外面は丁寧なナデの後、下半は横ヘラケズリ、上半は横いへラミガキ。胴部内面に絞り目を残す。他はナデ。①赤褐色の目立つ粗-細砂を含む②ぶい赤褐(2.5YR4/4) ③普通、均一
15	甕	口(14.2) 高14.79厚188cc 口縁-体約1/2欠 東端床直 外面は口縁ヨコナデの後左上方向のヘラケズリ。内面は平滑な板状具小口面による横位ナデ。底面は一方ヘラケズリで平らな丸底状に整形する。①細礫-粗砂を多く含む②ぶい橙(7.5YR5/4) ③二次的加熱を受け、強い④底外面に粘土付着
16	甕	底8.2 胴下半-底約3/4破片 カマド燃焼部 外面は板状具小口面による横位のナデ。内面は同工具による横位ナデ。底面はヘラケズリで不安定な平底に整形。①細礫-粗砂を多く含む②明赤褐(5 YR5/8) ③普通④粘土付着
17	甕	底8.4 底破片 カマド左脇 底面は周縁がわずかに盛り上がり、上げ状を示す。外面は板状具小口面によるナデ、内面整形不明。①チャート、軽石、変岩等の細礫を含む②橙(7.5YR7/6) ③二次的加熱を受ける
18	管玉	長2.2径0.57孔径0.16 完形 北隅穴直 側面と端面を粗い研磨で整形。やや扁平。孔はほぼ中央に両方向から穿つ。①絶紋岩②オリーブ灰色だが、表面は白灰
19	白玉	径0.63厚0.35孔径0.16 完形 南東壁埋土 側面を粗い研磨で整形。表面面は割痕を残す。穿孔は分割する以前と思われる。①滑石②オリーブ黒
20	白玉	径0.49厚0.26孔径0.17 完形 埋土 側面を粗い研磨で整形。表面面はわずかに研磨。穿孔は分割以前か。開孔部は貫粒によると思われる摩滅が見られる。①滑石②オリーブ黒
21	白玉	径0.50厚0.29孔径0.20 完形 埋土 側面を粗い研磨。表面面は摩滅か。穿孔は分割以前と思われる。①滑石②オリーブ黒
22	鉋形模造品	長4.36幅1.79厚0.33孔径0.20 完形 カマド突口床直 表面面、側縁とも粗い研磨で整形。穿孔は一方。①絶紋岩②黒灰
23	鉋形模造品	長4.36幅2.09厚0.53 完形 カマド 突口床直 表面面、側縁とも粗い研磨で整形し、割痕を残す。穿孔前の未製品か。①絶紋岩②オリーブ灰

6号住居跡出土遺物(第39・40図 PL40・41)

1	杯	口15.8高5.3 完形 カマド燃焼部 口縁は強く屈曲して立ち上がる。底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ後放射状ヘラミガキ。①細礫-粗砂を多く含む②ぶい黄橙(10YR7/4) ③外面は二次的加熱を受けて赤変する
2	碗	口13.0高7.08径4.5-4.8 完形 南東壁埋土直 口縁は小さく外傾し、内面に強い稜を作り出す。胴上半はヨコナデ、下半は横位ヘラケズリ。底面はほとんど無調整。内面は板状具小口面による横位ナデの後、布状具によるナデ。①細礫-粗砂を多く含む②黄橙(10YR8/4) ③普通④内面に粘土が付着するが、これは遺棄以後のものである
3	鉢	口14.5高8.78径9.9 完形 カマド燃焼部 体部は左下方向のヘラケズリ。底面はヘラケズリで不安定な平底を形成する。内面は底付近をヘラケズリ、他は横位ナデ。①細礫-粗砂を含む②ぶい黄橙(10YR7/4) ③普通④109号高杯と重ねて伏せ、支脚として再利用
4	杯	口(15.0) 高(6.3) 口縁-底約2/3破片 南隅床直 口縁全体に歪みあり。底外面は反時計回り基調と思われるヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデ。体部外面は無調整部分を残す。①きめの粗い粘土に赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②黄橙(10YR8/4) ③二次的加熱を受ける④内外面に粘土付着
5	碗	口11.7高5.3 口縁-底約1/2破片 埋土 底外面に縦横のヘラケズリ。口縁-内面はヨコナデ。①ややきめの粗い粘土に粗-細砂を含む②明赤褐(2.5YR5/6) ③二次的加熱を受ける
6	杯	口14.0高5.7 口縁-底約1/3破片 埋土 底外面に時計回り基調のヘラケズリと思われるが、不明瞭。口縁-内面ヨコナデ。口縁下の壁は小さく突出する。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(5 YR6/6) ③やや軟調で均一
7	杯	口(12.3) 口縁-底約1/6破片 埋土 底外面は時計回り基調と思われるヘラケズリ。内面整形は不明。①白色岩石片、赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐(5 YR5/6) ③やや軟調、均一
8	杯	口(13.9) 高(5.0) 口縁-底約1/6破片 埋土 反時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。口縁下の壁は弱い。①やや緻密な粘土に赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(7.5YR7/6) ③やや軟調
9	甕	口13.0 口縁-胴上半約1/2破片 埋土 口縁ヨコナデ。胴外面はナデの後、縦位のまばらなヘラミガキ。胴内面はヘラ状具によるナデ。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(5 YR6/5) ③やや軟調で不均一
10	高杯	口16.6杯部高5.5 脚部欠 カマド燃焼部 内外面ヨコナデの後内面と底外面に板状具小口面による放射状の浅いナデ。①白色粘土を混合しており、赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(5 YR6/6) ③外面は還元、カマド内での二次的使用によるものか
11	埴	胴最大幅15.7 口縁-胴上位欠 カマド突口床直、埋土 底外面はヘラケズリ、胴部外面整形不明。内面は布状具使用による横位ナデ ①やや粗い粘土に粗-細砂を含む②ぶい橙(5 YR7/4) ③普通、外面一部に黒斑
12	埴	胴最大幅(13.2) 口縁-底約1/3破片 埋土 外面は横位ヘラケズリ後粗いヘラミガキ。内面はナデか。①ややきめの粗い粘土に細礫-粗砂を含む②灰白(10YR8/2) ③二次的加熱を受けて艶削
13	甕	口19.1高32.0底7.8 完形 カマド燃焼部-器底部 外面に浅いハケ目の後粗いナデ。内面は斜位の浅いハケ目。底面はナデ。①細礫と粗砂を多く含む②ぶい橙(7.5YR7/3) ③外面に黒斑や二次的加熱あり④外面全体に粘土付着
14	甕	口26.4高25.9孔径9.6器口15cc 口縁と体一部欠 体部外面上半は斜位、縦位のナデ。下半は横位ヘラケズリ。内面は横位ナデ。底部の孔は焼成後の打割で穿孔あるいは整形を行っている。①やや緻密な粘土に粗-細砂を含む②黄橙(10 YR8/4) ③やや軟調、体部外面の中心以上は二次的加熱を受けた可能性がある。④灰化物付着は認められないが、内面割痕が深い



15	砥石	長5.2幅3.6厚2.6 表面、両側面とも使用しており、小口面は摩滅しているが、研痕はない。①砥石目、目が粗く、1ミリ以下の黒色・白色砥物を含む。
----	----	---

### 7号住居跡出土遺物 (第45回 PL41)

1	杯	口12.7高5.4 口縁1/4欠 埋土 底外面に乾燥が進んだ状態で反時計回り基調の粗いヘラケズリ。口縁-内面上半にヨコナデ。底内面に凹凸あり。①赤褐色の細砂と粗～細砂を含む②澄 (5 YR6/6) ③軟調で、均一
2	杓	口11.5高さ不明 口縁約4/5破片 カマド突口床直 外面中位で鋭い段をつくる。肩部内面には1.5cm幅の粘土帯接合痕を残す。外面は腹ハケメ後ヨコナデ。胴部内面は腹ナデ。①赤褐色粒の目立つ粗～細砂を含む②澄 (5 YR6/6) ③普通、均一
3	葉	口18.0高30.4底7.2容6825cc 口縁1/2、胴部1/4欠 埋土 外面に目の整った細かいハケ目を縦位に施す。胴下半の接合部分を斜位にヘラケズリ。底面は小さな凹面で周縁を削る。内面は荒れて、整形不明。①細砂～粗砂が多い②にぶい赤褐 (2.5YR4/4) ③普通、側面に黒斑
4	葉	口18.0高30.0底7.5容6883cc 胴下半一部欠 埋土 口唇は内側に屈曲して尖る。胴外面は縦位の強いヘラケズリ。内面は平滑な工具による横位のナデ。①赤褐色粒の粗砂を多く含む②にぶい澄 (7.5YR7/4) ③やや硬調。均一④外面の胴下半に深、中位に粘土が多量に付着する
5	瓶	口 (19.8) 高さ不明 口縁-体上半約1/4破片 カマド燃焼部 口縁は幅広い粘土帯を付加して2重口縁を作り出す。口縁外面は指溝押圧。体部外面は縦と斜の粗いヘラミガキ。内面は下半が横ヘラケズリ、上半が腹ナデ。①粗砂を多く含む②明赤褐 (5 YR5/8) ③やや軟調。均一④内外面に深と粘土付着

### 8号住居跡出土遺物 (第48回 PL42)

1	杯	口 (13.5) 高5.2底4.5 口縁約1/2欠 北東壁部床直 底外面は乾燥が進んだ段階で反時計回り基調のヘラケズリを施し、浅い凹み底を作る。口縁-内面にヨコナデ。器壁は他の杯に比べて比較的均一。口縁下の稜は小さく鋭い。①赤褐色の細砂と粗～細砂を多く含む②澄 (5 YR6/6) ③やや軟調。外面底部に黒斑
2	杯	口 (13.0) 高さ不明 口縁-底約1/5破片 床面よりやや上 外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面はヨコナデ。口縁はほぼ垂直で、口唇部がやや肥厚する。口縁下の稜は段状。①比較的きめの細かい粘土に粗～細砂を含む②澄 (5 YR6/6) ③やや硬調。底外面に黒斑
3	鉢	口 (14.0) 高さ不明 口縁-体約1/5破片 床面よりやや上 口縁ヨコナデ。体外面は横位ヘラケズリの後粗いミガキ。内面はきめの細かい調整具によるナデ。①粗砂を多く含む②にぶい澄 (5 YR6/4) ③やや軟調④器面に深と粘土が付着
4	杯	口7.0高4.1 完形 南隅床直 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面にヨコナデ。外面に体部無調整部分に小さな窪を残す。①粗～細砂を含む②にぶい澄 (5 YR6/4) ③普通④器面に深が付着するが、二次的加熱の痕跡はない
5	葉	底7.4 底部破片 南東壁部床面よりやや上 中央がややくぼむ1/7欠。外面は斜位のヘラケズリ。内面は板状具小口面によるナデ。①粗砂を多く含む②にぶい澄 (7.5YR7/4) ③二次的加熱を受ける。④外面に大熱を受けて硬化した粘土が付着
6	高杯	胸径 (18.0) 舞臺部約1/3破片 北東壁部床直 内外面ともヨコナデ。中位の凸帯と裾端部は鋭い稜をなす。①やや粗い粘土に赤褐色、白色の粗～細砂を多く含む②淡黄 (2.5YR/4) ③軟調。均一
7	瓶	口 (22.0) 口縁-体下半約1/4破片 北東壁部床直 口縁ヨコナデ。外面は乾燥が進んだ段階で下から斜位のヘラケズリ。内面は同様に横位のヘラケズリ。口縁上半に粘土帯接合痕を明瞭に残す。①比較的きめの細かい粘土に粗～細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③軟調
8	瓶	口16.2高26.5口径7.4 口縁と胴下半の一部欠 床直 口縁ヨコナデ。外面は横位と斜位ヘラケズリの後、縦位の粗いヘラミガキ。内面は板状具小口面による横位ナデ。穿孔は焼成後の調整による。①赤褐色の細砂と粗～細砂が多い②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通。外面の片層2カ所に黒斑
9	内椀	径2.7×2.4厚0.6 完形 埋土下層 葉部破片の周縁を粗い研磨で整形。①粗～細砂を含む②澄 (5 YR5/8) ③普通
10	白土	径 (0.6) 厚0.34 1/2破片 埋土下層 表面と側縁を研磨。厚さは均一でない。①滑石②灰緑色
11	磚	長10.9幅7.2厚3.4重350g 完形 北東壁部床直 整形なし。無縁部に使用によると思われる研磨がわずかに認められる。①デイスイト②暗緑色
12	磚	長12.5厚4.9重280g 完形 北東壁部床よりやや上 整形なし。使用痕跡確認できず。①砂岩②暗緑色

### 9号住居跡出土遺物 (第54・55・56回 PL42・43)

1	杯	口 (6.7) 口縁-底約1/3破片 埋土 底外面の中央は一方、周縁は反時計回り基調のヘラケズリ。口唇は沈降状にくぼむ。口縁-内面にヨコナデ。口縁下の稜は小さく突出する。①赤褐色の粗砂と他の細砂を含む②澄 (5 YR6/6) ③やや軟調。二次的加熱を受けた可能性あり
2	杯	口 (7.1) 口縁-底約1/4破片 埋土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁はやや厚く、外反する。口縁-内面はヨコナデ。口縁下の稜は段状。①粗砂を多く含む②明赤褐 (5 YR3/6) ③軟調
3	杯	口 (6.4) 口縁約1/5破片 埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリと思われる。口縁は内側気味に開き、ヨコナデ。口縁下の稜は鋭い。①赤褐色の粗砂と他の細砂を多く含む②澄 (7.5YR6/6) ③普通

遺物観察表

4	椀	□(6.8) 口縁~底約1/2破片 埋土 体~底部外面はヘラケズリ後粗いヘラミガキ。口縁ココナデ。内面整形不明。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通
5	(鉢)	底(5.2) 底約1/3破片 埋土 外面はナデ後粗いミガキ。内面は指頭による粗いナデ。底面はヘラケズリで平坦に作る。①粗い粘土に赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②ぶい赤褐(2.5YR5/4)③普通
6	高杯	口径1.1高14.3頸径(13.2) 孔径0.8 胸部2/3欠 カマド熟焼部 口縁に幅広のヨコナデ。杯部内外面と胸部外面に放射状のヘラミガキ。胸部内面は横位ヘラケズリ。胸中位の相対位置に2個の円孔を穿つ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②橙(2.5YR6/8)③二次的火熱を受ける
7	高杯	胸部 埋土 胸部は筒状に作る。外面は胸部との接合部分にハケ目後粗いヘラミガキ。内面上位は指頭ナデ。下位は横位ヘラケズリ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/5)③やや硬調、均一
8	高杯	□16.5 口縁1/3と胸部欠 カマド左脇床直 口縁は幅広のヨコナデ。外面は底部との接合部にハケ目後放射状の粗いヘラミガキ。杯部内面は割線により不明。胸部内面上位は指頭ナデ。下半は横位ヘラケズリ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②橙(5YR6/6)③二次的火熱を受ける④外面に火熱変化を受けた粘土付着
9	高杯	口径14.0 胸部破片 カマド熟焼部 脚柱部上半に層ハケメの後ナデとまばらなヘラミガキ。内面は横ヘラケズリ、上半に紋目を残す。腹部はヨコナデ。①粗~細砂を含む②橙(5YR6/6)③ほぼ均一、胴一部に黒斑
10	高杯	口径14.0 杯部欠 カマド前床直 胸部ヨコナデ、脚柱部ナデ後まばらなヘラミガキ。胸部内面は横位ヘラケズリ。①赤褐色の細織と粗~細砂を含む②ぶい橙(7.5YR7/4)③普通、胴の一部に黒斑
11	高杯	□17.0 杯部 カマド右脇床直 外面は底接合部分にハケ目の後幅広いヨコナデと粗い縦位ヘラミガキ。内面は横位の目の粗いハケ目の後外面と同様のヨコナデとヘラミガキ。下端は底部接合部で割線。①赤褐色の細織と粗~細砂が多い②明赤褐(2.5YR5/6)③普通、二次的火熱を受けた可能性あり
12	(高杯)	□(25.6) 口縁部約1/2破片 カマド右脇床土下層 2段に屈曲して外反し、内外面ともヨコナデ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②橙(5YR6/6)③やや硬調
13	(高杯)	□(22.4) 口縁部約1/3破片 南東壁跡床直 2段に屈曲して外反し、外面は全体にヨコナデの後下段に縦位ハケ目。内面は接合部に横位ハケ目後ヨコナデ。最後に内外面ともまばらな放射状ヘラミガキ。①細織と粗~細砂を含む②橙(5YR6/6)③硬質、均一④内面に灰と粘土が付着しており、カマド支脚に用いられた可能性がある
14	高杯	口径(19.2) 脚部約1/4破片 カマド右脇床直 2段に屈曲し、後強い。外面はヨコナデ後まばらな放射状ヘラミガキ。内面はヨコナデ後不定方向のヘラミガキ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③硬調、均一
15	埴	□(10.7) 高16.7底5.2 口縁3/4欠 カマド右脇床直 口縁ヨコナデ。胴外面は斜位ヘラケズリ後下半に粗いヘラミガキ。内面は斜位のナデ。底面はほとんど無調整。①変質質の細織と他の粗砂を多く含む②橙(5YR7/8)③普通、均一
16	甌	口径9.8高25.4口径6.7容432cc 成形 カマド胸部立位 角状把手は嵌め込みにより成形。穿孔は焼成前にヘラで整形。体部外面は板状具小口面による縦位ナデ。内面は丁寧な縦位のヘラミガキ。①細織と粗砂を多く含む②橙(7.5YR7/6)③普通、体外面の対称位置に黒斑④内面に灰に灰化物付着痕
17	甌	□116.0~115.5高31.7底8.3容8371cc 成形 カマド左脇 口縁は弱く2段に屈曲し、ヨコナデ。胴外面は縦位ハケ目後丁寧な斜位ヘラミガキ。底面とその周辺はヘラケズリ。内面はナデ。①細織と粗砂を多く含む②橙(2.5YR7/6)③普通、胴外面一部に黒斑
18	甌	□13.7高27.5底7.1容5085cc 成形 カマド熟焼部 外面は上半を主体に縦位ハケ目後粗いヘラミガキ。口縁内面は横位ハケ目。胴内面は横位ヘラケズリ後縦位ヘラミガキ。底面ヘラケズリ。①粗~細砂を含む②橙(2.5YR6/6)③普通④口縁内外面の一部に灰化物付着痕が残るが、胴には灰等の付着は不明瞭
19	甌	□20.4高31.2底8.4容9297cc 成形 カマド左脇床直後焼 外面は斜位ハケ目後口縁ヨコナデ、胴部はまばらなヘラケズリ。内面は下半が横位の粗いハケ目、上半が斜位ヘラケズリ。①細織と粗砂を多く含む②橙(7.5YR7/6)③やや硬質、下半に二次的火熱痕あり④胴外面中に灰が少量付着
20	甌	□16.5 胴下半欠 東壁跡床直 口縁ヨコナデ。胴外面は斜位の浅いヘラケズリとナデ。内面はナデと思われる。①細織と粗砂を多く含む②淡黄橙(10YR8/3)③やや軟調、口縁から胴の一部が変色
21	鉢	□19.0 体下半以下欠 カマド右脇床直 口縁ヨコナデ。外面は体中位に斜位ヘラケズリ後縦位ヘラミガキ。内面は板状具小口面による横位ナデ後縦位ヘラミガキ。①赤褐色の細織と粗砂を含む②ぶい橙(5YR6/4)③普通、外面一部に黒斑④内面頸部付近に赤色の液体状付着物の痕跡あり
22	甌	□16.0 口縁~胴部 南東隅床直 外面はナデ後前部に横位ヘラケズリ。口縁はヨコナデ。胴部内面は接合部を明確に残す。①細織と粗砂を多く含む②ぶい黄橙(10YR7/4)③やや軟調、均一
23	甌	□15.5高23.1底5.7容3787cc 成形 南東隅床直立位 外面は縦位ハケ目後中位に粗いヘラミガキ、下半にヘラケズリ。底面はヘラケズリでやや上げ底に作る。内面は目の粗いハケ目とナデ。①細織と粗砂を多く含む②橙(5YR6/6)③やや硬調、胴外面の一部に黒斑④胴外面中位全体に縦付着
24	甌	□14.0高22.9容3148cc 南東隅床直立位 口縁ヨコナデ。胴外面は縦位の細かいハケ目。内面はナデ。①赤褐色の細織と粗~細砂を多く含む②赤(10R5/5)③二次的火熱を受ける④口縁~胴上半の外面に縦付着
25	甌	□17.0 胴中位以下欠 カマド埋土 口縁ヨコナデ、胴外面は縦位の粗かいハケ目。内面は平滑な板状具小口面による縦位ナデ。①粗砂を多く含む②橙(5YR6/8)③やや硬調、均一
26	白土	径0.52厚0.20孔径0.12 成形 埋土 顆粒を研ぎ、表面は平直だが研磨痕は見られない。①純砂岩②黒黒

## 10号住居跡出土遺物 (第60~63図 PL44 - 45)

1	杯	口18.3高5.3 完形 床直 口縁は内厚、肥厚して立ち上がる。底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁下の縁は丸い。口縁-内面ヨコナデ。底内面はややくぼむ。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②液 (5 YR7/6) ③普通④内外面に焼変後の張が付着
2	杯	口13.4高5.7 完形 床直 口唇部は沈状状に面取り。底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。底内面はヘラ具をあてたナデ。口縁下の縁は小さく丸い。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/8) ③やや硬調
3	杯	口11.7高5.7 口縁一部欠 環土 底外面は不定方向のヘラケズリ。口縁-内面はヨコナデ。口縁下の縁は細い。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②液 (5 YR6/6) ③やや軟調
4	杯	口13.0高6.2 口縁一部欠 底外面は乾燥が進んだ段階で時計回り基調と思われるヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデ。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②液 (5 YR6/6) ③普通
5	杯	口 (12.8) 高6.5 口縁-底約1/2破片 環土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁はほぼ直立し、縁は小さく鋭く突出する。口縁-内面ヨコナデ。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/8) ③二次的加熱を受ける
6	杯	口 (14.0) 高4.8 口縁-底の約1/2欠 底外面は一方方向のヘラケズリの後、同心円状のヘラミガキ。内面はナデ後放射状ヘラミガキ。口縁下の縁は弱く、丸く作り出す。①軽石を含む粗砂が多い②赤褐 (2.5YR4/6) ③やや硬調、均一
7	杯	口 (12.8) 高 (5.2) 約1/2破片 環土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデ。口唇上には沈状状の面取り。口縁下の縁は丸く突出する。①粗-細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/8) ③普通
8	(鉢)	口 (12.5) 口縁約1/4破片 貯蔵穴環土 体外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデまばらな放射状ヘラミガキ。①粗-細砂を含む②ふい液 (10YR7/4) ③普通
9	変	口 (14.4) 高16.9底6.3容2170cc 口縁1/2欠 カマド左脇 口縁ヨコナデ。体部外面は縦位ヘラケズリ。内面はヘラ具による横位ナデ。底面はヘラケズリ。①粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/8) ③やや硬調だが二次的加熱を受けた可能性あり④外面下に窪付着
10	変	口12.5高14.4容7.4容1406cc 完形 カマド手前環土下層 口縁ヨコナデ。胴外面は縦位のナデとヘラケズリ。内面は板状具小口面による横位ナデ。底部やや上げ底。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②ふい液 (5 YR6/4) ③二次的加熱を受ける④外面には煤、口縁内面には炭化物付着痕が残る
11	変	口 (12.5) 高27.1底8.7容1044cc 口縁-口約1/2欠 西壁部環土下層 口縁ヨコナデ。外面は斜位ヘラケズリ。内面は割層が濃く整形痕は観察できない。底部は上げ底で無調整。①白色の細礫と粗砂が多い②液 (7.5YR7/6) ③やや硬調、二次的加熱を受けた可能性あり
12	変	口17.4高31.7割最大幅35.8底7.3容15750cc 胴一部欠 東端床直 口縁ヨコナデ。外面は横位ヘラミガキ。内面は寬れて整形不明。底面は粗いミガキ。①やや粗い粘土に粗-細砂を多く含む②液黄肌 (10YR8/4) ③やや軟調、黒斑や焼きまわりあり
13	変	口12.7高14.5底5.5容1588cc 胴一部欠 北西壁部環土下層 口縁ヨコナデ。胴外面は整った縦位ハゲ目、下位は斜位ヘラケズリ。内面は板状具小口面によるナデと思われる。①細礫を多く含む②ふい液 (2.5YR6/4) ③二次的加熱を受け、黒い
14	鉢	口16.0高11.5底6.5容1288cc 口縁と底一部欠 貯蔵穴環土 体外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面ヨコナデ。下半は横位ヘラケズリ後中位に粗い横位ヘラミガキ。内面はヘラ具による横位ナデ後半に放射状ヘラミガキ。①粗-細砂を含む②液 (2.5YR6/8) ③二次的加熱を受け、やや硬い
15	変	口16.2高29.0容8043cc 胴一部欠 カマド器設部 口縁ヨコナデ。外面は斜位の目が細く浅いハゲ目。内面は丁寧なナデ。①粗い粘土に白色の粗砂を多く含む②液黄 (2.5YR8/4) ③やや軟調、二次的加熱を受ける④底部は直徑10cm前後の円形に掌状
16	変	最大幅24.2容現状高22.2底7.3 胴部以上と胴一部欠 中央床直 外面は下半が斜位、上半が横位のヘラケズリ後全面にヘラミガキ。内面は板状具小口面による横位ナデ。①粗-細砂を含む②ふい液 (5 YR7/2) ③普通、外面片側に黒斑④胴部が掌状することから、胴部を欠いたまま使用したらしい
17	瓶	口19.2高24.7口径6.5容4578cc カマド器設部 完形 口縁ヨコナデ後体部縦位ヘラケズリ。内面は板状具小口面による横位ナデ。穿孔は焼成前のヘラケズリによる。①粗-細砂を含む②液 (2.5YR6/6) ③やや硬調、胴部の相対面に黒斑
18	瓶	口30.0高30.3口径7.3容10771cc 完形 カマド左脇床直 外面体部は整った縦位ハゲ目後まばらな斜位ヘラミガキ。内面は横位ハゲ目後縦位ヘラミガキ。①粗-細砂を多く含む②液 (5 YR6/6) ③硬調、体部片側に黒斑④外面の下位から上位に窪付着
19	瓶	底7.3口径5.7 底部破片 カマド脇床直 外面は斜位のまばらなヘラケズリ。内面は横位ナデ。穿孔は焼成前ヘラケズリによる。①石英、長石等の白色・無色鉱物の細礫-粗砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/8) ③やや軟調
20	高杯	口径約1/3破片 外面は粗いナデの後、まばらな縦位ヘラミガキ。内面は全体に絞りを残す。①赤褐色と白色の細礫と粗-細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや硬調
21	罐	長14.8幅5.7厚3.6重420g 整形はなく、目立つ使用痕も認められない。①石英黒閃岩②灰

## 11号住居跡出土遺物 (第69図 PL46)

1	高杯	口16.3高12.1口径7 (12.5) 胴大部分欠 カマド内 杯部の底外面はヘラケズリ。外面はナデ。内面はヨコナデ後放射状ヘラミガキ。胴部外面は縦位ヘラミガキ。内面は横位ヘラケズリ後底部によるナデ。①粗砂を多く含む②液 (7.5YR6/8) ③やや軟調、二次的加熱を受けた可能性高い④杯部内面に粘土充填の痕跡、倒立してカマド支脚としたものか
2	高杯	口 (19.4) 杯部約1/2 北隅環土 杯部と脚部の接合は嵌め込みによる。底外面に整ったハゲ目、杯部外面はヨコナデ後放射状ヘラミガキ。内面はヨコナデ後横位と放射状ヘラミガキ。①ミミリ大バミと粗砂を含む②液 (5 YR5/8) ③普通
3	鉢	口18.1高12.7底6.5容15750cc 口縁-底約1/3欠 環土 体外面は縦位ヘラケズリ後半ナデ。内面はヘラ具によるナデ。底部は突出し、不整形。輪状の底部に粘土塊を充填して不安定な上げ底とし、更に焼成後下からの焼打で穿孔を試みるのが、貫通しない①細礫-粗砂を含む②液 (5 YR6/6) ③やや硬調、口縁に二次的加熱を受けた痕跡あり④瓶を倒置したものか

遺物観察表

4	葉	口13.0高11.7幅4.4容1033cc 定形 西隅床直 体中位外面は横位ハケ目、下位は縦位ヘラケズリ。内面顔部に横位ハケ目、体は横位ヘラ杖具のナデ。 ①細礫-粗砂を多く含む②赤褐色 (5 YR6/6) ③普通、体外面下半に二次的加熱を受けた可能性あり
5	葉	口 (16.9) 高17.8容 (2918) cc 口縁-底1/2強欠 カマド内 体外面はナデ、中位の接合部分のみ横位ヘラケズリ。内面は斜位ナデ、口縁ヨココナデ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③二次的加熱を受ける④体下半外面は未変し割線が激しい
6	葉	口17.1高27.0幅7.7容7593cc 口縁1/4と体一部欠 カマド熱燻部 外面は板杖具小口面によるナデ。口縁はヨココナデ後横位ヘラミガキ。内面は板杖具によるナデ。 ①細礫-粗砂を多く含む②赤褐色 (2.5YR6/6) ③二次的加熱を受ける④体中位外面に粘土と煤付着
7	刀子	関部幅1.6基幅0.8厚0.3 跡と歪欠 埋土 横は遺存状況が良く、ほぼ直角に切り込み面が残る。刃間は鋭く突出しており、刃の研削が著しいことを物々せる。

12号住居跡出土遺物 (第74~77図 PL47・48)

1	杯	口14.4高4.8 定形 北東壁埋土 底外面はハケ目、体外面は粗いヘラミガキ。内面ヨココナデ後粗いヘラミガキ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤 (10R5/6) ③普通
2	杯	口13.7高5.9幅3.7 口縁一部欠 東隅床直 口縁ヨココナデ。体外面は斜位ヘラケズリ、底外面はヘラケズリでやや上げ底。内面は横位ヘラナデ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通、口縁外面一部に黒炭
3	杯	口13.4高5.0幅3.7 定形 東隅床直 口縁-内面ヨココナデ。体-底外面は時計回り基調のヘラケズリ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通、底内面に黒炭
4	杯	口 (12.0) 口縁-体約1/4破片 西隅埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁-内面は濡れた布状具で丁寧なヨココナ。口縁下の残は丸く、下位は無調整部分を残す。 ①やや微少な粘土に粗砂を含む②赤 (2.5YR6/8) ③やや硬調
5	椀	口12.3高6.7 口縁一部欠 東隅埋土下層 体外部面に縦位ハケ目後底部に反時計回り基調のヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ。 ①角閃石の粗粒が多い②淡黄橙 (10YR8/3) ③二次的加熱を受ける④内外面に丹靨の可能性あり
6	椀	口12.0高8.2 口縁一部欠 南西壁埋土 体部下半は横位ヘラケズリ、底面はハケ目。口縁ヨココナ。内面は指痕による粗いナデ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通④体外部面に煤が多量に付着
7	椀	口11.0高7.8 定形 東隅埋土下層 体部横位ヘラケズリ、底外面はハケ目。内面は横位ヘラナデ。 ①粗-細砂を含む②赤 (2.5YR5/6) ③やや硬調④口縁外外面に炭化物付着痕
8	椀	口12.8高6.1 定形 東隅埋土 口縁ヨココナ、体部無調整。底面は反時計回りのヘラケズリ。内面は横位ヘラナデ後ヨココナ。 ①粗-細砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通、均一④粗-細砂外外面に煤付着
9	椀	口12.8高6.0 定形 北隅床直 口縁-体部はヨココナ後内面に放射状ヘラミガキ。底面は反時計回り基調のヘラケズリ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤 (2.5YR4/3) ③普通
10	椀	口11.8高8.5 体部一部欠 北東隅埋土下層 体外部面中位に横位ヘラケズリ、底外面はハケ目。口縁ヨココナ。体内面は横位ヘラナデ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤褐 (2.5 Y R 4/6) ③やや硬調、全体に二次的加熱を受けた可能性あり
11	高杯	口19.5高15.2幅14.0 杯部1/4劣部と裾部1/2欠 東隅埋土下層 杯部内外面は縦位ハケ目後丁寧なヨココナ。裾部はヨココナ。脚柱部外面は縦位ヘラミガキで、内面に紋目を残す。 ①粗-細砂を含む②赤 (2.5YR5/6) ③普通、均一
12	高杯	口17.9 杯部約1/2破片 東隅埋土 杯部外面はハケ目後ヨココナ、内面ヨココナ。脚柱部内面顔部は指痕によるナデ。 ①ややきめの粗い粘土に粗砂を含む②赤 (5 YR7/6) ③普通、ややムラ
13	高杯	口18.0 杯部約3/4破片 東隅埋土 杯部外面はハケ目後ヨココナ、内面は同様の整形後まばらな放射状ヘラミガキ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②赤 (2.5YR6/6) ③普通、均一
14	高杯	口15.6高10.8幅14.0 口縁と唇の一部欠 東隅床直 内外面とも粗いナデ。脚柱部内面は紋目を残す。 ①粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③二次的加熱を受ける
15	高杯	口 (18.0) 杯部約4/5破片 東隅埋土下層 外面に縦位ハケ目後口縁内外面に丁寧なヨココナ。杯部下層の残は強い。 ①チャートと赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②赤 (5 YR5/4) ③硬調、外面2カ所に黒炭
16	高杯	杯部小破片 東隅埋土 外面はハケ目後ヨココナ。内面ヨココナ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤 (2.5YR7/6) ③普通、均一④外面に煤付着2カ所
17	高杯	杯径 (20.0) 裾部小破片 東隅埋土 内外面ともハケ目後ヨココナ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤 (2.5YR5/6) ③普通、均一
18	甌	口23.0高24.7孔径7.0容6983cc 口縁-体上半の大部分欠 中央部床直 体外部面全体に縦位ハケ目後下位はヘラケズリ。内面は平滑な工具による横位ヘラナデ。孔はヘラケズリ後打削で整形。 ①細砂が多い②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや硬調、外面の一箇面に黒炭④内面は割線が激しい
19	甌	胴径16.8 頸部以上欠 東隅床直 朝下半は横位ヘラケズリ。内面は丁寧なヘラミガキ。 ①パミス、安山岩粒が目立つ②赤 (5 YR7/4) ③普通、外面上半に黒炭④欠損部の摩滅状況から口縁欠損のまま使用を推察したらしい
20	甌	口 (29.2) 高27.1孔径9.0容 (10870) cc 口縁-体上半約1/3、下半-底約1/2破片 北西壁埋土 体外面は縦位の横位ヘラミガキ。内面下半は斜位ヘラケズリ、上位は横位ナデ。 ①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR3/6) ③やや硬調、体外面2カ所に黒炭
21	葉	口17.7高24.1容4586cc 定形 北隅床直 体外部面下半は横位、上半は縦位のヘラケズリ。内面は粗い横位ヘラナデ。 ①長石・石英等の細礫と粗砂を多く含む。②赤 (10YR7/4) ③底-体外面は二次的加熱を受ける
22	葉	口12.3 口縁-朝上半約3/4破片 北東隅埋土 外面は縦位。内面は横位のハケ目後、外面はナデ、口縁ヨココナ。 ①粗-細砂を多く含む②赤褐 (2.5YR4/6) ③二次的加熱を受ける

23	要	口18.8 口縁-体上半約3/4破片 東陽階土下層 体部外面は板状具小口面による横位ナダ。内面は横位ヘラナダ。口縁ココナデ。①細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③普通④口縁外面がやや燻ける。底部内面に5ミリ程度の粒あり
24	要	口15.6高30.4底6.0径7823cc 定形 北陽床直 体部外面は横位ヘラナダ。内面は横位ヘラナダ。底面はヘラズリで整形。①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②赤 (2.5YR6/6) ③やや硬調。体下半は二次的の火熱を受ける④体下半外面に炭が付着
25	要	口17.0 胴部以下欠 東陽床直 胴部外面はハケ目後ナダ。口縁内外面ココナデ。胴内面は横位ヘラナダ。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙 (7.5YR6/6) ③二次的の火熱を受けた可能性あり
26	要	口(15.0) 口縁-体部約1/4 北東陽階土下層 体部外面は横位のヘラナダ。内面下位は板状具によるナダ。①粗-細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③体部外面は二次的の火熱を受ける
27	要	口(17.2) 口縁-体部約1/3破片 東陽階土下層 体部外面は横位、内面は横位のヘラナダ。口縁ココナデ。頸部に指頭圧痕を残す。①粗-細砂を含む②明赤 (2.5YR6/6) ③二次的の火熱を受ける④口縁外面に炭が付着
28	要	口17.0 胴部以下欠 東陽床直 板状具小口面による横位ナダ後内外面ともココナデ。①粗砂を多く含む②明赤 (2.5YR6/6) ③やや硬調④外面一部に炭が付着
29	要	口14.7 口縁-体上半約3/4破片 北東陽階床直 口縁ココナデ。頸部横位ハケ目。体部外面は横位ナダ後横位ヘラミダキ。内面はヘラナダ。①粗-細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③やや硬調。体外面に黒炭④口縁外面に炭が付着
30	要	口17.4 体中位以下欠 カマド 外面は横位ハケ目。内面は横位ハケ目。①粗-細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③普通、外面一部に黒炭④口縁外面に炭が付着
31	(要)	底8.0 体下半-底約1/3破片 北東陽階土下層 外面ヘラナダ。底外面に乾燥時の板目を残す。①粗-細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③普通④底-体下半に炭が付着
32	土玉	径2.7孔径0.3重17g 定形 中央床直 全面ナダによる整形。孔は焼成前に向一方から管状で穿つ。①やや緻密な粘土に細砂を多く含む②赤 (7.5YR6/4) ③硬調
33	小玉	径0.35孔径0.12 定形 カマド 表面側面とも丁寧な研磨。①赤色珪質岩質燻赤
34	小玉	径0.27孔径0.13 定形 カマド 表面側面とも丁寧な研磨。①赤色珪質岩質燻赤
35	小玉	径0.30孔径0.10 定形 カマド 表面側面とも丁寧な研磨。①赤色珪質岩質燻赤
36	白玉	径0.50孔径0.15 定形 カマド 側面に横位の粗い研磨、表面面は研磨。回転穿孔。①滑石②オリブ灰
37	白玉	径0.56孔径0.20 定形 カマド 側面に横位の粗い研磨、表面面は研磨。回転穿孔。①滑石②オリブ灰
38	白玉	径0.54孔径0.19 定形 カマド 側面に横位の粗い研磨、表面面は研磨。回転穿孔。①滑石②オリブ灰
39	白玉	径0.55孔径0.22 定形 カマド 側面に横位の粗い研磨、表面面は研磨。回転穿孔。①滑石②オリブ灰
40	白玉	径0.58孔径0.19 定形 カマド 側面に横位の粗い研磨、表面面は研磨。回転穿孔。①滑石②オリブ灰
41	砥石	径3.4 一部欠 北陽床直 全面が磨減し、4条の鋭利な擦痕あり。①角閃石安山岩

### 13号住居跡出土遺物 (第81回 PL49)

1	要	径約1.5破片 東陽床直 外面は板状具小口面による横位ナダ。内面は斜縁が微しく不明。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③二次的の火熱を受ける④外面に炭が付着
2	要	口19.3高26.7底6.2径7811cc 口縁一部欠 東陽階床直 外面の体下半は横位ヘラズリ後横位ナダ。上位は横位ナダ。口頸部は横位ハケ目後ココナデ。内面は横位ヘラナダ。①細礫を多く含む②淡黄橙 (10YR8/8) ③底部周囲は二次的の火熱を受ける④体中位外面に炭が付着
3	高杯	径14.2 胴部中位以下欠 南陽床直 胴部はココナデ。胴柱部に外面に横位ヘラミダキ、内面に板目を残す。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②赤 (7.5YR7/4) ③やや硬調
4	樽	長50.2径9.0厚7.8底1930g 定形 床直中央両寄り 整形。使用痕は認められない。①滑結凝灰岩②③以上の面が火熱を受けて赤変
5	石製模造品	長2.7幅1.7孔径0.16 定形 東陽床直 周縁を打削り調整し、表面側面を粗い研磨。①滑石②オリブ灰

### 14号住居跡出土遺物 (第84・85回 PL49)

1	杯	口12.8高5.0 口縁一部欠 埋土下層 底外面は一方後縁縁に時計回り基調のヘラズリ。口縁-内面はココナデ。口縁下の縁はヘラ状具のナダで整形され、鋭く突出する。口唇は沈線状の面取り。①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②赤 (2.5YR7/4) ③硬調、均一④口縁外面に炭が付着
2	碗	口13.7高5.2 口縁-底約1/4欠 南東陽階土下層 体下半-底外面は反時計回り基調のヘラズリ。体上半は指頭ナダ。内面は横位ナダ後斜位ヘラミダキ。①粗砂が多い②橙 (2.5YR6/6) ③やや硬調、均一
3	杯	口(14.5) 高5.6 口縁-底約1/4破片 南東陽階土下層 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁-内面はココナデ。口縁下の縁は弱い。①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②橙 (2.5YR7/6) ③やや硬調。底外面に黒炭
4	杯	口(13.5) 高5.0 口縁-底約1/3破片 南東陽階土下層 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。内面は粗いヘラナダ。口縁ココナデ。①パミスや赤褐色の細礫と粗砂を多く含む②赤 (5YR6/4) ③やや軟調
5	要	口17.2高29.2底7.7径6603cc 定形 貯蔵穴 体部外面下半は斜位ヘラズリ。上半は板状具小口面による横位ナダ。内面は横位ヘラナダ。①細礫-粗砂を多く含む②赤 (10YR7/4) ③底部-片面に二次的の火熱を受ける④体部外面に炭が付着
6	要	口18.6 体部下半欠 カマド右脇 体部外面は斜位、内面は横位のヘラナダ。体部外面に粘土粒積み上げの凹凸を残す。①細礫-粗砂を多く含む②赤 (5YR7/4) ③やや硬調。口縁に二次的の火熱を受ける

遺物観察表

7	瓶	口19.1-18.0高13.5口径4.7容1845cc 口縁の一部欠 カマド右脇床直 体部外面は横位ヘラケズリ、内面は横位ナダ後縦位ヘラケズリ。口縁ヨコナダ。底孔は丁軍にナダ。①赤褐色の細粒と粗一細砂を含む②赤褐色(2.5YR4/6)③やや軟調。体部片面黒炭
8	瓶	口径(7.5) 体下半一底部1/2破片 埋土下層 外面は横位ヘラケズリ後ナダ。内面は横位ヘラケズリ、孔は丁軍ナヨコナダ。①粗砂を多く含む②明赤褐色(2.5YR5/6) ③普通
9	支脚	縦径2.2約1/4破片 埋土 粘土紐積み上げ痕を明瞭に残す。内外面ともナダ。①粗一細砂を含む②にぶい黄褐色(10YR7/3)③二次的の火熱を強く受ける④外面に粘土付着
10	支脚	高18.2径7.8-7.2 定形 カマド 全体に手捏ねによる成形。①長石・石英・角閃石等の粗一細砂を含む②褐色(7.5YR6/6)③二次的の火熱を受けるが甚だしくはない
11	灰石	幅2.3-2.0厚1.4 裏面と両端が欠 東隣埋土下層 表面は横位に準成する。他は均等に準成。①変質凝灰岩、灰化石
12	石皿	厚4.7約1/4破片 南東隣埋土下層 表裏両面は準成。中央部が最もくぼむ。両面には長粒な黒炭が10箇所は残る。①角閃石安山岩
13	管玉	長1.74径0.63径0.22 定形 西隣埋土下層 両端面は粗い研磨、側面は丁軍な研磨。穿孔は両側から行い、中央でややずれる。①粒状炭②ナリーブ灰

15号住居跡出土遺物 (第89・92図 PL50・51・52)

1	杯	口(13.4) 高5.8 口縁一底約1/2 壘形埋土下層 底外面は縦磨が進んだ段階で板状具によるナダ。内面は外面と同様のナダ後中央部のみ粗いヘラミガキ。①赤褐色の細粒と粗一細砂を多く含む②赤褐色(5YR4/4)③やや軟調
2	杯	口(13.8) 口縁一底約1/2 壘土 底外面は同心円状ヘラケズリの後丁軍ナダ。内面はハケ目または放射状ヘラミガキ。①やや緻密な粘土に細砂を含む②暗赤褐色(5YR3/3)③やや軟調
3	杯	口(16.0) 高5.5 口縁一底約1/3 壘土 底外面は放射状のナダ。口縁一内面はヨコナダ。①赤褐色の細粒と粗一細砂を多く含む②赤褐色(10R4/4)③普通④口縁外面に煤付着
4	鉢	口12.0高7.4 定形 西隣埋土下層 体部は反時計回り基調のヘラケズリ。底面はヘラケズリで不安定な平底に作り出す。内面は板状具小口面によるナダ。①赤褐色の細粒と粗一細砂を多く含む②褐色(7.5YR7/6)③やや軟調④内面の粒状炭が、外面の口縁一体中に煤が付着
5	鉢	口12.3高8.0 定形 西隣埋土下層 体部は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナダ。内面は同心円状の粗いヘラミガキ。①粗砂を多く含む②赤褐色(2.5YR4/6)③普通
6	鉢	口15.1高8.9 定形 南西隣埋土下層 底部は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁一上半はヨコナダ。内面全体にヨコナダ。①細粒一粗砂を多く含む②浅黄褐色(10YR8/3)③やや軟調。全体に二次的の火熱を受けた可能性あり
7	鉢	口(14.8) 口縁一上半約1/3破片 南西隣埋土下層 体下半に斜位ヘラケズリ。口縁一上半はヨコナダ。内面ヨコナダ。①粗一細砂を含む②淡黄(2.5YR4/0)③普通④体下半外面に煤付着痕あり
8	鉢	口(15.4) 高10.6底7.5 口縁一底約2/3 南東隣埋土 体下半は横位ヘラケズリ。口縁一底部ヨコナダ。内面は板状具による横位ナダ。底面はヘラケズリで平底に作り出す。①やや緻密な粘土に細砂を多く含む②暗赤褐色(5YR3/6)③やや軟調
9	鉢	口11.6高7.5 定形 西隣埋土下層 体部下半は反時計回り基調のヘラケズリ。底部平底成形。内面はヨコナダに横位放射状の粗いナダ。①細粒一粗砂を多く含む②にぶい褐色(7.5YR7/4)③普通④外面の口縁一上半に煤が多量に付着
10	高杯	縦径12.0 杯部欠 南東隣埋土下層 杯部との接合は粘土塊充填による。外面はナダ。脚柱部内面は横位ハケ目。①白色粘土を混合し赤褐色の細粒が見られる定形(7.5YR6/6)③普通、二次的の火熱を受けた可能性あり
11	高杯	縦径11.0 杯1/3と杯部欠 北隣埋土下層 杯部との接合は粘土塊充填による。外面はナダ。脚柱部内面は横位ハケ目。①細粒一粗砂が多い②にぶい褐色(7.5YR6/4)③二次的の火熱を受けた可能性あり
12	高杯	縦径12.3 杯1/2と杯部欠 西隣埋土下層 杯部との接合は粘土塊充填による。外面はナダ。脚柱部内面は横位ハケ目。①白色の粗一細砂を多く含む②褐色(7.5YR6/6)③軟調、二次的の火熱を受けた可能性あり
13	高杯	口(19.0) 高17.1縦径15.0 杯部約3/4欠 西隣埋土 全体にナダ。脚柱部に絞りを残し、下半はナダ。①粗一細砂を含む②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)③やや軟調、一側面に黒炭
14	高杯	口16.6高14.2-13.3縦径(12.8) 杯部と頸の一部欠 西隣埋土下層 杯部内面と脚柱部内面にハケ目を残し、他はナダ。①白色の粗一細砂が目立つ②褐色(7.5YR6/6)、不均一③二次的の火熱を受けた可能性あり
15	甕	口16.0 口縁の一部と底部欠 西隣埋土 体中位外面に横位ハケ目を残し他は横位ヘラケズリ。内面は横位ナダ。①粗一細砂を含む②浅黄褐色(7.5YR8/3)③二次的の火熱を受けた可能性あり④外面が全体に煤に塗れる
16	甕	口13.6高19.0容2534cc 定形 南西隣埋土 体外面に斜位ハケ目後ヘラケズリ。内面横位ナダ。①粗一細砂を多く含む②褐色(5YR6/6) 体下部接合部を境に上下で発色が異なり、異質粘土によるものか③底一体下半は二次的の火熱を受ける
17	甕	口16.7高24.0容5082cc 定形 南西隣埋土下層 不整な丸底成形後乾磨段階を経て体上半を撥合。体上半一底に横位ヘラケズリによる横位ナダ。内面は下位にハケ目、中位以上はヘラケズリによる横位ナダ。①粗粒一粗砂を多く含む②明赤褐色(2.5YR5/6)③硬調、二次的の火熱を受ける④体中に煤が付着
18	甕	口19.5-18.4高27.9縦径7.7容828cc 口縁と体一部欠。体部外面は板状具小口面による横位にナダ後粗いミガキ。内面は横位ナダ。①細粒一粗砂を多く含む②褐色(7.5YR7/6)③体下半は二次的の火熱を受ける④体中位外面に煤付着。底面に粒状炭あり
19	甕	口15.4-14.8高23.5縦径7.1容4777cc 定形 南西隣埋土下層 体外面に横位ヘラケズリ。口縁一頸部ヨコナダ。内面はヘラケズリによる横位ナダ。下位はハケ目を残す。底面は不安定な平底で整形する。①細粒一粗砂を多く含む②浅黄褐色(7.5YR8/3)③普通④体下半は煤に塗れる
20	甕	口18.0高20.5容4300cc 定形 西隣埋土 体外面は板状具小口面による斜位と横位ナダ。内面は横位ナダ。①粗一細砂を多く含む②褐色(5YR6/6)③二次的の火熱を受ける④底部は赤褐色、体中位外面に煤付着

21	差	口16.3高23.5容460cc 部分的1/3欠 西壁障土下層 体下半は横位ヘラケズリ、胴中位接合部分で上半接合以前に斜位ハケ目、口縁-上半はナデ。部分的に粗い横位ヘラミガキ。①きめの粗い粘土に黒色の粗-細砂を多く含む②浅黄橙 (10YR8/4) ③やや軟調。底-胴下半は二次的火熱を受ける
22	差	口16.0高 (26.8) 容 (725) cc 体下半約1/4欠 北隅障土下層 体下半は横位ヘラケズリ後横位ヘラミガキ。体中位は斜位ハケ目後横位ヘラミガキ。口縁-体上半はナデ。内面は平滑な工具によるナデ。①粗-細砂を含む②浅黄橙 (10YR8/4) ③やや軟調。底面は二次的火熱を受ける
23	差	口 (20.1) 高29.8底7.0容8342cc 口縁-体上半約1/4、体下半約1/5欠 南東障土 体外面は板状具小口面による縦位。斜位ナデ。内面は横位ナデ。口縁ココナテ。①きめの粗い粘土に粗織を多く含む②橙 (5YR7/6) ③やや硬調④体片面に黒炭。体中位外面に窪付着
24	差	口16.4 体下半欠 南壁障土下層 胴中位は板状具小口面による横位ナデ。肩部は斜位ナデ。内面は横位ナデ。①やや緻密な粘土に粗織と粗-細砂を少量含む②橙 (2.5YR6/6) ③やや硬調④胴中位外面に窪付着
25	差	口15.4高27.9底6.7容6106cc 口縁-底約1/2 西壁障土 板状具小口面による縦位ナデ後横位ヘラミガキ。内面は横位ナデ後横位ヘラミガキ。①粗織-細砂を多く含む②赤黒 (2.5YR3/6) ③やや軟調④内面下に炭化物付着
26	差	口 (12.9) 高18.7底 (5.5) 容 (2487) cc 口縁約2/3欠 西壁障土 胴下半は横位ハケ目後まばらなナデ。内面は板状具小口面によるナデ。①粗-細砂を含む②にぶい橙 (5YR7/4) ③二次的火熱を受ける④底部付近は赤黄、胴中位には窪付着
27	瓶	口 (21.7) 高21.7口径7.4容 (5423) cc 口縁-底約1/2 北隅障土下層 体下半は横位ヘラケズリ、上半は縦位ハケ目、口縁ココナテ。内面は板状具小口面によるナデ。①粗-細砂を多く含む②灰白 (10YR8/2) ③軟調。胴外面の一部に黒炭④内面下半は器面剥離が激しい

## 16号住居跡出土遺物 (第95図 PL52)

1	高杯	口16.8 口縁の一部と脚部欠 東隅障土下層 外面は斜位ヘラケズリ。内面はヘラ状具による縦位ナデ。①赤褐色の粗織と粗-細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③二次的火熱を受ける
2	高杯	原径13.0 脚部約3/4破片 理土 外面はハケ目後丁寧なナデ。器柱部内面には絞り目を残す。①粗-細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③やや硬調
3	鉢	口16.9高11.4容1572cc 口縁一部欠 西隅床底 体部外面は斜位と縦位。内面は横位の板状具小口面によるナデ。体部外面に幅1cm強の粘土結核痕を残す。①粗織を多く含む②にぶい橙 (5YR7/4) ③やや硬調。底外面は二次的火熱を受ける④体部外面に窪付着。内面中位に炭化物付着痕あり
4	差	口16.8 体部中位以下欠 理土下層 体部外面上半は縦位。内面は横位のヘラナデ。口縁ココナテ。①粗織を多く含む②にぶい橙 (5YR7/4) ③口縁-体部上半に二次的火熱を受ける
5	差	底6.8 底-体下半破片 東隅床底 外面は縦位ヘラケズリ後まばらな縦位ヘラケズリ。内面は横位ハケ目。①粗織を多く含む②にぶい橙 (7.5YR6/3) ③底付近は二次的火熱を受ける

## 1号古墳出土遺物 (第98図 PL52)

1	杯	口縁下半-底約1/4破片 周壁障土下層 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ後ナデ。口縁下の残はわずかなが、鋭い。口縁-内面ココナテ。①赤褐色の粗織と粗-細砂を含む②にぶい橙 (7.5YR6/4) ③やや硬調。均一
2	杯	口 (13.8) 高5.0 口縁-底約1/5破片 周壁障土下層 底外面は時計回り基調と思われるヘラケズリ後ミガキ。口縁-内面ココナテ。底内面中央は弱い凹凸あり。口縁下の残は弱く、底との境界は無調整で、型作りを想定させる痕を残す。①赤褐色の粗織と粗-細砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③普通。均一
3	鈴鐺	径4.6高1.6孔径0.7 定形 周壁障土下層 上下両面は丁寧に研磨されて光沢をもつ。側面は内彎し、放射状のケズリを行う。穿孔は中心よりややずれる。下の面細かい擦痕は使用痕ではなく輪周固定のものだろう。①蛇紋岩②オリーブ褐
4	耳環	外径2.6-2.3内径1.4-1.2重13.5g 周壁障土 径8ミリの断面楕円形の棒を輪に巻くように折り返したと考えられる。①銅地に鍍金と思われる。

## 2号溝出土遺物 (第101図 PL52)

1	土鏝	長5.2径1.5孔径0.5重12.1g 定形 棒軸巻き付けにより成形。①粗-細砂を含む②橙 (5YR6/6) ③普通
---	----	--

## 5号溝出土遺物 (第103図)

1	高杯	脚柱部破片 外面は粗い縦位ヘラミガキ。内面には絞り目を残す。①粗-細砂を含む②橙 (5YR6/6) ③やや軟調で均一
2	灰輪	口 (6.2) 口縁破片 口縁は強く外へ折り返し。下端の残は鋭い。輪は不均一で、剥落部分が多い。①やや粗い粘土に黒色の粒子を含む②明オリブ灰 (3.5G/7L)

## 遺物観察表

## 6号溝出土遺物(第104図 PL52)

1	柄	口13.6高5.3底6.3 口縁一部欠 右回転ロクロ成形、底回転糸切抜付高台。口唇部はやや膨らむ。①やや緻密な粘土に白色・無色の細砂を多く含む②黒灰(10YR6/1)③やや酸化気味で軟調
2	高杯	脚柱部破片 杯部との接合部は粘土塊光澤により、後内面をヘラケズリ。外面はまばらな縦位ヘラミガキ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③普通

## 9号溝出土遺物(第106図)

1	灰目碗	体部破片 右回転ロクロ成形でロクロ目は高い。軸はほぼ均一で、禾目状に発色する。①ザツクリした粗い粘土で赤色の微粒が見られる②灰白(7.5YR/2)③やや軟調
---	-----	--

## 12号溝出土遺物(第107図)

1	高杯	脚柱部破片 外面は縦位ヘラミガキ、内面には鋭り目を残す。①赤褐色と軽石の細礫と粗～細砂を含む②にぶい赤褐(5YR5/4)③普通、均一
---	----	--

## 15号溝出土遺物(第109図 PL52)

1	杯	口13.0高4.8 口縁約1/3欠 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。内面はヘラ状具によるナデ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通
2	碗	底部破片 内面は黒色処理、内外面ともヘラミガキ。内面は凹凸あり。①粗～細砂を含む②にぶい貴橙(10YR7/4)④外面は酸化、内面と器壁は還元
3	青磁碗	底(5.2) 高台部破片 頸り出し高台で、腰部との境は沈線状に頸り込む。軸は均一で厚さ0.5ミリ前後。①緻密で夾雑物は少ない②灰白(5Y7/1)、軸はオリーブ灰(10Y6/1)

## IV・V区グリッド出土遺物(第118図)

1	柄	口12.6高6.5 口縁一体約1/4欠 IV区N-22 口縁ヨコナデ、体中位以下は横位ヘラケズリ。内面は縦位ヘラナデ。口縁外面に縦筋を残す。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通④体外面中位に煤付着
2	碗	口12.6高5.5 口縁1/3欠 IV区1号住付近 口縁ヨコナデ、体外面は横方向、底面はほぼ一方のヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②明赤褐(2.5YR5/6)③普通
3	杯	口(13.5) 高(3.9) 口縁～底約1/2欠 V区P-1 黒色土層下 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ、内面はナデ。①少量の細礫と粗砂を含む②にぶい橙(7.5YR6/4)③やや軟調、均一
4	杯	口(13.8) 口縁～底約1/4破片 V区P-1 口縁～内面ヨコナデ、底外面ヘラケズリ。①細礫と粗砂を少量含む②橙(7.5YR6/6)③やや軟調、均一
5	杯	口(16.5) 高3.8 口縁約1/2欠 V区P-2 口縁～内面ヨコナデ、底外面は一方のヘラケズリ。①粗～細砂を含む②橙(7.5YR7/6)③やや軟調で均一
6	瓶	口(24.5) 口縁～体上位約1/4破片 IV区L-20 口縁ヨコナデ、体外面は縦位ハケ目後、ヘラケズリ。内面は縦位ヘラミガキ。把手部分を嵌入後ナデとミガキ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③器壁は還元気味④内面下半は割離、口縁直下に縦筋あり
7	鉢	口10.5高7.8 底の一部欠 V区Q-4 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ、口縁ヨコナデ。内面は丁寧なナデ。①粗～細砂を含む②橙(5YR6/6)③やや軟調で、均一④外面に煤付着
8	高杯	口(18.3) 口縁約1/3破片 V区G-4 外面下半は放射状ハケ目後内外面とも幅状の横位ナデ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を含む②橙(2.5YR6/6)③普通
9	火鉢	口40.5高21.5高台径36.5 口縁～底約1/4欠 V区表接 口縁は強く内彎、高台は2段にくびれる。左回転成形。体外面中位に2本の凹線、その下に細かい格子目を彫んだ施文具を3～4段回転させて施文。2個一對の獅子面を付け、口に把手孔を穿つ。外面は全体に磨きを施す。①比較的緻密な粘土に赤褐色の細礫を含む②黒灰色。器面は褐色を帯びる③濃し、軟調



Ⅷ区水田面下層出土遺物 (第119図)

1	輪	口14.5高5.0 完形 I-9グリッド 口縁ヨコナデ、外面は時計回り基調のヘラケズリ。内面は斜位の丁寧なヘラミガキ。 ①粗～細砂を含む②にぶい靑 (5.YR6/4) ③やや硬調で均一
2	杯	口13.0高5.3 口縁～底約1/4欠 I-9グリッド 底外面は同心円基調のヘラケズリ、口縁ヨコナデ、内面ナデ。口縁下の縁は2段で鋭く突出する。底内面は鋭い凹凸あり。①細砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/4) ③普通、均一
3	杯	口13.9高6.3 口縁一部欠 I-9グリッド 底外面は時計回り基調のヘラケズリ、口縁～内面は丁寧な横位ナデ。口縁下の縁は鋭く丸みを持つ。①細砂を多く含む②にぶい靑 (10.YR7/4) ③均一でやや硬調
4	杯	口(13.5)高6.1 口縁～底約1/3欠 H-0グリッド 底外面は鋭いヘラケズリ、口縁ヨコナデ、内面ナデ。①細砂含む②にぶい靑 (10.YR7/4) ③底外面に黒炭あり④器面の風化が激しい
5	杯	口13.4高6.6 完形 I-8グリッド 口縁～底内面中位にヨコナデ、底外面はヘラケズリ。底内面はヘラ状具によるナデ。口縁下の縁はヘラ状具先端でナデ。①赤褐色の細礫と細砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/4) ③普通、均一
6	杯	口12.8高5.9 口縁一部欠 I-8グリッド 口縁～底内面ヨコナデ、底外面は時計回り基調のヘラケズリ。①やや緻密な粘土で細砂を少量含む②靑 (5.YR6/6) ③軟調で均一
7	杯	口12.8～13.6高6.4 口縁1/3欠 I-8グリッド 底外面は乾雑が進んだ段階でのヘラケズリ、口縁は2段にくびれる。内面はナデ。口縁下の縁は丸味をもって突出する。底内面はやや凹凸。①赤褐色色が目立ち、細砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/4) ③やや硬調で、二次的の火熱を受けた痕跡あり
8	杯	口(14.8)高6.6 口縁～底約1/2欠 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ、底は小さな平底。内面は丁寧なナデ。口縁下の縁は小さく突出する。①赤褐色色の多い粗砂を含む②にぶい靑 (7.5YR7/4) ③普通、口縁内側に黒炭が見られる
9	杯	口14.5高6.7 口縁～底の一部欠 I-9グリッド 底外面は中央が一方、周辺同心円状ヘラケズリ。内面はナデ。口縁下に縦筋を残す。①赤褐色色の多い粗砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/3) ③やや軟調
10	杯	口12.8高5.8 口縁～底の一部欠 I-10グリッド 底外面は一方を基調としたヘラケズリ、口縁ヨコナデ、内面は丁寧なナデ。口縁下の縁はやや強く突出する。①赤褐色色を含む粗砂が多い②にぶい靑 (7.5YR6/3) ③やや硬調、口縁部に黒炭
11	杯	口13.0高6.0 口縁約1/2欠 I-8グリッド 口縁～内面ヨコナデ、底外面はヘラケズリだが不鮮明。①赤褐色の細礫と粗～細砂を含む②にぶい靑 (5.YR6/4) ③やや軟調で均一
12	杯	口(14.0)高5.5 口縁～底約1/2欠 I-9グリッド 底外面は鋭いヘラケズリ、口縁ヨコナデ、内面ナデ。口縁下の縁は鋭い。①赤褐色色と細砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/3) ③やや軟調
13	杯	口(13.0)高5.5 口縁～底約1/3破片 I-9グリッド 口縁～内面ヨコナデ、底外面は単一方のヘラケズリ。①赤褐色の細礫と細砂を含む②にぶい靑 (7.5YR7/4) ③やや軟調
14	杯	口(13.2)高5.7 口縁～底約1/3破片 I-9グリッド 底外面中央は一方、周辺時計回りのヘラケズリ。口縁～内面はヨコナデ。①赤褐色色と細砂を含む②にぶい靑 (10.YR7/3) ③普通
15	杯	口(13.3)高5.6 口縁～底約1/3破片 I-9グリッド 底外面は中央が一方、周辺同心円状ヘラケズリ。口縁ヨコナデ、内面ナデ。口縁下の縁は小さい。①赤褐色色と細砂を含む②にぶい靑 (7.5YR6/4) ③やや硬調
16	盃	口(19.5) 口縁～体上半約1/5破片 H-8グリッド 口縁ヨコナデ、外面は斜位ヘラケズリ後縦位の粗いナデ。内面はナデ。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②黄緑～灰色③二次的の火熱を受けた可能性あり
17	壺	体～底約1/2破片 I-8グリッド 体外面は斜位ヘラケズリ、内面はナデ。①粗～細砂を多く含む②暗褐 (7.5YR3/2) ③二次的の火熱を受ける④赤黄、外面の剥落が激しい

2 三室間ノ谷遺跡出土遺物

Ⅱ区1号住居跡出土遺物 (第123・124図 PL90)

1	輪	口12.4高7.2 口縁1/3欠 南東壁埋土下層 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。底内面はヘラ状具によるナデ。口縁下の縁は鋭く丸い。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②靑 (5.YR6/6) ③やや硬調で均一④底外面に塵付着
2	鉢	口(13.6)高6.4 口縁約1/2欠 カマド左脇 体外面は反時計回り基調のヘラケズリ。底はヘラケズリで不安定な平底を作り出す。口縁ヨコナデ。体外面上半と内面は粗いナデのみ。①軽石・岩片・赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②にぶい靑 (5.YR4/4) ③普通、二次的の火熱を受けた可能性あり④底外面に少量の塵付着
3	杯	口(14.0)高6.8 約1/2破片 南東壁埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。底内面に凹凸あり。口縁下の縁はヘラ状具ナデで小さく張り出す。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②赤褐 (2.5YR4/6) ③普通、二次的の火熱を受けた可能性あり④器面に灰化物付着
4	鉢	口10.5高5.4 完形 南側味直 体外面下半は斜位ヘラケズリ。口縁～体上半と内面は粗いナデ。底面はヘラケズリ。内面の凹凸が激しい。①赤褐色と白色の細礫と粗～細砂を含む②暗灰 (10.YR4/1) ③普通、やや還元気味で均一
5	(鉢)	底5.2 体上半以上欠 カマド右脇 体外面は斜位と横位のヘラケズリ。底面はヘラケズリでやや上げ底に作り出す。内面は布状具による丁寧なナデ。①粗～細砂を多く含む②浅黄靑 (7.5YR8/3) ③不均一で、体下半外面に二次的の火熱を受けた可能性あり

遺物観察表

6	壺	口17.5 胴下平欠 貯蔵穴状 頸-肩部外面は斜位のヘラズリ。内面は横位ナデ。①細礫と粗砂を含む②外面は橙(5.YR6/6)内面は赭灰色③普通④口縁内外面は細礫が散しい
7	甕	口19.8 体下平以下欠 カマド燃焼部 体外面は縦位のヘラナデ。内面は横位ヘラナデで、頸部付近はヘラズリ。①粗砂を多く含む②橙(5.YR6/6)③やや硬調、均一④口縁-肩部の外面に煤附着
8	甕	口(15.6)高(29.0)容(5127)cc 口縁-底約1/3破片 東壘形赤土 体外面肩部は横位、体部は斜位のヘラズリ。内面は指痕による斜位ナデ。底面はヘラズリで丸底状に整形する。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②明赤帯-明赤帯(2.5YR3/1-3/6)③不均一④口縁外面に煤附着、内面は割傷
9	甕	口17.2高31.2容8276cc 完形 カマド器底部 体外面下半は斜位のヘラズリ。中位以上は縦位のヘラナデ。内面は横位ヘラナデ。①粗-細砂を含む②橙(5.YR6/6)③底面付近は二次的火熱を受ける④体外面中位には煤附着
10	甕	口13.5高17.3容1709cc 完形 カマド燃焼部伏位 体外面下半は下→上、上半は上→下の縦位ヘラズリ。内面は横位ヘラナデ。口縁ヨコナデ。底面は大きめの平底でヘラズリで整形。①2-3ミリの白色粘土粒と粗-細砂を含む②暗赤-明赤褐色③外面の体中位以下は二次的火熱を受ける④内面下半に炭化物附着痕あり

Ⅱ区2号住居跡出土遺物(第128・129・130図 PL90・91)

1	杯	口13.2高5.5 口縁約1/5欠 東壘形土下層 底外面は時計回り基調のヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面はナデで平滑に整える。口縁下の縁は丸く張り出す。①赤褐色の細礫と粗-細砂を含む②橙(2.5YR6/6)③普通、均一
2	杯	口(12.3)高5.4 口縁約1/2欠 南東壘形土下層 底外面は不定方向のヘラズリ。体部外面は無調整で幅1.5cm前後の粘土粒接合痕を残す。口縁ヨコナデ。内面は粗い放射状ヘラミガキ。①細礫と粗砂を含む②橙(5.YR6/6)③やや硬調、均一
3	輪	口13.3高5.5 完形 南直流 底外面は荒れて不明瞭だが、時計回り基調のヘラズリと思われる。口縁-体上半ヨコナデ。内面は放射状ヘラミガキ。①赤褐色と軽石様の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③均一④内外面とも器面割傷が散しい
4	碗	口12.4高5.8 口縁一部欠 赤直 底外面は中央一方向、周囲は時計回り基調のヘラズリ。体部外面は無調整で幅1-1.5cmの粘土粒接合痕を残す。口縁ヨコナデ。内面は放射状ヘラミガキ。①細礫と粗砂を多く含む③明赤帯(2.5YR5/6)③普通、均一④口縁外面の一部に煤附着
5	碗	口13.0高7.1 口縁一部欠 坭土下層 体一底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁-内面ヨコナデ斜角方向ヘラミガキ。口縁と体部の境には粘土粒接合痕を残す。①石英や赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③やや内面にムラ④内外面の一部に煤附着
6	碗	口12.2高5.6 口縁約1/3欠 赤直 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁は2回のヨコナデにより外面に割い段を残す。内面はヘラナデ後まばらな放射状ヘラミガキ。①長石・石英・赤褐色の細礫と粗砂を多く含む②ぶい橙(7.5YR7/4)③やや硬調、均一
7	杯	口12.6高4.3 口縁約1/4欠 東壘形土 底外面は乾輪が通んだ段階で反時計回り基調のヘラズリ。体部外面は無調整。口縁ヨコナデ。内面はヘラナデ。口縁下の縁は段状。①赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③普通、外面にややムラ
8	(節)	胴下部破片 カマド右側壁土 外面は同心円状のヘラズリで丸底に整形する。上半部の器厚は非常に薄く、一部に成形上のミスと思われる凹みを残す。内面はヘラナデ。①粗-細砂を多く含む②ぶい橙(5.YR6/4)③硬調、ややムラ
9	鉢	口11.0 口縁-体部約1/2破片 南壘形赤土 体外面は斜位ヘラズリ。口縁ヨコナデ。内面は口縁と同様の丁寧なナデ。口縁下の縁はわずかに段状を呈する。①長石・石英・赤褐色の細礫と粗-細砂を多く含む②橙(2.5YR7/6)③硬調
10	甕	口18.4 体下平部欠 カマド燃焼部土 体外面下半は横位のヘラズリ。上半は板状具小口面による縦位ナデ。内面は横位ヘラナデ。①細礫と粗砂を多く含む②ぶい橙(7.5YR6/4)③体下半外面に二次的火熱を受ける
11	甕	口18.5 口縁-肩部破片 坭土 肩部外面は板状具小口面による斜位のナデ。口縁は2-3段のヨコナデで、頸部外面に煤を作る。肩部内面は横位ヘラナデ。①細礫-粗砂を多く含む②ぶい黄橙(10YR7/4)③普通、ややムラ④口縁外面の一部が煤ける
12	甕	口15.2高13.1 完形 カマド燃焼部伏位 体外面下位は斜位ヘラズリ。中位以上は縦位ナデ。内面は平滑な工具使用の横位ナデ。底面無調整。①粗砂を多く含む②浅黄橙(10YR8/3)③不均一④体部以下外面に粘土附着
13	甕	口19.5 胴部約2/3欠 南東壘形赤土 体外面は板状具小口面による斜位のナデ後粗いヘラミガキ。内面下半は横位ヘラズリ。上半は横位ヘラナデ。①細礫と粗砂を多く含む②ぶい橙(5.YR6/4)④外面下半は二次的火熱を受ける⑤外面下半に粘土附着
14	瓶	口23.0高30.5口径7.8容7930cc 完形 カマド焚口直流 体部外面は平滑な板状具小口面による縦位ナデ。内面は横位ヘラナデ後縦位の粗いヘラミガキ。体下部の接合痕が明瞭に残る。底部はヘラズリで穿孔。①細礫を多く含む②浅黄橙(7.5YR8/4)③外面内面にムラ
15	壺	口19.2高34.0高9.5容13249cc 体部約1/3欠 南東壘形赤土 胴外面の下位は縦位。中位の接合部は横位のヘラズリ。上半は縦位ナデ。内面は全体に横位ヘラナデ。口縁は2段のヨコナデ。底面は斜位ヘラズリ。①粗-細砂を多く含む②橙(7.5YR6/6)③胴下半外面に二次的火熱を強く受ける④胴下半外面の一部に黒炭あり
16	紡錘車	径3.3高1.4口径0.75重16.7g 完形 南西壘形赤土 上面は粗い研磨、側面は放射状の粗かい研磨を施す。側面は内磨し、下手は使用による磨減らしき痕跡を残す。①滑石②炭成分はオリブ褐色、他は暗褐色
17	石製織造品	長2.7幅1.8厚0.5口径0.19 完形 南西直流 頸縁のうち三辺は荒削りのままで、一辺のみ研磨。表裏面は粗い研磨で繊維を多く残す。穿孔は一方向から。①滑石②オリブ褐

18 塵	長13.3幅0.6厚2.6重520g	定形 埴土 整形はしないが、縦線には弱い打痕が残る。	①安山岩②灰
19 白玉	径0.55厚0.38孔径0.20	定形 西床直 表表面は細かく、側面は粗い研磨。穿孔は研磨以前。	①滑石②灰白
20 白玉	径0.54厚0.33孔径0.20	定形 北西床直 表表面は細かく、側面は粗い研磨。穿孔は研磨以前。	①滑石②灰白
21 白玉	径0.54厚0.33孔径0.20	上面 中央床直 表表面は細かく、側面は粗い研磨。穿孔は研磨以前。	①滑石②灰白
22 白玉	径0.64厚0.40孔径0.22	定形 北西床直 表表面は細かく、側面は粗い研磨。断面は台形状。穿孔は研磨以前。	①滑石②灰白
23 白玉	径0.48厚0.40孔径0.19	定形 南東壺形床直 表表面は細かく、側面は粗い研磨。断面は台形状。穿孔は研磨以前。	①滑石②灰白
24 塵	長さ不明幅5.1厚2.4 半分欠	南東壺形床直 先端部に細かな敲打痕、表面に6~7条の短く鋭い擦痕が残る。	①砂岩②灰白

## Ⅱ区3号住居跡出土遺物(第135・136図 PL92)

1 杯	口13.2高6.2 口縁約1/4欠	カマド左隣埋土下層 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁ヨコナデ。内面調整は剣磨のため不明。口唇の上面に沈線状の面取りを行う。	①やや緻密な粘土に赤褐色の細粒と粗砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) 磨擦は浅黄橙 (7.5YR8/4) ③二次的加熱を受けた可能性あり④内外面とも粘土付着し、器壁割れが激しい	
2 杯	口13.0高6.2 口縁と底一部欠	南東壺形埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁一内面ヨコナデ。底内面中央部やや弱い凹凸あり。口唇に強い面取り、口縁下の縁は鋭く突出する。	①赤褐色の細粒と粗一細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや軟調で、均一	
3 杯	口10.7~10.3高3.6 底一部欠	東隣埋土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁一内面ヨコナデ。口縁下の縁はナデによりやや突出する。	①赤褐色の細粒と粗砂を含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや硬調。二次的加熱を受けた可能性あり	
4 杯	口(17.5) 高7.5 口縁約2/3欠	埋土 底外面は乾磨が進んだ段階で同心円状のヘラケズリを施し、わずかに光沢を帯びる。口縁一内面ヨコナデ。口縁下は弱い沈線状ナデにより丸く突出する。	①赤褐色の細粒と粗一細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③不均一④器面の割れが激しく、表面とも粘土と思われる白色物質が付着する	
5 杯	口13.3高5.9 約1/2破片	東隣埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁一内面は丁寧なヨコナデ。口唇やや弱い面取り。口縁下の縁はわずかに突出する。口縁外面に繋ぎの痕跡と思われる筋が残る。	①やや緻密な粘土に軽石と赤褐色の細粒を含む③明赤褐 (2.5YR5/6) ④やや軟調、均一	
6 杯	口(13.5) 高6.0 約1/2破片	東隣埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁一内面は丁寧なヨコナデ。口唇は沈線状の面取り。口縁下は鋭いナデで、縁は鋭く突出する。	①赤褐色の細粒と黒色の粗一細砂を多く含む②橙 (2.5YR6/6) ③やや硬調。二次的加熱を受けた可能性あり	
7 鉢	口11.8~12.3 底一部欠	カマド隣埋土 底はやや丸底気味の成形で、外面全体に粗いヘラケズリ。内面は乾磨が進んだ段階で斜位ヘラケズリ。口縁は無調整。	①ややキメの粗い粘土に粗砂を多く含む②にぶい橙 (7.5YR7/4) ③やや軟調でムラあり④器底部の未成品の可能性あり	
8 壺	口20.0 体部以下大部分欠	北隣埋土 体外面は斜位、口縁は横位のヘラケズリ。内面は横位ヘラケズリ。	①岩石片等の細粒を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③湿度が多く不均一	
9 壺	口19.6 口縁一上半平均1/2破片	東隣埋土 体外面下半は斜位のヘラケズリ。上半は縦位ハケ目後口縁ヨコナデ。内面は2種類の板状具小口面による横位ナデ。	①長石・石英・岩石片等の細粒を多く含む②橙 (5YR7/6) ③普通、均一、二次的加熱を受ける	
10 砥石	長7.3幅5.2厚4.0	定形 埴土 整形痕はほとんど残さない。一側面のみ外磨し、他の三面は内磨しており、表面側面ともほぼ均等に使用する。小振りで面が不安定なことから手持ち使用されたものだろう。小口面に数十本の鋭い擦痕が残る。	①砥石	
11 瓶	口22.2高30.0孔径8.0重6345cc	口縁と体一部欠	南東壺形埋土 体外面は縦位のヘラケズリ。口縁は強いヨコナデ。口唇つまみナデ。内面は横位ヘラケズリ。底はヘラケズリで整形。	①細粒を多く含む②橙 (10YR7/6) ③普通、体下半は二次的加熱を受けた可能性あり④底から高さ6cm、径17cmほどの外面部分で使用痕と思われる剣磨あり
12 瓶	口25.6高31.8孔径7.0重8396cc	口縁約1/3欠	北側床直 体外面下半は横位一斜位。上半は縦位のヘラケズリ。成形時のナデ痕を残す。内面は縦位ヘラケズリ後粗いヘラミガキ。	①粗砂を多く含む②にぶい橙を主とするが、破片部の変色が激しく、不均一③普通、破砕後二次的加熱を受ける
13 壺	口17.2 口縁約1/4と底部欠	南東壺形埋土 体外面上半は目の細かい板状具小口面による縦位ナデ後半を主に縦位のヘラケズリ。口縁外面はハケ目後ヨコナデ。内面は目の粗い横位ハケ目。	①細粒を多く含む②赤褐色から黄褐色までムラあり③片面に強い二次的加熱を受ける	
14 壺	口15.4高23.4 口縁一体部約1/3欠	南東壺形埋土 体外面上半は板状具小口面による縦位ナデ後全体に縦位のヘラケズリ。内面は板状具小口面による横位ナデ。口縁はヘラケズリ。底面はヘラケズリ。	①赤褐色の細粒と粗砂を多く含む②にぶい赤褐 (5YR5/4) ③普通、体下半側は二次的加熱のためムラあり④口縁外面の一部に繋ぎ	
15 壺	口縁と胴下半部欠	埋土 外面は斜位のヘラケズリ、粗いヘラケズリ。内面整形は剣磨のため不明。	①粗砂を多く含む②にぶい橙 (7.5YR7/4) ③二次的加熱を受けて強い	

遺物観察表

Ⅱ区4号住居跡出土遺物(第141図 PL93)

1	杯	口13.5高5.7 口縁～底約1/2破片 南壁際埋土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。底内面中央にヘラナダ痕を残してヨコナデ。口縁下は強いナデで、縁が鋭く突出する。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③やや軟調で均一
2	埴	最大径7.4 埋土 底外面は粗いヘラケズリ。胴上～中位は丁寧なナデと横位の粗いヘラミダキ。内面は丁寧なヨコナデ。①緻密な粘土で粗砂を少量含む②いぶい橙(7.5YR7/4)③やや硬調、均一
3	罎	口19.5 体部以下約2/3以上欠 カマド右脇 体外面は縦位の細かいハケ目。内面は横位ヘラナデ。①きめの粗い粘土に粗砂を多く含む②いぶい橙(7.5YR7/4)③やや脆い④外面全体に粘土付着。口縁内外面に窪付着
4	管玉	長1.80径0.60孔径0.21 完形 西側床直 全体に丁寧な研磨。穿孔は両側からで、中央ではほぼ直線的に連続する。肩部穿孔後は研磨をしない。①純粘岩②灰緑
5	管玉	長2.15径0.67孔径0.20 端部欠 西側埋土 全体に丁寧な研磨。穿孔は両側からで中央で食い違う。孔口部はやや漏斗状に開く。①純粘岩②灰緑

Ⅱ区5号住居跡出土遺物(第142図 PL93)

1	杯	口11.4高4.1 完形 カマド煙道部 底外面中央は交互、周縁は反時計回りのヘラケズリ。体部外面は無調整で型作り痕跡と思われる筋を残す。口縁ヨコナデ。口縁～内面中位ヨコナデ。内面中央は押圧痕を残す。口縁は1回のナデで縁は丸く突出する。①角白土等の黒色鉱物を多く含む②橙(5YR6/6)③やや軟調、均一
2	杯	口(12.0) 高3.3 口縁～底約1/3破片 埋土 底外面は時計回り基調のヘラケズリで、筋を残す。口縁～内面はヨコナデで、中央部は押圧痕を残す。口縁下の縁は小さい。①長石の細礫と黒色鉱物の粗砂を含む②橙(5YR6/6)③やや軟調、均一
3	杯	口(11.2) 高3.4 口縁～底約1/3破片 埋土 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁～内面はヨコナデ。口縁ヨコナデ。口縁下の縁は突出せず、段状。①緻密な粘土に粗砂を含む②いぶい橙(5YR7/4)③軟調、均一

Ⅱ区6号住居跡出土遺物(第147・148図 PL93・94)

1	杯	口13.3高6.0 口縁約1/6欠 南壁際埋土 底外面は乾燥が進んだ段階で時計回り基調のヘラケズリ。口縁～内面ヨコナデ。口唇上面に弱い面取り。口縁下の縁は沈没状のナデで小さく突出する。①赤褐色の細礫と粗～細砂を含む②橙(2.5YR6/6)③普通、ややムラあり
2	杯	口12.3高5.7 口縁わずかに欠 南東隅床直 底外面は中央一方向、周縁は放射状のヘラケズリ。口縁～内面ヨコナデ。口縁下の縁は丸く、やや突出する。内面中央は押圧により凹凸が残る。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③二次的加熱を受けた可能性あり④底外面に黒痕、内面に黒ずんだシミあり
3	杯	口13.8高(6.8) 口縁～底約1/6欠 南壁際床直 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁～内面ヨコナデ。体部外面は無調整部分を残し、縦筋が見られる。口縁下の縁は鋭く突出する。①赤褐色の細礫と粗～細砂を多く含む②橙(5YR6/6)④内面に二次的加熱を受けた可能性あり、脆い
4	杯	口11.5高5.5 口縁～底約2/3欠 埋土 底外面中央は不定方向のヘラケズリ。口縁～体部外面はヨコナデとナデ。内面ヨコナデ。口縁下の縁は不明瞭で、丸み強い。①赤褐色の細礫と粗～細砂を含む②橙(5YR6/6)③普通、均一④底面に炭化物付着
5	罎	口15.8～16.7高31.2 完形 カマド部設部 体外面は上方への縦位～斜位の長いヘラケズリ。内面は横位ハケ目。口縁ヨコナデ。①細礫を多く含む②いぶい橙(7.5YR7/4)③底～体下部外面は著しく二次的加熱を受け、脆い
6	瓶	口22.5～23.5高31.0～30.5孔径7.5径8399cc 完形 貯蔵穴 体外面の下半は横位、上半は縦位の浅いヘラケズリ。中位の接合部分は横位の強いヘラケズリ。内面は乾燥が進んだ段階で縦位の長いヘラケズリ後粗いヘラミダキと見られる。①きめのやや粗い粘土に粗砂を多く含む②橙(5YR6/6)③対応する体部両面に黒痕④口縁内面に黒色のシミが見られる
7	鉢	口20.2～18.0高13.2 口縁～底約1/3欠 カマド煙道部 口縁が円滑。体部外面は斜位のヘラケズリ。内面の下半は横位、上半は縦位のヘラナデ。底面ヘラケズリ。①若石片・軽石・赤褐色等の細礫と粗砂を多く含む②橙(5YR6/6)③やや軟調で脆く、二次的加熱を受けた可能性あり④脆い可能性あり
8	砥石	幅5.3～3.4厚3.0～1.8 約1/2欠 南壁際埋土 端部は細かい打割によって調整。表面側面とも磨ぎ減りが激しい。①砂岩。きめは細かく、夾持物はほとんどない②灰黄褐色
9	子持勾玉	長7.3孔径0.55 尾一部欠 床面よりやや上、3層 全体に丁寧な研磨で丸みをもった形状を作り出す。頂部先端は尖り、穿孔は両側から行い、互い違いになる。両側部、背、腹に作り出された突起は角張った勾玉状で、両側2個づつの突起は孔と同様にややずれて対称になる。①純粘岩②緑黒

Ⅱ区7号住居跡出土遺物(第150図 PL94)

1	杯	口13.0高5.8 完形 南壁際床直 底外面の中央部は一方向、周縁は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁～内面ヨコナデ。口唇は上面に面取り。口縁下は鋭く突出する。①赤褐色の細礫と粗砂を多く含む②橙(2.5YR6/6)③やや硬調で均一
---	---	--

2	杯	口13.2高5.8 口縁一底約2/3破片 南壁際埋土 底外面は時計回りの基調のヘラケズリ。口縁一内面ヨコナデ。口縁中央はやや肥厚する。口縁下の稜は丸みが強い。①赤褐色の細礫と若石片と思われる白色の粗砂を含む②橙 (2.5YR6/6) ③内面黒色④二次的の火熱を受けたため割離、変色が激しい
3	杯	口11.2高3.2 口縁約1/3欠 埋土 底外面中央は一方、縦線は反時計回りの基調のヘラケズリ。口縁一底面中位ヨコナデ。底内面に凹凸を残す。①やや緻密な粘土に粗一粗砂を含む②橙 (5 YR6/5) ③普通、均一
4	杯	口12.0高3.7 口縁約1/2欠 埋土 底外面は反時計回りの基調のヘラケズリ。口縁一底面内面中位ヨコナデ。底内面中央は凹凸を残す。①赤褐色の細礫と粗砂を含む②橙 (5 YR6/6) ③やや軟調、均一
5	罍	口(20.5) 口縁約2/3と体下半一部欠 貯蔵穴跡床直 体外面下半は斜位のヘラケズリ、接合部分では横位ヘラケズリ。上半は縦位ナデ。内面は全体に横位ヘラナデ。①比較的大きさの揃った細礫一粗砂を含む②にぶい橙 (5 YR7/4) ③普通、不均一④体下半内外面の割離と変色が激しい
6	(面)	胴最大幅23.0 肩部以上と底部欠 カマド付近埋土 朝外面は縦横のヘラケズリと粗いミガキ。内面は接合面を残し、指節による粗いナデ。内外面とも変形が粗く、器形も歪む。①比較的緻密な粘土に細礫一粗砂を含む②淡黄 (2.5YR/3) ③やや軟調、破砕後二次的の火熱を受ける
7	罍	口(19.8) 口縁一上半平均1/3破片 南壁際床直 体外面は目の細かい板状具小口面による縦位のナデ。内面は横位ヘラナデ。口唇外側に面取り。①粗い粘土に大ききさの揃った粗砂を多く含む②にぶい黄橙 (10YR7/3) ③やや硬調、均一④体外面僅付着

## Ⅱ区8号住居跡出土遺物 (第153図 PL95)

1	鉢	口11.6高6.2底6.1 口縁1/2欠 カマド 体部外面に横位、底面一方向ヘラケズリ。口縁一内面はヨコナデ。①赤褐色、白色の粗砂を多く含む②淡橙 (5 YR8/3) ③器面は二次的の火熱を強く受ける④口縁外面に炭化物附着痕あり
2	鉢	口(12.0) 高5.5底5.6 口縁一底1/2欠 カマド 体部外面に横位、底面一方向ヘラケズリ。口縁一内面はヨコナデ。①やや緻密な粘土に赤褐色、白色の細礫と粗砂を含む②淡橙 (5 YR8/3) ③器面は二次的の火熱を強く受ける
3	杯	口(12.5) 高5.8 口縁約3/4欠 埋土 底外面は反時計回りのヘラケズリ。口縁一内面ヨコナデ。口縁下の稜は小さく尖る。①赤褐色の細礫、粗砂を多く含む②にぶい橙 (5 YR6/4) ④やや軟調⑤内面に粘土付着
4	手摺ね	口5.0高2.8底4.2-4.8 完形 床直 浅鉢状に成形し、外面と底面の変形は丁寧。①赤褐色、白色、無色鉱物の粗砂を含む②にぶい黄橙 (10YR7/4) ③やや硬調④底面に4ミリ次の横圧痕
5	瓶	口20.8高23.5口径6.4容4460cc 口縁一底部約1/2欠 貯蔵穴 口縁ヨコナデ。内面は横位、外面は縦位のヘラケズリ。底孔はケズリ。①赤褐色、黒色、白色鉱物の粗砂を多く含む②淡黄橙 (10YR/4) ③やや軟調、体外面一部に黒泥④体下半外面のくびれ部に擦痕
6	罍	口13.8-10.8高15.3底(7.5) 容1293cc 底一部欠 カマド 内外面とも縦位ヘラナデ。口縁は両側からくびれるように強く歪み、ひびが入った部分に粘土を貼付して補強する。①やや粗い粘土に粗砂を多く含む②暗褐 (7.5YR3/3) ③二次的の火熱を受けた可能性あり、不均一
7	白玉	径0.55高0.48孔徑0.22 完形 床直 上面と側面は丁寧に研磨、下面は打割痕を残す。①滑石②灰白

## Ⅱ区9号住居跡出土遺物 (第154図 PL95)

1	瓶	口15.8- (14.0) 高13.4口径2.2容1261cc 口縁と体の一部欠 カマド 口縁ヨコナデ。体内外面は斜位ヘラナデ。底孔はケズリで穿孔。口縁がかなり歪む。①細礫一粗砂を含む②にぶい橙一暗褐でムラが多い③やや硬調
---	---	---

## Ⅲ区1号住居跡出土遺物 (第156図 PL95)

1	鉢	口(13.2) 高(6.6) 底(7.2) 口縁一底1/2 埋土 口縁ヨコナデ。体外面は粗い横位ヘラナデ。内面は割離のため変形不明。体外面に約1.5cm単位の粘土帯接合痕残す。①細礫一粗砂を多く含む②橙 (7.5YR6/6) ③普通、口縁外面の一部に黒泥
2	高杯	口15.9 脚部欠 床直 口縁内外面とも丁寧なヨコナデ。底外面は放射状ヘラナデ。脚部との接合は粘土塊の充填による。①白色、黒色の粗砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③普通、黒泥、ムラあり
3	高杯	口(19.5) 脚部と口縁の一部欠 床直 内外面とも丁寧なヨコナデで、口唇の稜は強い。脚部との接合は粘土塊充填による。①やや粗い粘土に粗砂を多く含む②黒褐一淡赤褐、ムラ多い③硬調、黒泥多い④外面に煤付着
4	埴	口18.8高8.6 完形 床直 口縁外面に2段のヨコナデで粗い接をつくる。体上半は横位ナデ、下半は横位ヘラケズリ。①やや粗い粘土に粗砂を多く含む②器面灰白 (10YR8/2) 器面にぶい黄橙 (10YR/6) ④やや硬調⑤内面割離が激しい
5	埴	口(9.0) 高(11.0) 口縁と胴下半1/2欠 床直 口縁ヨコナデ。朝上ナデ、下半は横位ヘラケズリ。底内面はヘラナデ、上半はナデ。杯部下位の稜は強く張り出す。①粗砂一粗砂を含む②黒褐一橙でムラ多い③やや硬調
6	砥石	長14.3幅6.8-4.8厚3.8-3.3 雙面埋土 打割成形でハツリ痕は不明確。表裏面は縦方向の鋭い擦痕が残る。側面は幅広の刃部を研いだ直造を残す。①夾雑物のほとんどない比較的キメ細かい砥石質
7	砥石	長13.5幅6.0-5.3厚7.0-6.5 雙面埋土 上小口面に粗いハツリ痕が残る。下半は欠損と思われるがそのまま使用している。側面を多用しており、刃部を斜位に研ぐ。裏面には細かい縦方向の擦痕がわずかに残る。①6と同質。

## Ⅲ区2号住居跡出土遺物 (第157図 PL95)

1	高杯	口15.8 脚部欠 埋土 口縁は薄いココナデ、底外面はナデ。整形は粗く器形もやや歪む。 ①赤褐色の細砂と他の粗砂を含む②腔 (5 YR6/6) ③普通、ムラ多い
2	高杯	脚部破片 埋土 脚柱部は上位で陥らむ。杯底部から脚外面に薄いヘラミダギ。内面に絞り目と指張圧痕を残す。 ①赤褐色の細砂を多く含む②明赤褐 (2.5YR5/6) ③やや軟調。二次的加熱を受けた可能性あり
3	埴	口8.3高7.5 口縁約1/2欠 埋土 口縁一側上半はココナデ、下半はナデ。胴内面は指張によるナデ。底部はやや上7底。 ①やや緻密な粘土に黒色鉱物を多く含む②灰白 (2.5YR2) ③やや軟調。底面黒
4	埴	口 (10.3) 高10.8 口縁約3/4欠 埋土 口縁ココナデ。胴上半は縦位ハケ目、中位以下はナデ。内面整形は粗織のため不明。 ①やや粗い粘土に粗砂を多く含む②赤 (10R4/6) ③普通、均一

## Ⅰ区1号溝出土遺物 (第160図 PL96)

1	灰輪跡皿	底 (6.0) 底部1/5残存 底部内面にへら状工具で跡目を入れる。内面の一部に灰輪が付着しており、口縁部に灰輪を施していたと推定される。 ①淡黄色でやや焼き締まる②瀬戸・美濃系陶器③15世紀
2	天目茶碗	底4.4 底部片 削り出し高台。高台内わずかに突出する。高台脇以下無輪。天目輪は比較的良好な禾目となる。 ①灰白色②瀬戸・美濃系陶器③17世紀か
3	胎輪片口鉢	口 (11.1) 底4.7高4.6 1/4残存 高台脇以下無輪。口縁部内面は、内側に突出することから、片口鉢と考えられる。内面に目痕1ヶ所あり。 ①灰白色でやや焼き締まる②瀬戸・美濃系陶器③18-19世紀前半
4	上絵皿	口 (8.2) 底3.2高4.0 口縁部1/2欠 口縁部、口縁部外面、高台脇に團扇を施す。團扇間に菊花文?を置く。上絵はほとんど剥落しており、色調は不明。菊花?の一部と口縁部團扇は水金を使用。剥落し易い水金のみが残存していることから、他の上絵具が使用されていたとは考えにくい。 ①白色②瀬戸・美濃系陶器③大正一昭和中期
5	染付碗	底 (3.8) 底部1/2残存 高台は高く、体部は湯飲み状を呈する。呉須は山呉須を使用するが、色調は良好である。 ①白色②瀬戸・美濃系陶器③幕末
6	染付碗	口 (8.0) 1/2残存 外面端部と高台境に團扇を施す。その間にゴム印で染付する。 ①白色②瀬戸・美濃系陶器③大正一昭和中期
7	灯明皿	口 (9.6) 底 (4.3) 高2.0 餅輪を施した後、外面の輪を拭い取る。 ①灰色-灰白色、やや緻密で焼き締まる②瀬戸・美濃系陶器③江戸後期
8	灯明皿	口 (9.5) 底4.1高2.0 1/3残存 餅輪を施した後、外面の輪を拭い取る。 ①灰色で炬形に焼き締まる②瀬戸・美濃系?陶器③江戸後期
9	鉄絵皿	口 (11.6) 底7.5高2.5 底部4/5 口縁一部残存 全面に長石輪を施す。底部内面と高台内に目痕2ヶ所。輪には粗い貫入が入る。 ①淡黄色でやや粗い②瀬戸・美濃系③17世紀前半
10	染付皿	底7.6 底部残存 底部内面蛇の目輪ハキ。見込みの五弁花はコンニャク印。底部内面は使用により若干摩滅。 ①白色②肥前磁器③18世紀
11	胎輪香炉	口 (13.0) 底 (8.9) 1/5残存 内面と底部外面は無輪。脚はごく一部ののみ残存。 ①淡黄色②瀬戸・美濃系③18世紀
12	砥石	長6.9幅3.0厚1.1 定形 裏面に整形時の細かい平行条痕をわずかに残す。表面の研ぎ減りが著しく、両側面はわずかに使用。 ①砥石、きめ粗く夾雑物多い
13	砥石	長8.3幅3.2厚2.7 小口部分欠 裏面と側面に整形時の細かい平行条痕を残す。斜方向の部分的な研ぎにより、不均等に減る。研ぎ減りは表面が最も著しい。 ①砥石、きめ粗く夾雑物多い

## Ⅱ区4号溝出土遺物 (第161図 PL96)

1	鉄絵皿	口 (13.8) 底6.5高3.5 約1/3破片 見込みに大柄な菊花文を置き全面に長石輪を施す。口縁にはくすんだ緑色の灰輪をかける。見込みに重ね焼きの痕跡を残す。 ①淡黄色でやや粗い②瀬戸・美濃系
2	石臼	径58前後 「はんどり」部分破片 上部は平滑。外面は細かいはつりによる整形。 ①粗粒安山岩、暗紫色
3	内耳土器	口32.5 底部欠 口縁は平坦な面取り。口縁はやや内側に開き、体部との境付近で内側に凹線を通らす。底部は浅い丸底で内面はケズリ。外面は板状具小口面による掻き目を残し、肩線はヘラケズリ。口縁ココナデ、体部は縦位ナデ。耳状把手は相対位置に2個を付け、外側に粘土を付加して補強する。なお底部には砂を多く混入した土を用いる。 ①赤褐色細砂を含む粗い粘土②表面は黒色、器壁は橙色③軟調な焼成

#### IV区2号溝出土遺物 (第162図 PL96)

1	甌	幅5.7厚2.5 約1/2破片 裏面と側面は粗い研磨を行う。隅部は角が取れているが、砥石等の再利用によるものか。墨道部分は使用によりかなりくぼむ。①頁岩②上半は紫色、下半は灰緑色
2	砥石	長8.6幅2.7厚1.2 完形 小口欠損か 整形時のはつりが残る。全体に均等に使用しており平坦に研ぎ減る。①砥石、きめ粗く火葬物多い

#### I区14号土坑出土遺物 (第169図)

1	杯	口14.0高6.3 口縁一部欠 底部外面に時計回り基調のヘラケズリ。口縁一部内面にヨコナデ。底内面は丁家なナデで、中央は小さな凹凸あり。①ややきめの粗い粘土に白色、無色の細砂を多く含む②にぶい層 (7.5YR5/3) ③やや軟調④底外面に長0.5、幅0.25の痕圧痕1点を残す。
---	---	---

#### II区5号土坑出土遺物 (第169図)

2	杯	口13.4高さ不明 口縁～底約1/2破片 底外面の中央は一方、周縁部のみ反時計回りのヘラケズリ。口縁は小さく直立しヨコナデ。内面はヨコナデで中央に細い凹凸がある。口唇はやや外反気味で丸みをもつ。①ややきめの粗い粘土に赤褐色粒の粗砂と他の細砂を多く含む②層 (5 YR6/6) ③やや軟調、一部二次的火災痕あり
3	杯	口 (12.6) 高さ不明 口縁～底約1/3破片 底外面は時計回り基調のヘラケズリ。口縁～内面はヨコナデ。口縁下の稜は丸みをもつ。①ややきめの粗い粘土に粗～細砂を含む②層 (5 YR6/6) ③普通、均一

#### III区5号土坑出土遺物 (第169図)

6	埴	胴径10.3 口縁欠 胴部下手を粗い横位のヘラケズリ。頸部外面は縦位ヘラケズリ。胴内面はナデ。①きめのやや細かい粘土に粗～細砂を多く含む②にぶい層 (7.5YR5/3) ③硬調で底に黒痕
---	---	---

#### IV区3号土坑出土遺物 (第169図 PL96)

4	鉄輪皿	口12.4底7.2高2.9 完形 見込みに大柄で折れた花様の文様を描き全面に長石軸を施す。①淡黄色でやや粗い②瀬戸・美濃系
5	灰輪皿	口11.3底6.8高2.4 完形 全体に淡い灰軸を施す。①黄白色②瀬戸・美濃系
7	寛永通寶	径2.30孔径0.60輪幅は面が0.25 背が0.38 背は無文。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)
8	寛永通寶	径2.37孔径0.60輪幅は面が0.25 背が0.31 背は無文。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)
9	寛永通寶	径2.43孔径0.58輪幅は面が0.28 背は無文で肌は荒れる。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)
10	寛永通寶	径2.32孔径0.58輪幅は面が0.20 背は無文で肌は準純。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)
11	寛永通寶	径2.33孔径0.55輪幅は面が0.20 背が0.25 背は無文。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)
12	寛永通寶	径2.30孔径0.60輪幅は面が0.22 背が0.31 背は無文。①銅④「古寛永」(寛永～明暦年間鑄造)

#### I区谷出土遺物 (第182図)

1	杯	口 (12.8) 高6.0 1/2破片 E542.5 底外面は反時計回り基調のヘラケズリ。口縁～一部内面はヨコナデ。底内面は丁家な放射状ヘツミガキ。口唇は丸みもち、口縁下の稜は前面三角形に突出。①きめのやや粗い粘土に赤褐色の細砂と粗砂を含む②にぶい層 (7.5YR5/3) ③硬調でややムラあり④底外面に黒様の有機物付着
2	高杯	脚径9.2 杯部欠 G540.5 杯部内面は丁家なナデ。脚部内外面ともヨコナデ。内面上部は指頭によるナデツケ。①きめの粗い粘土に赤褐色の粗粒と他の細砂を含む②にぶい層 (10YR7/3) ③硬調で均一、杯部内面は還元
3	埴	胴径8.5 口縁欠 G541 肩は縦、胴部は横位、底部は一方のヘラケズリ。胴内面は指頭によるナデアゲ。①きめのやや粗い粘土に赤褐色細粒と粗～細砂を多く含む②灰黄層 (10YR7/2) ③硬調で胴に黒痕

遺物観察表

4	杯	口(13.5)高7.7 口縁大部分分 F536 底外面中央は一方、周縁は時計回り基調のヘラズリ。口縁-体部内面はヨコナデ。底内面は粗いヘラミガキ。口唇は丸みのある面取り。口縁下の縁は小さな段状。①きめのやや粗い粘土に細礫と粗砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR6/4)③やや硬調で底面にムラあり
5	杯	口(12.5)高4.9 口縁-底1/3破片 G541 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。中央は径3mmの小さな平底。口縁はヨコナデ。体内面は横波のヘラミガキ。口唇と口縁下の縁は丸みをもつ。①細礫と粗砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR6/4)③普通
6	杯	口12.5高5.1 口縁一部欠 G540.5 底外面は反時計回り基調のヘラズリ。口縁-体部内面はヨコナデ。底内面は丁寧なナデで凹凸を残す。口唇はやや丸み。口縁下の縁部分は沈没状。①粗-細砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR5/3)③普通
7	杯	口12.9高4.0 口縁1/4欠 E542 底外面は同心円状のヘラズリ。口縁-体部内面はヨコナデ。口縁下の縁部分は丸みが高い。①きめの粗い粘土に粗-細砂を含む②灰黄緑(10YR6/2)③軟質ではは均一
8	杯	口12.2 口縁と底に一部欠 G540.5 底外面は同心円状のヘラズリ。口縁-体部内面はヨコナデ。口唇は丸い。①きめの粗い粘土に赤褐色の細礫と粗砂を多く含む②浅黄緑(7.5YR8/4)③軟質ではは均一
9	罍	口19.0高30.3 口縁と胴上段1/3欠 G540.5 口縁ヨコナデ。胴下半は斜ヘラズリ。上半は斜ハケメ。内面は平滑な工具による横波ナデ。底面は粘土帯を高くして浅くぼみ底に整形。①細礫と粗砂を含む②灰黄緑(10YR5/2)③胴下半は二次火熱を受ける④胴上半-口縁外面に煤付着
10	杯	口11.6 口縁一部欠 E542.5 底外面は一方向基調のヘラズリ。口縁は小さく外反し、ヨコナデ。内面中央はヘラナデ、上位は斜位のヘラミガキ。①きめの粗い粘土に粗-細砂を含む②にぶい殻(7.5YR5/3)③硬調で均一
11	壺	胴径24.0高(23.0) 口縁欠 G541 胴下半は斜ヘラズリ後上半は横波のナデ。内面は平滑な工具による横波ナデ。中位の接合部分は横ハケメ。底面はケズリによる不安定な平底。①細礫と粗砂を含む②にぶい殻(10YR7/2)③胴部片面に黒炭
12	白玉	径9.55厚0.40孔径0.25 E536 側面は斜位の研ぎ痕を残す。穿孔後は上下両面を研磨。①滑石②黒炭(10YR6/1)
13	白玉	径9.53厚0.35孔径0.20 E536 側面は斜位の研ぎ痕を残す。穿孔後は上下両面を研磨。片面は穿孔時のくぼみを残す。①滑石②黒炭(10YR7/1)
14	筒	口14.8高7.0 口縁-底1/3破片 G541 底外面は時計回り基調のヘラズリ。口縁は小さく外反し、ヨコナデ。内面中央はヘラナデ。内外面に赤彩。①きめの粗い粘土に粗-細砂を含む②灰黄緑(10YR6/2)③軟調で均一
15	鉢	口12.6高6.7 口縁-底1/2破片 G540.5 口縁ヨコナデ。体外面は時計回りで横波のヘラズリ。底はケズリによる不安定な平底。①きめの粗い粘土に粗砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR7/3)③軟調で外面に黒炭
16	(壺)	厚0.6 E544 表面は「大塚」の刷印。裏面は無調整。①ややきめの粗い粘土に黒色細砂を含む②にぶい殻(10YR7/4)③やや軟質で、酸化焙焼後④江戸期の焼痕散在

IV区谷出土遺物(第183-184図)

1	壺	口17.1胴径25.1 口縁一部と胴下半欠 F583 口縁破ハケメ後ヨコナデ。胴部は斜ハケメ後粗い横ヘラミガキ。内面は平滑な工具による横波ナデ。胴部片面に指頭圧痕を残す。①細礫と粗砂を多く含む②浅黄緑(10YR6/2)③胴部片面に黒炭
2	壺	胴径17.0 E582.5 口縁外面は横ハケメ。内面は斜ヘラナデ。胴部外面は横ハケメ。内面は底付型ハケメ。胴部は横ヘラナデ。①粗砂が多い②灰黄緑(10YR6/2)③硬調。胴下半に黒炭
3	埴	口(11.4)高17.0 口縁と胴下半の一部欠 E582 口縁-胴部はヨコナデ。胴部外面は横ヘラズリ後ナデ。内面は横ヘラナデ。胴内面に指頭圧痕を残す。①きめのやや粗い粘土に白色の細礫と粗砂を多く含む②にぶい殻(10YR7/2)③やや軟調で胴一部に黒炭。胴内面は還元
4	埴	口19.5高10.5 胴一部欠 E582.5 口縁はヨコナデ。胴部外面は横ナデ。内面は粗い横ハケメ。胴外面はヘラナデと浅いハケメ。胴内面は指ナデ。①きめのやや粗い粘土に赤褐色の細礫と粗砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR6/2)③やや軟調で口縁一部に黒炭
5	小形鉢	口9.4高6.3 口縁一部欠 E581 口縁ヨコナデ。口縁-体外面は横ヘラミガキ。内面は斜と横のヘラミガキ。底は小さなくぼみ。①きめのやや細かい粘土に粗砂を多く含む②灰白(10YR8/2)③硬調で一部に黒炭と赤炭
6	鉢	口(18.0) 胴径(15.4) 口縁-底1/4破片 E582.5 口縁-底の外面全体に丁寧な横ヘラミガキ。内面は口縁が縦。胴部は横ヘラミガキ。底はわずかに突出した平底。①やや粗い粘土に粗-細砂を含む②にぶい殻(10YR5/4)③硬調で均一
7	鉢	口15.2高6.3 口縁一部欠 D582.5 口縁ヨコナデ。体外面下半は横ヘラズリ。体内面はハケメ後丁寧なナデ。底はケズリによる不安定な平底。①きめの粗い粘土に細礫と粗砂を多く含む②にぶい殻(10YR7/2)③普通。胴部片面に黒炭
8	高杯	口21.8 胴部欠 E582.5 外面は縦ハケメ後横ヘラミガキ。内面は横ハケメ後横ヘラミガキ。①きめの細かい粘土に粗砂を含む②にぶい殻(10YR7/2)③硬調で均一
9	高杯	口18.2 杯部3/4破片 口縁ヨコナデ後外面は放射状ヘラナデ。内面は杯部全体にヨコナデ。下位の接合部分内面は横ハケメ。杯部外面は無調整。①きめの粗い粘土に細礫と粗砂を含む②にぶい殻(10YR6/4)③硬調ではは均一
10	高杯	口17.2 杯部一部と胴部欠 D582.5 口縁ヨコナデ。杯部外面は斜ヘラナデ。杯部内面はヨコナデ。胴上段内面は指ナデ。①きめの粗い粘土に赤褐色の細礫を多く含む②殻(2.5YR6/6)③外面は赤炭。器壁は還元
11	高杯	胴径19.0胴径1.2 杯部1/3と杯部欠 E581.5 外面は放射状ヘラミガキ。内面は上位が横ヘラズリ。下位が横ハケメ。穿孔は3カ所。①きめの粗い粘土に粗砂を多く含む②にぶい殻(10YR6/4)③硬調で黒炭が多い④器底の刺磨が強い
12	管玉	長1.60径0.47孔径0.27 丁寧な研磨で仕上げてあり、光沢あり。両側から穿孔し、中心からずれて側面に貫通する。①粒紋岩②黒色
13	付合罍	口(11.3) 口縁3/4と胴部欠 D580.5 口縁ヨコナデ後胴上部は上から。下部は下からのハケメ。胴内面は横ヘラナデ。底付型は指ナデ。胴部は胴部成形後に混合あるいは巻き上げ成形したと思われる。①ややきめの細かい粘土に粗砂を多く含む②にぶい殻(7.5YR7/2)③胴下半は二次火熱を受けて赤炭



14	台付蓋	口17.2 口縁1/2と体一部欠 D582 口縁-胴部外面は斜一板の細かいハケメ。内面は口縁-頂、胴下部-底に横ハケメ、胴中に横ヘラナダ。胴部は胴部と分けて成形して接合したと思われる。①やや粗い粘土に赤褐色の細礫と黒色積砂を多く含む②灰黄緑 (10YR6/2) ③ほぼ均一で胴下半は二次大熱を受けて赤変
15	蓋	口20.5 胴中位での接点はないが上半と下半の破片 C580.5 口縁ヨコナダ。胴外面は縦ヘラナダ。胴内面は横、底付近は斜ヘラナダ。底面はケリによる丸底。①堆砂を多く含む②灰黄緑 (10YR6/2) ③普通④口縁外面に黒多く付着
16	台付蓋	口(17.5) 口縁-肩大部分と胴部欠 E582.5 口縁ヨコナダ。胴外面は斜ヘラナダ。胴内面は横ヘラナダ。底はやや上げ気味の平底。①赤褐色の細礫と黒砂を多く含む②にふい煙 (7.5YR6/4) ③胴下半-底は二次大熱を受けて赤変
17	蓋	口14.6高28.8 口縁-胴1/4欠 D580.5 口縁ヨコナダ。胴部外面は浅い斜ハケメ。胴外面中位以下は横ヘラナダ。胴内面は幅広い横ヘラナダ。底はやや上げ気味の平底でヘラナダ。①赤褐色の細礫と黒砂を多く含む②にふい煙 (10YR6/4) ③口縁-胴の片面に黒変

#### I 区出土土製品 (第179・180図 PL97・98)

1	蓋状木製品	全長43.7輪長32.0輪径3.214身長6.6腕長16.5 H541 腕部7本のうち3本は欠損 2カ所の車輪状に分枝する部分の材を削り出して成形。腕部は樹皮を削りだすまで、先端部を水平と外側に曲取り。上端部はほとんど断截したままで無整形。腕部は「エンタシス」状に削り、研磨。下端のはざめ部は截頭円錐形の受け部を作り出す。①イエロキヤ
2	長柄筒	連存長57.0輪長14.5厚1.1柄幅3.2 G540.5 動先端側縁と柄の上部欠 両面からの加工で、刃部はやや湾くなる。動身の柄は柄からはほぼ直角に削り、左右対称。削り痕は不明瞭。使用による磨滅で、刃先端部は丸く、その付近の側縁がやや割れている。また肩縁部も摩滅する。②椀目、磨滅不明
3	鏃	長17.8径0.7 近代地葬用 鋸治物被褥式。鏃は鋭く丸みをもつ。鋒はやや磨滅。隈は小さく作り出す。①セミ属
4	鏃(曲)	三ツキI 遺跡参考資料 連存長8.5径6.6 茎から鋒までを直線的に削り出す。鋒は両丸造で隈は左右で段違いになる。
5	磨柄筒	長32.0輪長7.7厚1.3 H538.5 身はなで削状で、ほぼ同じ厚さに両面から加工する。柄は幅3.5cmの断面楕円形で、基部はやや膨らみ。身への移行部分は装着によりくぼむ。先端部は欠損して磨滅。①椀目、クヌギ節
6	板	長56.5輪24.3厚4.0 H536.5 表面はほぼ平坦に削り、裏面は樹皮付皮を削りだけで細かい加工は見られない。両端部と側縁部はほぼ直線的に加工され、中央は厚く厚らむ。①椀目、セミ属④木部の未加工材か
7	欠板	長58.5輪8.0厚2.6 H539 母材から木取りした板をそのまま用いて先端を両側から均等に削り出す。頭部は平坦に作出する。①椀目、クヌギ節
8	杖	長33.5径7.4 H536.5 丸木材を用いて樹皮を残し、先端を削り出す。削り痕は鋭い。頭部は材にはほぼ直角に断截した平坦面を残す。打痕は不明瞭。①削り材、クヌギ節
9	杖	連存長32.8径3.8 頭部欠 H540 丸木材を用いて樹皮を残し、先端を削り出す。削り痕は鋭い。①芯持材、不明
10	杖	連存長37.9径5.8 頭部欠 H536.5 丸木材を用いて一部に樹皮を残し、先端を削り出す。先端部は土圧により湾曲する。削り痕は鋭い。①芯持材、クヌギ
11	杖	連存長37.2径5.0 頭部欠 H536.5 丸木材を用いて、先端のみ削り出す。削り痕は鋭い。①芯持材、コナラ節
12	杖	連存長77.3径6.8 頭部欠 H536.5 樹皮を残し、先端部を均等に削り出す。削り痕は鋭い。土圧により中央で屈曲。①芯持材、コナラ節
13	杖	長58.0径6.3 先端部欠 H536.5 丸木材を用いて、先端を均等に削り出す。削り痕は鋭い。頭部は斜面をなし、断截痕や打痕は不明瞭。①芯持材、クヌギ節
14	杖	連存長37.0径5.5 頭部欠 H536.5 丸木材を用いて、先端を削り出す。削り痕は鋭く、先端部は折れる。①芯持材、コナラ節
15	杖	連存長57.9径5.5 中央欠 H536.5 丸木材を用いて、先端を3方から削り出す。削り痕は鋭い。①芯持材、クヌギ節
16	杖	長46.5径6.0 中位で折れ G541 丸木材を用いて、先端を片面から削り出す。削り痕は鋭い。①芯持材、クヌギ節

#### IV 区谷頭出土土製品 (第181図 PL99)

1	横杖	長48.0幅11.5隆起部厚4.0厚0.9 E582.5横付近 刃部はやや丸みをもち、中央にわたりがある。また両側縁にも片側からの刃部を作出。柄には中央からやや偏り、円形で傾斜角は60°、柄つは隆起は「宝珠」型彫刻に作出する。①椀目、クヌギ節
2	矢板	長37.6幅5.6厚3.4 E582.5横 断面長方形の削り材の先端を鋭い三角形に加工。片面は火をうけて炭化する。①コナラ節
3	杖	連存長34.7幅3.9厚3.5 頭部欠 E582.5横 大きな母材の削り材の先端を加工。①クヌギ節
4	杖	連存長20.8幅3.9厚2.3 頭部欠 E582.5横 大きな母材の削り材の先端を加工。①クヌギ節
5	杖	連存長43.5幅4.0厚3.3 頭部欠 E582.5横 大きな母材の削り材の先端を加工。先端は鈍角で丸い。①クヌギ節
6	板	連存長61.5幅11.5厚2.0 両端部欠 E582.5横板 表面面と側縁を粗く削って加工。①椀目、セミ属
7	板	連存長37.6幅9.0厚2.0 両端部欠 E583溝水 片面と側縁は平坦に加工される。手拵等の加工痕は不明瞭。①椀目、クヌギ節

遺物観察表

II～IV区出土遺物 (第191図)

1	壺	口21.5 胴径34.2 Ⅱ D567.5 口縁外面は2段のヨコナデで中位に鋭い稜を作る。胴部外面は平滑な工具による斜ナデと横ハケメ、下部では斜ヘラズリ。胴内面は幅広い横ヘラナデ。口唇外側に面取り。①細線と粗砂が多い②にぶい粒 (7.5YR7/3) ③硬調、均一
2	杯	口11.8 口縁と底の一部欠 Ⅱ D556 底外面は反時計回り細線のヘラズリ。口縁→体部内面はヨコナデ。口唇は丸みのある面取り。口縁下の稜は鋭く小さく突出する。①きめの粗い粘土に赤褐色の細線を含む②にぶい粒 (7.5YR7/3) ③硬調で均一
3	高杯	口18.6 口縁1/4と脚部欠 Ⅲ G567.5 杯部ヨコナデ後内外面に粗い放射状ヘラミガキ。脚部はヘラズリで整形し杯部との接合は粘土塊充填による。①きめの粗い粘土に細線と粗砂を多く含む②にぶい貴粒 (10YR7/3) ③普通、ムラあり
4	壺	口20.6 胴径30.5 胴下半以下欠 Ⅱ D557.5 口縁ヨコナデ。胴外面は斜ハケメ後幅広い放射状ヘラミガキ。胴内面は幅広い横ヘラナデ。口唇上面は丸みのある面取り。胴内面には幅1.5～2cm幅の粘土紐痕と指痕押圧の痕跡を残す。①細線と粗砂を多く含む②にぶい粒 (7.5YR5/4) ③硬調、内面は還元気味④胴外中位に窪付
5	埴	口(9.4) 高8.8 胴径8.5 口縁一体上部1/2欠 Ⅲ G567.5 口縁一部はヨコナデ。体部外面は横ヘラズリ。内面は指ナデ。底は小さな平底で無調整。①きめの粗い粘土に細線と粗砂を含む②粗 (7.5YR4/6) ③やや軟調でムラあり
6	高杯	口径1.6 脚部破片 Ⅲ G567.5 外面は丁寧なナデ、内面は指痕によるナデ。杯部との接合は粘土塊充填による。ヨコナデ後内外面に粗い放射状ヘラミガキ。脚部はヘラズリで整形し杯部との接合は粘土塊充填による。対称位置に2ヶ所対の穿孔。①きめの粗い粘土に白色細砂を含む②明赤褐 (5YR5/6) ③硬調、均一
7	杯(須恵器)	底径(10.0) 底破片 左回転成形。底ヘラ切り。体部下部は一条の鋭い沈線を巡らす。①赤褐色の細線を含む②にぶい粒 (7.5YR6/4) ③酸化色、軟調で均一
8	彫形土製品	先端部欠 Ⅲ G567.5 表面は深くくぼみ、粗いヘラミガキ。肩部は段状に起って、横方向に径2mmの経過し孔を穿つ。裏面は平坦。①やや粗い粘土に粗い細砂を含む②にぶい貴粒 (10YR7/2) ③やや軟調、均一
9	軒丸瓦	径(15.0) 厚2.7 1/4破片 外区は幅広い、無文。内区は一段低く、巴文と珠文を巡らす。①均質でややきめ粗く、片割れの細粒を含む。②灰白色～黒灰色③やや軟調

3 石器一覧表

上淵名裏神谷遺跡 (第117図)

1	石鏃	長2.9幅1.8重2.11g	表探	①紫色頁岩
2	石鏃	長1.8幅1.4重0.44g	1号古墳	①黒曜石
3	石鏃	長(3.2)幅1.7重(1.86)g		①チャート
4	片刃石斧	長9.0幅4.8重112.96g	Ⅳ区	①黒色頁岩
5	片刃石斧	長5.7幅4.5重31.37g	Ⅳ区	①ホルンフェルス

三室間ノ谷遺跡 (第188・189図)

1	石鏃	長2.7幅1.7重1.39g	Ⅳ区	①チャート
2	石鏃	長3.0幅2.0重1.69g	表探	①紫色安山岩
3	石鏃	長1.8幅1.7重0.59g	Ⅲ区	①チャート
4	石鏃	長(2.4)幅1.4重(1.75)g	Ⅰ区	①チャート
5	石鏃	長3.1幅1.8重1.84g	Ⅳ区	①チャート
6	箭鏃	長7.8幅8.9重108.85g	Ⅰ区	①黒色頁岩
7	箭鏃	長6.0幅8.9重90.09g	Ⅰ区	①黒色頁岩
8	箭鏃	長5.4幅8.1重117.39g	Ⅱ区	①黒色安山岩
9	箭鏃	長6.1幅8.3重25.87g	Ⅱ区	①黒色頁岩
10	三角鏃形石斧	長12.6幅7.5重538.80g	Ⅱ区	①黒色頁岩
11	打製石斧	長(8.1)幅4.5重(41.10)g	Ⅰ区	①黒色頁岩
12	片刃石斧	長8.4幅5.4重87.47g	Ⅰ区	①黒色頁岩
13	打製石斧	長14.7幅6.3重383.60g	Ⅱ区	①黒色頁岩
14	片刃石斧	長9.0幅6.0重108.69g	Ⅱ区	①黒色頁岩
15	打製石斧	長15.0幅8.25重25.50g	Ⅰ区	①輝緑岩
16	片刃石斧	長14.6幅7.2重305.20g	Ⅰ区	①黒色頁岩

## 写真図版

### 凡 例

1. 遺物の大きさは杯、碗、高杯等の小形品は約写及び写基準としたが、壺・壺等の大形品については写-写の間で不同である。
2. 遺物の番号は挿図及び遺物観察表の番号と一致する。

上湖名裏神谷遺跡

PL. 1 IV・V区住居跡群全景 (南より)





全 景 (西から)



土層断面 (a-a')



カマド



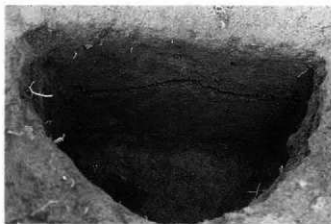
カマド断面 (a-a')



床面の検出状況



カマド検出状況



貯蔵穴断面



壁際での遺物出土状況



掘り方全景



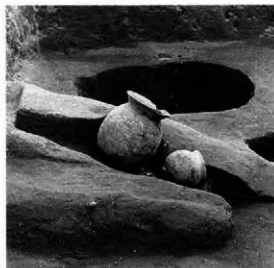
全 景 (北西から)



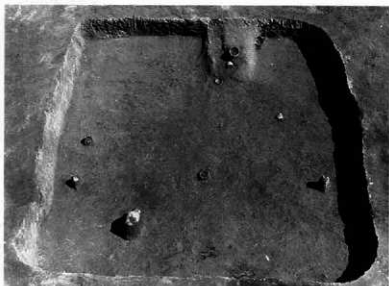
土層断面 (a-a')



カマド検出状況



カマド側面



遺物出土状況全景



No. 4 出土状況



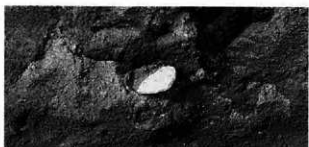
貯蔵穴遺物No.12 出土状況



No. 9 出土状況



No. 2 出土状況



No.13 出土状況



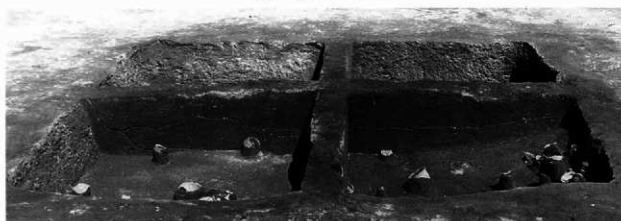
カマド全景



カマド断面 (a-a')



全 景 (西から)



土層断面 (a - a')



遺物出土状況全景





カマド



カマド断面 (a-a')



壁際の遺物出土状況



No. 7 出土状況



No. 6 出土状況



No. 8 出土状況



No. 20 出土状況



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



土層断面 (b-b')



遺物出土状況全景



カマド



カマド断面 (a-a')



勾玉No.14 出土状況



掘り方全景



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



カマド



貯蔵穴断面



遺物出土状況全景



No. 1 出土状況



No.23(剣形模造品) 出土状況



No.22(剣形模造品)出土状況



壁際の遺物出土状況



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



炉F2断面



遺物出土状況全景



壁際での遺物出土状況



No. 2 出土状況



No. 14 出土状況



炭化材出土状況  
P1-P2間の断材と思われる



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



カマド



遺物出土状況全景





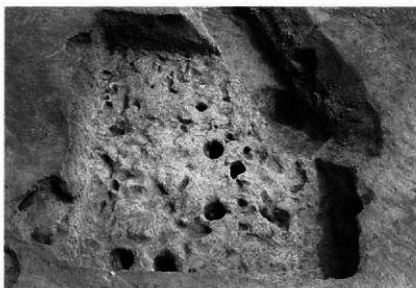
全 景 (南から) 右上は15号溝



土層断面 (a-a')



No. 4 出土状況



掘り方全景



全 景 (西から)



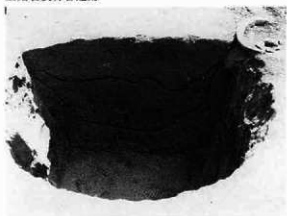
土層断面 (a-a')



カマド検出状況



カマド



貯藏穴土層断面



南壁際床断面



遺物出土状況全景



貯藏穴脇遺物No.15・23・24 出土状況



カマド左脇遺物No.19 出土状況



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



カマド



カマド断面 (b-b')



遺物出土状況全景



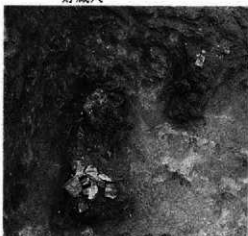
カマド遺物出土状況



貯蔵穴



カマド左脇遺物No. 2・18・19 出土状況



炭化物出土状況



全 景 (西から) 上は15号溝



土層断面 (a-a')



カマド検出状況



遺物出土状況全景



貯蔵穴土層断面



P 5 断面



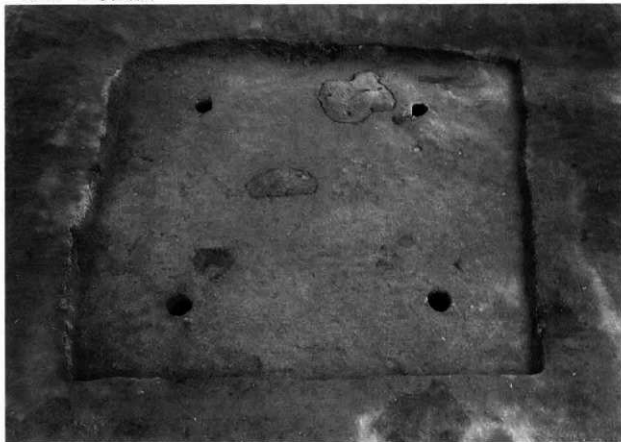
カマド断面



カマド遺物出土状況



掘り方全景



全 景 (南西から)



炉検出状況 中央凹みが燃焼部





遺物出土状況全景



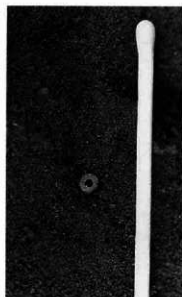
炉と壁際出土遺物



地床炉の断面



壁際での遺物出土状況



小玉出土状況



全 景 (南西から)



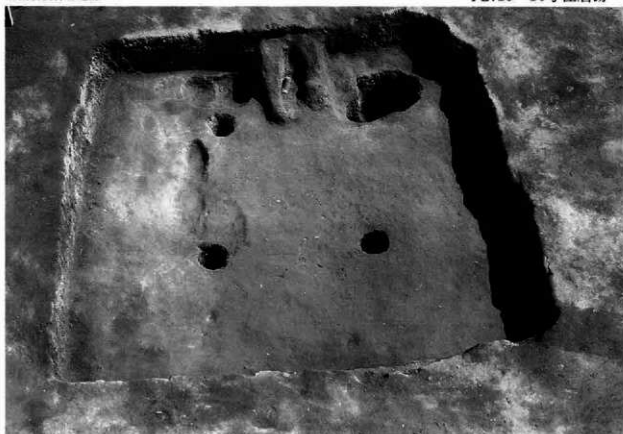
土層断面 (a-a') 中央は12号溝



No. 2 出土状況



貯蔵穴土層断面



全 景 (南西から)



カマド検出状況 右側に妻口縁に載せた皿がみえる



カマド断面 (b-b')



貯蔵穴遺物No. 5 出土状況



貯蔵穴断面



全 景 (南西から)



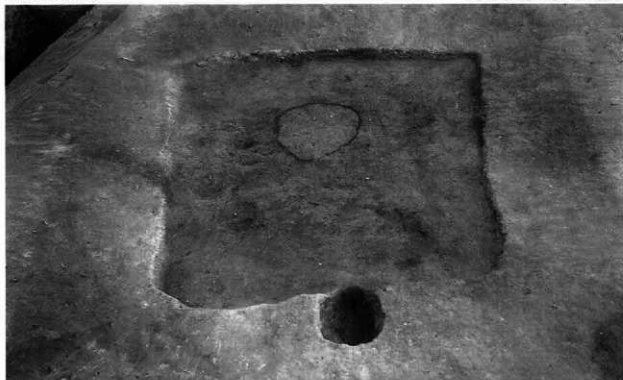
遺物出土状況 (遺物の大部分は俵から浮く)



炉F2検出状況



炉F2断面



全 景 (南から)



遺物出土状況全景



炉検出状況



炉断面



炉 (燃焼面)



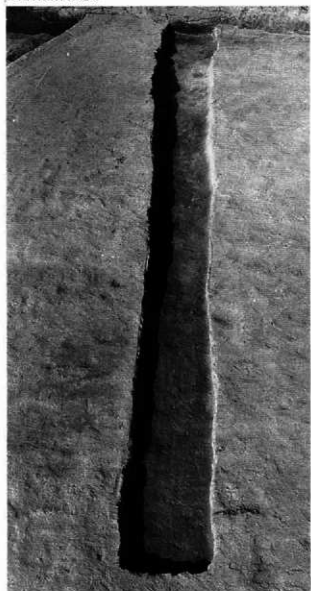
全 景 (東から)



周堀土層断面 (c-c')



周堀遺物出土状況



3号溝全景 (南から)



4号溝全景 (西から)



5・13号溝全景 (東から)



6号溝全景 (南から)



6号溝断面 (c-c')



6号溝溝底



12号溝全景 (西から)



12号溝断面 (a-a')



12号溝断面 (b-b')

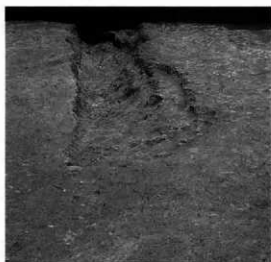




15号溝全景 (南から) 下は8号住



15号溝断面 (a-a')



14号溝全景 (南西から)



17号溝全景 (北西から) 上は16号溝



18号溝全景 (北西から)



9号溝全景 (南から)



円形周溝遺構（北から）



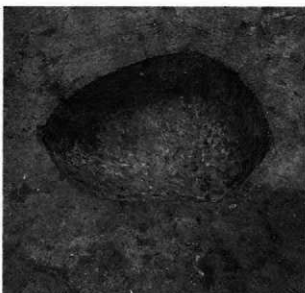
1号井戸（北から）



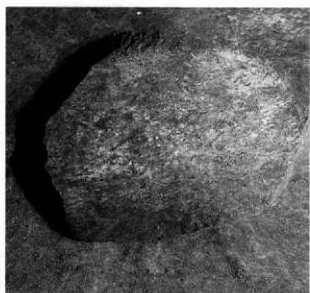
1号土坑（東から）上方に水田面が見える



1号土坑と畦（東から）上方の白い部分が畦



4号土坑



5号土坑



水田址全景（南東から）白く浮き出た部分が畦



水田址全景（北から）



畦と馬と思われる蹄痕



畦断面



畦と馬踏痕（東から）中央の溝は暗渠



杭穴列（南縁辺部）



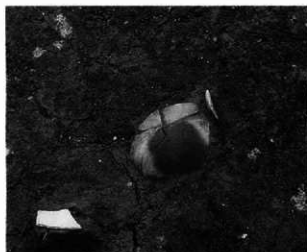
暗渠排水路



グリッドによる調査状況 (南から)



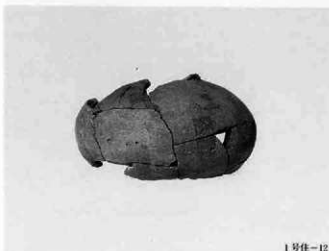
土器片の出土状況 白く見える土塊はFA



杯出土状況



土器片出土状況



1号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物(1)



2号住-8



2号住-9

2号住居跡出土遺物(2)



3号住-1



3号住-4



3号住-7



3号住-2



3号住-5



3号住-8



3号住-3



3号住-6



3号住-13



3号住-24



3号住-20

3号住居跡出土遺物(1)





3号住-25



3号住-22



3号住-33



3号住-35



3号住-36



3号住-37



3号住-38

3号住居跡出土遺物(2)



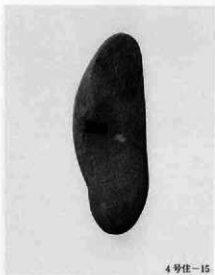
4号住-1



4号住-3



4号住-10



4号住-15

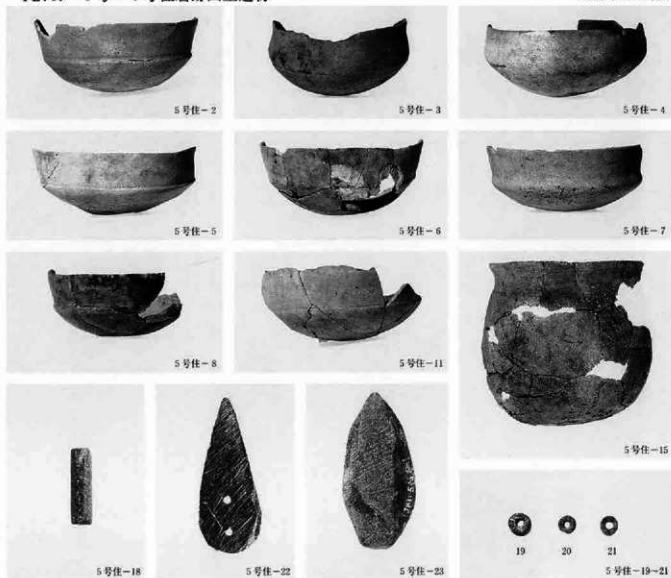


4号住-16

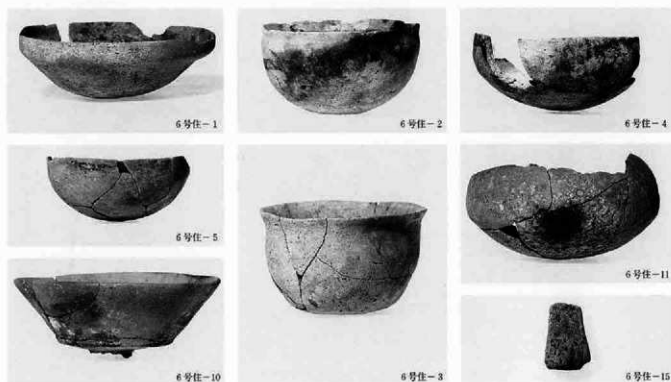


4号住-14

4号住居跡出土遺物



5号住居跡出土遺物



6号住居跡出土遺物



6号住-13



6号住-14

6号住居跡出土遺物(2)



7号住-1

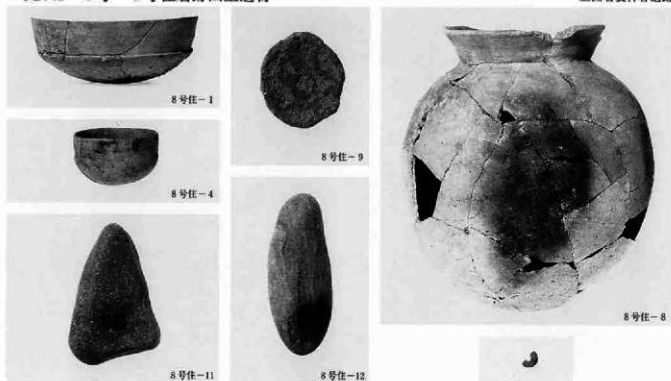


7号住-3



7号住-4

7号住居跡出土遺物



8号住居跡出土遺物



9号住居跡出土遺物



9号住居跡出土遺物(2)



10号住-1



10号住-2



10号住-3



10号住-4



10号住-7



10号住-14



10号住-9



10号住-10



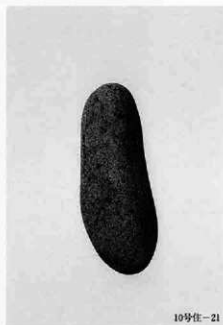
10号住-13

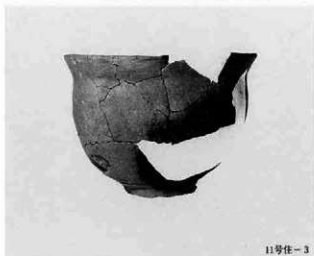


10号住-15



10号住-11









12号住-1



12号住-2



12号住-3



12号住-5



12号住-6



12号住-7



12号住-8



12号住-9



12号住-10



12号住-11



12号住-14



12号住-15



12号住-18



12号住-20



12号住-24



12号住-21



12号住-19



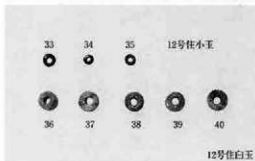
12号住-29



12号住-30



12号住-22



12号住白玉



12号住-32



12号住-41



13号住-2



13号住-4



13号住-5

13号住居跡出土遺物



14号住-1



14号住-2



14号住-7



14号住-5



14号住-12



14号住-9



14号住-11



14号住-13



14号住-10

14号住居跡出土遺物



15号住-1



15号住-4



15号住-8



15号住-5



15号住-9



15号住-6



15号住-13



15号住-14



15号住-15



15号住-23

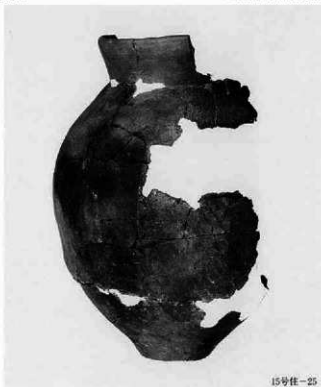


15号住-22





15号住-18



15号住-25

15号住居跡出土遺物



16号住-2



16号住-3



16号住-4

16号住居跡出土遺物



1号古墳-3



1号古墳-4



2号溝-1



15号溝-1



6号溝-1

1号古墳、溝出土遺物



Ⅱ区住居跡群（南から）手前中央はⅡ5号住居跡



Ⅱ区方形溝(館址)群（北より）



全 景 (南から)



遺物出土状況全景



カマド遺物出土状況



カマド検出状況



貯蔵穴検出状況





全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



カマド検出状況



貯蔵穴断面



全 景 (南西から)



カマド検出状況



遺物出土状況全景



貯蔵穴断面



西隅部炭化材出土状況



全 景 (南西から)



土層断面 (a-a')



遺物出土状況全景



カマド検出状況

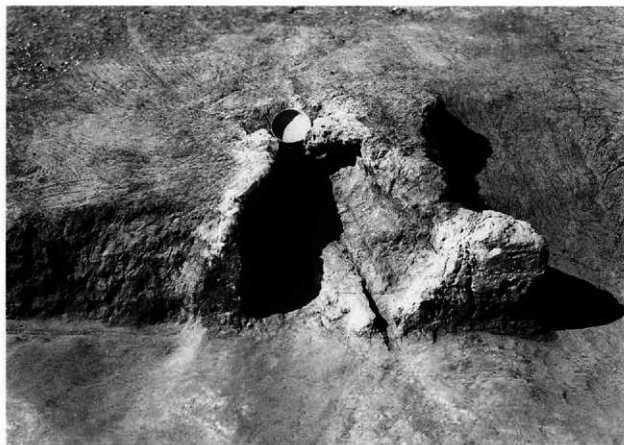


北東隅部焼土堆積状況



全 景 (南から)

右半部を縦位に走るのはトレンチ  
上半で横位に走るのは21号溝



カマド検出状況



全 景 (南西から)



土層断面の調査状況



カマド調査状況



貯蔵穴断面



カマド検出状況



南壁際遺物出土状況



子持勾玉出土状況



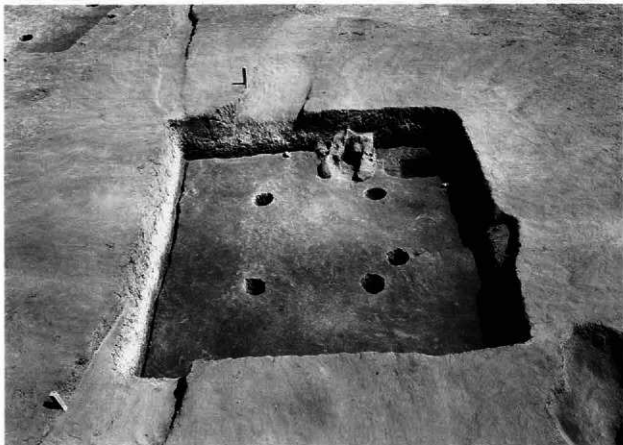
北西隅垂木の出土状況



西壁際の垂木出土状況



炭化材出土状況



全 景 (南西から)



カマド検出状況



カマド検出状況 (横から)



南東隅部遺物出土状況



No. 5 出土状況 手前は貯蔵穴



II 8号住居跡検出状況 左側は道路



カマド検出状況



貯蔵穴検出状況



II 9号住居跡カマド検出状況 中央はII 21号溝





Ⅲ1号住居跡掘り方(東から)



No. 4 出土状況



砥石No. 6・7 出土状況



Ⅲ2号住居跡全景(北東から) 右側に重葺するのは5号溝



I区全景（北東から）

浅間山噴出の火山灰As-Bを  
除去した面。  
左下方に水田の畦が残る。上方  
を左右に走るのは旧道前橋古河  
線で右上方に壘が見える。



水田面（北東から）手前中央で畦が検出された。



1号溝を主とした用水路

左半部はAs-B下の水田面と思われるが  
検出された用水路とは時期が異なる。



1号溝に付随する3号・30号溝 (南から)



4号・5号溝 (北から)



1号溝と付随する7号・9号溝（北から）



9号・11号・12号溝（東から）



1号溝北東部分（南から）右に進行するのは15号溝



Ⅱ区南部(館址)検出状況(北から)

中央「釣の手」に曲がるのが  
4号溝で館の北限か。上方  
に見えるのは1区で検出さ  
れた谷である。



Ⅱ区1号・2号・3号溝(左から)右の溝群は近世以降の畝址



4号溝 聖社の北側を区画すると推定される。



4号溝(北西隅部)上は1号土坑



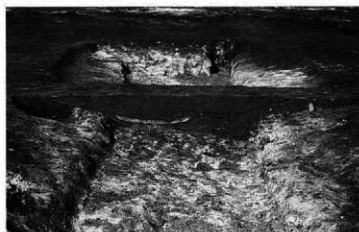
4号溝断面(b-b')



8号・10号溝全景(西から)



4号・6号溝(南から)



9号溝断面(d-d')



12号・13号溝全景 (南から)



14号・18号溝全景 (西から)



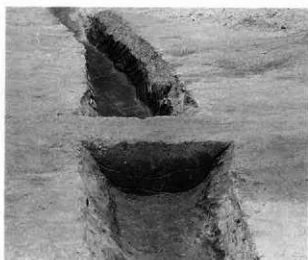
16号溝断面 (e-e')



17号溝断面 (f-f')



21号溝断面 (g-g')



22号溝断面



Ⅲ区溝全景 (北西から)



1号溝断面



1号溝断面



2号溝土管



3号・4号溝断面 (b-b)





5号溝断面



6号・7号溝断面



6号溝全景(東から)



6号溝断面(c-c')



6号溝に落ちたⅢ2号住の遺物No. 3



9号溝断面



12号溝全景(東から)



IV区全景 (南から) 遠方に赤城山を望む



IV区谷検出状況 (北から) 中央のT字溝はトレンチ



1号・2号溝 (南から)



1号・2号溝断面 (a-a')



3号溝 (南から)



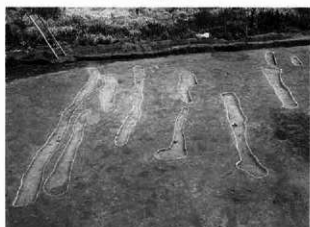
3号溝断面



5号・6号溝 (西から)



7号・8号溝断面



11号~16号溝 (西から)



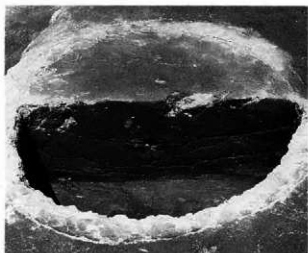
2号土坑全景



2号土坑断面



3号土坑全景 周囲の白色部は積土



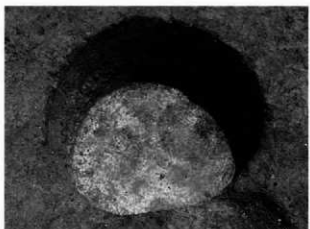
3号土坑断面



4号土坑全景



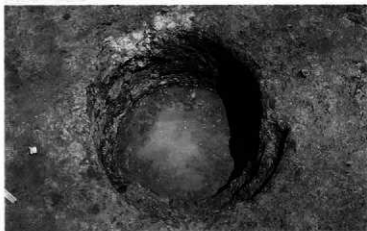
4号土坑断面



5号土坑全景



5号土坑断面



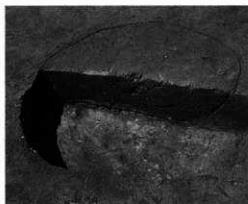
6号土坑全景



6号土坑断面



7号土坑全景



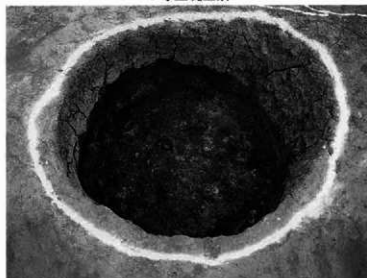
7号土坑断面



8号土坑全景



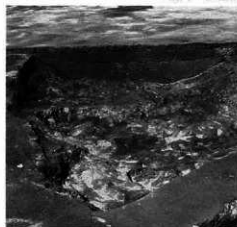
8号土坑断面



9号土坑全景



9号土坑断面



当初10号土坑として登録したが、後に欠番とした落込み



11号土坑断面



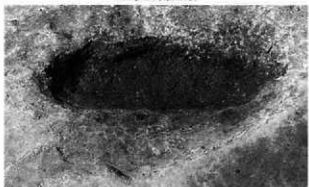
13号土坑全景



12号土坑全景



12号土坑断面



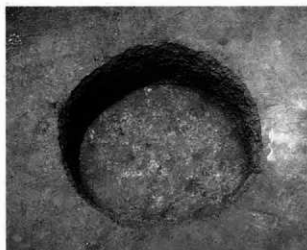
16号土坑全景



16号土坑断面



畠 址 (南から)



1号土坑全景



4号土坑全景



2号井戸全景



5号土坑断面



1号土坑断面



2号土坑全景



3号土坑全景



3号土坑断面



4号土坑全景



4号土坑断面



5号土坑全景



6号土坑全景





1号土坑



1号土坑断面



2号土坑断面



3号土坑遺物出土状況 皿2個体と銭貨6枚が出土



I区谷全景（南西から）自然木の埋没状況が見える



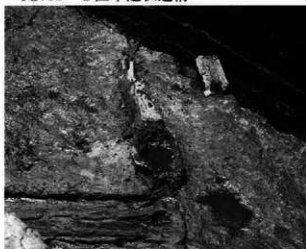
I区全景（北から）奥に上野名裏神谷遺跡が見える



I区埋没谷土層断面 (B545グリッド東壁)



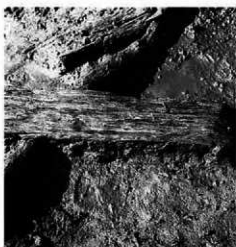
I区545.5グリッド東壁土層断面 (底までの深さ1.5m) 土壌分析試料採取地点



C地点木道 (部分)



C地点出土状況



C地点板出土状況



D地点木道 (上の白線はFA含有層)



B地点木道



杭検出状況



木道の自然木を杭で固定した状況



種子出土状況



B地点木道検出作業



土器No.11出土状況



D地点矢板No.7出土状況



土器No.3出土状況



長柄鋤出土状況



D地点木道状遺構



D地点木道状遺構



C地点杭列



C地点木道状遺構



D地点木道状遺構



自然流木



自然流木



自然流木



全 景 (北から) 手前が谷頭の湧水点



ヒョウタン果实検出状況



谷頭湧水点 (泥炭土除去後)



ヒョウタン果实検出状況



橋状遺構 (正面から)



橋状遺構 (横から)



土器出土状況



土器片集中地点



土器出土状況



土器片集中地点



小形鉢No.5 出土状況



土器片集中地点



谷As-B下土層断面



谷土層断面





I区南端部遺構検出状況(北から)

道路を開てた右上方は  
上洞名義神谷遺跡



東西に走る溝群 堀下から検出



近代の池に伴う柱穴群調査状況



西壁断面の状況 (a-a')



西壁断面の状況 (a'-a)



西壁での溝埋没層断面

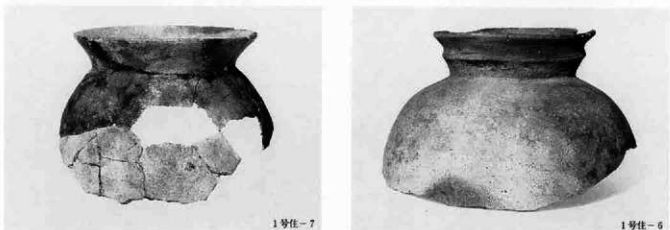


近代の池に伴う脚柱根と方形掘り方

4基が等間隔で平行して配される。橋脚を支えたものか。左方に池が見える。



脚柱根と掘り方を縦方向から見る



II 1号住居跡出土遺物



II 2号住居跡出土遺物(1)



2号住-7



2号住-8



2号住-9



2号住-15



2号住-10



2号住-12



2号住-24



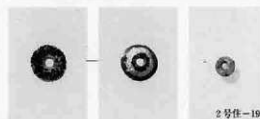
2号住-14



2号住-18a



2号住-18b



2号住-16

2号住-19



3号住-1



3号住-2



3号住-5



3号住-3



3号住-6



3号住-8



3号住-4



3号住-7



3号住-11



3号住-13



3号住-10



3号住-糠土



3号住-12



3号住-14



4号住-1



4号住-2



4号住-4



4号住-5

II 4号住居跡出土遺物



5号住-1



5号住-2



5号住-3

II 5号住居跡出土遺物



6号住-1



6号住-2



6号住-3



6号住-4



6号住-7



6号住-8



6号住-陶承台L



6号住-6



6号住-5

II 6号住居跡出土遺物(1)



7号住-1



7号住-2



7号住-3



7号住-4



7号住-7



7号住-5

II 7号住居跡出土遺物



7号住-6



6号住-9







8号住-1

8号住-2

8号住-4

8号住-7



8号住-6

8号住-5

9号住-1

Ⅱ 8号住居跡出土遺物

Ⅱ 9号住居跡出土遺物



Ⅲ 1号住-2

Ⅲ 1号住-3

Ⅲ 1号住-1



Ⅲ 1号住-4

Ⅲ 1号住-5

Ⅲ 1号住-6

Ⅲ 1号住-7

Ⅲ 1号住居跡出土遺物



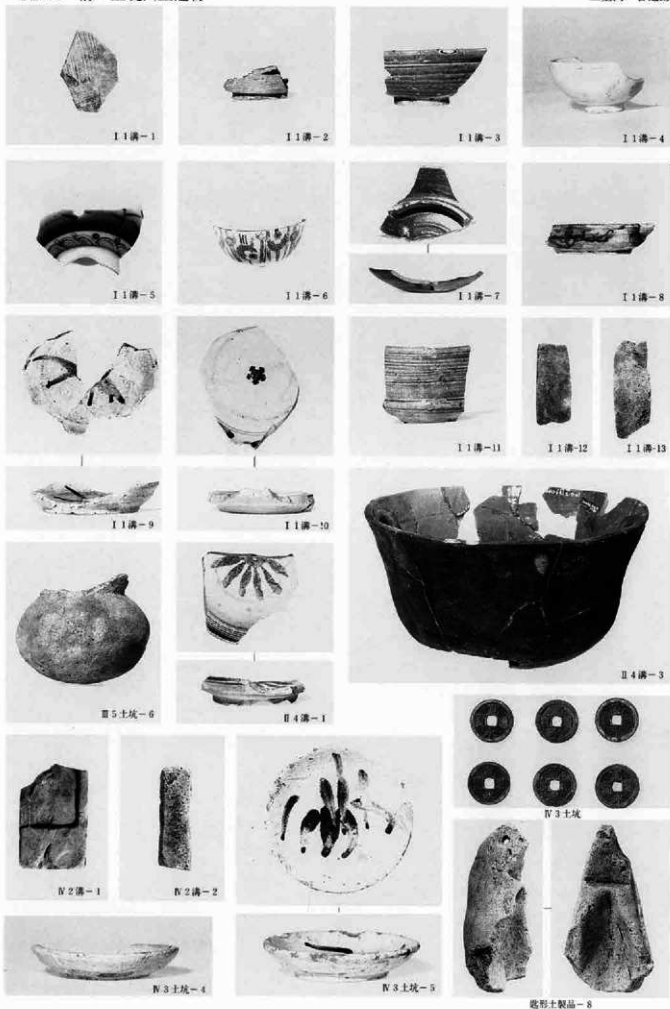
Ⅲ 2号住-1

Ⅲ 2号住-2

Ⅲ 2号住-3

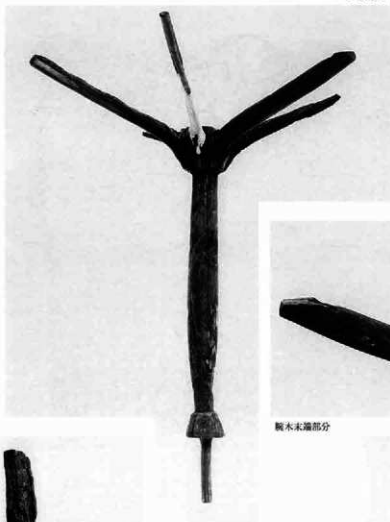
Ⅲ 2号住-4

Ⅲ 2号住居跡出土遺物





柄部分



蓋状木製品No. 1



上端部分



製木末端部分



長柄鉤 No. 2



鏃 No. 3



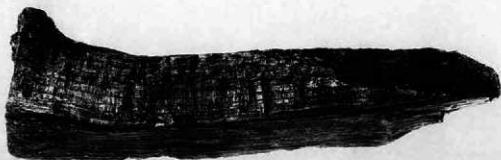
着柄鋤鉤 No. 5



板材 No. 6



矢根 No. 7



杖 No. 8



杖 No. 13



杖 No. 15



横板 No. 1 下面中央に「くり込み」、左縁に刃部分が見られる



杭 No. 5 環板を押さえたもの



環板 No. 6



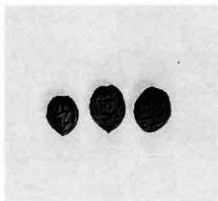
ヒョウタン類種子



ヒョウタン類種子



モモ種子



モモ種子



クルミ種子



6号住-14 調整された瓶底部



11号住-6 穿孔途中の瓶底部



3号住-22 再穿孔した瓶底部



1号住-12 壺肩部内部のしぼり痕



5号住-7 「型押し」成形を想定させる器面のしわ



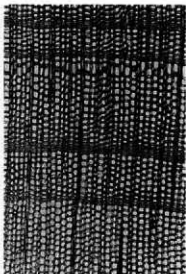
3号住-8 「型押し」成形の刺磨痕か



9号住-16 把手柄穴



9号住-16 把手柄



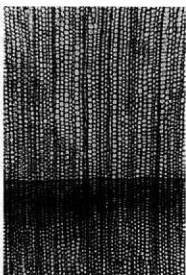
1a. カヤ(横断面)No.131 bar:0.2mm



1b. 同(接線断面) bar:0.2mm



1c. 同(放射断面) bar:0.2mm



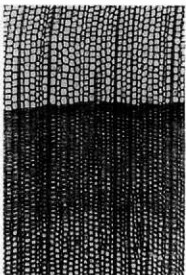
2a. アカマン(横断面)No.248 bar:0.5mm



2b. 同(接線断面) bar:0.2mm



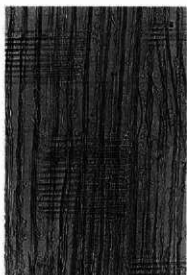
2c. 同(放射断面) bar:0.2mm



3a. モキ(横断面)No.37 bar:0.5mm



3b. 同(接線断面) bar:0.2mm



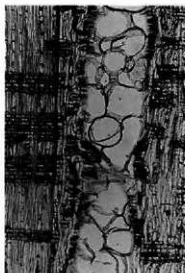
3c. 同(放射断面) bar:0.2mm



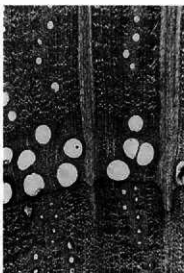
4a. コナラ節(横断面) No.126 bar : 0.5mm



4b. 同(接線断面) bar : 0.5mm



4c. 同(放射断面) bar : 0.2mm



5a. タヌキ節(横断面) No.140 bar : 0.5mm



5b. 同(接線断面) bar : 0.5mm



5c. 同(放射断面) bar : 0.5mm



6a. クリ(横断面) No.133 bar : 0.5mm

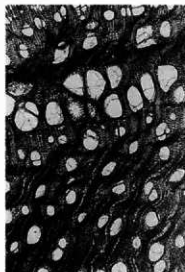


6b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



6c. 同(放射断面) bar : 0.5mm





7a. ヤマダワ(横断面)No.333 bar : 0.5mm



7b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



7c. 同(放射断面) bar : 0.2mm



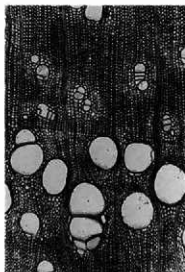
8a. サタケ属(横断面)No.230 bar : 0.2mm



8b. 同(接線断面) bar : 0.2mm



8c. 同(放射断面) bar : 0.1mm



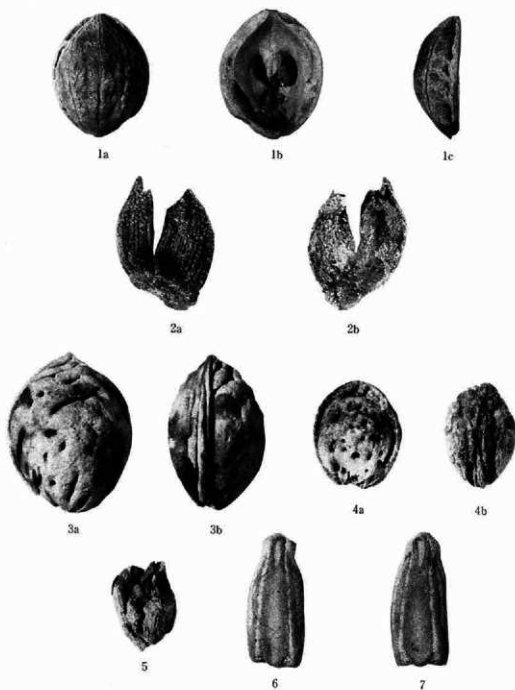
9a. エタノキ(横断面)No.156 bar : 0.5mm



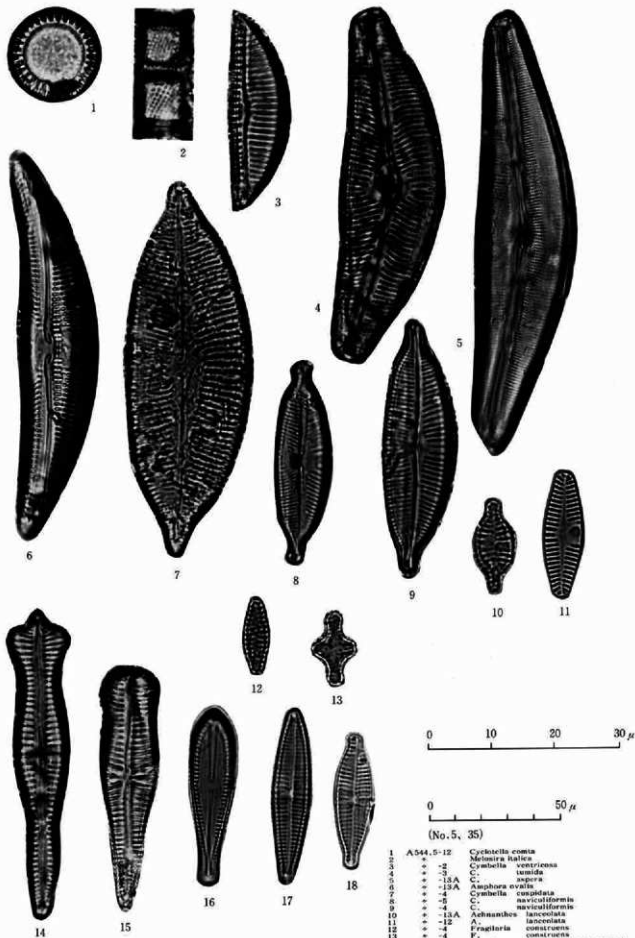
9b. 同(接線断面) bar : 0.5mm



9c. 同(放射断面) bar : 0.2mm



1a-b-c.オニグルミ 核 ×1(試料番号19)、2a-b. コナラ属果実 ×2(15)、  
 3・4.モモ 核 ×1.5(11-12)、5.サクラ属 核 ×2.5(22)、  
 6・7.ヒョウタン類 種子 ×2.5(20)

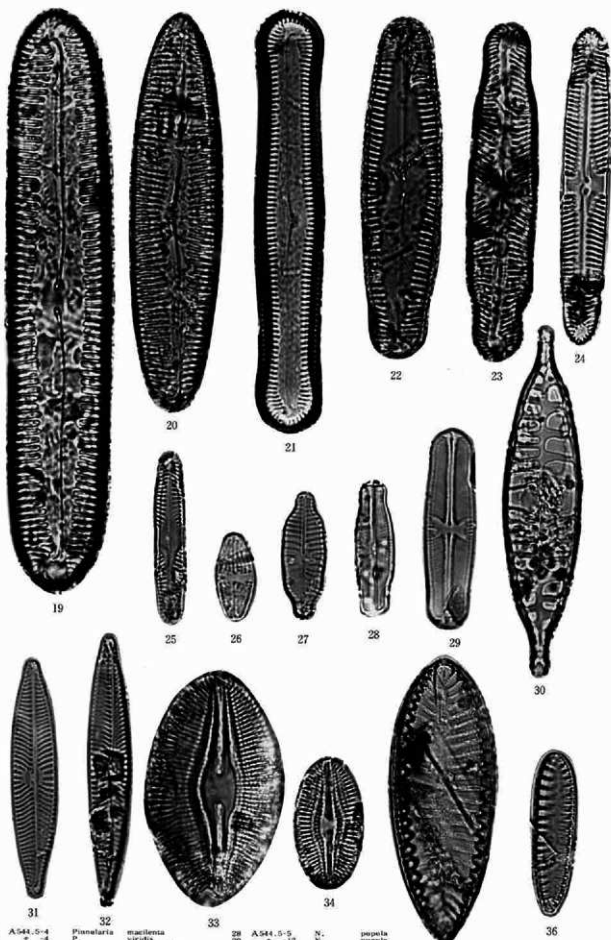


0 10 20 30  $\mu$

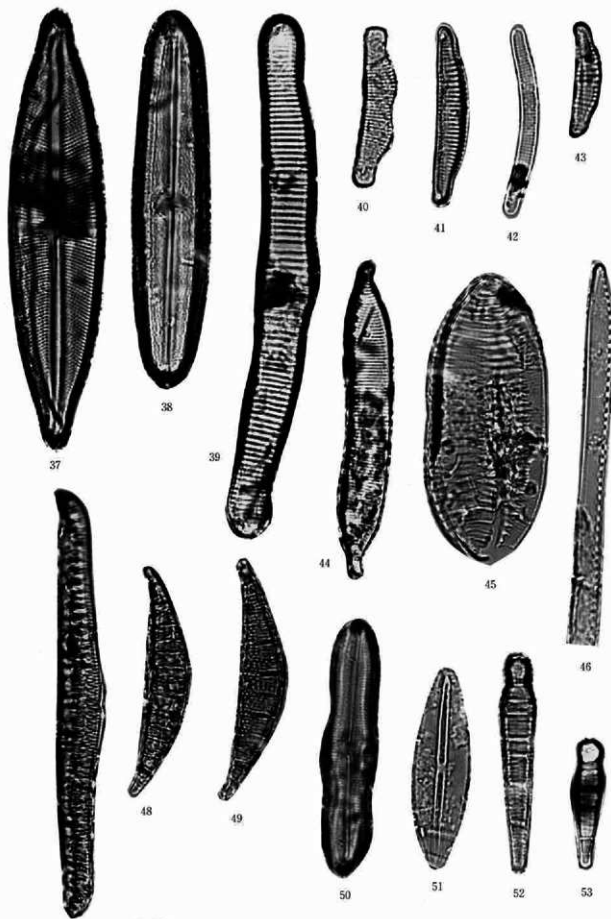
0 50  $\mu$

(No. 5, 35)

1	A 544.5-12	<i>Cyclotella comta</i>
2	+	<i>Melosira hantz</i>
3	-2	<i>Cymbella ventricosa</i>
4	-3	<i>C. tumida</i>
5	+	<i>C. axilla</i>
6	-13A	<i>Amphora ovalis</i>
7	-4	<i>Cymbella cuspidata</i>
8	-5	<i>naviculiformis</i>
9	-4	<i>naviculiformis</i>
10	-13A	<i>Achnanthes lasioclata</i>
11	-12	<i>A. lasioclata</i>
12	-4	<i>Fragilaria constricta</i>
13	-4	<i>F.</i>
14	-2	<i>Gomphonema acuminatum</i> var. <i>coronata</i>
15	-6	<i>G. constrictum</i> var. <i>capitata</i>
16	-13A	<i>G.</i>
17	-12	<i>G. bohemicum</i>
18	-13A	<i>G. parvulum</i>



19	A.544.5-4	<i>Pinnularia</i>	<i>maculenta</i>	29	A.544.5-5	N.	<i>pupula</i>
20	" -4	P.	<i>viridis</i>	30	" -12	N.	<i>pupula</i>
21	" -4	P.	<i>serophaeria</i>	31	" -13A	N.	<i>cuspidata</i>
22	" -4	P.	<i>atiba</i> var. <i>parva</i>	32	" -6	N.	<i>radiosa</i>
23	" -7	P.	<i>multicincta</i>	33	" -2	Diphoneta	<i>radiosa</i>
24	" -7	P.	<i>atiba</i>	34	" -6	D.	<i>ovata</i>
25	" -8	P.	<i>subcapitata</i>	35	" -13A	Sarirella	<i>rubens</i>
26	" -13A	<i>Navicula</i>	<i>maiera</i>	36	" -5	S.	<i>ovata</i> var. <i>pinnata</i>
27	" -5	N.	<i>diocphala</i> var. <i>neglecta</i>				



37	A544.5-4	<i>Stauroneis phoenicenteron</i>
38	* -4	<i>Neidium tridra</i>
39	* -12	<i>Eumotia pectinatis</i> var. <i>undulatus</i>
40	* -4	<i>E. pectinatis</i> var. <i>indewo</i>
41	* -13A	<i>E. pectinatis</i> var. <i>minor</i>
42	* -7	<i>E. tenuis</i>
43	* -12	<i>E. tenella</i>
44	* -6	<i>Hantzschia amphioxys</i>
45	* -9	<i>Nitzschia tryblionella</i> var. <i>victoriae</i>

46	A544.5-13A	<i>N. obtusa</i>
47	* -6	<i>Rhopodia gibba</i>
48	* -2	<i>R. gibberula</i>
49	* -5	<i>R. gibberula</i>
50	* -4	<i>Caloneis allicula</i>
51	* -7	<i>Frustulia rhomboides</i>
52	* -13A	<i>Meridius circulae</i>
53	* -12	<i>M. circulae</i>



群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第124集

**上淵名裏神谷遺跡  
三室間ノ谷遺跡**

一般国道17号(上武道路)改築工事に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年12月16日 印刷

平成3年12月24日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局